NHK

2

鈴木健二

歴史への招待



NHK

歴史への招待 2

鈴木健二

新選組流亡　笹沢左保
朝鮮使節往還　李進熙
龍馬暗殺　三好徹
碧眼の会津武士　早乙女貢
皇女和宮の謎　有吉佐和子　鈴木尚
奇兵隊叛乱　奈良本辰也



NHK 歴史への招待 2

●新選組流亡 ●碧眼の会津武士 ●朝鮮使節往還 ●皇女和宮の謎 ●龍馬暗殺 ●奇兵隊叛乱

日本放送出版協会

日本放送出版協会



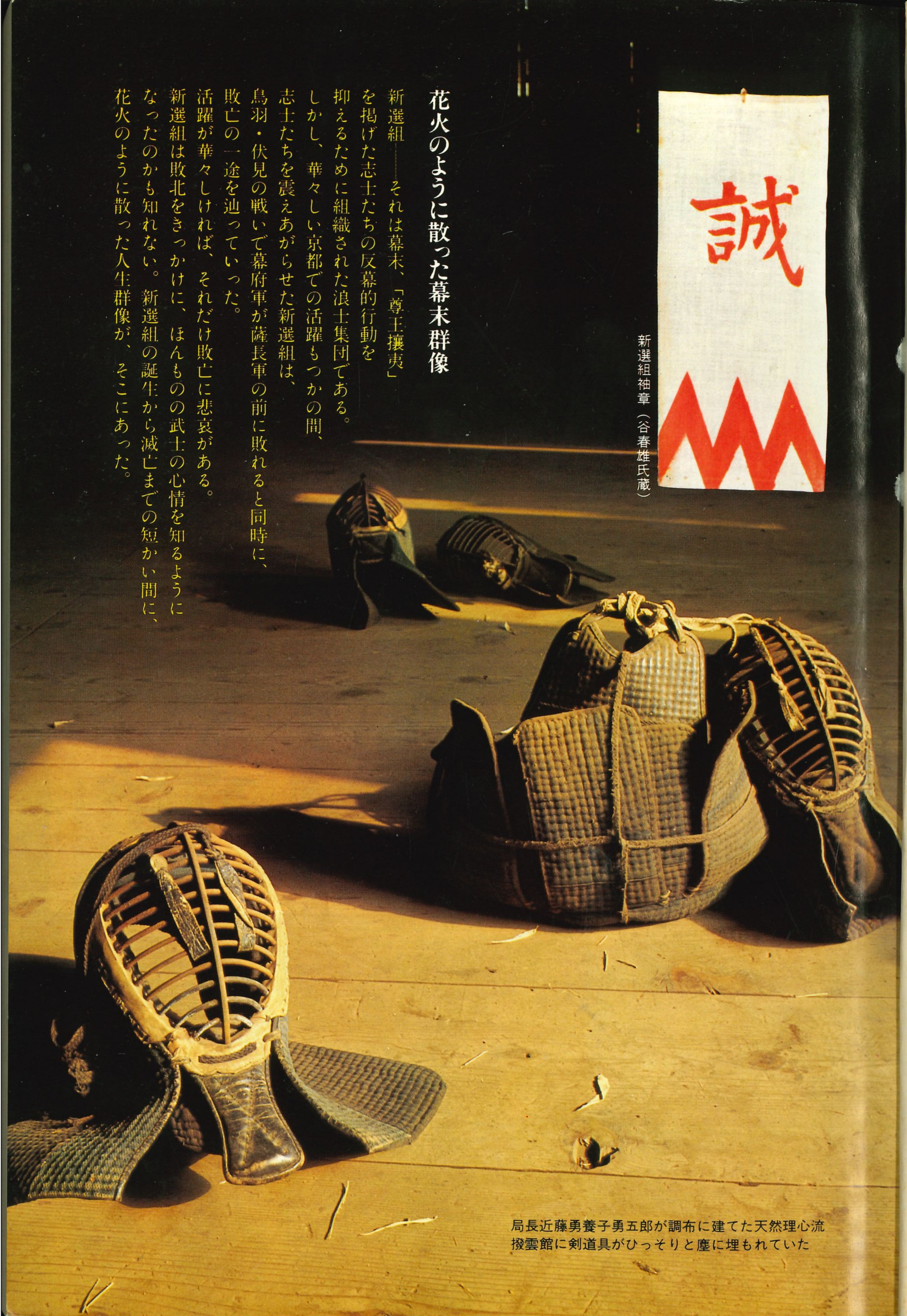
歴史への招待

定価＝1200円　雑誌コード69691-02

歴史への招待

日本放送出版協会

目次



花火のように散った幕末群像

新選組――それは幕末、「尊王攘夷」を掲げた志士たちの反幕的行動を抑えるために組織された浪士集団である。しかし、華々しい京都での活躍もつかの間、志士たちを震えあがらせた新選組は、鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が薩長軍の前に敗れると同時に、敗亡の一途を辿っていった。活躍が華々しければ、それだけ敗亡に悲哀がある。新選組は敗北をきっかけに、ほんものの武士の心情を知るようになったのかも知れない。新選組の誕生から滅亡までの短かい間に、花火のように散った人生群像が、そこにあった。

新選組袖章（谷春雄氏蔵）

局長近藤勇養子勇五郎が調布に建てた天然理心流撥雲館に剣道具がひっそりと塵に埋もれていた

この本は、NHKテレビの「歴史への招待」の出版化です。一本のテレビ番組が作られる裏では、表に現われない大量の取材が行われます。その結果は、一定の時間の中に凝縮され、刈り込まれ、カットされることで出来上がります。この本では、その大量の素材をたんねんに追跡し、補足し、編集し、一冊の書物に編み上げることにしました。多くの協力者や資料提供者の協力、アイディア提供等々をまって、映像化された番組を、すべてにわたって再現し、出版の世界に定着させることは、苦難の連続といって過言ではありませんでしたが、ここにささやかなその結果をお届けすることが出来ました。映像と出版とのこよなき結合が、読者の皆様のご賛同を得られればこれにすぎることはありません。



最初の新選組壬生の屯所跡（八木氏邸）

治安警察隊誕生

武州多摩在の剣士たちを母体とする浪士隊が上洛したのは、将軍家茂の警護が名目であった。やがて、近藤らは京都守護職松平容保お預りとなり、治安警察隊を組織した時に、新選組は誕生した。京都壬生に屯所を置き、隊内抗争に打ち克って、近藤・土方の主導権を確立するや、勤王の志士たちに殺りくの剣を振い、京師の大道を闊歩し始めた。



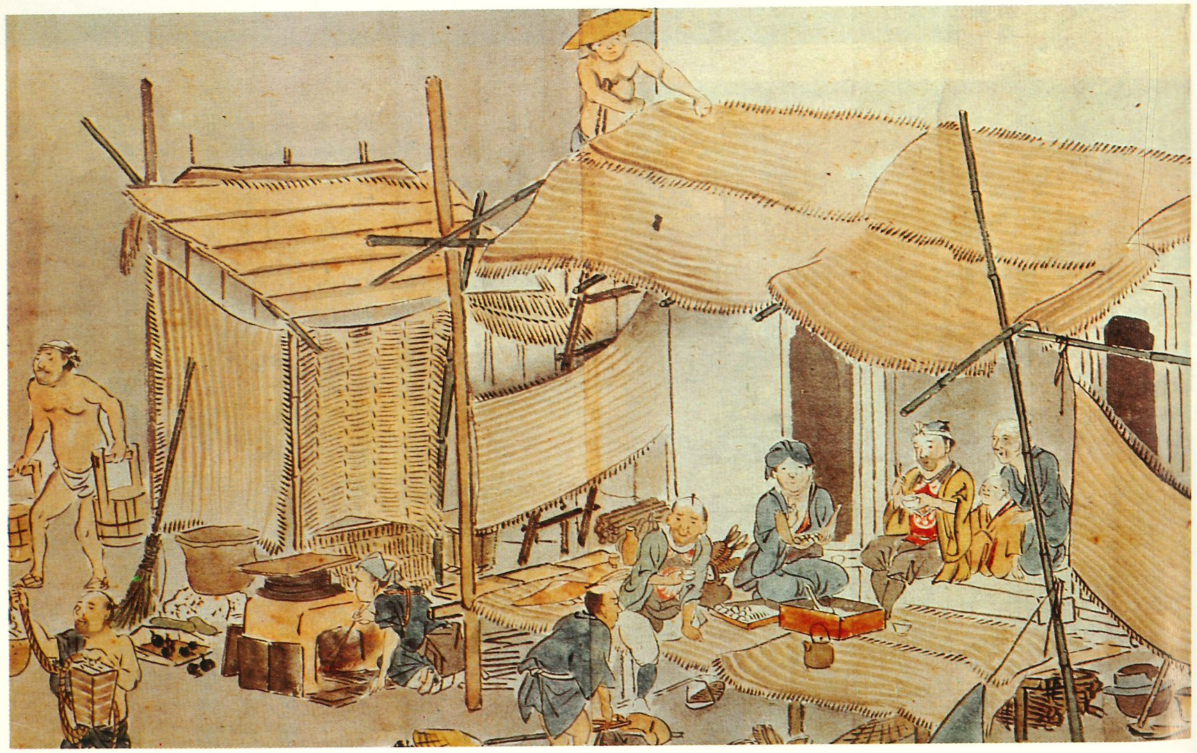
腥愴の気を散ずべく隊士が登楼した島原の大籬角屋（すみや）



左上　中島登描くところの近藤勇
右上　同じく土方歳三
右下　同じく山口二郎こと斎藤一
左下　戦没した戦友をしのんで絵筆をとる元隊士中島登（以上中島登戦友絵姿より・中島登氏蔵）
背景写真　新選組の故郷東京都下小野路風景



戦火に追われる庶民の群れに混じって、傷兵が落ちてゆく(同図より)



焼跡からの復興は、予想外に速かったと伝えられる(同図より)

池田屋事件が引き金となって、京都における長州勢力の回復をはかろうとする蛤御門の変が起こった。京都の町は焼かれ、人びとは逃げまどった。しかし、この甲子戦争の結果は、長州の敗北であった。そして、幕府軍による第一次長州征伐が行なわれた。

このような動乱の京都で、新選組は三条高札事件や油小路の決闘などで暗殺集団としての磨きをかけていった。また隊内も、粛清につぐ粛清を繰り返し、風儀は陰惨をきわめた。しかし、幕軍の頽勢は今やいかんともしがたく、鳥羽・伏見の戦いで薩長軍の前に敗れると、新選組も将軍慶喜らとともに江戸へ逃げ帰った。生き残った隊士は約四十名。もう彼らには、昔日の面影はなかった。



甲子の兵火に焼かれる京都市街
(甲子兵燹図より・京都大学図書館蔵)





上　近藤が縛に就いた下総流山の屯所跡
下　近藤の処刑場跡に建つ近藤・土方の墓

末路あわれ

江戸へ帰った近藤勇らは、東山道を進む官軍を迎え撃つため、新選組を中心に甲陽鎮撫隊を組織し、故郷の武州多摩に功成り名をとげた大旗本として錦を飾りつつ、甲府へと向かった。しかし官軍の進撃は早く、甲陽鎮撫隊は散り散りに逃げ散った。やっと退路をひらいて江戸に逃げ着いた時、かつての同志永倉新八も斎藤一も近藤から離れ、従うもの土方歳三ただ一人であった。

近藤勇は下総の流山で再起を企ったのだが、近藤はついに屯所を官軍に囲まれてつかまり、江戸府外板橋の宿で首をはねられた。

一方、流山を逃れた土方歳三は会津へと転戦、そして死地を求めて函館へと流れ、この戊辰最後の戦闘の中で、たおれた。


中島登が描いた函館海戦之図（中島登氏蔵）


轟沈される新政府軍の軍艦朝陽
（江差歴史資料館蔵）

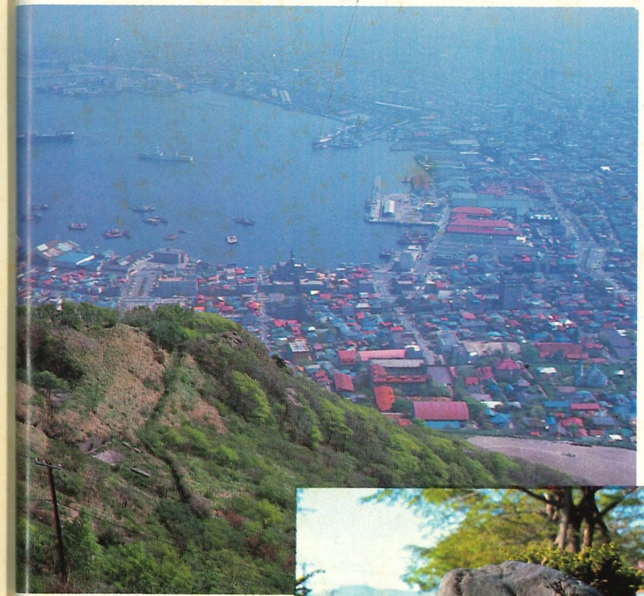
新選組流亡

笹沢左保

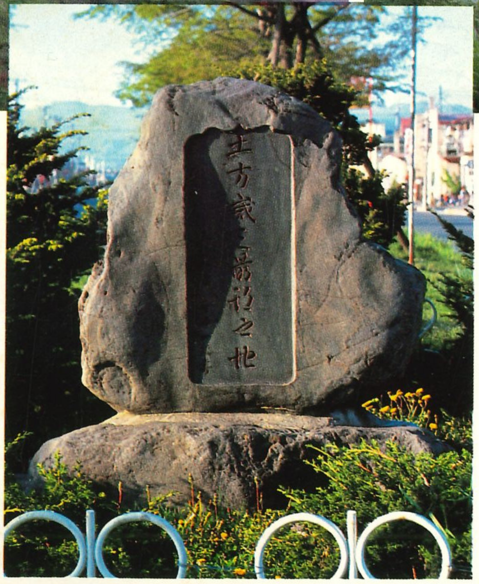
■ささざわさほ
作家　昭和5年神奈川県生まれ 著書『人喰い』『木枯し紋次郎』『六本木心中』『招かれざる客』『人間沖田総司』(新潮社)『詩人の家』(文芸春秋社)

NHK 中澤俊明









上　幕府軍艦開陽引上げ作業中の江差港
中右　木古内の激戦地跡
中左　函館山から市内を望む
下　土方歳三終焉の地(五稜郭)

五稜郭で、旧幕軍は新政府軍と激烈な戦闘を展開したものの、ついに敗れ、戊辰戦争は終わった。五稜郭までの新選組流亡はあわただしくも、隊士たちの鮮烈な死にざまを残した。だが生きのびた永倉たちの明治とは、おのれの過去を消すため、ひっそりと送られた時であった。

〝朝敵〟の汚名を気にして生きる余生

大正四年一月、小樽——烈風のなかに一人の男がひっそりと死んだ。

晩年の彼は、夕食前によく孫を散歩に連れ出しては、駄菓子を買い与えたり、木馬に乗せて、港を見下ろす坂道をカラコロと引いてやったりしていたという。

元新選組副長助勤、二番隊組長永倉新八、享年七十七歳。

武士の節を尽して
　厭までも貫現竹の心一筋

陣羽織の背の裏地に墨書された遺歌である。

若き日にはいくたびか白刃の下をかいくぐり、御一新以降は、朝敵の汚名を一生気にしつつ、もっぱら旧同志の追善に送った余生であった。

見せかけだけの武士集団

慶応四年（一八六八）正月、幕軍と官軍との激突が鳥羽・伏見に始まる。

新選組は幕軍最前線として伏見奉行所を守っていた。このときすでに局長近藤勇は負傷し、一番隊組長沖田総司は病重く、戦列を離れて、大坂城中で病床に臥せていた。

副長土方歳三率いるさしもの新選組も、大砲と鉄砲で武装した洋式の官軍にはなす術を知らず、大坂への敗走の楯としてしんがりを務めるうち、淀川堤千本松での激戦で隊士二十数名が戦死。六番隊組長の井上源三郎、池田屋討入りの時、薬の行商人に化けて



晩年、旧同志たちの追善に余生を送った永倉新八（前列中央）

手引きをした監察の山崎烝ら生え抜きの隊士を失った。文久三年（一八六三）の結成以来五年、巷間華々しい京都時代の新選組はここに終わりを告げ、以後敗亡の坂を転げ落ちてゆく。

——幕府の退潮とともに新選組も衰亡の一途をたどるんですが、いわゆるもののふのあわれみたいなものを感じますか。

笹沢　いや、私はあまり感じませんけどね。

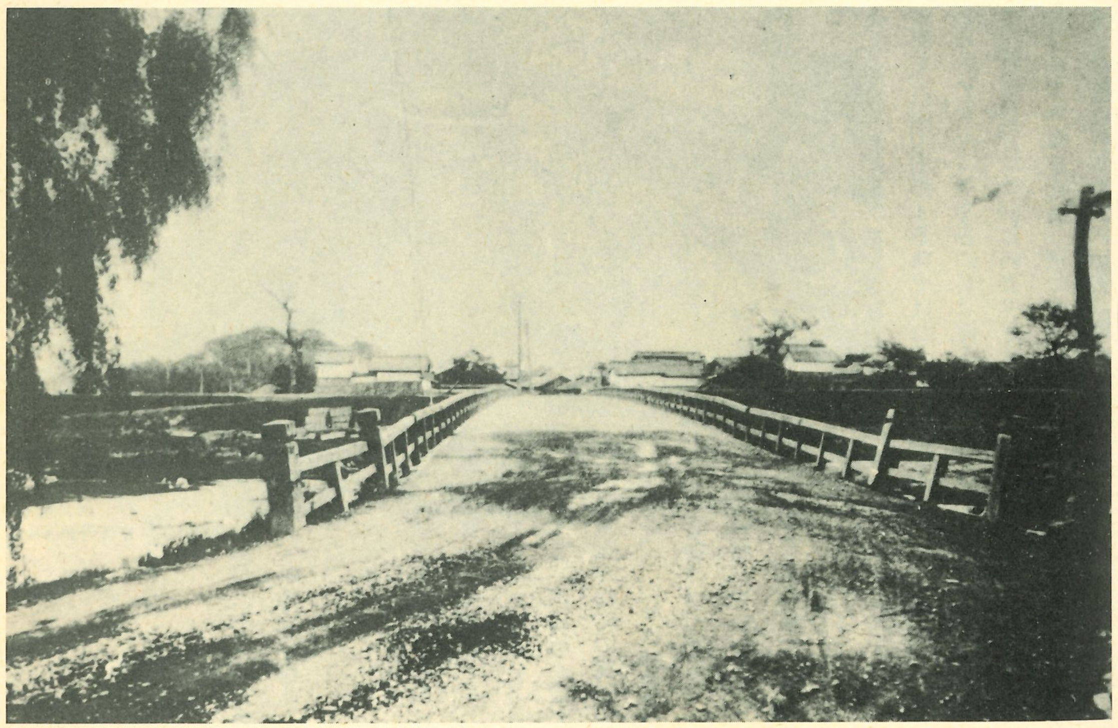
——なぜですか。

笹沢　やはり、まあ見せかけの武士というだけであって、魂というものはないのですからね。要するにもののふというのは魂ですから、そういうものがまったくない。だから、夢破れても身のほどを知っている。それでいて、徳川家とか、日本全国の情勢とか、それから自分たちの今後の苦しいさだめですね、そういうものにまだ気がついていない。しかしその反面で、彼らは何か本物の武士の心情といったものをやっとつかみかけてきたんじゃないか。何かそういう若者たちの悲劇を感じます。ぼくは、あそこで戦って敗れたということによって、初めて武士の心境がわかったんじゃないかと思うんです。やはり武士というのは負けたことがないと、ほんとうの武士の心というのはわからないはずだと思う。

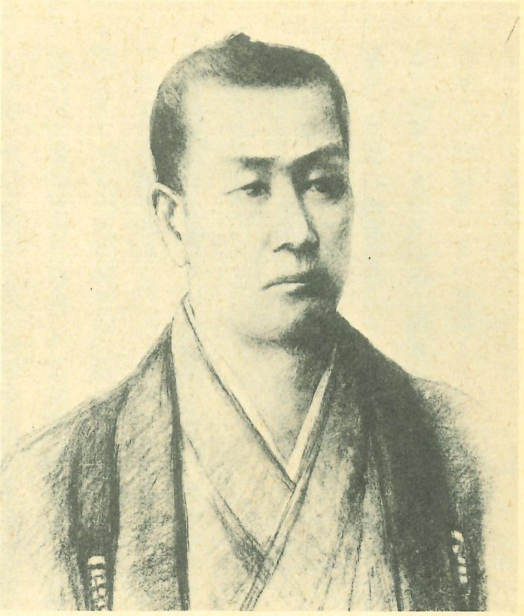
生活保障された浪士組

幕末、京都の治安警察パトロール隊として勇名をはせた新選組は、わずか十数名の浪士団から出発する。

安政の大獄以来、その反動として「尊王攘夷」を掲げたいわゆる志士浪人の反幕的行動が活発化し、これに手を焼いた幕府が懐柔



新選組は鳥羽・伏見の戦いで幕府軍の最前線で戦った（鳥羽・小枝橋激戦地古写真より）



新選組のもととなった浪士組の創立者清河八郎

策として浪人を募集したのがそもそもの始まりであった。

これはもともと、出羽の浪士清河八郎の献策によるもので、文久三年（一八六三）二月、三百人に近い多数が応募。その中に、小石川小日向の天然理心流の道場試衛館に集まる近藤勇、土方歳三、沖田総司、永倉新八、原田左之助、井上源三郎らがいた。将軍家茂上洛の前駆警備の命を受けて、浪士組は京に向かう。京都到着もつかの間、旬日を経ずして幕府は、前年八月の生麦事件の賠償をめぐって英国軍艦が横浜に入港したのを機に、浪士組を東帰させる。この時、近藤勇一派と水戸脱藩浪士・芹沢鴨一派計十数名が京都残留を希望し、京都守護職・会津中将松平容保侯直々のお預り浪士となって、新選組が発足。その年八月、禁門の政変により急進攘夷派の長州が都を追われ、以後志士狩りが本格化するにおよんで、新選組は公然と治安の責にあたることとなる。

新選組第一次編成

局長　芹沢鴨　近藤勇　新見錦

副長　山南敬助　土方歳三

助勤　沖田総司　永倉新八　原田左之助　藤堂平助　井上源三郎

　斎藤一　山崎烝ほか

時に近藤勇三十歳、土方歳三二十九歳、沖田総司二十歳、永倉新八二十五歳、後に三番隊長となり、剣にかけては沖田に勝るとも劣らないといわれた斎藤一は二十二歳であった。

笹沢　まあ一種の浪人対策みたいなものもあったんですが、あれは浪人だけじゃないですね。つまりそういった見せかけの武士、それから脱藩者、それに要するにあの当時の渡世人みたいな、そういうものを集めた。近藤、土方は武州多摩の百姓の出ですし、天然理心流では大先輩の井上は八王子千人同心の息子、芹沢は常陸芹沢村の郷士、沖田は奥州白河阿部藩の江戸詰藩士の息子、さらに、山南は仙台藩の、永倉は松前藩の、原田は伊予松山藩の、そして斎藤は播州明石藩のそれぞれ脱藩浪士というように、要するにだれでも構わないということでしょうね。だいたい近藤や土方、芹沢なんていうのは時代がもうちょっと古ければ、とても刀を差して歩くなんていうことはできなかった人たちです。それが二本差しの武士になって、剣術をやっているもののそれ以上出世するはずはないわけです。永久に、死ぬまでそこ止まりです。次に考えるのが、何かあったらひと旗あげて、本物の武士になろうじゃないかという、それが一つの大きな夢じゃないでしょうか。そこへたまたま、例の清河八郎という人が出てきて、浪士隊を作って京都へ行きます。清河八郎は適当なことを言っておいて、京都へ着いたら全員を勤王側の武士集団にしようと思っていたけれども、それがだめだというので呼び帰されます。あとに十三人ですか、残った。これが新選組の始まりですが、じゃあ彼らがなぜ残ったか。別に勤王の思想もないわけです。かといって、佐幕のように代々幕府に仕えたわけじゃないですから、幕府に対する忠誠心もありゃしない。しかし、せっかくつかみかけたチャンスです。と同時に、また江戸に戻って、元のもくあみというのは、いかんせん嫌なわけでしょう。とにかく京都に残りたい。それがまず野望の芽ばえですね。だから、江戸にいては食べていけぬ、どうしてもだめだという連中、それから何かを利用してひと旗上げようという連中が残る。そういう型破りの連中



新選組局長となった近藤勇



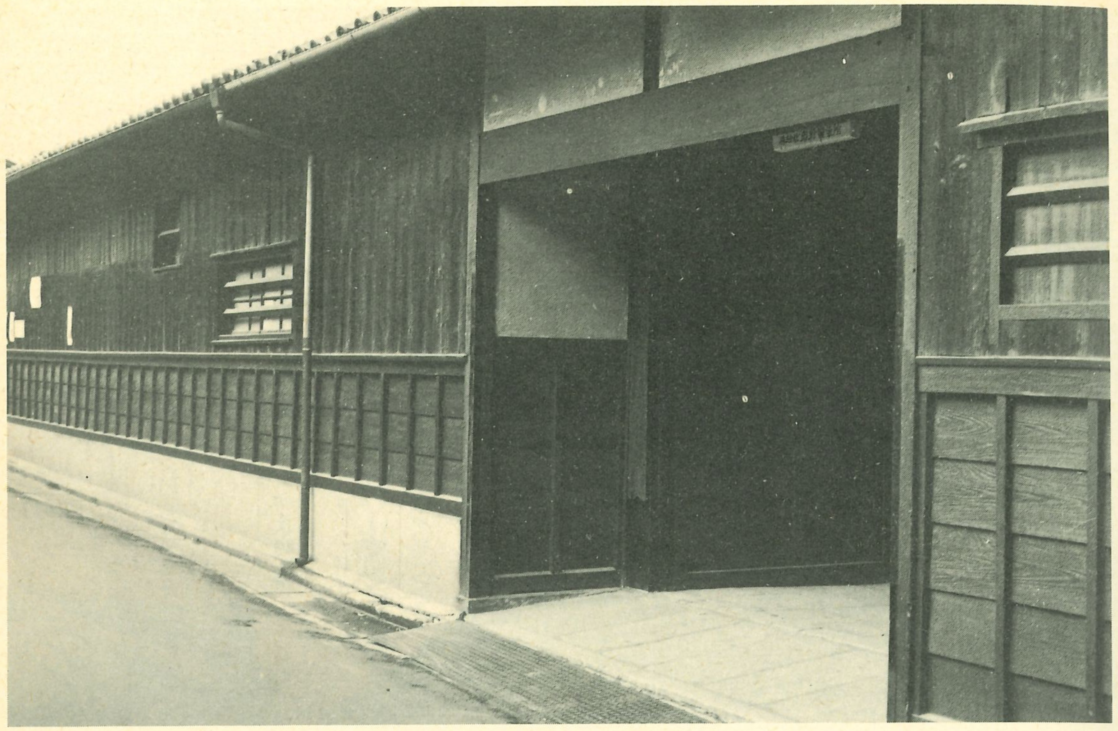
壬生寺にある、斬殺された局長芹沢鴨の墓

が、野心というかスケベ根性の点でまとまったということです。食いつめた連中がそれだけ大勢いたということです。だから、それが幕府のお声がかりで少しのお金でももらえれば、こんないい話はないわけです。それでみんな飛びつくわけです。ただ、この時代というのは、攘夷と言わなきゃ食べられなかったそうですよ。攘夷、攘夷と偉そうに言うわけですね。心のなかには何も持っていないんです。何かというと攘夷、攘夷と騒ぎ立てる。浪人とか志士は攘夷と言わなきゃめし食っていけない。そういうことを公言する人もいたという話ですから、結局全部お金ですよね、あの時代全部。新選組に限らずですが、幕府だって、朝廷そのものというか、お公家さんだって金で動くし、大名も皆お金で動いている。そこに世界的情勢で開港です。港を開いたためにたいがいの藩が経済的にひどくなって、下級武士全部に不満が強まってくる。それがなんとなく攘夷と結びついたんです。

だから、思想といっても高度な思想じゃないですね。ろくに学問もない浪人達が、そうそう思想なんて持てっこないわけです。それが、会津藩の直々の預りという形になって、生活を一生幕府側で保障してくれたから、だから新選組というのは佐幕になったわけです。ほかにだれも抱えてくれないから。極端な話、長州藩が金を出してくれて近藤以下全員雇ったら、あれは完全に勤王方になってしまっている。あくまでも自分たちを武士として認めてくれるところへついたわけですから。

〝士道に背く間敷き事〟

元治元年（一八六四）六月五日、祇園祭の宵山の晩に新選組はなんとも血腥い事件を起こす。池田屋討入りである。後世明治維新


新選組の屯所が置かれた前川邸

を一、二年遅らせたといわれたこの事件によって、関東の食いつめ浪人の集団ぐらいにしか思われていなかった新選組は一躍有名となる。勤王の志士のうち、即死または自決したもの、長州の吉田稔麿、肥後の宮部鼎蔵ら六人、負傷後死亡したもの四人、捕らえられたもの二十数人。

このときの恩賞、朝廷から百両、幕府から五百両。以後、新選組はますます勢力を伸ばし、組織を改編して、機能的な殺戮集団として磨きをかけていく。

新選組第二次編成

総長　近藤　勇
副長　土方歳三
参謀　伊東甲子太郎
組長　一番隊　沖田総司
　　　二番隊　永倉新八
　　　三番隊　斎藤　一
　　　四番隊　松原忠司
　　　五番隊　武田観柳斎
　　　六番隊　井上源三郎
　　　七番隊　谷三十郎
　　　八番隊　藤堂平助
　　　九番隊　鈴木三樹三郎
　　　十番隊　原田左之助

このうち、精鋭部隊は沖田、永倉、斎藤、藤堂、原田がそれぞれ率いる一・二・三・八・十番隊であり、なかでも沖田総司の一番隊はいわば近藤勇の親衛隊であったという。

「局中法度」に曰く。
一、士道に背く間敷き事
一、局を脱することを許さず
一、勝手に金策致すべからず
一、勝手に訴訟取扱うべからず
一、私の闘争を許さず
右の条々、相背き候者、切腹申し付くべき候也。

笹沢　あれだけ厳しい規律を必要としたものは何か、罰則は全部切腹ですからね。まず士道に背く間敷き事と、なぜそんなことをわざわざ特記しなければならないか。武士であれば士道に背かないのはあたりまえのことなんです。それをわざわざ、士道に背いちゃあいかんということを強調するというのは、彼らが武士じゃないということの証拠ですね。あれは明らかに、武士でないものが、武士たらんとするには、まず士道に背いちゃいけない、という意味ですね。その象徴が「誠」という隊旗になっているわけで、私はこれは新選組首脳部の武士への憧れの表れだと、ほんとうにいじらしいほど武士になりたかったんだなあと思います。次に局を脱したらいかんということです。あれはやはりそれだけいつみんながばらばらになるかわからない連中ですよ。ということを幹部はいちばんよくわかっていたんじゃないですか。あれは主従関係にないからですよね。

――　みんな同志です。横のつながりです。

笹沢　精神的な意味で命令に服するとか、必ず言うことを聞きますという、やはり主従のつながりがないと文句出ますよね。現に永倉新八かな、彼ら何人かが近藤のことを訴えに来ます。そのなかに、みんなを家来に扱うというんですね。それが不満である。だから、局長とか一応長というものがついておりますが、けっして彼らは家来ではない。それぞれみんなそれなりの野望と、自分のためにやっています。だから組織というものを作るには、とくに力と、あとは要するにお金ですね。ちゃんと食べさせるよということと、背いたら殺すぞという両方でギュッとしばっておかなかったら、組織自体もっていかなかった。

――　そうすると、彼らにしてみれば、年じゅう闘うことの反面、隊内にいれば、いつ自分はやられるかもしれないという不安もあったでしょうね。その不安が逆な現象となって、ああいう修羅場へ飛び込ませたということもありうるわけですね。

笹沢　そうです。そういう気持は常にあったと思うんです。という



壬生寺境内に建つ近藤勇胸像



西本願寺太鼓楼　新選組は隊士の増加などの理由で、壬生からここに屯所を移した

のは、いったん睨まれたら、これは申し開きはできませんから。だれが告げ口するかわかりませんしね。睨まれたら、脱走すれば殺されちゃうし、非常に日々戦々恐々としていたんじゃないか。そこには当然やはり言われたら目覚ましい働きをして威信を回復しようなんていう気持も当然働きますから、精神的な強みになります。同じ暗殺に取りかかるにせよ、どこかへ殴り込みをかけるにせよ、やらなくちゃ自分が危ないという気持がありますから。そういうところがプロですね。

プロフェッショナル暗殺集団

池田屋事件が直接引き金になって、長州軍が蛤御門の変という京都戦争を起こした時、九条河原に陣した新選組の屯営の門前に高々と張られたという「軍中法度」に曰く。

一、敵味方強弱の批評、一切停止の事

一、昼夜に限らず急変これ有候とも、決して騒動致すべからず、心静かに身を堅め、下知を待つべき事

一、私の遺恨ありとも、陣中において喧嘩口論仕りまじきこと

一、組頭討死に及び候時、その組衆その場に於て戦死を遂ぐべし。もし臆病を構え、その虎口逃来る輩これ有においては、斬罪微罪その品に随って申渡すべきの候、予て覚悟、未練の働これ無き様、相嗜(たしな)むべき事

一、烈しき虎口に於て、組頭の外、屍骸引退く事なさず、始終その場を逃げず忠義を抽(ぬき)んずべき事

笹沢　なにか考えれば考えるほどだんだんプロという感じがしてきますけどね。拷問の仕方なんていうのは実にうまいですよ。白状させるときに、やはり気絶させないようにするということに非常に重点を置いて拷問をやっているわけです。ですから、指を一本一本切り落とすんですね。ああやると気絶もしないし死なないんです。でも、指一本ずつ切られたらやはり痛いし、だから、白状しないとまた切るよと言われたら、これやはり怖いから白状してしまいますよ。そういうところもプロですね。



光縁寺にある副長山南敬助の墓　山南は謎の失踪を企てたが沖田総司らに捕まり、隊の規律により切腹した

――私は、旧日本陸軍の職業軍人に、何であんなにふだんから殴ったりしたんだと聞いたら、あのくらいやっておかないと、いざというときに敵の鉄砲の玉をかいくぐっていかないんだというんですね。そういう一種の脅しみたいな環境に置かれていたんでしょうね。

笹沢　そうですね。べつに頭が正常じゃないというわけではないですから、そんな血腥いことを平然とやってのけるには、何かなければできないでしょうね。それが、彼らの日常生活といいますか、酒を飲み、紅燈の巷に入りびたるというのは、やはりそこにどこか人間らしさがあるんでしょうね。明日死ぬかもしれないという気持があると同時に、やはりそういうことで発散しなければいられないんじゃないですか。また逆に、鼻紙や煙草代にも事欠くようなみじめな食いつめ浪人風情が、剣と度胸だけでそういう夢のような生活を得られたわけだから、どんなに辛く殺伐な仕事でもやり遂げられたんじゃないですか。人を殺せばお金をもらえ、あこがれの的だった京都の色街へも自由に出入りできるわけですから。

峻烈！　粛清につぐ粛清

プロの暗殺集団としての新選組では、隊士のけいこは一刻も廃することを許さず、しかも心胆を練るために真剣を使ったといわれ

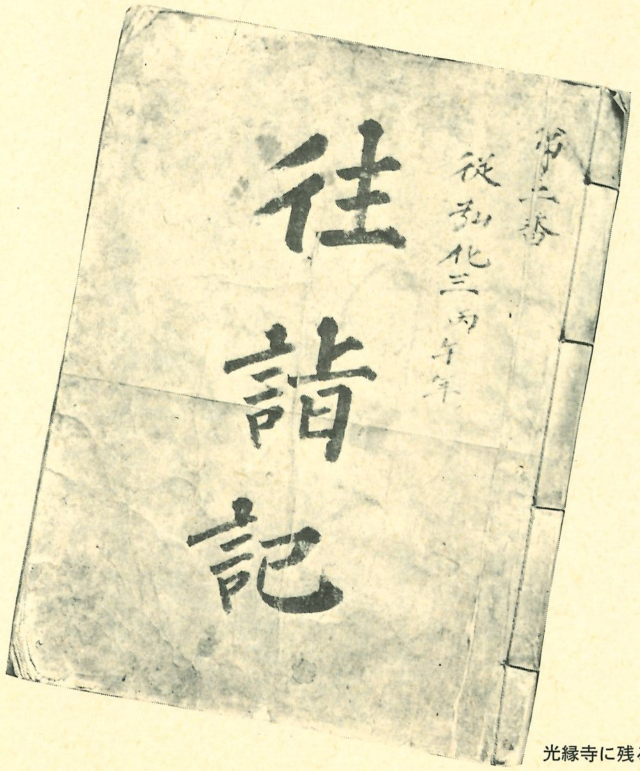
新選組流亡〈年表〉

文久3(1863)	3月15日、近藤らの浪士組は、京都守護職松平容保の預りとなる　八月十八日の政変で、近藤らの浪士組出陣　この政変に際しての功績により、浪士組に新選組の名が下されたと思われる
元治1(1864)	6月5日、池田屋事件　7月、禁門の変　敗走する長州勢を新選組が追跡した
慶応3(1867)	新選組隊士は、幕府直参となる
慶応4(1868)	1月、鳥羽・伏見の戦いが起こる　新選組出陣して奮戦するが、多くの隊士が戦死する　その後、富士山丸で海路江戸へ向かう　江戸に着いたとき、一時百十名を数えていた隊士は、40名ほどになっていた　2月30日、近藤、土方、沖田、永倉、斎藤らの新選組隊士を中心に甲陽鎮撫隊が結成され、甲州へ向かう　甲州での官軍との戦いに敗れ敗走　永倉は靖兵隊を組織して新選組を離脱　斎藤も去った　さきに、甲州へ向かう途中で結核のため江戸へ帰った沖田総司は、時を措かずして世を去っていた（享年25歳）　近藤と土方は、再起を期して流山へ陣どるが、4月、近藤勇は捕らえられ斬首（享年35歳）　土方は、旧幕軍と合流して会津で奮戦、会津落城前に仙台へ落ち、榎本武揚率いる幕府艦隊と合流、函館・松前占領の先兵となった
明治2(1869)	5月、土方歳三、函館で弾丸に倒れる（享年35歳）
明治10(1877)	藤田五郎と名を変えた斎藤は、明治4年に巡査、この年警部補となり、西南戦争に従軍する
明治15(1882)	明治3年、松前の杉村家の養子となっていた永倉は、この年北海道の樺戸監獄の剣道師範となった
大正4(1915)	1月、永倉新八、小樽で死す（享年76歳）　9月斎藤一、東京で死す（享年72歳）

る。また、隊規違反などで切腹させられる者があれば、代わりばんこにその介錯をやって、人を斬る呼吸を会得させたともいう。さらに沖田・永倉・斎藤らの各剣術師範頭は、夜中非常召集を行って、闇夜の真剣試合をさせたり、寝ている所へ突然斬り込んだりして鍛練したともいう。ともかく新選組にとっては、刀はすなわち法律であり、その歴史は暗殺と粛清の歴史であった。峻烈をきわめた掟の前に、間者、脱走者、怯懦者は次々と斬られていく。

新選組隊内粛清記録

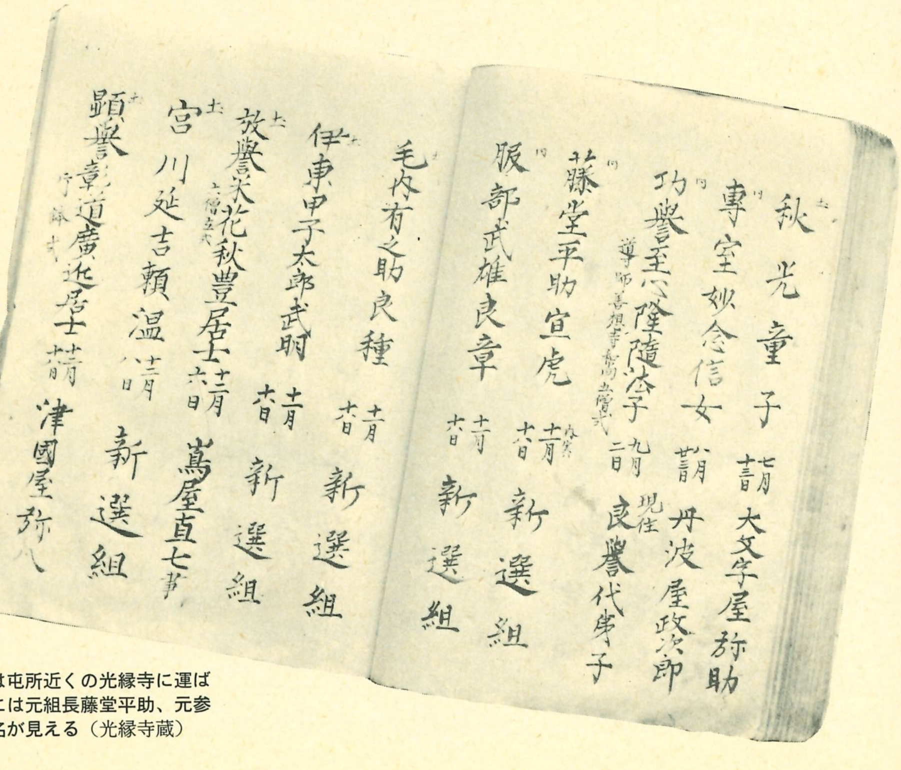
文久三年四月　殿内義雄　斬殺
五月　家里次郎　切腹
八月　佐々木愛次郎　斬殺
九月　局長　新見錦　切腹
局長　芹沢鴨　斬殺
助勤　平山五郎　斬殺
御倉伊勢武　斬殺
楠小十郎　斬殺
荒木田左馬之輔　斬殺
十月　助勤　野口健司　切腹
元治元年九月　葛山武八郎　切腹
慶応元年二月　副長　山南敬助　切腹
六月　瀬山滝人　切腹
石川三郎　切腹
七月　佐野収太郎　断首
慶応二年二月　河合耆三郎　断首
小川信太郎　切腹



光縁寺に残る過去帳の往詣記

六月　柴田彦三郎　切腹
九月　五番隊組長　武田観柳斎　斬殺
慶応三年一月　田内知　切腹
四月　剣術師範頭　田中寅蔵　切腹
十一月　参謀　伊東甲子太郎　斬殺
八番隊組長　藤堂平助　斬殺
毛内有之助　斬殺
服部武雄　斬殺
年月日不明　酒井兵庫　斬殺
浅野　薫　斬殺
横田長兵衛　斬殺
吉田寅之助　切腹

こうした粛清や暗殺を専ら手掛けたのが新選組粒選りの猛者といわれた沖田総司、永倉新八、斎藤一らであったが、なかでも斎藤一ほど謎に満ちた不可解な人物はいない。そもそも江戸出発時の浪士組名簿に彼の名は見当たらず、それが京都での新選組誕生とともにいつの間にか名を連ね、副長助勤、三番隊組長、剣術師範頭と常に幹部として活躍している。また慶応三年三月、参謀伊東甲子太郎、八番隊組長藤堂平助、九番隊組長鈴木三樹三郎ら総勢十六名が光明天皇御陵衛士を拝命し、新選組から去った時、斎藤一もこれにつき従ったが、十一月、伊東ら高台寺党が油小路で粛清される数日前には、またちゃんと新選組に戻ってきている。この斎藤一について、作家赤間倭子さんは彼が新選組に入ったのはその発足直後であり、京都吉田道場の師範代をしていた一刀流（太子流）の腕を認められて助勤になったのだと述べている。ま


粛清された隊士たちは屯所近くの光縁寺に運ばれ葬られた。往詣記には元組長藤堂平助、元参謀伊東甲子太郎らの名が見える（光縁寺蔵）



油小路付近で新選組によって暗殺された高台寺党の伊東甲子太郎（鈴木康夫氏蔵）

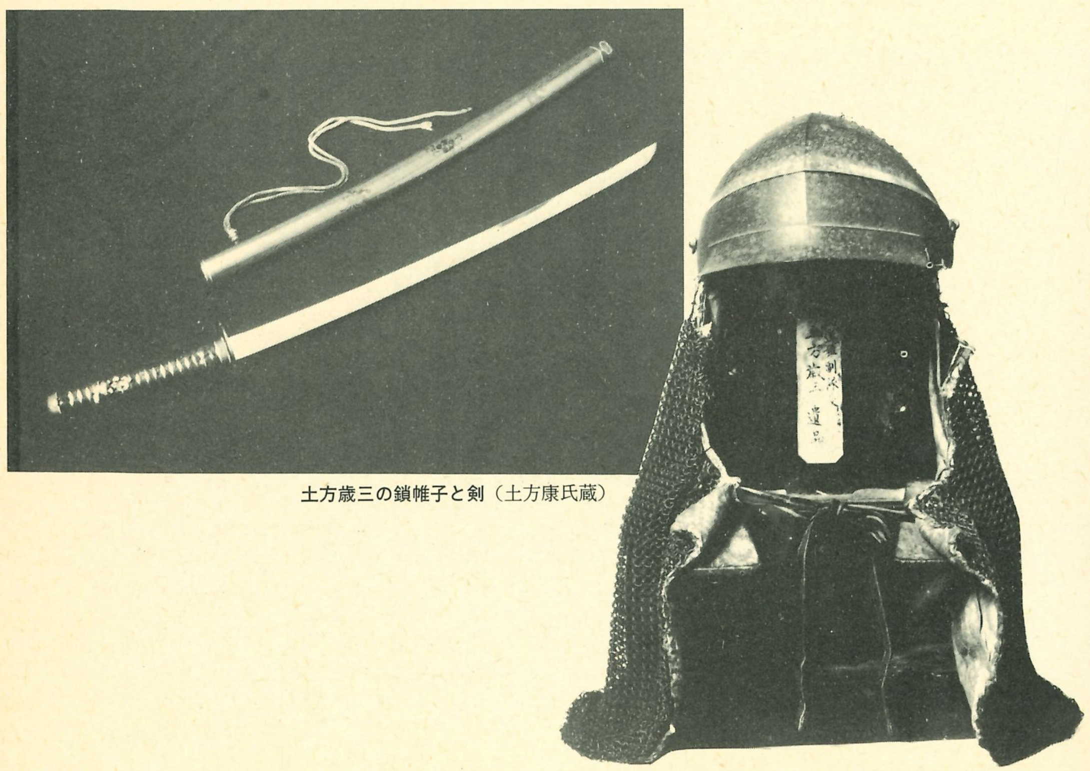
た、高台寺党にくみしたのは、今までは近藤の意をうけた内情偵察のためと考えられていたが、むしろ会津藩大目付の直接の指令で間者としてもぐり込んだのではと述べておられる。いずれにしても剣の冴えだけは凄かったようで、油小路の決闘の翌月、坂本龍馬暗殺は紀州藩士三浦休太郎の使嗾による新選組の犯行だとして、陸奥陽之助宗光ら海援・陸援両隊の十数名が夜中三浦の宿を襲撃してきた時、護衛に当っていた斎藤一はすっかり泥酔していたにもかかわらず、落ち着いて素早く室内の灯を消し、最先に踏みこんできた一人を一刀のもとに斬り伏せたという、そのプロとしての手際のよさを伝えるエピソードが残されている。

流亡——鳥羽・伏見から函館まで

幕末の動乱は、三百年ぶりに訪れた武士になれる絶好のチャンスであった。

慶応三年六月、総長近藤勇、見廻組与頭格・副長土方歳三、同肝煎格沖田総司ら組長六人は見廻組格の地位を与えられ、晴れて直参旗本の身分となり、ここに新選組は隠然たる佐幕の一勢力となった。しかし、時すでに遅く、幕府の長州征伐失敗、薩長の討幕密約成立などの情勢のなかで、彼らが一途に信じて守ろうとした公武合体は時代遅れとなり、王政復古により頼みとする会津侯も京都守護職を追われ、混乱のうちに鳥羽・伏見の戦いを迎える。新選組が結成以来の念願であった武士の集団として認められてから、わずか半年後のことであった。

慶応四年戊辰の年の一月三日に始まった鳥羽・伏見の戦いで新選



土方歳三の鎖帷子と剣（土方康氏蔵）

組は二十余名が戦死し、これが新選組流亡の始まりとなった。一月の六日に、将軍慶喜は会津松平容保ら側近、ほんの数名を連れてひそかに大坂城を抜け出し、天保山沖から江戸へと逃げて行った。その数日後、新選組も富士山丸に乗って江戸へ向かうのであるが、この艦中で、鳥羽・伏見の戦いで傷ついた重傷者のうち三名がろくな手当も受けずに死亡した。命からがら江戸へ着いたのは約四十名だったといわれている。この時、負傷者らを江戸へ輸送するその指揮官を務めたのが、永倉新八と斎藤一であった。

ところが、江戸へ着くと、恭順派の勝海舟がリーダーシップを握っており、将軍慶喜は自ら進んで江戸城を出、上野寛永寺に謹慎中。主戦派急先峰の会津藩や新選組は用がなくなってしまった。というよりむしろ、官軍のてまえ、江戸に居すわられては迷惑至極の存在だったのである。そこで、肩の傷もいえた近藤勇は甲陽鎮撫隊を三月一日に組織。しかし、すでに脱走した者もあり、付き従うのは、永倉・斎藤・原田ら二十数名にすぎなかった。彼らの任務は、五千両の金子と、五百挺の銃と二門の大砲をもらい、甲州の城を接収に行くことだったが、いってみれば体よく江戸を追い払われたようなものであった。この甲州へ向かう途中の日野のあたりは、近藤や土方の出身地である。かつて百姓の小せがれがいまや大旗本となって、故郷へ錦を飾って来る。近藤などはきらびやかな駕籠に乗り、まさに大名気分。地元は大歓迎に次ぐ大歓迎で、夜を日についで飲めや歌えの大騒ぎであった。そのような大歓迎のあと、ゆっくり勝沼へやって来たところが、すでに、板垣退助が率いる官軍三千名が岩倉具視を先頭にして甲州の城に入っていた。驚く間もなく官軍の鉄砲に追い払われ、今のブドウ

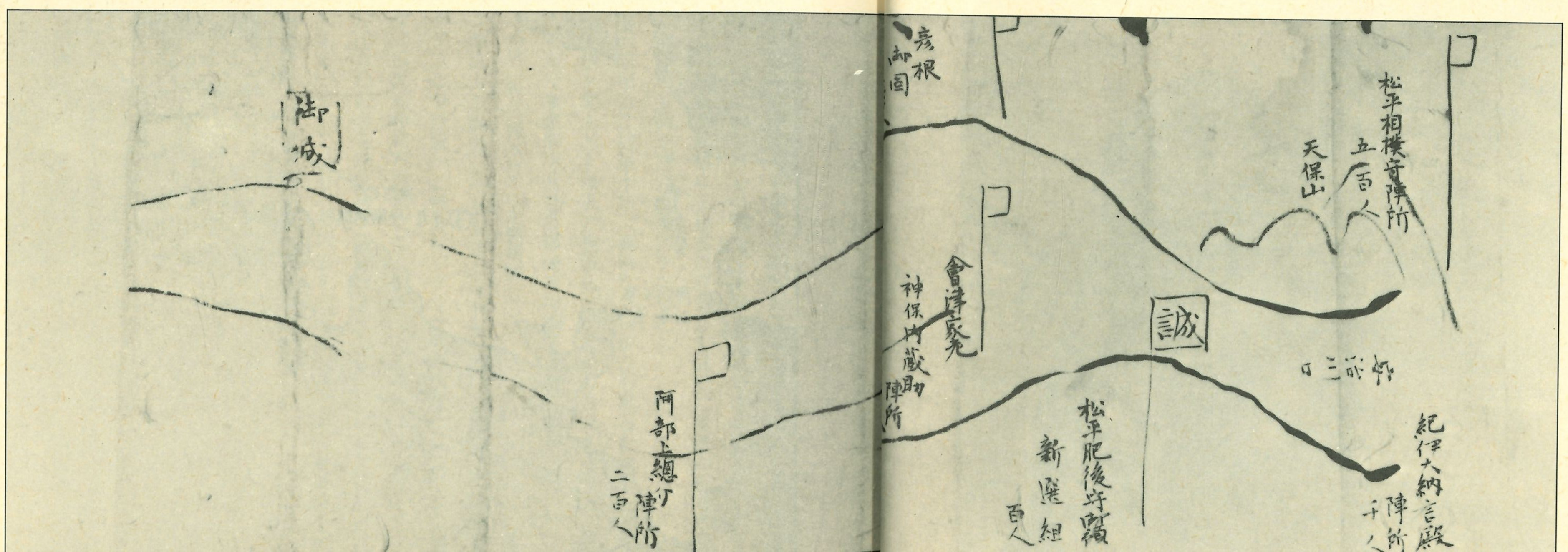
畑あたりをさんざんに逃げ回り、近藤勇も愛刀をふりかぶりながら、やっと退路をつくって散り散りバラバラに江戸へ逃げ帰って来て、下総の流山へ行って再起を期すことになった。

しかしながら、そのときには従うものは土方歳三ただ一人であった。新選組の初めから行を共にした、沖田総司と並ぶ剣の使い手の斎藤一や永倉新八などは、自分は近藤の同志ではあるが家来ではないといって、その後、別の隊を組織し、四月九日、江戸明け渡しの前日に会津へ向かったのである。永倉は会津へ行ってみるとすでに敗色濃厚。命からがら逃れてまた江戸へ帰って来た永倉は、朝敵となった身はとても隠しきれず、やむなく出身地の北海道松前藩へ帰参した。そこで藩医の養子に入り、明治になってから樺戸監獄の剣術師範をしたり、再び上京して牛込に撃剣の道場を開いたりして、最後は小樽で没したのであった。

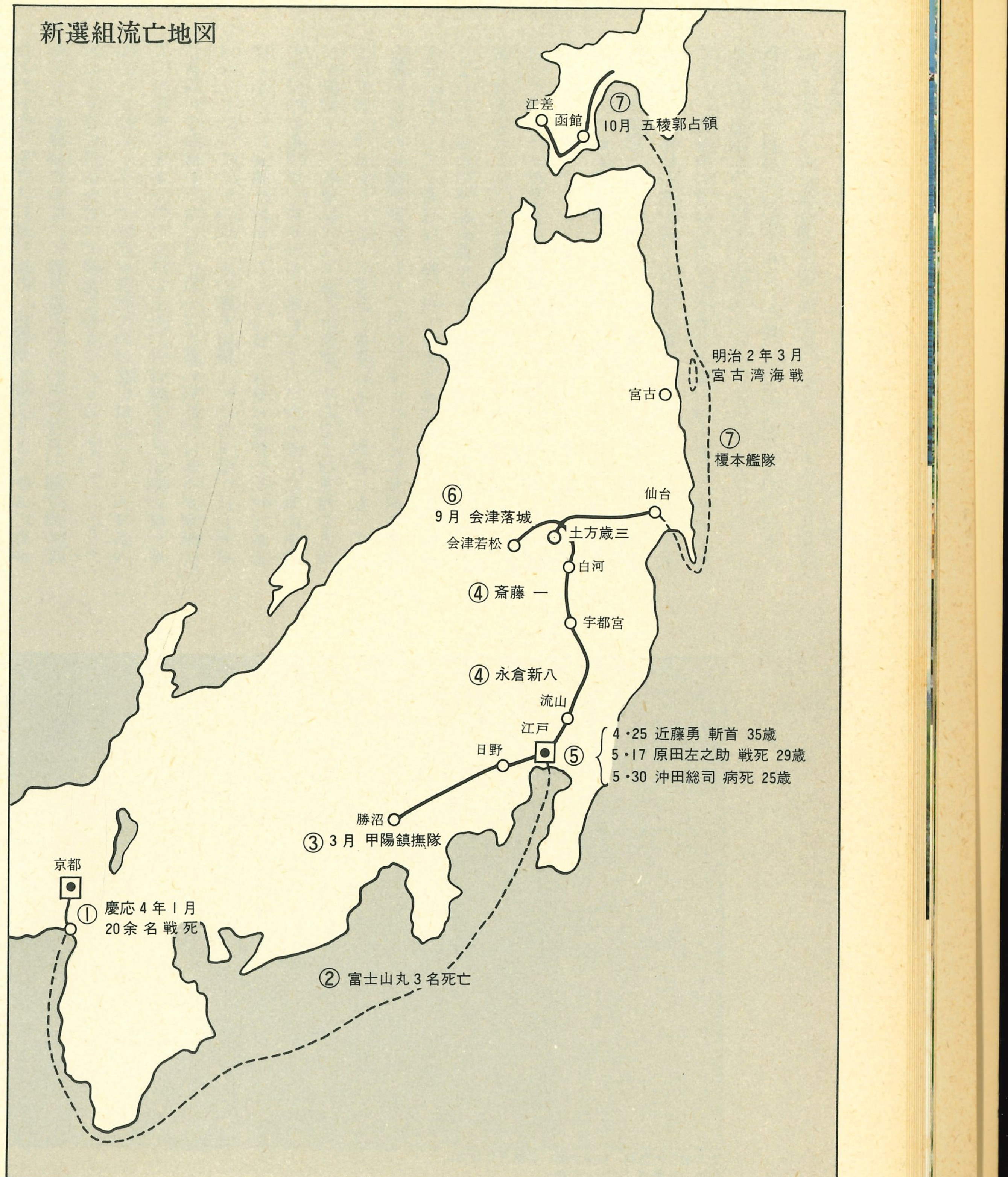
さて一方、流山で再起を期そうとした近藤勇は四月の初め、朝、目が覚めたところが、十重二十重と屯所を官軍に囲まれており、そこでつかまって板橋の宿で首を切られてしまった。時に四月の二十五日、近藤勇三十五歳であった。しかもこれと相前後して、槍をとっては新選組第一の使い手といわれた十番隊組長原田左之助も、彰義隊の戦いに加わり二十九歳で亡くなった。そしてかの沖田総司も結核の病が高じて二十五歳で千駄ケ谷でひっそりと死亡した。近藤勇の首は塩漬けにされて京都に送られ、三条河原や大坂の千日前にさらされたという。

板橋で、近藤勇の首がさらされた時、そばに立てられた立札には、次のようなことが書かれてあった。

「近藤勇



土方歳三が鳥羽・伏見の戦いの戦況を故郷に報告した手紙（平拙三氏蔵）



右者元来浮浪之者にて、初め在京新撰組之頭を勤め、後に江戸に住居致し、大久保大和と変名し、甲州並下総流山において官軍に手向ひ致し、或は徳川の内命を承り候抔と偽り唱へ、不容易企に及候段、上は朝廷下は徳川の名を偽り候次第、其罪数ふるに暇あらず、仍て死刑に行ひ梟首せしむる者也。」

後年、永倉新八は、かつての盟友近藤勇と、土方歳三の霊をとむらうため、ゆかりの地、板橋に二人の墓を建て、毎日のようにその行跡をしのんだというが、墓を建てるいきさつにつき、当時の新聞はこう報じている。

「鶴髪童顔静かに余生を愛孫の傅育にたのしんでいる小樽市花園町杉村義衛老人すなわち新撰組当年の副長助勤たる永倉新八の波瀾ありし半生の事歴はさきに長いあいだ本紙に連載したが、なお翁のために没却し去るべからざる一事がある。

東京板橋通り左側の横道をはいって滝の川寿徳寺管理の古墳のなかにひときわ目立つ丈余の石碑がある。その表面には、

近藤勇宜昌　（註・正しくは昌宜）
土方歳三義豊　墓

と記され、裏面には建立者永倉新八あらため杉村義衛および彫刻者平田四郎右衛門、両側には戦死病死または変死者の姓名が刻まれてある。これじつに徳川幕府掉尾の勇をふるえる新撰組の巨魁近藤勇と土方歳三の墓標である。

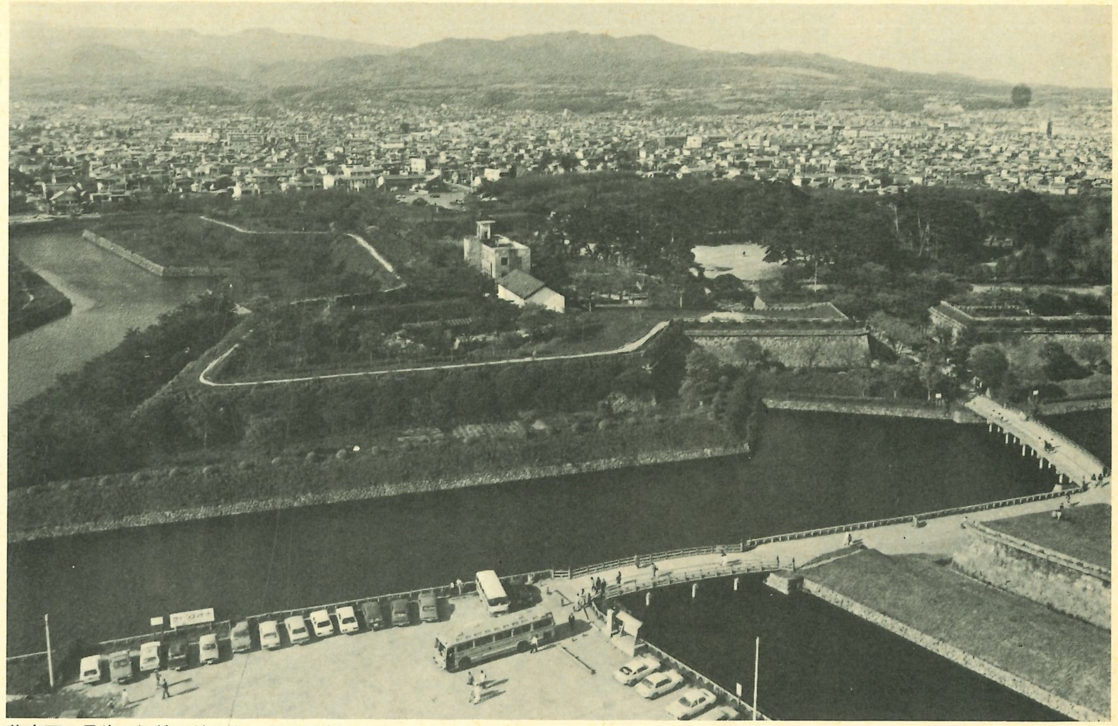
三百にちかい同志の団結もいわゆる強弩の末勢いかんともするによしなく、勇はついに板橋で官軍の手に斬られたが、かれらもまた憂国の志士で永倉とは肝胆あい照らした朋友である。そこで永倉はこのままにしてはその名も年とともに忘れらるるであろうと、明治九年ときの東京府権知事楠本正隆氏の許可をえて故松本順氏に一切の執筆を依頼し、近藤、土方の名を併記したうえ、前新徴組隊長芹沢鴨以下百名の姓名をも併記して勇の斬られた場所に追悼の石碑を建立したのである。

春風春雨ここに幾十年、青苔なめらかなる墓石を撫して当年の志士の情を偲ぶとき無限の感慨をおぼえぬものはあるまい。墓石の所在地は東京府下北豊島郡滝の川町字谷端二千十四番地である。」

（大正二年八月十日「小樽新聞」）

この流山を脱出した土方歳三は宇都宮から会津へと転戦して行き、ここで斎藤一と再会し、ゲリラ戦で活躍するのだが、利あらず、混乱の中に再び別れてしまう。九月に会津が落城して、さらに土方は仙台を経て榎本艦隊と合流し、はるばる函館へと行くのである。そして十月、五稜郭を占領し、選ばれて陸軍奉行並とな


松前城攻略の図（梅木通徳氏蔵）



幕府軍の最後の抵抗の地となった五稜郭

った。年が変わって明治二年の三月、宮古湾へ官軍の船が集結した。そのなかに官軍がフランスから購入したストーンウォールという甲鉄艦があり、土方歳三はそれを乗っ取ろうとして、三隻の船を率いて宮古湾へやって来た。ひそかに敵の甲鉄艦に接触して、斬りこみをかけたが、これまた鉄砲にやられてさんざんな目に遭い、またはるばると函館へ逃げて帰ったのである。

そして五月、函館の戦いが始まると、土方は、自分は死におくれた、もしこのまま官軍と和することがあれば、地下の近藤に相まみえることができないといって、常に死地を求めて戦ったということである。そして五月十一日、馬上において背中に数発の弾をうけて壮烈な戦死を遂げた。時に近藤勇と同じ三十五歳であった。そのほかの兵士たちはそれぞれ捕らえられたり、散り散りバラバラになってしまった。土方歳三と近藤勇がかつて武州の農村で出会ったその青春時代から数えてわずか十二、三年。これが鳥羽・伏見から新選組が完全に崩壊するまでの一年有半の流亡の歳月であった。

斜陽産業の幹部社員

——しかし、みんな若いんですよね。

笹沢　若いですね。人生五十年というけれども、だいたい三十代、二十代ですね。

——あの若者たちにとって新選組というのはどういうことだったのでしょうか。身を寄せる場所だったのでしょうか。

笹沢　やはり一つの夢の実現を図るための足がかりといいますかね。あまりうまくない言い方なんですが、いろんな条件がむつかしくてなかなか入れないような大企業に、突然、おまえ幹部社員にならないかとおだてられ、どうも企業が斜陽であるということはわかっていた、でも、倒産することはないだろう、と。それで大いに意気込んで入社して、ほかの一般社員というのは全然無気力そのもので、どうでもいいという社員のなかで、彼らは非常に目立ってよく仕事をした。しかし、倒産しちゃった。途端に責任の一部は彼らにあるよということで、倒産の原因の一部を押しつけられたという、そういう感じがするんですよ、新選組というのは。

——もし明治維新がすんなりいったとしたら、あるいは徳川家が逆にあそこまで落ちなかったら、極端にいえば存命したら、彼らは最大の功労者に数えられたかもしれないでしょうか。

笹沢　かもしれないんですけれども、いろいろな意味から判断すると、やはり追っ払われたと思います。甲陽鎮撫隊みたいな格好であっちへ追っ払われたのと同じように、体裁のいい形でやはり追っ払われていた。というのは、会津藩にしても幕府にしても利用するだけ利用しましたが、しかし彼らはあくまで新選組というものは武士と思ってないわけです。だから、いくら武士らしい働きをしても、実情というものはやはり武家の出身でなければ武士ではない。それはなまじ戦功を立ててこられたらなお始末が悪いんじゃないかと思うんです。何か理由をつけてやはり追っ払われた。明治維新といっても要するに権力の取りっこですから。まあ長州と薩摩と幕府と三者の権力の奪い合い、それに朝廷が利用される。それが三つ巴になりまして、この三つとも言うなれば大物ですよ。ですから、三つの大物のなかにほんとうに点みたいにちょこっといたのが新選組であって、なにか維新の始末は全部彼らを処断をすることによって決着をつけようなんていう見方もできなくはない。あれだけ大物が動くなかでは、あまりにも彼らは

趣味人・中島登の生涯

口絵で紹介した新選組戦友姿絵を描いた中島登には、新選組隊士としての華々しい活躍の記録は残っていない。それも道理、中島の新選組での任務は、武蔵、相模、甲州一帯の地理をしらべ、在住の人たちの思想をキャッチする、いわば諜略要員だったからである。

中島登は、天保九年の生まれ。二十歳のころ結婚、八王子を中心とした半農半武のグループ〝4人組〟に投じている。そのうち登は、組の同僚と争って斬り、組を脱退して新選組に入った。

登が地下の隠密行動から地上の制服組になったのは、鳥羽・伏見の戦いに敗れてからで、彼らは函館へたどり着き、彼はここで弁天台場の守備に当たったのである。

しかし、この戦いにも敗れ、登は虜囚となった。絵は、恭順中、時代の波に押し流され、囚われの身となった鬱屈をなぐさめ、また、長い戦いのあいだに戦死した同志への追慕の情から描かれたという。

御一新後の隊士たちの運命と同様、登もじぐざぐの道を歩むことになる。

はじめは、遠州白須賀、今の静岡県湖西町（浜松市へ八キロ）に入植、開墾に従事するかたわら、近所の青年たちに剣術指南をしていた。かなりの腕だったという。

まもなくここを出、道でたまたま出合ったのが、会津で戦った戦友、大島清慎で、登はしばらく大島の世話になる。ここでは近所の暴れものをとり鎮める、用心棒のようなことをやっていたようである。

ここで小金をため、つぎにはじめたのが質屋だが、〝武家の商法〟を地で行って、失敗してしまう。

登はなかなかの趣味人で、植木いじりが好きだったが、このころ流行していた葉蘭づくりに熱中し、見事な品種をつくりあげた。名づけて「金玉簾」という。これが品評会で評判となり、一万円の値がついたという。明治十四年のころの一万円である。

登は親株は売らずに、子株をふやしては売って大儲けしたという。ようやく運が向いてきたのである。

明治十七年には、静岡県下ではじめての鉄砲火薬売買人の免許をとっている。このころ社会事業にも寄付している記録が残っており、浜松の名士になっていたという。

しかし、好事魔多し、後にめとった後妻を失った翌年の元旦、〝たかくとも五十の峠を安々と越ゆれば御代の春ぞ長閑けき〟という歌を詠んだ四か月後、五十歳の波乱の生涯を閉じたのである。（中島節也）



土方歳三　土方は近藤に死に遅れたことを悔みながら死地を求めて戦っていった

小物すぎたということでしょうね。

単純さということをいえば、近藤勇なんていうのは最も単純で、すぐあの人は乗っちゃうでしょう。だから、まず最初に非常に小さな偶然で、例の京都守護職の松平容保に会ったときに彼は感激したそうですけどね。それは一介の浪人以下のものが本来だったら側にも寄れない殿様に、大名にお目通りするわけですから。松平に言われて非常に感激して、やる気を起こした。それが負けて江戸へ帰って、今度は甲陽鎮撫隊で若年寄格にしますなんていわれて、その気になっちゃうでしょう。非常におだてに乗っちゃうんです。ぼくはそれがやはり近藤勇だけではなくて、みんなにあったんじゃないかと思います。それが結局最後まで逃げなければならないような状態、利用するだけ利用して、いらんようになったらポイという、そういううまいワナにちゃんとはまっちゃう。よくいえば武骨者というんでしょうけれども、悪くいえばあまりにも単純すぎるんじゃないか。

花火のごとく散った若者たち

——いまたいへんな新選組ブームだそうですけれど、どのへんに理由があるとお思いになりますか。

笹沢　私はやはり、若くして死んだということが、いちばん若い女の人には魅力じゃないかと思うんですよ。あまり年老いて死んだら好きになってくれないですよ。これはやはり、みんな三十五以下で死んでいく、その悲愴感というのは女の人は好きなんじゃないかと思うんですけどね。と同時に、ああいう一つの大きなロマンを抱かえて、それでほんとうに花火のごとく散っていった、ああいう非常に強い男というのは現代にはいないでしょう。私はそういう面では、女の人の永遠に理想像だと思うんです。自分の亭主にしちゃ困りますよ、すぐ死んだら困っちゃうから。ですけど、一つの理想像としては、若くして死んで、だいたいなぜか美男子にされちゃうでしょう。

土方歳三は美男子だったそうですけど、強くてはかなく死んでいくなんていうのは、これは若い女性が好きになるのはあたりまえだと思いますね。

——しかし、実像はそうではなかったということですね。

笹沢　夢をこわすようで申しわけないですが、世の中そんなに甘くないということですね。

ありし日の戦友を描いた勇ましい姿絵が残されている。五稜郭で降伏した一隊士中島登が、おのれの青春への惜別の思いと、死んでいった同志への追慕の情とをこめてかき残したものである。近藤勇、土方歳三、そして山口二郎こと斎藤一。

戒名もいらぬといった元隊士の晩年

青森県三戸郡五戸村。

明治三年五月、かつて斗南と呼ばれたこの不毛の地で、旧会津藩の移住民にまじって一戸伝八と名のる男が開墾の鍬をふるいはじめた。会津で土方と別れた元新選組三番隊長斎藤一の姿である。

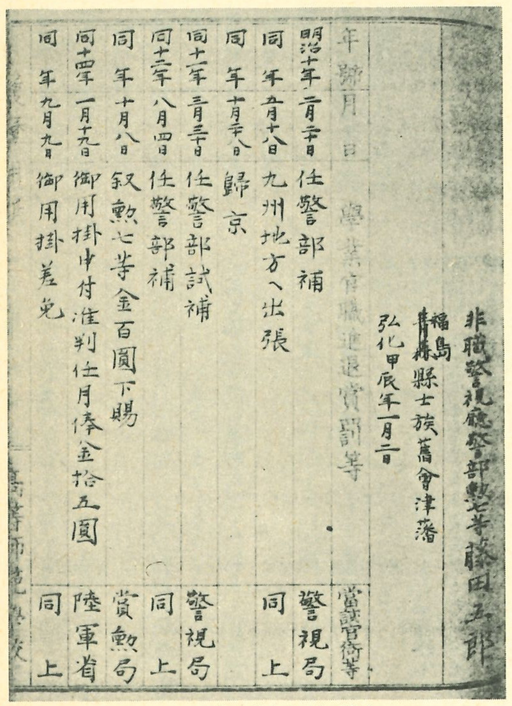
ほどなく彼は、東京から移住民激励にやって来た松平容保の媒酌で結婚、藤田五郎なる名前をもらって上京する。

明治十年警視局警部補となり、西南戦争に従軍、晴れて朝敵の汚名を返上する。

その後の彼は、学校の守衛や書記を勤め、大正四年九月、同志永



ありし日の戦友の姿絵を描いた元隊士の中島登（中島登氏蔵）



非職警視廳警部勲七等藤田五郎
福島 青森 縣士族舊會津藩
弘化甲辰年一月二日

年號月日	學業官職進退賞罰等	當該官衙等
明治十年二月廿二日	任警部補	警視局
同年五月十八日	九州地方へ出張	同上
同年十月廿八日	歸京	
同十一年三月廿三日	任警部試補	警視局
同十二年八月四日	任警部補	同上
同年十月八日	叙勲七等金百圓下賜	賞勲局
同十四年一月十九日	御用掛申付准判任月俸金拾五圓	陸軍省
同年九月九日	御用掛差免	同上

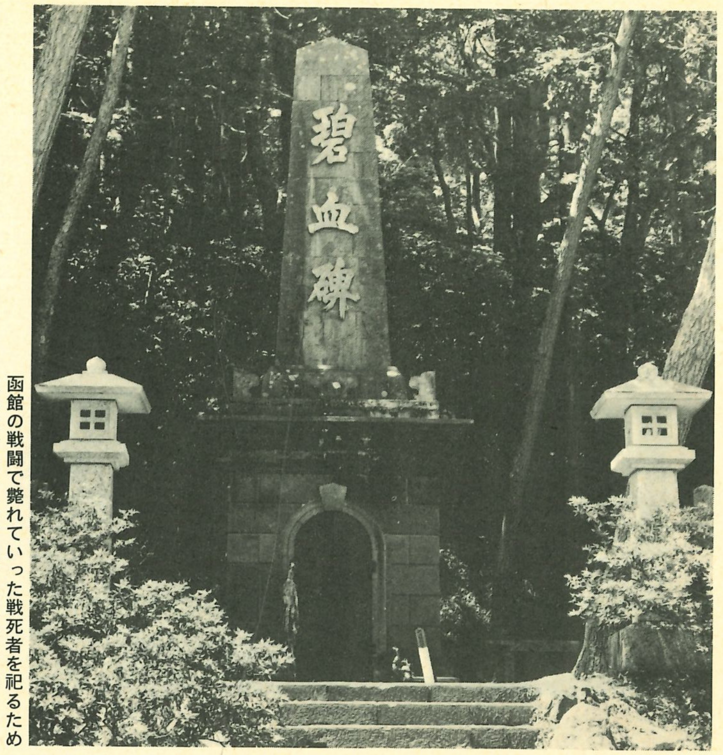
藤田五郎と名を改めて明治を生きた剣の達人の斎藤一の履歴書（藤田誠氏蔵）

倉新八の死におくれること九か月で波乱の人生を終える。白晒の経帷子を身にまとい、床の間に正座をして、カッと眼を見開いての最期であった。

晩年、子供らに語ったという。

「何度名前を変えたか自分でもわからない。それは、敵であった人々の報復から逃げるためでもあった。もう名前など欲しくない。戒名も付けないでくれ」と。

享年七十二歳であった。



函館の戦闘で斃れていった戦死者を祀るため大鳥圭介らによって建てられた碧血碑

なぜ新選組なのか

尾崎秀樹

幕末期に活躍した諸隊は少なくなく、海援隊、陸援隊、奇兵隊、赤報隊、凌霜隊……など、数えきれないほどだ。

時代の変革期には、人間も動けば金も動く。まして戦争や革命ともなれば、その動きもまた大きくなる。正規の人員や準備金だけではまかないきれず、雑多なものが動員される結果となるが、それだけにまた在野の潜在的なエネルギーが噴出することにもなるのだ。

おまけに幕末の諸隊で終わりをまっとうしたものは少ない。佐幕派はもちろんのこと、討幕派について活躍したグループさえ、歴史の非情を味わわされた。それは利用するだけして、あとはお払い箱といった権力の意志によるものであり、むごい目にあわされるのはいつも大衆だというテーゼがそこにも生きている。

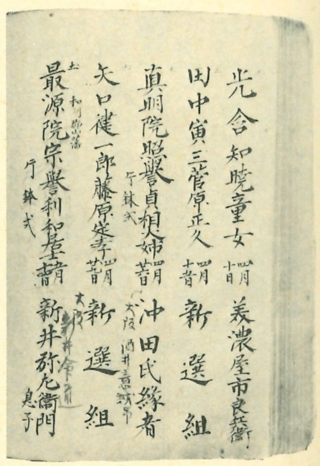
新選組はその典型だ。中核をなしたのが武州から相州へかけての中・富農層の二、三男であり、近藤勇を頭にいただく試衛館グループであったことは、あらためていうまでもない。

彼らは農村の出身だけに、かえってサムライ身分へのあこがれがつよく、武士道意識の純粋性を最後まで保ちつづけた。さらに多摩地方特有の地域的連帯感がその結束の軸をなしており、新選組の厳正な隊規、果敢な行動力、チームワークのみごとさなどはそのあらわれとみなされる。

旗本八万騎と一口にいわれるが、実際に使いものになる侍はたいして多くはなかった。動乱期になると、在来の武士だけにたよってはおれず、新選組など多摩の中・富農層の子弟で構成された変則的な組織がクローズ・アップされることになる。

もともと新選組の前身である浪士隊が編成されたのは、浪人対策の一環だったと思われるが、清川（河）八郎らが江戸へもどった後、京都に残留した二十余名の連中は、清川とは別の大義名分にもとづき、会津守護職直属のパトロール部隊として組織され、さらに芹沢鴨一派を排除して、試衛館グループのイニシアティヴによる組織づくりがなされるのだ。

だが不幸なことに、彼らが戦略論として準拠した公武合体策は、あわただしい政局の中で次第に時代おくれとなり、忠誠心にかられて行動すればするほど、歴史に逆行するといった悲運を招くことになった。本来ならば伊東甲子太郎一派の動きの方が、時世を見抜く点ではるかに進んでいた。しかし近藤や土方は伊東一派を裏切り者として処断し、みずからの将来を決定づけたのであった。その意味では、鳥羽・伏見の戦いから甲陽鎮撫隊の敗残に至る過程は、その選択の上にもたらされた必然のコースだったのである。



過去帳・往詣記にある沖田氏縁者（光縁寺蔵）

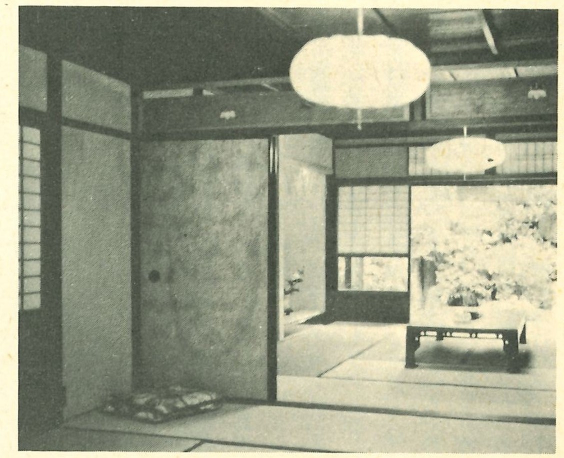
近藤勇ら指導的地位にあった連中は、時世にくらかったのであろうか。必ずしもそうとばかりはいえない面もある。近藤は当時の時代思潮であった尊王論を一応身につけていた。だからこそ公武合体策を信条としたのだ。しかし彼の限界は、その公武合体策を唯一のものとし、最後まで疑うことがなかった点である。新選組の隊士は、職務に忠実であればあるだけ、討幕派の志士たちを倒し、その敵とならざるを得なかった。

子母沢寛は新選組について質問を受ける際に、まず第一につぎのように説明したそうである。

「新選組は京都守護職支配下の役人、警察隊の一グループである。まず、それをわかっていただければ、かれらのやった事の御理解が参りましょう。」

この大前提を抜きにしては、新選組の存在理由も、その悲劇的末路も理解できない。

新選組のブームは、TBS―朝日系テレビが



新選組の壬生屯所が置かれた八木氏邸

昭和三十六年に「新選組始末記」を放映して以来である。そしてNETテレビが「燃えよ剣」でつくり出した沖田総司像（島田順司）が異常な沖田ブームをまきおこした。

　もちろんそれ以前から、新選組にたいする潜在的な人気は存在した。明治戊辰から六十年にあたる昭和三年に、子母沢寛の『新選組始末記』、平尾道雄の『新撰組史』（後に『新撰組史録』と改題）が出版されて以来、新選組についての研究は、やっと正規の軌道にのせられたが、まだまだ小説や映画の世界では、勤王佐幕といった図式にもとづいた単純な認識が支配的だった。

　それが改まり、隊士個々の動きにも光があたるようになったのは、戦後のことである。村上元三や井上友一郎の仕事につづいて、司馬遼太郎の『燃えよ剣』や『新選組血風録』が書かれ、したしみのもてる人間造型がなされたことも、ブームの一助となった。

　だがテレビによる異常な人気は、それ以前の趣味的なものとはことなり、ふかい世代的共感に由来するようだ。沖田総司の墓のある元麻布の専称寺には、全国からファンがつめかけるという。寺に備えつけられたノートをみせてもらったことがあるが、それには学生やOLたちの熱烈な共感が、さまざまな字体で書きとめられていた。それはファン・レターとよぶにふさわしいものだった。なぜこれほどまでに新選組、とくに沖田総司が若い世代に迎えられるのだろうか。

　管理社会の機構がつよくなり、自閉的な要因が加わるにつれて、若い人々はどこかに自分の喜びや悲しみを訴える対象をもとめたがるものだ。新選組はそれにふさわしい存在だったのである。

　新選組の魅力はいくつか考えられる。

　ひとつは彼らが農村の二、三男であり、威張りくさった侍とはちがう庶民的な性格をもつ点だ。それだけに普通の侍以上にサムライ的であり、純粋さが感じられる。

　第二は彼らの末路の悲惨さだ。近藤勇は板橋の刑場で斬られ、副長の土方歳三は函館戦争で陣歿し、沖田総司は胸を患って夭折する。生き残った者にしても、むくわれないままに世を終えた者が少なくない。それが大衆の判官びいきを誘うことになった。

　第三は隊士それぞれの個性的なおもしろさである。剣あり恋あり、話題には事欠かない。シンボル的存在としての近藤、まれにみる組織者としての土方、若さと美貌と剣の冴えを一身にあつめた沖田をはじめとして、隊規に照らして切腹となった山南敬助、剣と槍にすぐれていた原田左之助、北辰一刀流の使い手であった藤堂平助、谷三十郎と万太郎兄弟、大正時代まで生き残った斎藤一や永倉新八等々、バラエティに富んでいる。

　隊士たちの一人びとりが波瀾に富んだ生きかたをしており、それだけに銘々伝のおもしろさがある。これはちょうど赤穂義士銘々伝と同じ魅力で、個々に独立して興味をよぶと同時に、



壬生屯所近くの壬生寺

それらが全体として歴史の波動の中に生きているところに、つきない魅力の源泉がある。

　もっとも史実そのものというより、人々がイメージとして思い浮かべるのは、小説や映画やテレビなどがつくった虚像であり、それだけにまた理想化が加わっていて、いっそうカッコよくうつるのだ。

　最後に、彼らは門閥や所属を誇るような立場にはおらず、何となく自分たちともしたしく話しあえるような人物であると思える点も見落とせない。つまりまかりまちがえば、われわれもまた新選組の隊士たちと同様な泣きと笑いを、体験することにならないとも限らないわけだ。

　出身からくる大衆性、判官びいき、多彩さ、親近感などが、新選組の人気の条件ではないだろうか。

　「むかし忠臣蔵、いま新選組」といった対照は、この両者が比較的単純な筋立てのものとして受けとられていることからもきている。実際にはどちらもそれほど単純ではないのだが、両者に共通しているのは、一方が主君の仇を討つといった忠誠心の発露であり、他方が滅びゆく徳川（とくせん）家に殉じるといった忠誠心にもとづく点だ。しかも銘々伝の魅力をもち、ヒーロー、ヒロインに事欠かないことも共通している。その上、春夏秋冬の季節感がもりこまれ、池田屋事件に祇園の宵宮が色どりを添えているように、吉良邸討入りに雪の叙景が加わる。

　そういった意味では、絵になる場面がちゃんと備わっていることも、映画やテレビでくり返しとりあげられるゆえんである。

　私が新選組関係の事蹟をたずねまわったのは、新選組ブームがおこる少し前のことだったが、まだ所によっては昔のままの面影を残した場所もあった。しかしブームになってからは状況が一変し、中には観光化された所も出現した。

　だがその新選組の事蹟をたずねようとするファンたちの姿には、きわめて純粋なものが感じられる。毎年、春と秋には京都の壬生寺へ訪ねてゆきますという人もいたし、土方歳三の日野の生家に何回も行きましたという人にも出会った。会津の母成峠や北海道の二股口をまわった人にも会ったことがある。私も何度かそれらの土地へ足をのばしたが、そのたびに新しい感慨をおぼえるのは、新選組の隊士の運命が、別の角度からよみとれるからだろうか。

　私たち戦中派は、特攻隊に志願した世代だが、その仲間たちを見る眼は、案外、幕末の激動期を生きた人々の運命を見る眼とかさなるところがある。そんなことをいっても戦後の世代には通じないだろうが、新選組の行動の中に純粋なものをみようとする意識は、別のものではあるまい。

　私は子母沢寛によって新選組にたいする関心を植えつけられたが、この先輩の気持の底には、歴史への鎮魂の思いがうずいていた。しかし今の若い世代にとって新選組は何なのか、もう一度問い直してみたい。

（評論家）

「人斬り」列伝

編集部

●岡田以蔵

土佐勤王党の武市半平太は、公武合体派の吉田東洋の暗殺を指令するなど、改革のための手段として〝暗殺〟を平然として用いた。この武市半平太の走狗として殺人剣をふるったのが、出自いやしき岡田以蔵という男である。

後に坂本龍馬の周旋で勝海舟の用心棒を勤めたことがあり、この勝をねらった人斬りをあっという間に斬り伏せて、勝を驚かせたというエピソードも残されているが、本間精一郎殺し、目明し文吉殺し、京都町奉行所与力、同心殺し等々、岡田以蔵の剣のすさまじさは、なまじ知性も教養もなく、勤王も攘夷もない点で、他の幕末の人斬り連中よりもランキング上位に置いてよいだろう。

人斬りの血はやがて自分にも降りかかり、吉田東洋暗殺（この実行者は岡田以蔵ではない）を怒った藩主容堂侯の勤王党弾圧により、武市半平太は牢につながれた。

数々の暗殺指令を出した武市は、万が一岡田以蔵が藩吏に捕らえられては大変と、牢中より岡田以蔵殺しを指令した。以蔵は驚き怖れ自ら名乗り出て縛についた。そこで武市は牢外の同志に手紙を出し、岡田以蔵の毒殺を指令した。以蔵が拷問にかけられて自白するのを恐れたからである。

なんともひどい話だが、ここらあたりが勤王武士の本音か。以蔵はあらいざらい自白し、ために半平太は切腹、武士ではなかった以蔵は無宿人として斬首の上、獄門となった。

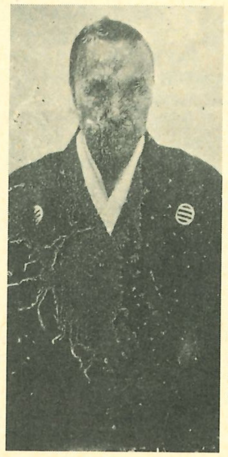
●田中新兵衛

薩摩を代表する〝人斬り〟で、異名を人斬りの新兵衛という。

公武合体派の九条関白の家宰島田左近を斬殺し、青竹に首を刺し梟首し、屍体を放置した事件の主犯者。後に土佐の武市半平太に身がらを預けられ、数々の暗殺指令を受けたものとみられる。通説では本間精一郎、宇郷玄蕃頭の二人の暗殺にも関与しているという。薩摩人でありながら土佐勤王党に関連したことで、彼の最後は悲惨なものとなる。

新兵衛は姉小路公知（尊攘派）の暗殺事件の主犯と目された。暗殺現場（朔平門外）に田中新兵衛の刀が残されていたのが物的証拠となった。新兵衛はその前に三本木の安料亭で遊んだ時、刀をすり替えられたものらしいが、土佐の那須信吾（吉田東洋暗殺の主犯）の「新兵衛の差料だ」という証言により町奉行に拘引された。土佐と薩摩の政治的対立のなかで、この船頭から示現流の名手に変身した殺人者は、奉行所の白州でみずから切腹して果てざるを得なかった。

以蔵といい新兵衛といい、考えることより刀を振るうことのほうが得意という単細胞的〝人斬り〟は、倒幕を画す首謀者たちにとって一番利用しやすい人種だったのだろう。



河上彦斎に殺された佐久間象山（象山記念館蔵）

●河上彦斎

これも肥後の人斬り彦斎と異名を取る熊本藩の茶坊主上がりの河上彦斎は、京の三条木屋町通りで白昼佐久間象山を斬ったことで知られている。

佐久間象山は公武合体論と開国論をもって京都の頑迷な公卿を説得し、その言動が攘夷派にとっては邪魔であった。わずかな従者を連れ宿に帰る途中を、河上彦斎ら数人にねらわれたのである。

その時象山は、西洋鞍をおいた馬に乗っていたという。

維新後、彦斎は時の政府の主導権を握った長州閥と意見が合わず、郷里に帰って有終館という私塾を開いた。木戸孝允は彦斎の政府批判（文明開化の風をそしる）を危険とみて、彦斎を逮捕し獄死させてしまう。彦斎にとっては攘夷を口にし倒幕した薩長の維新後の姿勢には裏切られたと感じたのだろうが、彼が開国派に人斬りの刀を振るっていた当時から、薩長のおえら方は、決して攘夷を本当に考えてなんかいなかったのである。

彼も以蔵、新兵衛と同様に時代の流れにほんろうされた〝人斬り〟だったのである。



人斬り半次郎改め桐野利秋（鹿児島市立美術館蔵）

●中村半次郎（桐野利秋）

薩摩藩のからいも侍と呼ばれる半農の下級武士の出身で、示現流を自得した中村半次郎も〝人斬り〟と呼ばれた。

京に出て佐幕派の連中を斬りまくったが、開明派の兵学者赤松小三郎の門に学びながら、彼を京の路上で斬っている。さらに寺田屋事件では、島津久光の命を受けて斬り込みの先陣を受け持ち、有馬新七ら同藩の急進派を斬っている。

この半次郎は、西郷の東征に従い上野の彰義隊、会津城の攻略にめざましい働きをし、維新後、桐野利秋と名を変えたが、文盲であったといわれている。武骨一辺倒の根っからの人斬り、戦争好きであり、征韓論に破れた西郷とともに下野し、いわゆる西南の役で、城山に奮戦して戦死した。

西郷に私淑し、生涯を賭けたのだから、共に城山の露となっても悔いはないのだろうが、当時の状況からいって、西郷の征韓論をいさめるなり、私学校の生徒の暴走を止めるなりのこともしなかった、いやできなかった桐野利秋は、所詮はからいも侍上がりの人斬り半次郎が、改名したにすぎなかったといえるだろう。

●新選組

新選組の隊士は、隊中法度によってきびしく統制されていた。浪士ややくざ、農民上がりの隊員が多いので、きびしくせざるを得なかったが、新選組が近藤勇・土方歳三コンビで固まる過程も血塗られたものだ。

浪士隊を作って、上洛する将軍の護衛をするという清河八郎の計画によって集まった浪士隊のうち、清河の本当のねらいに乗らず京に残ったのが芹沢鴨ら水戸系と近藤勇ら試衛館系の二派。清河は江戸に帰って間もなく佐々木唯三郎らに暗殺される。

近藤は芹沢派の横暴を見かねて、その右腕ともいえる新見錦に詰腹を切らせる。さらに泥酔して女と同衾中の芹沢を斬殺する。

試衛館派の山南敬助も、近藤・土方のやり方について行けなくなり脱退したため、沖田総司の手によって斬られた。

さらに後に参謀として参加した伊東甲子太郎が、御陵衛士隊を作って脱隊すると、この伊東も近藤の妾宅に呼び、会合の帰途永倉新八、土方らで暗殺し、屍体を油小路に放置する。この屍体を引き取りに行ったのが、伊東とともに御陵衛士隊員となった旧新選組の篠原泰之進、鈴木三樹三郎、服部武雄、藤堂平助、毛内有之助らで油小路に待ち伏せしていた土方、永倉、原田左之助らと激闘をくりひろげ、服部、藤堂、毛内らは斬殺された。

新選組が名を上げたのは、いうまでもなく池田屋騒動だが、この斬り込みによって維新が一年遅れたという。肥後の宮部鼎蔵、松田重助、長州の吉田稔麿、杉山松助、佐伯靱彦、土佐の野老山吾吉郎、石川潤次郎、北添佶摩、望月義澄、播州の大鷹忠兵衛、大高又次郎などの志士が難にあっている。

一番強かったのは原田左之助とも永倉新八ともいわれているが、近藤、土方、沖田も人後に落ちない、血塗られた殺人剣の持ち主といえるだろう。

新選組のふるさと・多摩

編集部

幕末動乱の時代、新選組の中心人物として活躍した近藤勇や土方歳三のふるさと多摩には、彼らに熱烈な想いを抱いた若いファンがつめかけて来る。新選組がもろくも崩壊してから百年以上も過ぎ、多摩周辺の景観も宅地化の波が押し寄せて、かなり変貌してしまった。しかし、熱烈な想いは、都会生活者の稀薄な生活の活性剤として、甦えりつつあるようである。これから訪れてみたい人たちのために、多摩の新選組散歩をしてみよう。

近藤勇の**生家跡**は調布市野水（三鷹駅から府中朝日町行バスで竜源寺下車）にある。人見街道に面して、草が茂る小さな空地がそれで、ここには**生湯の井戸跡**が残っている。またここに、近藤勇を祀る**近藤神社**がこのほど子孫の方の手によって再建された。

人見街道をはさんで、生家跡の斜め向かい側に、勇の甥近藤勇五郎が建てた剣道場**撥雲館**（調布市西町）がある。これは昭和七年、勇五郎の門下生らによって改築されたものだが、生前の勇五郎が勇の遺志を継いで剣道場を建て、近在の者たちに剣道を教えたところである。撥雲館の命名は山岡鉄舟によるもの。



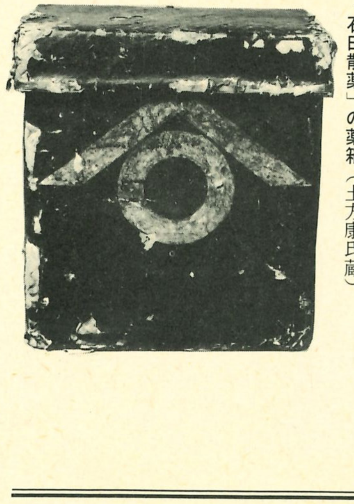
近藤勇五郎の剣道場・撥雲館

この道場の隣りに住む峰岸コンさんは、勇五郎の娘さんである。もうかなりのお年だが、たいへん元気で、現在も野良仕事をしているが、笑顔を拝見していると、目元のあたりに近藤勇の面影を宿しているように感じられる。道場に立つ父勇五郎の厳しい姿を想い浮かべながら語られるおばあちゃんであるが、この撥雲館、今も正月の時だけ開き、ここで三鷹の剣士たちが多数集まって寒げいこを行うということであった。

生家跡の近く、やはり人見街道に面して、勇の菩提寺の**龍源寺**（三鷹市大沢）がある。板橋で処刑され墓地に埋められた勇の首なしの死体を、夜中、人目をはばかって勇五郎ら数人で掘り起こし、運んでここに埋葬したのであった。寺の入口には勇の胸像が建っているのも皮肉だが、本堂裏手、竹やぶを抜けたところに、勇や勇五郎の墓がある。線香の煙が絶えない墓である。

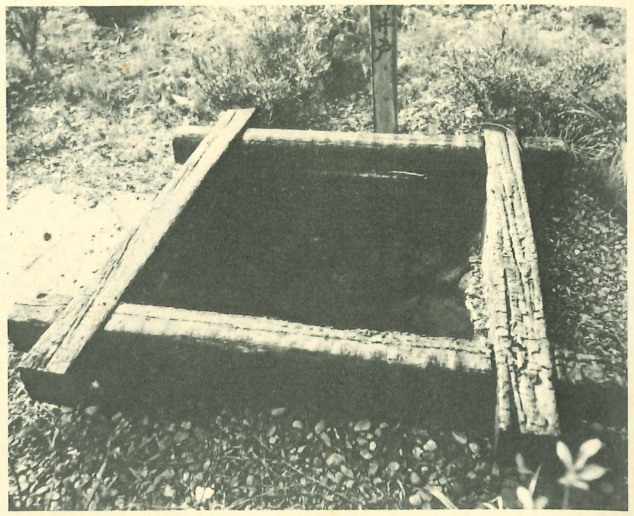
新選組のもう一人の指導者土方歳三は日野の豪農の四男として生まれた。土方家は農業の他に、薬の商いも行っていた。家に代々伝わっている話では、宝永年間、先祖のガマが当主の夢枕に立ち、村人たちが病いで苦しんでいるのを見かねて、薬を作るようにとの指示があって以来、「石田散薬」という薬の行商を始めたということである。

現当主土方康氏（歳三の次兄の子孫）によれば、戦後しばらくまでこの薬の行商を行っていたという。薬のもとは多摩川べりに茂る牛角草で、ただし土用の午の日に刈り取らないとききめがないとのことで、その日は村人総手で刈り取り作業にはげんだそうである。歳三も、この日ばかりは村人たちの指揮官としてよく働いたらしい。しかし、「石田散薬」の薬箱を背負って八王子周辺から甲府方面まで出掛ける歳三は、薬箱に剣術の道具一式をつめ込んで各地で剣術のけいこをして回ったらしく、どうも商売はあまりやってこなかったようである。



「石田散薬」の薬箱（土方康氏蔵）









上右　近藤勇の生家跡に残る生湯の井戸
下右　近藤勇五郎の娘の峰岸コンさん
上左　龍源寺の近藤勇胸像
下左　龍源寺墓地の近藤勇・勇五郎の墓

日野駅から歩いて二十分、日野市石田にある**土方家**には土方ファンがたびたび訪ねて来るらしく、千羽鶴やブロンズ製の歳三胸像などが飾られている。「あんまりたくさんのファンがやって来るもんだから、時々逃げ出しちゃうよ」と康氏が快活に語られるほどの盛況ぶりである。近くに土方家の菩提寺の**石田寺**がある。

日野からさほど遠くないところに、高幡山金剛寺（京王線高幡不動駅下車）がある。ここは、多摩自然動物公園に続く多摩丘陵の一角であるが、この境内に近藤勇と土方歳三の「殉節両雄之碑」が建っている。これは多摩の豪農佐藤俊正や小島為政、近藤勇次郎らによって建てられたものである。

ところで、多摩は天正十八年（一五九〇）、徳川家康が江戸城に入って以来、江戸を中心とした支配体制確立の基として、天領や旗本領となっていった。また甲斐との国境の治安維持部隊として、八王子に千人同心という、普段は本百姓としての生活を送っている武士団が結成されていた。しかし幕藩体制の確立とともに、千人同心の存在意義も次第に薄れてきて、半農半武士的な性格がより一層強調されてくるようになっていったが、指導的立場にある農民階級は、在村の武士団と血縁関係などを結びながら、天領であるゆえの恩義を幕府に感じていたのである。

幕末期、各地に一揆や打ちこわしが荒れ狂っ

た時、多摩八王子では豪農の組織した農兵が存在したため、一揆・打ちこわしが波及しなかった。このことに注目した幕府能吏江川坦庵は、豪農を中心にして、農閑期の農民に武術の訓練を行えば一揆・打ちこわしに十分対抗できると考え、やがて幕府もこのような策を容れることになり、名主や組頭、百姓代などの豪農幹部を育成して、各地に農兵隊を組織したのであった。多摩の農兵隊が武州一揆を鎮圧したころから、指導層である豪農に大きな自信を与えるようになったのである。

近藤勇の父宮川久次郎は多摩石原村の豪農であり、また土方家も多摩石田村の豪農である。時代の波を敏感に受けとめつつ、天領の民である自負意識をもって、彼らは登場してきたが、新選組を支援する農兵隊の指導階級が多摩に多くいたことを忘れてはならないだろう。

「殉節両雄之碑」の建立者の一人、小島為政も、小野路（現町田市小野路）の豪農であった。武士が頼りにならなくなった時代に生きるため、自衛のために豪農の子弟を中心に剣術を学んでいったが、小島為政も、試衛館時代の若き近藤勇や土方歳三を小島家に呼んで、村人たちに剣道のけいこをつけてもらったのである。



土方家の当主の土方康氏

為政は武の道を勇に学び、一方勇は文の道を学者である為政から学び、二人は義兄弟の関係を結んだのである。この二人の信頼関係は続き、新選組局長として京都にいた勇は為政に京都の情勢を書状にしたためて多数送り、また為政は農兵隊を組織したり金銭面での援助を行ったのである。

小島家は、昭和四十三年、**小島資料館**を設立した。資料館（小田急線鶴川駅下車、小野路行バスで駐在所前下車。なお開館時間は毎月第一・三日曜日の午後一〜五時）には、小島家に伝わるぼう大な量の古文書や典籍などの他に、近藤勇や土方歳三の手紙など、新選組関係の資料も多数陳列されている。

小野路の先には、多摩ニュータウンがひろがり、多摩丘陵は変貌しきってしまったが、小島資料館周辺は木の生い繁った山がせまり、竹林が昔をしのばせてくれる。若き日の近藤や土方が江戸の試衛館からここへ幾度となく通って、剣道のけいこをつけ、また漢詩文を学んでいたことを想いながら周辺に足を運べば、よい散策の一日となろう。

徳川家康以来、天領として生きた多摩は、幕末の動乱の中で、新選組の中心人物たちを生み、また農兵隊を組織して、やがて崩壊していった。徳川とともに生き、かつ徳川とともに滅んでいったのであるが、しかし明治になり、自由民権運動が盛んになると、多摩は、再び豪農たちを中心にして、時代の新しい展開の中で浮かび上がってくるのであった。



対馬藩の外交

江戸時代を「鎖国の時代」と決めつける人が多いが、この時代、朝鮮との間には、厳として国交があった。秀吉の朝鮮侵略の跡始末に腐心した家康が、国交修復の手段として相互に使節を交換したが、その交渉を含め、対朝鮮外交を一手に引受けたのは、対馬藩宗氏であった。

厳原の万松院。宗家の菩提寺である。その規模の大をもって日本三大墓所と言われもするが、時の藩主宗義智をはじめ十四代の藩主の墓が建ち並び、宗家往時の隆盛をしのぶことができる。

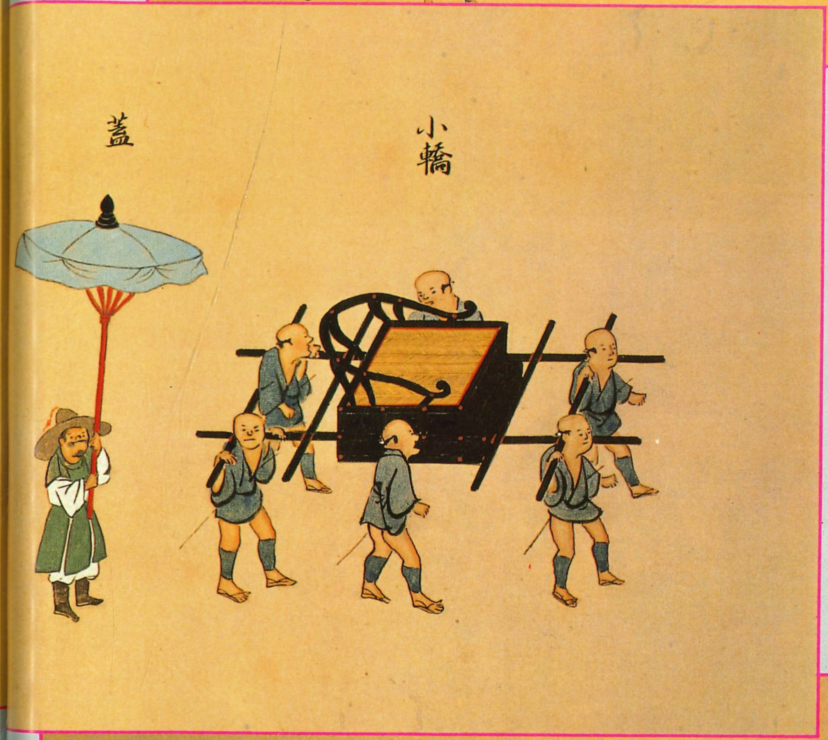
代々藩主に承けつがれた藩の象徴の兜。兜鉢の毛飾りが、朝鮮の風を思わせる

杉の老木に囲まれた万松院は宗義智の遺言により建立された。中央は義智の墓所













五百人ちかい朝鮮からの使節団は、徳川将軍一代の盛儀として人びとの目を奪った（朝鮮来朝之行列図並び護行列之図・鄭詔文氏蔵）

一行五百人、二代の盛儀

異国の楽の音をひびかせながら街道をゆく使節の一行は、外交上の大きな役割ばかりでなく、学問、芸術、文化の上でも、わが国にもたらした影響は大きい。通信使屏風に描かれている人びとの明るい表情から、平和友好の絆をつよめようという両国のねがいを感じることができるだろう。

朝鮮からの使節一行は五百人にも及んだという。送る側も迎える側にとってもまさに盛儀だった。

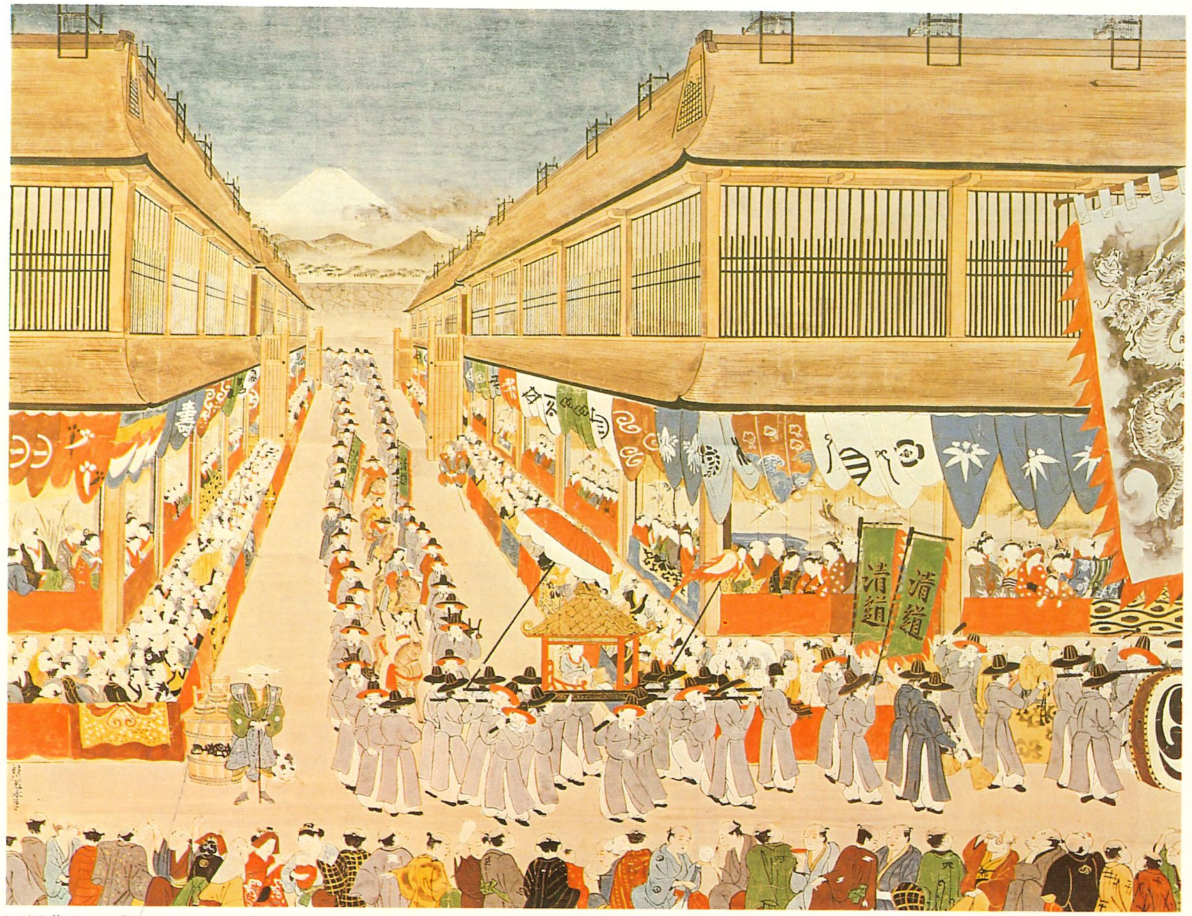


使節一行は、日本各地で文化交流の渦をまき起こした
（朝鮮通信使屏風四曲一双のうち・京都泉涌寺蔵）



日朝貿易の窓口となった船江跡

厳原港の対岸、久田の南側、山すその南風をさけられる入江にある、対馬藩の御用船繋留の船渠、御船江（県史跡）がある。当時のままの型を残すものとして、全国的にもきわめて珍しいものである。対馬藩は、朝鮮外交の大役とひきかえに、幕府から朝鮮貿易の権益をもらっており、この権益が対馬に大きな繁栄をもたらしたが、その貿易の窓口・基地となったのが、この船江である。日本からは銀を輸出、かわりに朝鮮からは、朝鮮人参、生糸などが輸入されたという。



羽川藤永画「朝鮮人来朝図」（神戸市立南蛮美術館蔵）

朝鮮使節の江戸入り

町人のくらしが豊かになり、世のなかものびのびと、はなやかになっていた元禄時代にあっても、朝鮮使節一行は規模の大きさで、江戸庶民にとっては刺激的な行事だったにちがいない。めずらしさと、驚きぶりが絵巻からも想像される。

「これ（朝鮮通信使）を見物せんとて、近国、近在の老若男女、その数数千万ということを知らず、並居る躰を見渡せば、千躰佛の如く、さらに空地はなかりけり」と、『宝暦物語』は当時の模様を伝えている。

朝鮮使節往還

李　進熙

■りじんひ
昭和４年朝鮮慶尚南道生まれ　明治大学講師　古代史　著書『広開土王陵碑の研究』『好太王碑の謎』『李朝の通信使』(講談社)『好太王碑と任那日本府』

NHK 竹内　康

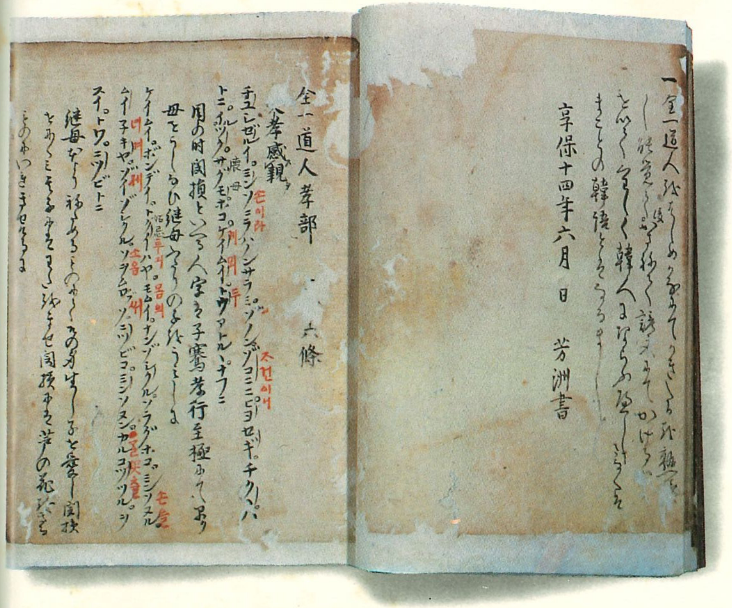


武家屋敷石垣などに残る宗家の城下町のなごり（対馬厳原市）



歴史民俗資料館に保存されている宗家の古文書

雨森芳洲自筆のハングル文字入り『全一道人』





江戸期に描かれた雨森芳洲像（高月・芳州文庫蔵）

朝鮮国王の使節団一行

「朝鮮来朝之行列図並び護行列之図」

箱書には

「徳川尾州公の姫君　禁裏御所摂家関白近衛家へ御輿入の節　御持参の物也」

とある。

この全八巻に及ぶ絵巻には、江戸時代日本を訪れた総勢五百人に及ぶ朝鮮国王の使節団が、克明に描かれている。こうした朝鮮使節の一行が、鎖国下の日本をたびたび訪れたことを知る人は少ない。この絵巻は、知られざる日本と朝鮮との友好の歴史を探る鍵である。

―― この朝鮮使節は、徳川三百年の間に前後何回日本に来ているんですか。

李　十二回来ております。

―― そうですか。名称は朝鮮使節というんですか。

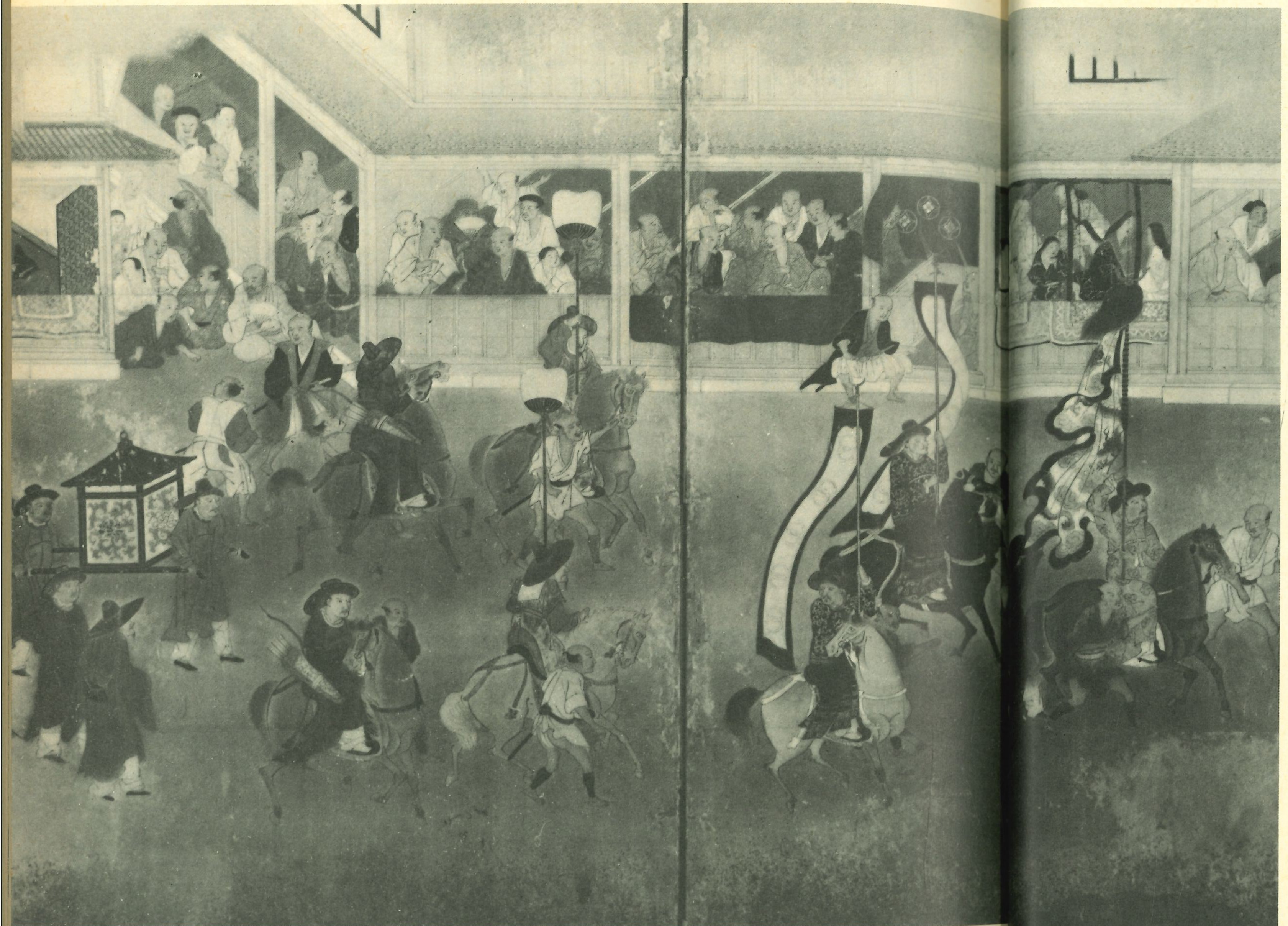
李　最初の三回は回礼兼刷還使といい、あとの九回は通信使です。最初の三回は、秀吉が朝鮮を侵した文禄慶長の役の戦後処理の使節でして、日本からの使いに対する回礼という意味があり、刷還使というのは、また秀吉の時にいろんな人を連れて来たものですから、その人たちを連れて帰るところから、そういわれました。そういう人たちを調べて連れて帰るという、いいかえますと、戦後処理にけじめをつける使節という意味です。

―― そのあとは通信使という……。

李　はい。よしみを交わすという意味で通信使といいます。一六〇七年に両国の国交が正式に結ばれまして、戦後処理が終わりますと、あとは朝鮮国王の即位とか、徳川将軍の代替わりのときに来る、お祝いの使節でした。

―― そうしますと、私どもが誤解をしてはならないのは徳川三百年というのは完全な鎖国だったんだ、外国人、日本人を問わず百パーセント入国、出国を許されなかったんだというふうに通常考えておりますが、朝鮮だけとは国交があったということなんですか。

李　江戸時代を「鎖国の時代」とよくいいますが、これはまちがいでして、日本は朝鮮との間には正式の国交を持っており、釜山の倭館には五、六百人の日本人が常駐していました。そして日本は、朝鮮を



善隣友好の中心・朝鮮通信使は，いたるところで文化交流の渦をまき起こした（泉涌寺蔵）

通じて諸外国、とくに中国などの東アジア世界と結ばれていたのでした。

―― なるほどね。そうしますとのちになって、オランダとかいろんな国と交易を結びますが、あれは通商だけですね。

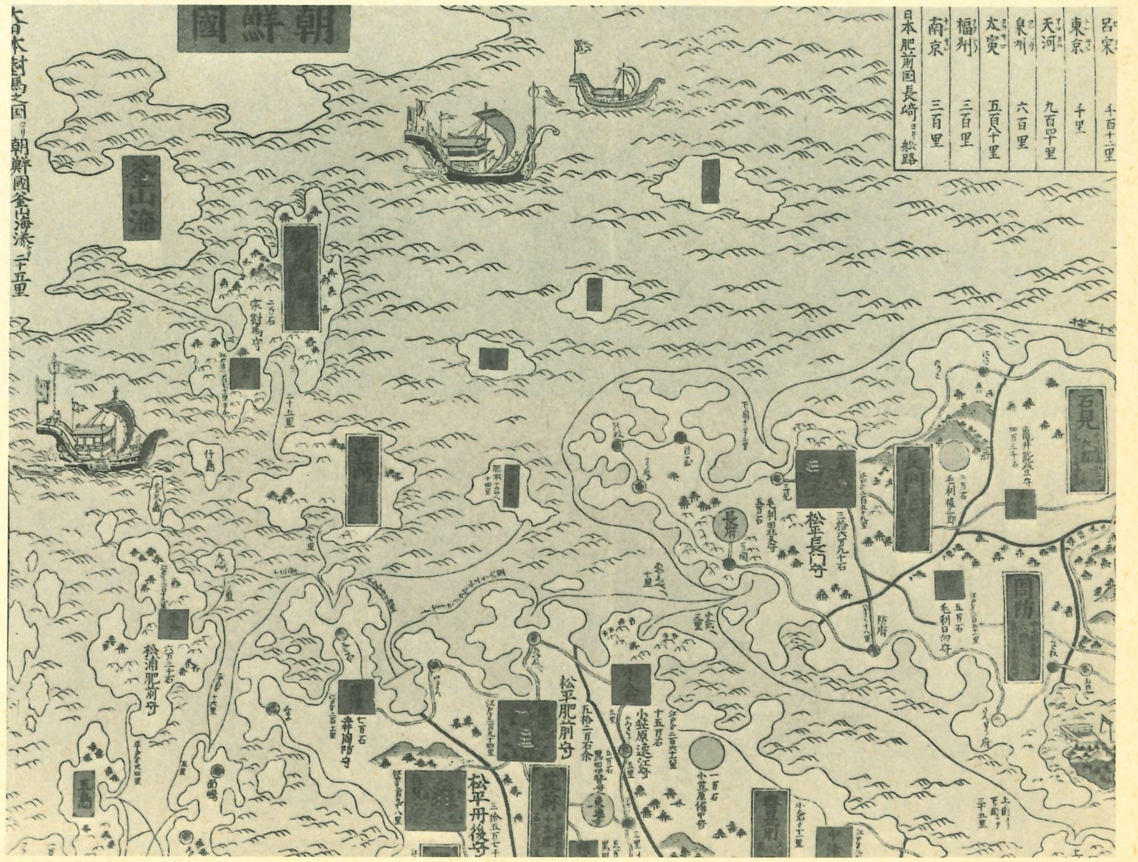
李　あれは通商だけで、正式な外交関係をもったのは、朝鮮とだけです。そうした友好関係が、このような華やかな通信使の絵巻となったわけですね。

この絵巻には、江戸時代に前後十二回にわたって日本を訪れた朝鮮使節のうちで、正徳元年（一七一一）正使・趙泰億以下五百人近くもの第八回の通信使の一行が描かれている。異国の楽の音を響かせて、街道を練り歩く朝鮮使節の行列の中には、正使、副使、従事官という朝鮮国王の使者のほかに、国書と呼ばれる外交文書の収められた輿、写字官、製述官、書師、医師といった人々まで見られる。

それは、この朝鮮使節の渡来が、日本と朝鮮との外交上のきずなであったばかりでなく、学問や芸術の面でも日朝の交流の場であったことを示しているのである。

―― 私ども、日朝の歴史の上にこういう事実があったことは、あまりよく知りませんでしたが、李さんがこれをお調べになるきっかけは……。

李　私は、秋が深くなると対馬が見える朝鮮の南端で育ったんですよ。幼いころの記憶ですが、対馬というのは、たいへん美しい、胸騒ぎのする島でしたね。その対馬へここ六、七年の間に何回か足を踏み



大日本対馬之国の古地図　釜山海峡より25里とある

入れたのは、対馬の北から朝鮮を見てみたいという想いも一方ではありましたが、教科書や解説書、あるいは一般の人が読む歴史書をみますと、日本と朝鮮との関係とは古代の出兵とか秀吉の侵略、それから征韓論、日清・日露というふうに不幸な関係だけが前面に出てきているんですね。不幸な関係の間に平和的な関係があるはずなのにどこにも書いていない。秀吉のあとの江戸時代に国交があったことは朝鮮側にも資料がたくさん残っておりますから、日本側にもあるはずです。そこで、対馬から江戸までを歩きながらそれを調べてみようということになったのでした。

朝鮮と日本の仲介者――対馬藩

―― なるほど。その国交をするためには事務当局みたいな、今でいう大使館とか総領事館とか、そういうものが必要だったはずですが、その時代にはどこが当たったんですか。

李　日本側は対馬藩の宗氏、朝鮮側は対馬の向かいにある釜山の東萊府使がその役割をしました。常時緊密な連絡を取り合っていまして、大きな事件などがありますと、だいたい三か月で江戸とソウルがキャッチできる仕組みになっていました。ですから、江戸時代の善隣関係は、やはり宗氏の役割、対馬の役割を抜きにしては考えられないんじゃないでしょうか。もちろん徳川幕府の姿勢の反映でもありますが、宗氏の役割というのはたいへん大きかったと思いますね。

日朝友好のにない手・宗氏

全八巻の絵巻のうち、後半の三巻に日本人の姿が見える。朝鮮使節を江戸まで先導した対馬藩主・宗氏の一行である。この対馬藩



外交文書を蔵した輿は厳重に人々に囲まれて……（朝鮮来朝之行列図並び護行列之図より・鄭詔文氏蔵）



通信使を先導する対馬藩平田隼人（朝鮮来朝之行列図並び護行列之図より・鄭詔文氏蔵）

の宗氏こそは、江戸時代の日朝友好の歴史のにない手であった。

対馬藩とは、朝鮮半島と日本列島との間、玄界灘に浮かぶ孤島の藩である。対馬は、古来朝鮮と日本とを結ぶ島であった。朝鮮使節の一行が釜山をたち、最初に訪れるのもこの対馬である。

しかし、江戸時代の日朝修好のあかしであった朝鮮使節を迎えるに至るまでには、対馬は、その地理的位置ゆえの苦難の歴史を背負わなくてはならなかった。そうした歴史を物語る遺跡が宗氏の城下厳原の草深い裏山に残されている。豊臣秀吉が朝鮮侵略のため築いた兵站基地、清水山城である。

天正十八年（一五九〇）天下統一を成し遂げた秀吉は、対馬を足がかりに朝鮮を侵略し、中国の明を討つという大陸侵攻の野望を抱いていた。

国境の島対馬は、一度事があると、日本と朝鮮との戦いの最前線に立たされる宿命にある。

このとき対馬の運命をになっていたのは、弱冠二十歳になったばかりの宗義智である。彼は秀吉の無謀な計画を知り、日本と朝鮮との間に立って戦争回避のためさまざまな外交工作を続けたが、秀吉の野望の前にその努力は挫折した。

文禄元年（一五九二）朝鮮侵略の戦いの幕は切って落とされた。世にいう文禄慶長の役である。このとき、宗義智の率いる対馬二千の兵隊は、小西行長とともに秀吉軍の先兵を命じられた。朝鮮事情に詳しいためである。

前後七年にも及んだ戦いは、慶長三年、秀吉の死とともに終結、両国に多大の犠牲だけを残した。

秀吉の朝鮮の役が終わってわずか二年後、宗義智は今度は打って代わって国交回復の交渉役を命じられる。関ケ原の戦いに勝った徳川家康の命令であった。

朝鮮側のきびしい対日感情の中で、断絶した国交を回復するというのは至難の技であった。宗義智の七年にわたる努力が実り、慶長十二年（一六〇七）、国交回復のための最初の朝鮮使節一行を対馬に迎えるに至ったのである。

なぜ彼は国書を改ざん偽造したか

ところで、幕末に書物奉行を務めた近藤正斎こと、近藤重蔵がまとめた『外藩通書』という本がある。これは徳川幕府の外国とのいろいろな交渉の文書をまとめ編集した本で、このなかに、徳川家康から朝鮮国王へ、あるいは朝鮮使節が持参した朝鮮国王から徳川家康への国書が載っている。

しかし、これを調べると、国書を宗氏がたびたび改ざんし、かってに書きかえている部分がある。近藤正斎は、対馬に残された朝鮮国王の国書原本の写しと比較対照して、その改ざんをいろいろと指摘したのである。その中の一つ慶長十二年に朝鮮使節が朝鮮国王の国書として持って来た国交回復のための文書を見てみると、この一行目に「朝鮮国王李昖奉復」と書いてある。しかし、重蔵の指摘によれば、「真本（幕府に伝わる国書）復を削りて書と改む」としたのであった。

――もともとの「奉復」を「奉書」と書き直したわけです。なぜそうしたんでしょうか。



朝鮮侵略の野望にもえた豊臣秀吉（高台寺蔵）

李　そこが大切なところでして、秀吉の侵略のためにたいへん迷惑を被ったわけですから、朝鮮側としては国交回復の条件ははっきりしていました。その第一は徳川家康が国書をよこすことで、そのなかで秀吉の侵略を謝罪し、二度と朝鮮を侵さないと約束することです。それからもう一つの条件は、王陵をあばいた犯人を引き渡すことでした。

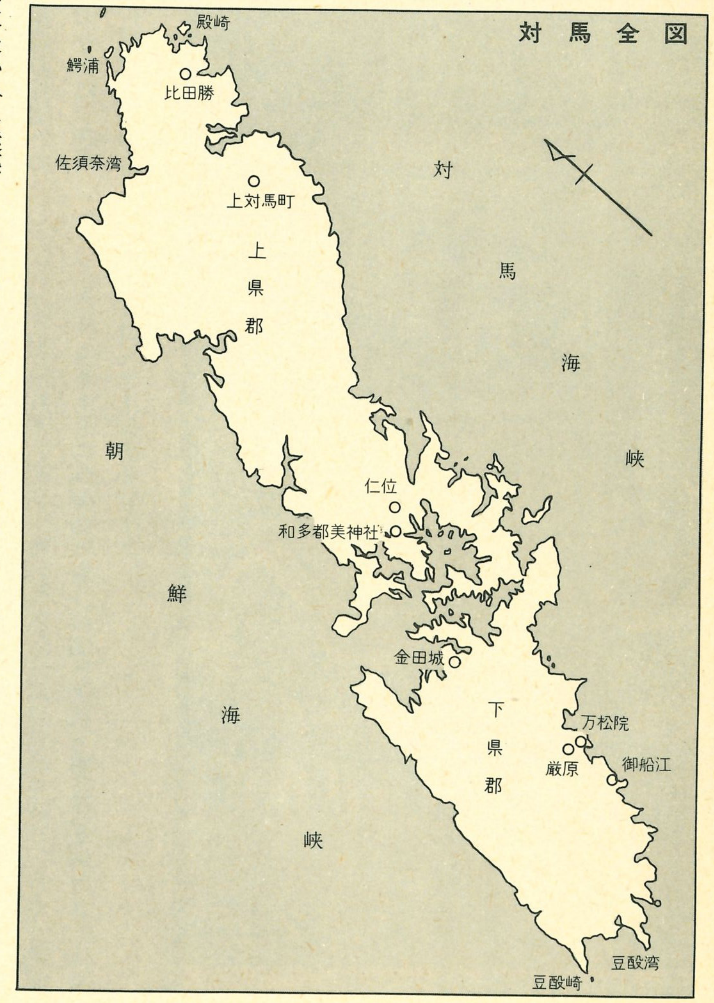
――墓を……。

李　ええ、文禄のとき、ソウル近くにあった成宗の貞顕王妃の墓と中宗の靖陵があばかれました。その犯人を捕まえて引き渡してほしいということです。朝鮮側の条件は、対馬の宗氏から見ますとたいへんよくわかるんです。ところが家康は、そういう謝罪の国書を書くだろうかという疑問が宗氏にあったんでしょうね。

――国王ではないですしね。

李　そこで宗氏は、まず家康の国書として謝罪の内容を入れたものを偽造して送ったわけですよ。それに対する回答の使節が一六〇七年の一行なんです。一行の持ってきた文書が「奉復」とあるのは日本の国書に対して答えるという文書ですから当然なことです。

――徳川さんは最初のは知らないわけですね。



李　そうです。ですから、宗氏としては「奉復」とあるのを「奉書」と書かないと、にせの国書を送ったことがばれてしまう。

――「書を奉る」にしてしまえば、これは一回目だということになるわけですね。

生き抜くための国際感覚

国交回復の実現の陰には、このような家康の国書の偽造、朝鮮国王の国書の改ざんといった宗義智の擬装外交が隠されていたのである。

やがて寛永十二年（一六三五）、対馬藩のたび重なる擬装外交が幕府に発覚した。しかし幕府の処断は、時の藩主宗義成についてはその罪をとがめず、家老柳川調興などを配流したにとどまったという。

――なぜ宗氏は国書の偽造改ざんといったことまでしなければならなかったのでしょうか。

李　それは、宗氏が朝鮮の事情に通じていたからでしょうね。つまり、侵略をうけた朝鮮としては、謝罪の国書が来ないかぎり、国交を再開しないことを宗氏はよく知っていました。それから、国交が回復し、朝鮮貿易が再開されなければ、対馬の生きる道はないんですが、そのことはともかく、朝鮮や中国をよく知っており、また敏感な国際感覚を持っていたから、偽造にまでいったといえますね。国書の偽造という危ない綱渡りをしましたが、これによって二百数十年にわたる平和な関係が始まったわけですから、これは高く評価していいと思います。

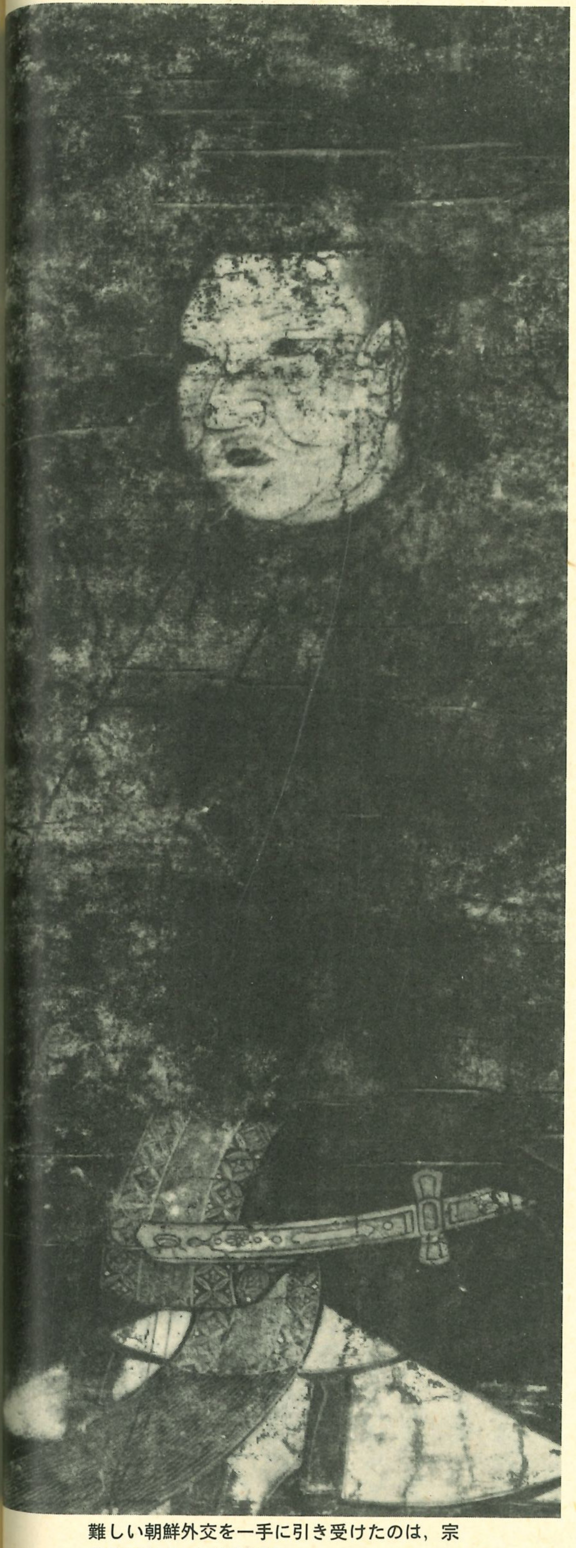
――ただ不思議に思いますのは、徳川時代にはたしかに平和の仲

朝鮮使節往還〈年表〉

天正1(1573)	室町幕府滅びる
文禄1(1592)	全国を制覇した秀吉は、さらに領土拡張のため朝鮮に出兵、明軍の反抗で苦戦、先鋒隊小西行長が講和の斡旋にあたった（文禄の役）
慶長2(1597)	明使の秀吉に捧げた書の内容に怒った秀吉は、二度目の出兵をしたが苦戦（慶長の役）98年、秀吉の死を契機に撤兵した
慶長8(1603)	徳川家康、江戸幕府を開く
慶長10(1605)	対馬藩、幕府に対馬絵図を提出
慶長12(1607)	朝鮮通信使、修好のため来朝（第1回）　宗義智、朝鮮使節を伴って江戸へおもむく
元和3(1617)	朝鮮通信使、大坂平定、日域総合の賀の目的で来朝（第2回）
寛永1(1624)	朝鮮通信使、家光の襲職の賀のため来朝（第3回）
寛永12(1635)	幕府は宗義成に、旧来どおり朝鮮国来往にあたらせ、国書の形式を改めさせた
寛永13(1636)	朝鮮通信使、泰平の賀のため来朝（第4回）
寛永20(1643)	朝鮮通信使、家綱の誕生祝いのため来朝（第5回）
正保1(1644)	対馬から端倉忠助を燔師として派遣、釜山・倭館内で窯を築く
明暦1(1655)	朝鮮通信使、家綱の襲職の賀を祝って来朝（第6回）
天和2(1682)	朝鮮通信使、綱吉の襲職の祝いで来朝（第7回）
正徳1(1711)	朝鮮通信使、家宣の襲職の賀で来朝（第8回）
享保2(1717)	釜山窯閉鎖
享保4(1719)	朝鮮通信使、吉宗の襲職の賀のため来朝（第9回）
延享5(1748)	朝鮮通信使、家重の襲職の賀で来朝（第10回）
宝暦13(1763)	朝鮮通信使、家治の襲職の祝いのため来朝（第11回）
安永5(1776)	朝鮮との交易断絶、宗氏幕府から毎年12,000両受けることになる
文化8(1811)	朝鮮通信使、家斉の襲職の祝いに来朝（第12回）
慶応3(1867)	大政奉還

立ちをしました。だけど秀吉の時代には、宗氏は尖兵となって朝鮮に入っておりますね。ここのところの関係はどうなるんですか。

李　秀吉は、朝鮮国王が入貢するよう、宗氏に命じますね。彼はアジアの情報にうといばかりか、朝鮮が異民族の国家だという認識さえまったくありませんでした。そこで九州制圧のように簡単にいくものと錯覚したんです。ところが朝鮮国王は理由もなしに入貢するはずがない。このことを宗氏はよく知っているんですが、秀吉の厳命にそむくこともできないので、輩下の者を秀吉の使者に仕立てて天下統一を通報し、それに回答する通信使派遣に持っていこうとする。宗氏の義父にあたる小西行長もなんとか戦争になることだけは避けようといろんな工作をしますが、結果的には朝鮮をいちばんよく知っているが故に、侵略軍の先陣を受け持たされる。そしてたいへん大きな被害を蒙るわけです。そうしたことを通して、朝鮮との関係が平和でなければ対馬は生きていけないことがよくわかったと思いますね。

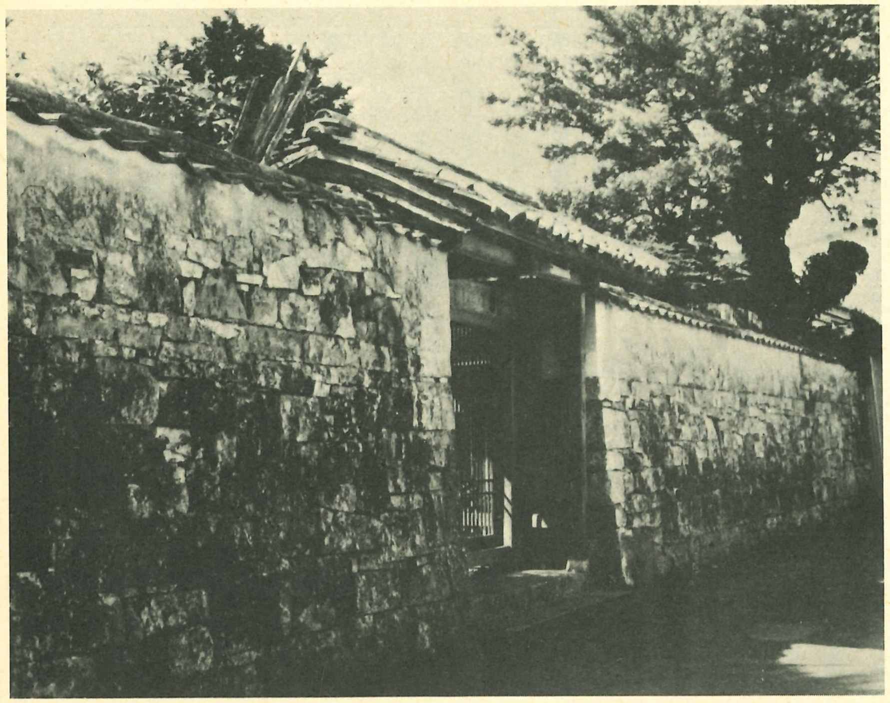


難しい朝鮮外交を一手に引き受けたのは，宗義智である（万松院蔵）

——　なるほどね。ですから、朝鮮の役が終わったあとで非常に早く手を打つということになるんですね。

李　ええ、日本軍の引き揚げと入れ違いに宗氏は使者を送って和平交渉のきっかけをつかもうとします。しかし、朝鮮側にはもう一度日本軍がやってくるまでの時間稼ぎかも知れないという不信感もあって、使者を捕まえてしまいます。けれども宗氏は翌年もまた使者を送り、その後も続けて送って和平交渉の糸口をつかもうとします。そして日本では関ケ原の戦いがありましたが、それに勝った徳川家康はさっそく朝鮮との和平交渉を宗氏に指示します。国交の回復までには、こうしたねばり強い宗氏の交渉があったことを忘れるわけにはいきませんね。

——　その当時の宗氏の上の人が宗義智という人で、かなりすぐれた人物です。外交感覚も鋭く戦争の過程でもたいへん頭のすぐれた、鋭い人のように思えますがね。



厳しい風土のなかに生きる対馬・厳原には江戸時代からの石垣が多く残っている

李　そうです。それから義智の義父小西行長ですが、彼は堺をバックにしていまして、宗氏以上に外交感覚にすぐれた合理主義者だったようですね。彼はなんとか戦争を回避しようとし、戦争になってしまうと、和平に持ち込もうと努めますが、そのつど加藤清正につぶされてしまいます。その彼は関ケ原では豊臣方にくみして身を滅ぼしてしまいますが、宗氏は関ケ原に兵を出しませんね。そして西軍が敗れると、自分の妻（小西の娘）を突き返してしまう。その結果、宗氏は家康のとがめをうけずに済み、朝鮮との交渉を任されるわけですが、こうしたところに国境の島・対馬に生きる宗氏の悩みが読み取れます。同時に、そうした苦しみのなかで培われたすぐれた国際感覚が、こんどは逆に徳川時代の善隣関係を作り上げ、維持していくうえで大きな役割をしたのだといえるのではないでしょうか。

米が自給できぬ宿命の風土のなかで

「居る所絶島、方四百余里ばかり、土地は山嶮しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸有り。良田無く、海の物を食って自活し、船に乗りて南北に市糴す」とは『魏志倭人伝』に記された古代の対馬の姿である。

この良田なく米が自給できないというのが、古代以来今も変わらぬこの島の風土の宿命である。

この厳しい島の生活を支えて来たのは、実は朝鮮の米であった。朝鮮半島との交易が、島の人々の死命を握っていたのである。それ故、時には倭寇とよばれる海賊となって朝鮮半島の沿岸を荒らしたこともたびたびであった。

海峡をはさんで、日本本土より朝鮮半島の方が近い島——対馬。

ここに住む人々のこうした生きざまを如実に物語る一枚の古文書が、対馬の旧家に伝えられている。

―― この文書を見ますと、「弘治」という朝鮮の年号が使われていますね。

李　明の年号で一五〇三年ですね。十六世紀の初め。

―― 「兵曹」というのはどういう意味でしょうか。

李　これは陸軍省と海軍省をいっしょにした軍事省みたいなものですね。

―― なるほどね。「教」というのは……。

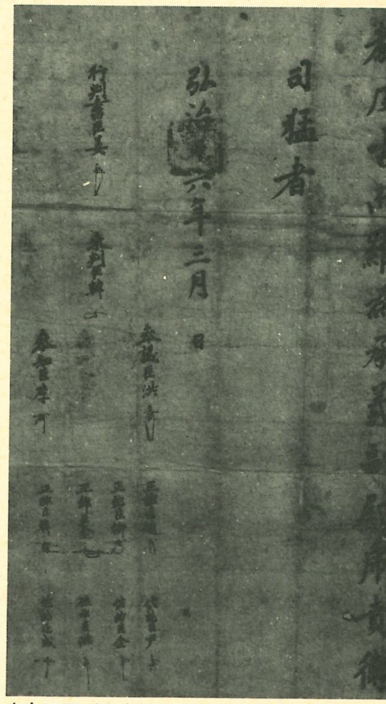
李　「教」というのは、授けるという意味でしょうね。

―― その次は何と読むんでしょうか。

李　「皮古而羅」と書いていますが、これは「彦次郎」のことです。

―― 万葉仮名みたいな……。あて字でもないし……。人の名前ですね。

李　早田彦次郎のことのようです。この彦次郎という人が、「虎賁衛司猛」というわけのわからない官職をもらったときの辞令ですね。彦次郎だけではなく、十五世紀と十六世紀には、対馬には多くの人がこういう告身という辞令をもらっておりまして、それは海賊を鎮める役です。そのかわり、辞令を持った者は朝鮮へ来て貿易することを許す。その海賊鎮圧の代償だったわけです。対馬の人はもちろん日本人ですが、にもかかわらず朝鮮からこういう辞令をもらい、しかも貿易をやって生きていかなきゃならないところに対馬の特殊性というか、辺境にいるものの独自な外交感覚というものでしょうか、そういうものがよく現われていますね。



皮古而羅（彦次郎）が虎賁衛司猛という官職をもらったときの辞令（早田英夫氏蔵）

―― それが室町時代ですね。そうすると秀吉の時代でも家康の時代でも、宗氏はとにかく朝鮮との間に立って、平和にやらなければ生きていかれないんだということが、先ほどの国書の改ざんというような事態までもたらしていても、そうしないと生きられなかったということがある反面、今度はその宗氏を幕府はどうみてたんでしょうか。非常に複雑微妙なそういう立場を……。

李　そうですね。まず朝鮮とは善隣関係でなければならない、という家康、秀忠の姿勢も無視できませんね。ただ、現代のように無線があるわけじゃありませんから、朝鮮にいちばん近く、また朝鮮の事情に通じている宗氏に外交の実権をまかせるわけです。一方対馬にいちばん近いのは、釜山にある東萊府ですが、そこの府使と対馬の宗氏との間で緊密に連絡し合うことになるわけです。

―― そうしますと、宗氏というのは朝鮮と日本との天秤の支点みたいなものですね。

李　そういえますね。宗氏は両方の立場をよく知っていて、それをくずさないようにどうするのか。江戸時代は二百数十年も続いていますから、多少ぎくしゃくするときがありますよね、そういうときには必ず家康と秀忠が朝鮮にたいした基本姿勢、原点に戻ろうという議論がおきましてきちっと元に戻る。十八世紀の初めに新井白石が通信使の接待を簡素化しようとしますが、すぐに元どおりになるんです。親善関係の維持における宗氏の役割、これは大きいですね。

江戸時代の大デレゲーション

対馬独自の対朝鮮外交の伝統をうけついだ宗氏の努力が、みごとに花開いたのがこの朝鮮使節の渡来であった。

朝鮮使節の一行五百人は、対馬から壱岐、下関を経て海路瀬戸内海を行き、大坂に上陸、陸路で江戸に向かった。各地でくりひろげられたこの華やかな行列は、鎖国時代の日本人の目をうばった。

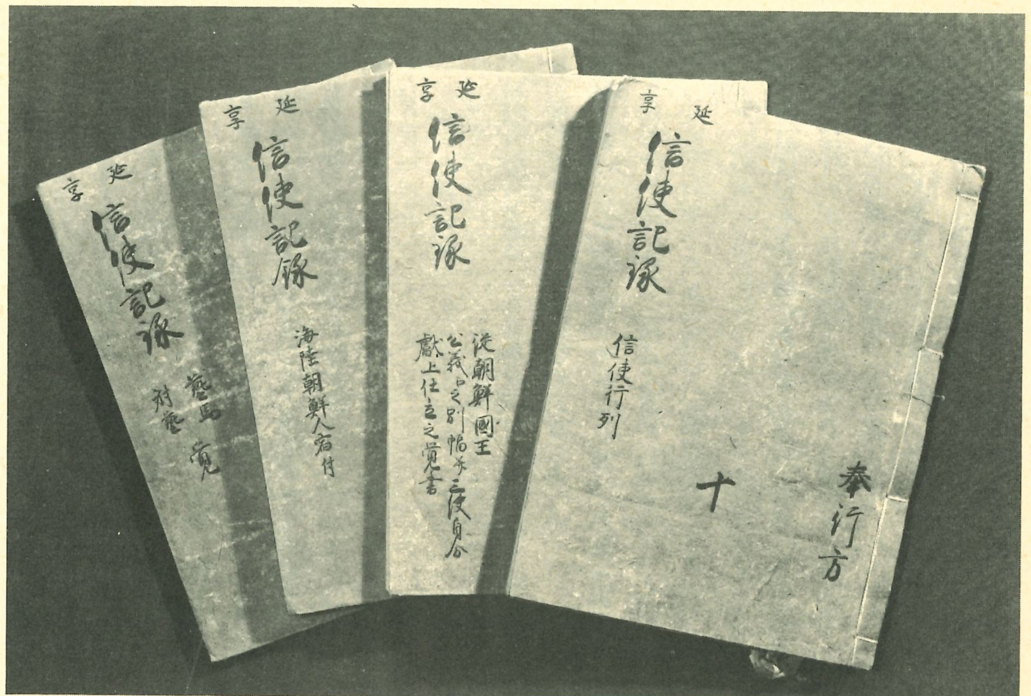
使節はほぼ四か月の長い旅の末江戸城に到着、徳川将軍との会見と朝鮮国王の国書の伝達でその役目を終える。幕府はこの朝鮮使節の訪問を将軍一代の盛儀として重んじた。

朝鮮使節の渡来に伴う外交事務や、日本での接遇の一切を取りしきったのは、対馬藩主の宗氏であった。

宗家には、歴代の藩主が残した江戸三百年間のばく大な藩政の記録が今に伝えられている。



通信使行列の図は木版刷として、人々の手に渡っていった（朝鮮人来聘行列より・鄭詔文氏蔵）



対馬藩と朝鮮との外交のやりとりを記録した古文書（宗家文庫蔵）

この「宗家文庫」と呼ばれる古文書のなかには、十二回の朝鮮使節往還の詳細な記録がある。孤島に残されたせいか、今までほとんど人の目に触れることがなかった。最近その調査研究に手が付けられたばかりである。それによると、朝鮮使節の一行を、当時の対馬藩や幕府が、如何に丁重にもてなしたかがうかがえるのである。

―― しかし、通信使の絵巻物にあるように、今でいうと大デレゲーションというんでしょうか、オリンピックの選手団みたいなのがどっと来るわけですね。そうすると、これを歓待するのもたいへんな演出なり裏方さんなりがあったわけでしょうね。

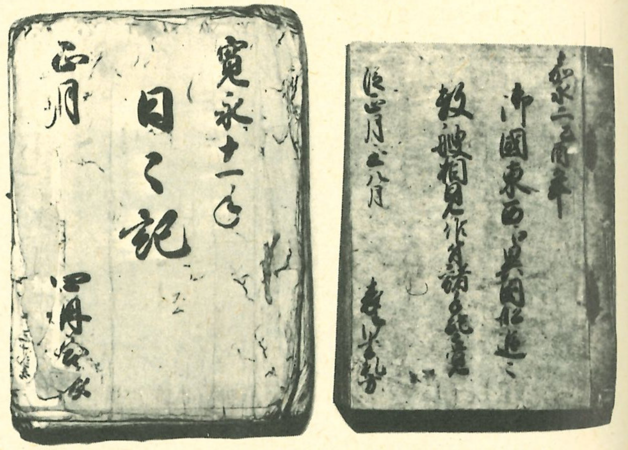
李 たいへんでした。新しい将軍が職につくと、対馬藩が大慶参判使を送ってこれを報告し、続いて修聘参判使をやって通信使派遣を要請します。参判使というのは、外務次官にあたる礼曹参判あての書状をもった使者のことです。そうしますと朝鮮では日本にたいし、OKの書状を出すとともに、三使（正使・副使・従事官）を任命し、使節一行の編成を行う。そうしますと、幕府は老中を総責任者にあて、通信使の通る西日本の藩主にたいし帰国を命じ、対馬藩の指示にしたがって送迎の準備に取りかかります。この準備に大体半年かけるのですが、それができると、迎聘参判使が釜山におもむいて、対馬へ案内する仕組みになっていました。

―― そうしますと、釜山を出発して、まず対馬に寄りますね。そこで、対馬の宗氏が案内役みたいになるわけですか。

李 そうです。案内と警護の責任を持っていました。通信使の一行は四百七十人前後で、これに付き添う対馬藩の人員は八百人、江戸まで往復する間ほぼ六か月のつきあいでした。

―― しかし、対馬はたった一つの島ですから、それだけの費用というのはどうしたんでしょうか。

李 壱岐から先は他の藩の負担です。それでも対馬藩の費用もばく大なものですが、朝鮮貿易を任されているから十分まかなえました。十九世紀初め貿易がうまくいかなかったときは、幕府が援助していますね。各藩には舟や人馬を出し、道路や宿舎を整え、接待しなければなりませんが、それは禄高によって差がつけられていました。例えば五十二万石福岡藩の場合は、相ノ島にそのつど二十四軒に上る館を新築しますね。そして魚の生簀を作ったり、雉を――朝鮮人は好きですから――特別に調達したり、数万個の卵を用意したという記録がありますね。それから、福岡藩は玄界灘の沖から一行の船を曳いて相ノ島に入り、さらに小倉沖まで送らねばなりませんが、そのために大小五



藩の日常を記録した日々記など（宗家文庫蔵）

対馬・朝鮮交流小史

天智天皇六年（六六七）、対馬は朝鮮半島に対する守りの島として、金田城が小茂田に築かれ、防人が配置されている。

『吾妻鏡』によると、源平の争乱時、伝地先である対馬から、対馬守親光は高麗に逃れ、平氏が滅亡したあと帰国したとあるが、このことからも対馬と朝鮮の往来は、海で活動する者たちを通し、容易であったと考えられる。

十一世紀になると、対馬から高麗へは、遺使や交易のため渡海したという記録が数多くあり、朝鮮南部の中心的都市、金海には対馬人が居住していて交易の窓口になっていたことも知られている。

十三世紀初頭、倭寇が朝鮮南岸で跳梁を始め、十四世紀なかばごろには猛威を振ったために通交の規制がきびしくなり、釜山浦・乃而浦・塩浦の倭人が釜山を攻略するという三浦の乱（一五一〇）が起こる。

この乱により、対馬が朝鮮から得ていた権益はすべて無に帰してしまうが、李朝初期からこれまでの約百年間は、対馬・朝鮮にとっていちばん緊密な時代であった。

三つの浦々に住んでいた対馬人は五百二十五戸、三千百五人を数え、朝鮮への親近感とともに、朝鮮文化の対馬への伝播に大きな役割を果たしている。

文禄・慶長の役後の朝鮮外交は、幕府の委伝により、すべて対馬がとり行った。

貿易も対馬が独占したが、もはや自由な交流は一切禁じられ倭館内に隔離される。

近世に入り、対馬にとって朝鮮は外国となってしまうが、幕末、豆酘村ではどの家も法事の馳走は朝鮮の沙鉢に盛ったという。

いまでも対馬では、辺鄙な浦々にまで、朝鮮渡来の仏像や経典が伝わっており、礼拝の対象になっている。対馬の人にとっては西国の仏師の作品よりも、朝鮮の仏像の方が手に入り易かったし、また、親しみを持っていた時代があったのであろう。

例えば、一四三四年、室町幕府は海賊取締りの指令を壱岐・対馬へ出すおり、現支配者がだれであるのか、はっきりせず迷ったということが、『満済准后日記』にみえる。

いっぽう、李朝は対馬の支配者宗氏については血縁関係まで、克明に記録しており、対馬の動きを把握することに熱心であった。

対馬は国防の最前線基地として、現在、自衛隊が駐屯している。

百隻の船と水夫三千六十人を用意しています。それに接待役などいろんな役がありますから、藩の財政を食い尽くすほどの費用を投入しなければならなかったようですね。

―― そして瀬戸内を通り、大坂へ上陸して、あとは東海道を……。

李　淀川をさかのぼって、淀から京都に入り、それから滋賀県の野州から「朝鮮人街道」を通るんですね。この街道は浜街道と呼ばれていますが、徳川家康が関ケ原の合戦に勝って上洛するときに通った街道ですので「吉道」とされました。ですから将軍が京都に行くときにだけここを通るならわしになっていまして、朝鮮の通信使のほかはだれも通しませんでした。そのことは、徳川幕府が朝鮮をどういう国として見ていたのかをよく示しているといえるでしょうね。

道中の文化交流

―― その道中で、朝鮮人が日本人の様子をいろいろ見ているに違いないですね。日本人はとにかく歓迎するということなんですが、では朝鮮人は日本人をどうみていたんでしょうか。

李　通信使とか信使といわれるように、信(まこと)を通わすこと、つまり朝鮮国王と徳川将軍との信頼関係を確かめあう使節ですから、友好親善・文化交流を図ることが主目的です。しかし、秀吉の時苦い体験がありますから、日本がまたやって来るかも知れないという警戒心もあるわけですね。そこで、道中で各藩の学者と交流するときにも、相手のそういう気配があるのかどうかを読みとることも任務の一つとしてありました。同時に、日本の風俗習慣を観察し、どういう社会であるのかに興味を持っていますね。朱子学が生活のすみずみにまで行きと



通信使節の人たちと日本人との親善は，長い道中の間にもさかんに行われた（朝鮮来朝之行列図並び護行列図より・鄭詔文氏蔵）

どいていた朝鮮側からしますと、男女七歳にして席を共にしないことが常識ですから、沿道に男女が入り混って並んでいるのを見て、これは野蛮だといいますね。それから京都から近江への峠を越える時ですが、見物の人たちがみな着飾って化粧しているでしょう。そうしますと、日本には水商売の女がどうしてこんなに多いんだろうと思ってしまうわけですね。

―― なるほど、日本にも確かに朱子学が入りましたね。だけど、学問としてだけ入って、実際のところでは、男女七歳にしてぐらいが多少武家階級でおこなわれていたくらいで、末端では男女が入り混っていたかもしれませんから、そういうことが朱子学を厳密に守っていた朝鮮人からみると、非常に奇異な風俗に映るんでしょうね。

李　奇異な風俗……。

―― 礼の国ですからね、朝鮮は。

李　ところが、朱子学の価値感で日本の社会をはかりますから、十八世紀の半ばくらいになってきますと、日本がまったく読めません。例えば大坂の繁栄ぶり、いわゆる商業経済、商品貨幣経済の発展が、何に起因しているのかがわからないんですよ。すべてを搾取に結びつけてしまう。自分たちと違った社会の仕組み、多様な価値観のあることが見えないところに、今世紀の不幸を招く遠因があったといえますね。

雨森芳洲と儒学者の役割

―― 逆にいうと、日本はその朝鮮使節が通ることによって、かつて文物の伝来してきた経路の国ですから、何とかして朝鮮を学ぼうと



同門の雨森芳洲とともに，朝鮮との外交に腐心した新井白石

いう姿勢が、日本側には多少なりともあったんでしょうかね。

李　ありましたね。それは通信使の泊る宿舎で、各藩の学者は朱子学だけではなく、中国や朝鮮を探り、歴史や風俗、経・史諸学について、さかんに質問しています。明け方まで続くこともしばしばあって、『海游録』を書いた申維翰は大坂では食事をとる時間さえなかったと書いています。その中で朝鮮をいちばんよく研究したのは幕府と対馬藩でしょうね。とくに対馬には雨森芳洲というたいへん偉い先生がいましてね……。

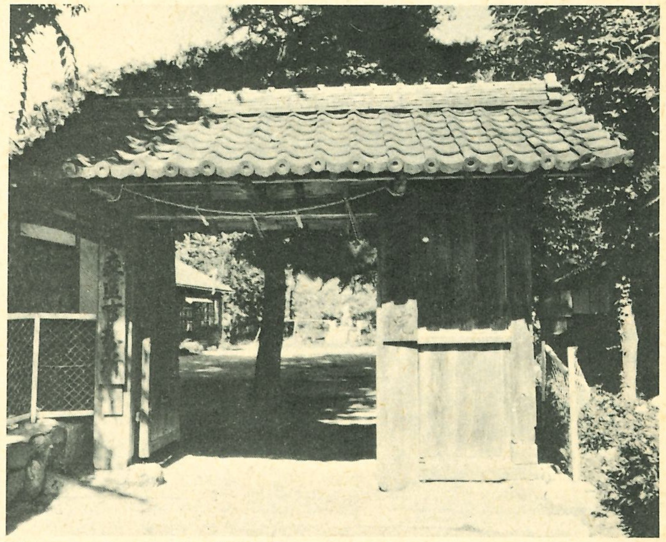
——木下順庵の弟子で……。

李　はい。新井白石と同門で、二十二歳の時に、朝鮮外交担当のために対馬藩に招かれるんですが、芳洲はまず隣国を知るには言葉からということで、朝鮮語の研究を始める。そして釜山まで行って約五年間滞在し、方言までマスターしてしまいます。それから歴史や風俗・習慣まで研究し、約五十年間朝鮮外交の実務をやっております。彼はのち自分の体験にもとづいて『交隣提醒』という本を書くんですが、隣国関係というのは、お互いに争わず、欺かない関係でなければならないと強調しています。これは今日においてもたいへん重要な意味を持っていると私は思うんですよ。



雨森芳洲が書いたさまざまな著書（芳洲文庫蔵）

——徳川三百年の間に通信使十二回。単純に計算しましても、二十七、八年に一回ということですね。時代のテンポが今日とちがうと



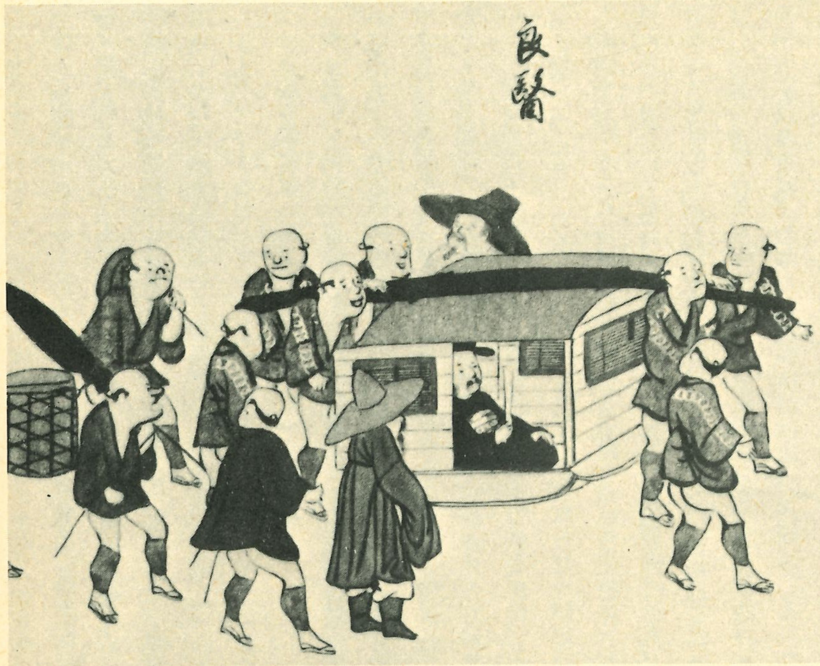
滋賀県にある雨森氏の屋敷跡　現在，芳洲文庫がある

いたしましても、この朝鮮使節が日本の外交以外に与えた面といったらどういうことなんでしょうか。

李　やはり文化の交流でしょうね。まずあげられるのは、儒学者同士の交流が、道中の宿であったことでしょうね。

——使節のなかにそういう儒学者が入って来ているわけですね。

李　有能な儒学者を交流に備えて入れています。それから画家や、漢方医つまり医者が来ているわけです。私の注目しているのは、儒学もありますが、医学ですね。オランダ医学が入るまで日本はいわゆる東医学、朝鮮医学に依っていたでしょう。ところが、朝鮮の医学書を読んでみてもよくわからないところがある。そこでお医者さんたちは、平素その部分を短冊に書き抜いておくわけですよ。そして通信使がやって来たとき、酒を酌み交わしながらそれを質問するんですが、片方は朝鮮の第一級の医者ですから、即座に答えられるわけなんですね。その結果は『桑韓医談』といった本にまとめられる。



一行のうち，とくに医者から日本の医学が学んだものは大きかったという（朝鮮来朝之行列図並び護行列之図より・鄭詔文氏蔵）

——そうすると日本の医師とか学者というのは、朝鮮使節が来るのを待ちこがれていたんでしょうね。

李　そうです。たとえば大垣藩の北尾春圃という人は、子どもを連れて行ってあいさつさせますね。ぼくはそのうち死んでしまうけれど、今後もよろしくという意味でしょうが、たいへん芸の細かいことまでやっていますね。

孝行芋（サツマイモ）と唐辛子

——逆に日本が朝鮮使節を通して朝鮮に与えた影響というのはありますか。

李　たくさんありますよ。それは貿易全般についてもいえることなんですが、通信使が日本と往復する間に学んだもので強調しておきたいのはサツマイモです。

——サツマイモ……。

李　十八世紀前半の享保年間に大飢饉がありましたね。そのとき、サツマイモを栽培していた地方はそれを乗り切ることができ、飢饉対策用として注目されるのですが、そのことがすぐ朝鮮にも知らされる

んです。そうしますと、一七六四年にきた通信使の正使趙曮は日本を往復する間に、サツマイモの植え方とか、貯蔵法、料理法などを学び、種イモまでちょうだいして帰るんです。十九世紀から二十世紀の初頭にかけて朝鮮では毎年のように飢饉がやってきますが、サツマイモのおかげで生き延びることができたんですよ。

―― そうすると、今おっしゃった人がもち帰って間もなく、サツマイモが非常に速いテンポで普及していくんですか。

李　速いですね。享保年間に対馬でもサツマイモを栽培していたために命びろいするわけですが、そこで人びとはこれを「孝行芋」とよぶようになりました。サツマイモのおかげで親孝行ができたという意味ですね。朝鮮でもこれが普及したおかげで、年寄りたちが餓死をまぬがれたのです。朝鮮では、「コグマ」と呼んでいますが、コグマは「孝行芋」のなまったものですよ。それから忘れられないのは、煙草と唐辛子です。これらは国交が回復して間もない十七世紀の初めに対馬から入っていまして、煙草はたいへん早く朝鮮各地に普及し、清国貿易の王座にのしあがります。それから唐辛子ですが、これは日本自生じゃなくて南方から入ったものですが、日本では凍傷除けとして靴の中へ入れますね。ところが朝鮮は口の中へ入れてしまったんです(笑)。初めはキムチの防腐剤として使用したようですが、そのうち朝鮮人の嗜好をかえ、料理になくてはならない存在となってしまったんです。ちなみに、日本に近いほど辛い唐辛子を使用し、北へ行くほど薄いんです。

―― そうですか、わたしども唐辛子といったら、向こうを通って来たような感じですけどね。

李　徳川初期の一六一六、七年からですから、わずか三百六十年ほど前のことですね。

対馬藩の在外居留地・倭館

対馬の厳原にある万松院。この寺は対馬藩主宗家の菩提寺である。

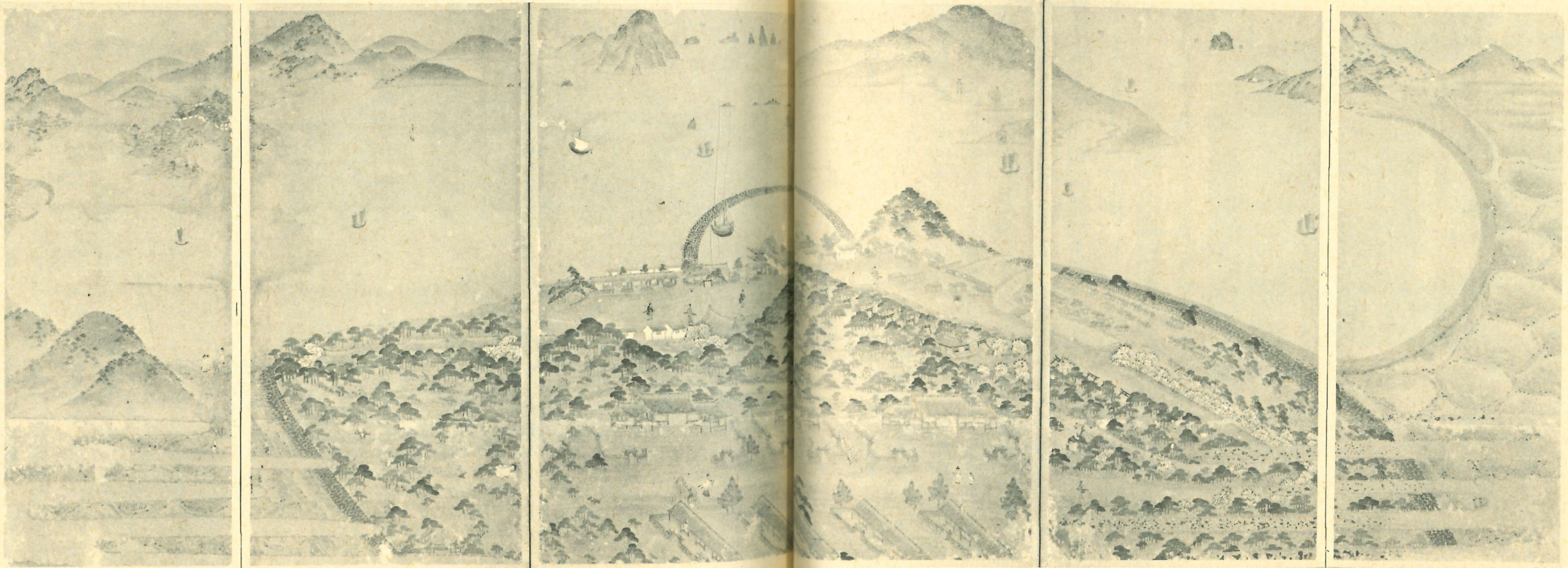
ここには義智以下十四代の藩主の墓がある。この墓は、大きさから日本三大墓所の一つにも数える人もいるという。江戸時代の対馬藩の栄華を今に伝えるただ一つの遺跡である。

対馬に繁栄の日々をもたらしたのは朝鮮貿易であった。宗義智以来、対馬藩は朝鮮外交の大役と引き換えに、朝鮮貿易の権益をとくに幕府から認められていた。日本の銀を輸出し、朝鮮から生糸や朝鮮人参などを輸入し、ばく大な利益を生み出していたのである。

この貿易の窓口となったのが、朝鮮半島の釜山にあった対馬藩の在外居留地・倭館であった。

日本と同じく鎖国政策を採る朝鮮は、対馬藩に対してだけは門戸を開き、貿易を許すとともに、朝鮮や中国に起こった重要な政治事件など外交情報をも、この倭館を通して徳川幕府に伝えて来たのである。

李　日本と朝鮮との外交の実務は、対馬藩と東萊府がやってますでしょう。距離もわずか五十キロ、目と鼻の先にあって、年間を通して緊密な連絡があるわけですよね。それに朝鮮は年に四度北京へ使いを出していますから、そこでえた情報が対馬を通して通報されます。幕府は朝鮮だけでなく中国や諸外国の情報をすぐにキャッチしていまし



釜山にあった対馬藩の居留地・倭館（岡部虎男氏蔵）

て、ソウルの出来事を三か月後には江戸が知っていたんです。例えば、明から清への交代とか朝鮮での内乱が起こったときのそれが、日本に伝えられています。それから一八六六年といいますと明治維新の二年前ですが、この年にフランス艦隊が朝鮮に侵入して江華島を攻める事件が起きています。そうしますと、すぐ日本に通報され、日本でも警戒した方がよいだろうといっていますね。このように両国の関係は幕末まで実に緊密だったわけです。いいかえますと、徳川幕府は朝鮮との国交によって東アジア社会と結ばれていたんですが、このことはもっと強調されてよいでしょうね。


徳川家康　家康は朝鮮との友好関係上，絶大な信用があった（徳川恒孝氏蔵）

―― そうすると、朝鮮は、徳川幕府あるいは徳川氏に対してたいへんな信頼をおいていたんですね。

李　これはもう絶対的なものでしたね。ですから、明治政府が出来、その代表が釜山にやってきたときに、釜山の出先機関はうむをいわさず追い返してしまうんです。徳川幕府を倒した明治政府の使節ですから、信義の上からでも君たちを相手にすることはできないということです。そのほかに文書とかいろいろありますが、基本はそこでしたね。つまり、朝鮮が徳川幕府に対し信頼が厚かっただけではなくて、徳川幕府も朝鮮に対する信頼は絶大なものがありました。したがって、日本の学問の正統派といいますか、江戸時代の儒学者のなかからは、朝鮮蔑視といったものは出てきませんね。後になって朝鮮蔑視という考え方が国学者の一部にでますが、数からしてもごく少数でした。私にいわせますと、彼らはあぶれた冷飯組であって、正統派に対抗する手段として『日本書紀』の記述を持ち出し「古代からの属国」を云々するんです。朝鮮と対等に仲よくするのはけしからんというわけです。明治政府になりますと、彼らの主張が明治政府の大陸膨張政策と結びついて、朝鮮蔑視が打ち出される。ですから、朝鮮に対する蔑視とかあるいは侵略思想といったものは古代から固有のものではなくて、明治時代の国策のもとで出てきたんだと思います。江戸の三百年間は、実によい関係だったわけですから。

―― それが明治に入って、今おっしゃったような事態になって、やがてそれが征韓論というところへ結びついてくると……。

李　不幸な関係になっていきますね。それには、日本がアジアを背にしてヨーロッパを見たという、重要な視点の欠如があったんじゃないでしょうか。

時代に揺れる島・対馬

日本と朝鮮の親善の場であった館跡には、明治十九年（一八八六）対馬警備隊の司令部が設けられた。以来、日清・日露の戦役を経て対馬は急速に要塞の島、大陸侵攻の足がかりの島と化していく。

江戸時代、日本と朝鮮とをつなぐ架け橋であった対馬は、こうして明治以降日本と朝鮮との軋轢、紛争のただ中に置かれてきたのである。

対馬の北端から海を隔ててわずか五十キロの距離に朝鮮半島がある。しかし朝鮮使節が絶えて以来、対馬にとって朝鮮半島は文字どおり近くて遠い国なのである。


明治以後，対馬は要衝の地として，要塞の島となっていった

対馬の風土を誌した古今の名著

対馬の風土を誌した歴史的名著として、私はいつも次の四誌を念頭においている。その第一は『魏志』東夷伝、通称「倭人伝」に見える対馬国の記事である。これは対馬に関する最初の文献として、きわめて重要な記録であるばかりでなく、そこに描かれている当時の対馬の実状が、まことによく活写されていることに敬服する。

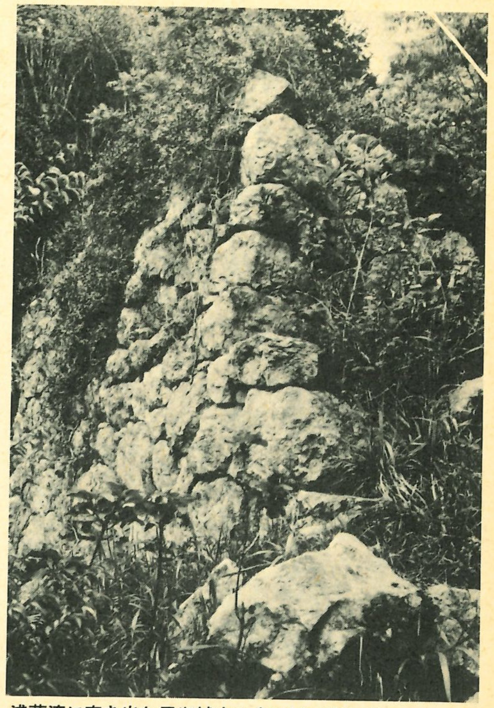
始度一海、千余里、至対馬国、其大官日卑狗、副日卑奴母離、所居絶島、方司四百余里、土地山険多深林、道路如禽鹿径、有千余戸、無良田、食海自活、乗船南北市糴

わずか六十余の文字を綴っただけで、対馬の様子が実に適確に表現されている。耕作地の乏しい絶島の民が、海上に活路をもとめ、南北に市糴したということである。

この倭人伝に次ぐ第二の名著として、中世の日本を描いた『海東諸国記』があげられる。これは朝鮮国の要職にあった申叔舟が、王命によって撰録したものであるが、室町時代の対馬を研究するうえに、不可欠の根本資料であることはいうまでもない。そのなかに、「四面皆岩山、土瘠民貧、以煮塩捕魚販売為生」とある所など、対馬の風土の特色が、実に簡明に、印象深く記述されている。

つぎに第三の名著として、大江匡房の『対馬国貢銀記』をあげたい。これは平安時代の中・後期、大宰府の長官として赴任した匡房が、対馬特産の銀を貢上する状況を誌したものであるが、それに、「全無田畝、只耕白田。……嶋中珍貨充溢。白銀鉛錫真珠金漆之類長為朝貢」と述べている。ここでも農業の貧困が焼き付けられ、鉱産物の採掘に生を賭けた姿が描かれている。対馬の銀山は、天武天皇三年（六七五）に初めて銀を貢したことが『日本書紀』に見えるが、大宝元年（七〇一）には金を貢したことが『続日本紀』に載っている。大宝という年号は、この金の産出を慶祝して建てられたもので、対馬は日本最初の銀と金を出した所であった。そして国営の銀山が操業されていたのである。『延喜式』にも、対馬の名産として銀と真珠（またま）が出ているが、式内社として銀山上神社と、銀山神社が載っている。

第四の名著として、陶山訥庵の『津島紀略』を推称する。著者訥庵は、元禄時代の対馬の学者で、少年のころより京に上り、木下順庵の門に学んだが、師の順庵から室鳩巣と並んで称されたほどの資質をもっていた。『津島紀略』は格調の高い地誌で、対馬最初の郷土誌である。（永留久恵）



浅茅湾に突き出た黒瀬城山の金田城　高句麗式の山城として知られる

李　戦後三十年たって、ようやくアジアに眼を向けよう、隣国朝鮮を見直そうという動きが強くなりました。こうしたなかで、今まで誰にも省みられなかった対馬の「宗家文庫」、例えば徳川二百数十年にわたる朝鮮外交が、日付別に克明に記された文書があるんですが、それに対する研究も最近はじまりました。たいへん嬉しいことですね。それから雨森芳洲先生が、隣国との関係は、互いに争わず、欺かないものでなければならないと強調しましたが、秀吉のときの不幸な関係を前向きに処理しますと徳川二百数十年のすばらしい友好関係となりました。そうした意味でも明治以降の不幸な関係にけじめをつけるべきでしょう。対馬から江戸までの通信使遺跡を歩いてみて、実感したのはそういうことでしたね。

——　歴史を学ぶということが、どんなに大きな意味を持つかということが、今のお話でよくわかりますね。われわれが何をしなければならないか、ほんとうの歴史を私たちは知らなければいけないんだということがですね。

李　そうです。隣国どうしはとくに争い、憎しみ合うべきではないですね。

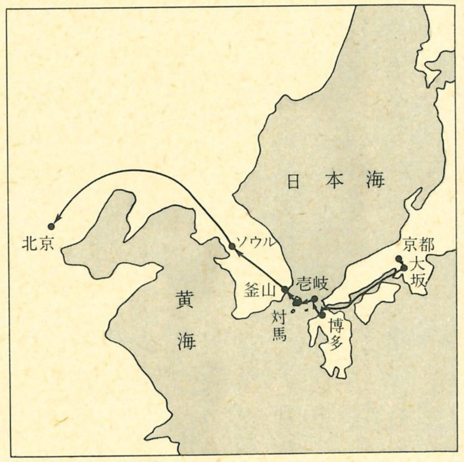
——　まったくそのとおりですね。

「銀の道（シルバーロード）」考

田代和生

江戸時代の日本と朝鮮との間には、通信使が往来する道のほかに、もうひとつ別の〝道〟があった。それは、信使往来の時のように、外交という表舞台でくりひろげられるはなやかな道ではないが、対馬藩の人々にとってはかけがえのない、生命線ともいうべき道——〝貿易の道〟であった。「鎖国」時代の貿易というと、長崎に入港する中国船やオランダ船との貿易を連想する。しかし対馬藩が行っていた朝鮮貿易も、それにまさるとも劣らない内容を持っていた。

朝鮮貿易のやり方には、官営貿易と私貿易の二つがあり、いずれも朝鮮釜山の地に設けられた倭館（後述）で行われていた。官営貿易とは、取り引きする品目と数量、そして交換比率がきちんと決められた、いわば定量貿易である。そのうち、朝鮮国王へ品物を献上する形式のものを封進といい、朝鮮政府が買い上げる形式を、公貿易という。品目は、対馬からは銅・錫・蘇方・胡椒など、朝鮮からは主に木綿（公木）があてられ、ほかに米・人参・虎皮・紬などもある。初めのうち、これらの品は、対馬から朝鮮へ派遣される使節（時代によって違うが、だいたい年に二十五回前後）が往来するたびに交換されていたが、寛永十二年（一六三五）に「兼帯の制」という制度が施行され、年に一回、まとめて授受されることになった。これによって対馬の使節は、貿易の業務から解放されたわけで、〝外交〟と〝貿易〟の分離がこのときから始まったのである。



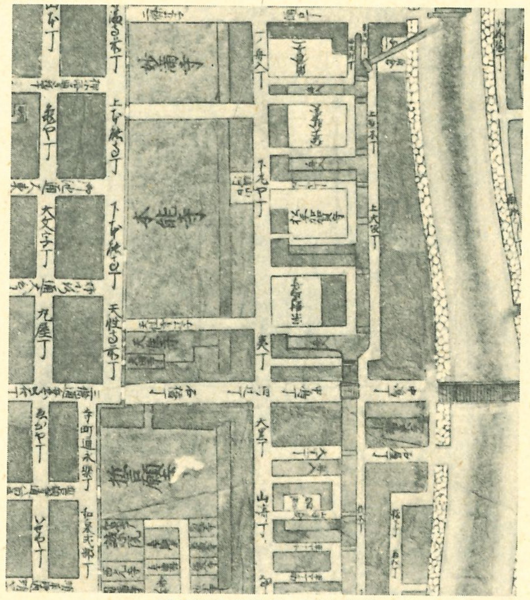
京都から北京へと向かうシルバー・ロード

こうした官営貿易に対し、私貿易は、月に六回、倭館の開市大庁という大きな建物に、朝鮮の商人と対馬藩の人々が品物を持って入り、相対で行われる貿易をいう。しかし官営貿易と違って、取り引き品目や数量に制限がないため、やりかた次第では、ばく大な利潤が見込まれる。対馬藩の貿易経営が、もっぱらこの私貿易のほうに注がれるようになったのも、無理からぬことである。ここで取り引きされた品物は、対馬からは、銀・銅・錫・タバコ・皮類・胡椒・水牛角・蘇木・明礬など、朝鮮からは、主に薬用人参（朝鮮人参）・生糸・絹織物類などである。このうち、対馬から出される胡椒・水牛角・蘇木・明礬は、東南アジア産で、オランダ船や中国船が長崎にもたらしたものを仕入れた。また朝鮮から出る生糸・絹織物類は中国産で、中国の王朝へ派遣される朝鮮の朝貢使節によってもたらされたものである。この時代の朝鮮は、中国を宗主国とし、毎年決まった時期に、朝貢使節が派遣されるならわしになっていたためである。しかしここで取り引き量が最も多いのは、何といっても輸出が銀、輸入は生糸、次いで人参であった。このうち、輸出される銀には幕府が鋳造した銀貨幣（丁銀）があてられていた。

今からは考えもつかないことだが、江戸時代の日本は、鉱産資源にめぐまれていた時代であった。とりわけ初期は、銀の産出額が多く、アジア第一の産銀国といわれたほどである。そうした中で生まれた銀貨幣は当初慶長銀（純度八十パーセント）という良質なもので、それを輸出することは、いわば政府がその品質を保証した銀を輸出するのと同じ意味をもつことになる。もちろん、当初の朝鮮貿易では、この慶長銀がもっぱら輸出されていた。

ところが元禄八年（一六九五）、幕府は突然貨幣の改鋳を行い、これまでの通用銀は品位六十四パーセントの元禄銀に切りかえられることになった。いわゆる元禄の悪鋳である。しかもこの改悪は、その後なおも続き、ついには品位は二十パーセントの最悪な通用銀（四ッ宝銀）まで登場する有様だった。貿易品として粗悪な銀しか得られなくなることは、貿易の衰退、やがては停止につながっていく。そこで対馬藩は幕府に請願し、宝永七年（一七一〇）から朝鮮貿易用の特殊な丁銀――特鋳銀（品位八十パーセント、人参代往古銀）を銀座で鋳造して輸出することを許され、国内通貨の悪鋳の間中、この貿易銀用にあてられた。対馬藩では、こうした輸出用の丁銀を、主に京都の三条河原町通に面した藩邸で集めていた。元禄時代（一六八八～一七〇三）の古地図でみると、この藩邸の前には、鴨川の水をひいた高瀬川の舟入が延びている。したがって、銀は屋敷の前から直接船積みされて、伏見――大坂――瀬戸内海……と運ばれていたことがわかる。そしてさらに、博多――壱岐――対馬を経て、倭館、すなわち朝鮮の釜山へ運ばれており、対馬藩の人々にとって、高瀬川の水は、朝鮮海峡にまでつながる、重要な交易水路であったわけである。この銀輸送のために、「御銀船」という、専用の小舟があてられ、京都から釜山までの全行程を、早いときで二週間足らずで運んだ。

その銀は、いったん、倭館という貿易管所に入る。倭館は、朝鮮の政府が、日本人のための居留区として設営したもので、長崎の出島と同じようなもの（ただし広さはその二十五倍もある）だと考えればよい。そこには、対馬から派遣された館守以下、数百人の人々が常駐しており、身分も士から足軽・商人・水夫、あるいは僧侶や陶工など、また生活に必要な酒やカサ、その他衣類などの便宜をはかる御用商人や、生鮮食料品を売る朝市が、毎朝、倭館の門前にたつなどして、それなりの立派な日本人町を形成していた。湊には、ひっきりなしに入港する貿易船以外に、対馬藩から派遣される使船（使節を乗せた船）も、時々入港してきた。この使者たちは、日本と朝鮮との間に起こった、さまざまな外交交渉を行うため、あるいは日本の国内の出来事を朝鮮へ知らせるために、渡って来たのである。朝鮮通信使の来日とは、また趣の異なった、日朝外交の〃最前線〃が、ここにあったのだといってよい。


対馬藩京都藩邸（慶応義塾大学古文書室蔵）

先に述べた私貿易によって、朝鮮商人の手に渡った銀は、その後もさらに長い〃旅〃を続ける。釜山から先は、通信使が往復するのと同じ道を通って、朝鮮の首都（ソウル）へ向かう。あるものは馬の背に、あるものは商人の背におわれて、野を越え山を越えて首都を目指す。首都に集められた銀は、そこからさらに中国の都、北京へ向かう。このときソウルから北京へ銀を運んだのは、前述の朝鮮の朝貢使節の人々である。そしてこのあたりになると、銀は当初の丁銀としての形を保っているのはマレで、大部分は純銀に近い銀塊に吹き直されている。銀はこの北京において、生糸・絹織物などと交換される。

こうして、京都高瀬川で船積みされた銀は、最終の地、北京へ到着する。京都――大坂――博多――壱岐――対馬――釜山――ソウル――北京。これが朝鮮貿易の中心である、銀がたどった道「銀の道」である。そしてこの「銀の道」を逆にたどったのが、中国の生糸・絹織物である。

中国で生産された生糸などが、朝鮮を経由して日本へもたらされていたという事実は、これまであまり問題にされていなかった。というのも、生糸といえば長崎貿易、そしてこれを専門に取り扱う商人である「糸割符商人」の存在もあって、生糸の輸入が、長崎の地だけで行われていたかのような錯覚をいだいてしまうためである。ところが、長崎貿易の生糸輸入量は、十七世紀後期に急激に落ちはじめる。幕府による貿易抑制策の結果であるが、これとは対照的に、朝鮮経由の生糸が対馬藩によって大量に日本へ輸入されるようになる。中でも生糸の最高級品ともいうべき白糸などは、一時期、長崎で取り扱う量よりも、大量にかつ安く輸入されたほどである。これらは、北京から、朝鮮の朝貢使節や商人、さらに対馬藩の人々によって最終の地である京都へ運ばれる。そして京都藩邸から、西陣の織物屋の原料糸として、あるいは巻物屋などの手に渡されていく。つまり、「銀の道」は、帰りにはそのまま「絹の道」にもなっていたわけである。京都は、こうした道の、日本側の出発点であり、また同時に終着点でもあったのだ。

このように、江戸時代の日本と朝鮮との間には、通信使の来日に示された、外交という、いわば両国のタテマエとしての関係があった反面、盛んな貿易活動が展開されていた。それは、長崎貿易、さらには薩摩藩の琉球貿易と並んで、「鎖国」時代の国際貿易ルートの一部を構成するものであった。とりわけこの貿易を独占した対馬藩にとっては、貿易利潤の獲得こそ、藩財政の死活と直接結びつく、重要な意味を持っていた。そしてそれは一方において、「銀の道」、「絹の道」の太さと、密接な関係を持っていたことはいうまでもない。

ところがこの「銀の道」が、極めて健全であったころ、幕府は銀貨幣の不足に悩んでいた。日本の銀産出高が頭うちになり、鋳造原料が不足していたことも原因だが、せっかく鋳造しても、穴から水がもれていくように、外国の地へ持って行かれたのでは、たまらない。そこで幕府の政治顧問でもあった新井白石は、何とか対馬藩による銀流出をくいとめようとはかった。貿易なくしては立行かない対馬藩は、白石と同門の儒者雨森芳洲（東五郎）を出してきた。この両者は、かつて通信使節来聘をめぐって、外交論争をたたかわせた間柄であったが、今回はもっと現実的な問題である、国内経済と藩経済とをめぐる経済論争が展開されることになった。結果は、前回とまったく逆で、雨森側、つまり対馬藩側が勝つ。要するに、朝鮮貿易は日朝外交を推進させている対馬藩にとって、経済的保障の意味をかねているのだとする意見が通ったのだ。そしてこの問題は、白石が政界から引退したこともあって、しばらく後に持ち越される。

新井白石が提起した、対馬藩の銀輸出問題が再び論議されるのは、元文年代（一七三六～一七四〇）に入ってからである。この前の年代である享保年代（一七一六～一七三五）に、対馬藩から流出した丁銀（享保銀、品位八十パーセント）は、記録でわかっている限りでも、全鋳造高（三十三万貫余）の八パーセント近くの二万貫余りにも達していた。国内の貨幣経済は、白石が危惧したように、重大な事態に陥っていたのである。幕府は元文元年（一七三六）、再び通貨の品位を四十六パーセントに落して、対馬藩へは以前と同様、特鋳銀の交付を許した。しかし幕府はこの交付に際して、かなり厳しい条件を対馬藩に課し、国内での銀調達の主導権を握った。

主要輸出品としての銀の供給源を幕府に抑えられたことによって、朝鮮貿易はみるみる低下していく。対馬藩が財政難に陥ったことは、いうまでもない。これに対して、幕府は毎年のように「下賜金」「御手当金」といった補助金を与え、さらに飛地領（下野国安蘇・都賀郡）も与えた。対馬藩に日朝外交を推進してもらうために、それなりの援助を与え、また外交担当役としての格式も維持しておいてもらわなければならなかったためである。こうして対馬藩による朝鮮貿易の全盛期に、幕がおりるのである。

（慶応義塾大学助教授）

対馬歴史散歩

永留久恵

◇浅海沿岸遺跡――南北に市羅する根拠地

浅海の沿岸には遺跡が多い。湾口に近い水崎浦の浅い海底に、縄文時代の遺物包含層があり、縄文中期の阿高式土器と、石器が多数出ているが、その下層から早期の押型文土器が発見されている。

また水崎の西方三キロ、ヌカシという西海岸の小さい浦で、同じく中期の遺跡が発掘されたが、出土した遺物のなかに、朝鮮系の櫛目文土器が検出されている。対馬には縄文早期から晩期までの遺跡が存在し、北部九州と同じ編年が通用するところから、日本列島の文化圏にあったことは明らかだが、そのなかに朝鮮系の遺物が混入しているもので、これが対馬の先史文化の特色である。

弥生時代になると、この傾向がさらに顕著で、大陸渡来の石器、土器、青銅器、鉄器の出土する遺跡があいつぎ、なかには朝鮮半島でも未発見のものが、対馬で出土した例がいくつかある。特に仁位浅海の沿岸にこれらの重要遺跡が集中し、赤崎、唐崎、糠浦、仁位浜などがよく知られている。

◇和多都美神社――幻の海神宮

当社には海幸彦・山幸彦の伝説があり、玉の井の古跡もあって、神話の海神宮に擬せられている。

◇雞知古墳群――県直の墳墓に擬す

浅海湾を瀬戸内海の縮図とすれば、雞知はまさに河内にあたる。この地に古式の前方後円墳が集中し、後期の横穴式古墳も存在するところから、対馬県直とよばれた古代豪族が、この雞知にいたにちがいないと思う。

◇城山の山城址――特別史跡「金田城」

天智天皇六年（六六七）、対馬国金田城、讃吉国屋島城、倭国高安城を築くと『日本書紀』に載っているが、浅海湾内の城山に、壮大な山城の遺構がある。

全山を取り巻くように石塁が築かれ、谷間には城戸があり、浦口の方から順に一ノ城戸、二ノ城戸、三ノ城戸と呼び、城戸の谷底には水門が設けられている。標高二百七十四メートルの頂上には、絶壁を利用して壇状に石垣が積まれ、おそらく望楼の跡と見られるが、ここから浅海大口を眼下に眺め、その向こうは一望千里、朝鮮まで水平線を監視することができる。

◇遣新羅使の泊地――万葉の歌所

百船の泊つる対馬の浅茅山　しぐれの雨に黄変ひにけり
（万葉集）

これは天平八年（七三六）秋九月、遣新羅使の船が、対馬の浅茅浦に停泊した時の歌である。続いて竹敷浦に泊った時の歌として、大使以下各心緒を陳べて詠んだ歌十八首が載っている。

◇外寇の跡

浅海の浦々にも、蒙古来襲の伝説がある。また応永二十六年（一四一九）夏、朝鮮軍二百余艘大挙して浅海の奥深く侵攻してきた。真先に尾崎を焼き討ちにし、次に船越を占拠し、さらに仁位浦に侵入して糠嶽の戦いとなったが、これは倭寇に悩まされる朝鮮国が、その根拠地をたたくためにとった軍事行動で、これらの浦々に海賊の首領がいること、また対馬の海賊どもがこの時、遠く中国の方まで出かけて留守であることまで知っていた。

文久元年（一八六一）春、ロシアの軍艦が突如として浅海に侵入し、芋崎に停泊して半年にわたり、湾内の測量を行うと同時に、基地の租借を申し入れてきた。藩はこれをもてあまし、幕府から外国奉行小栗豊後守が来島し、交渉に当ったが要領をえず、イギリス軍艦まで来て退去を迫る一幕もあった。

それから二十数年経った明治十九年、竹敷が帝国海軍の基地となり、同二十九年には要港部が置かれ、浅海は艦隊の泊地となった。日本海海戦の当時も、ここが作戦基地となったことはいうまでもない。

◇三根浦の弥生遺跡――青銅器は語る

三根浦沿岸には弥生時代の遺跡が多く、ガヤノキ、高松壇、坂堂、チゴノハナ、それに支浦吉田のエベス山、トウトゴ山、木坂のヨケジ等がよく知られている。これらは舶載の文物が多く出土して、大陸との交渉を語っているが、なかでも異色のものとして、北方騎馬民族の短剣など、珍しい青銅器がある。

◇海神神社――対馬国一ノ宮

中・近世のころは木坂八幡宮と称したが、明治四年に現社号となり、国幣中社に列せられた名社である。この神山の名を伊豆山と称するのは、神を斎き祭る所、稜威高き山ということであろうが、これと対称的に、死者を埋葬する所を保利山というのは、葬りという意味にちがいない。木坂の里では、北の伊豆山を神の世界、南の保利山を黄泉の世界とする観念があったわけで、出産をする所も決まっていて、産屋の習俗が遺っていた。

◇佐賀の円通寺――中世の遺宝

東海岸の佐賀浦に、中世の一時期島守の居館があった。当地の名刹円通寺に、宗氏一族の墓所があるが、なお円通寺の本尊薬師仏は、見事な銅造の高麗仏で、また鐘楼に懸っている梵鐘は、李朝初期の秀作として、重文に指定された名宝である。

◇千俵蒔山――烽と防人の跡

対馬第一の大川が流れ、流域に六つの村落を育んだ佐護川の沿線には、歴史上名のある遺跡が多く、それに天神多久頭魂、神御魂、天諸羽など名神古社が多い。また海峡に臨んだ千俵蒔は、古代の防人が配備された山で、頂上には烽の跡と見られる遺構がある。

◇和珥津――国境の港

『日本書紀』神功皇后伝には、和珥津から発進したとある。この新羅征伐の物語は信用できないけれども、和珥津というのは実在の地名を記したものと見られ、それは対馬北端の鰐浦（現在名）にちがいない。

後世豊臣秀吉の出兵軍も、第一陣はこの浦に集結し、ここを基地として海を渡った。その後軍監毛利高政が大浦河内に駐在し、輸送線の中継基地としたが、当時はこの浦に諸将の納屋があったらしい。

◇古里遺跡と朝日山古墳

比田勝の支浦古里の海辺に、重要遺跡に指定された弥生の石棺群がある。弥生土器と同伴して朝鮮の陶質土器があり、広形銅矛と共に銅釧、玉類が多く出ている。

◇国府と国分寺――国衙と館

厳原町役場の辺から、金石川に沿って開けた一帯を国分町というのは、国府が置かれた時代の遺称である。中世のころまで国府と呼ばれ、近世になって府内、または府中と称したが、明治二年に厳原と改称した。

清水山の南麓を国府平と呼び、国府の印鑑を収納する社があった。現在中学校がある所に国分寺（島分寺）があったが、戦国時代の末期に、国分寺を移転し、その後地に島主の屋形を築き、金石館と称したが、後に増築して金石城となった。現在も城壁がよく遺っている。

◇清水山城――築城史に残る石垣

天正十九年（一五九一）、秀吉の朝鮮出兵にあたり、軍監毛利高政が清水山に築城し、肥前名護屋（秀吉の本営）と朝鮮を結ぶ中継基地としたもので、今も頂上に一ノ丸、東に延びた尾根に二ノ丸、三ノ丸の遺跡がある。金田城は防衛のための逃げ城であったが、この清水山城は異国を侵すための根城であった。この城の石垣が珍しい。

◇万松院――島主歴代の菩提寺

金石城の西側に万松院がある。宗義智以来歴代藩主の菩提寺で、見るべき文化遺産が多いが、なかでも壮大な墓碑が立ち並んだ御霊屋は、対馬の名所とされている。

◇佐須浦古戦場――元寇の墓碑悲し

文永十一年（一二七四）秋、蒙古・高麗の連合軍四万、九百艘の軍船をもって対馬に襲来した。島主宗資国は佐須浦に出陣し、主従八十騎、死力を尽くし防戦し、全員討死したという。小茂田浜神社はその霊を祭ったもので、資国の墓は、下原の丘にお首塚、樫根の法清寺にお胴塚があり、悲惨な戦況を伝えている。

◇豆酘――古い祭祀習俗

対馬の南端豆酘の浦は、弥生遺跡から古墳もあり、歴史時代の古跡も多いが、それと共に式内名神大高御魂神社、および多久頭魂神社、雷神社などの古社が多く、これらの祭祀と関連して伝統の赤米を耕作し、その穀霊を祭る習俗と卜部の秘伝を継承した亀卜が遺っている。

（長崎県立対馬歴史民俗資料館）

朝鮮通信使と民衆の交流

辛　基秀

一口に鎖国時代といわれてきた江戸時代は、決して閉ざされた社会ではなく、一衣帯水の隣国朝鮮とは、善隣関係がつづいた時代である。

徳川幕府は、朝鮮を「通信」の国、すなわち信義をもって交わる国として、オランダ・中国の「通商」の国と区別して対等の善隣外交を成立させ、貿易の量も、長崎出島のオランダ・中国に劣らず、拡大させ、とくに文化の交流は盛んとなった。

朝鮮と日本の善隣友好のきずなは、江戸時代二百余年の間に、前後十二回往来した朝鮮通信使で、一行は賑やかな文化使節団でもあった。

朝鮮側は朝鮮通信使の派遣がきまると、五百名近い人選にとりかかる。

正・副・従の三使をはじめ、文章の起草をする製述官、書記、軍事官、医術に精通し、日本の医者との交流——医事問答——で大きな役割を果たした良医、堂上訳官、上通事、押物通事の各級の通訳、徳川将軍の特別の所望により派遣される馬をつれての曲馬の名手——馬上才、馬の世話係の理馬、典楽、騎船将都訓導、廳直、一行中の重要な人物の庶務的な役をし詩文にも秀でている小童、及唱、コック——力尺、楽工、吹手の音楽隊で「一芸を以て国に名のある者、悉く従いて行く」（李彦瑱「松穆館稿」—松田甲『日鮮史話』より）ありさまで、異国情緒たっぷりの通信使は、朝鮮ブームをおこした。

一行の宿舎は、書画の揮毫を求める者、あるいは筆談で、朝鮮・中国の政治情勢をたずねたり、歴史、風俗をきく人で埋まった。

たとえば、一七六四年の通信使の副使の書記「元重挙は、三、四か月の間に実に一千余人の日本人に接し、二千余篇の唱和に応じた」（李元植『朝鮮純祖辛末通信の訪日について』）という超人的記録もある。

朝鮮通信使の訪日は、もちろん国家レベルの交流ではあるが、民衆の間にも大きな交流があったことが、各市町村史に断片的に残されている資料や、各地の民間芸能からもよくうかがえる。



民衆の熱狂的関心は、たとえば、町人文化のさかんであった大垣城下、竹島町の大黒屋の先祖のように、朝鮮通信使に同行した視察と記録が秋祭の朝鮮軕（やま）として創作された例は、各地の祭事にも多く残されている。

竹島町の大黒屋は、大垣を通る朝鮮通信使に強烈な印象をうけ、「勇壮な中にも気品のある美しい行列に感銘し、衣裳や飾り付け等すべてを覚えた後『祭りの出し物には使節の行列に似せたもの』を考案創作」（山田美香『山車と竹島町』）したのである。



鈴鹿市の唐人踊り（鈴鹿市教育委員会提供）



津市の唐人踊りの清道旗

本年六月七日、岐阜県教育委員会で、県重要有形民俗文化財と指定された〝朝鮮軕〟の付属品、行列衣裳、楽器一式四十四点は、民衆レベルの交流の重要な証である。

赤や朱色を豊富につかった朝鮮軕は、他町の山車に比しひときわ目立ち、長い行列は夜おそくまで町から町へとねり歩いた。

行列は「金襴（西陣製）の美しい揃いの朝鮮服を着て赤地に金糸の刺繍を施した帯を締め帽子を被り、木綿の靴をはいたもので、先頭には『清道』と書いた幟二本……」（前出書）に大笛、太鼓がつづくもので大垣城下をはじめ近郷近在の人々にも「大垣祭に奇抜なものは、竹島町の朝鮮軕」と流行（はや）された曳山行列は、明治初年になり、国家神道に反すると槍玉にあげられ禁止されたが、竹島町の人々は、衣裳等を大事に保管してきた。

竹島町の陣羽織に、朝鮮民画のいわゆる「文房具」等が金襴されていることに注目した李進熙氏は、竹島町に分宿した通信使の「下官」の民画の心得のある者が、記念に贈ったのではないかと推測している（歴史ドキュメンタリーフィルム「江戸時代の朝鮮通信使」上映の講演より）。

陣羽織の「文房具」のデザインは、朝鮮と日本の民衆の深いえにしを語る。李氏朝鮮で、「民衆の間では、書籍と筆、机、それに孔雀の羽や珊瑚をあしらった文房具の絵が好まれ、それを子供部屋などに飾り、すこやかに成長を祈るのであった。」（李進熙氏）

朝鮮通信使を知る人は少ないが、残された資料は沿道ゆかりの地だけでなく、遠くはなれた地にも多く残されていることは、朝鮮通信使迎送が、如何に挙国的なものであったかを知らせるものである。

祭事に残された朝鮮通信使の影響の最大のものは、南蛮風に変形しながらも今日までつづいている三重県津市の分部町の唐人踊りであろう。

秋、八幡神社の祭礼は、津の大祭だが、祭の歴史は古く、寛永十二年（一六三五）二代藩主藤堂高次が津町に特別に費用を貸与し保護したから一段と盛大になったという。中でも唐人踊りは、朝鮮通信使一行のシンボリックな旗である「清道旗」「形名旗」を先頭にしたもので、秋祭最大の人気となっている。大垣ではなくなったものが、ここでは、たくましく生きつづけ、「他の風流が次々と姿を消していった中で、この『唐人踊』だけが連綿として三百年以上の長い生命を保っているのは、ユーモラスで異国的なあじわいと分部町の人々の変わらない熱意によるものである。」（『津市史』）

同じことは、津市から名古屋へ向かう途中の鈴鹿市東玉垣町に伝わる唐人踊りについてもいえる。

この踊りは、毎年四月十五日、牛頭天王社の春祭に行われ、無形文化財となっている。「長歳哉（ちようざいや）、変らで祈る瑞垣（みずがき）の五穀成就と踊る唐人」の口上で始まる唐人踊りは、ラッパ一、



岡山県牛窓の唐子踊り

銅羅一、うちわ一の三人が太鼓二、笛二、鼓一、ちゃんぎり一のはやしでひょうきんに踊る。市の教育委員会は、この踊りを「日本式神道行事と支那式舞曲と巧みに交錯せしめている庶民芸術」と説明しているが、村史の総合的研究がすすめば、説明不可能な「支那式舞曲」は明らかにされるであろう。

岡山県牛窓に伝わる唐子踊りも「神宮皇后の三韓征伐」の神話伝承に牽強付会されていたが、私たちの映画「江戸時代の朝鮮通信史」のインタビューにこたえて本蓮寺の貫名正締伝職は、「正使の宿舎である本蓮寺からすれば唐子踊りが伝わる紺浦は辺鄙なところで下官、すなわち下級の人たちが泊って踊りを踊って楽しんでいたのではないか、近所の人が自然にならって伝えたのであろう」とたんたんと語られた。

かつて牛窓で唐子踊りを見聞した上田正昭京大教授は、「疫神社のまつりに舞われる二人の少年の対舞は、その衣裳といい、そのリズムの終わりの部分といい、日本化の要素を加えながらも、朝鮮渡来の唐子、すなわち韓子の対舞であることを肌に感じた」（「朝日ジャーナル」七九・四・二〇）と述べておられる。

朝鮮通信使一行には、楽工、典楽と芸能関係者も多い。歌と踊りがなければ、一日ももたない朝鮮人の芸能的特性を反映し、通信使一行は音楽にとりかこまれての旅であった。鼓笛、銅羅、鼓などの勇壮な曲は長い道中の士気を鼓舞したただけでなく、沿道ぎっしりの日本の民衆を魅了したに違いない。津市分部町の唐人通りの大きなラッパも、通信使のものを模倣したものである。

民衆レベルの交流の発掘は、これからの大きな課題であるが、朝鮮側の記録にも多く残されている。

一七一九年、製述官として随行した甲維翰は書いている。彼らは壱岐への出帆を待つ間対馬藩との交歓や船遊び、歌に興じていた。

「紅酒を酌み、楽工に鼓笛、咸角篥を奏でさせ、唱歌相応じ、両童子は華衫をひるがえして対舞していた。……俄かに倭の男女、老少、稚児数十人があらわれた。…山の谷間から楽声を聞いて来り、崖頭に坐って俯視しながら楽を歓ぶ。楽がおわると、郡工が鼓を撃ち、広大（俳優）が語りをし、倡優が諸戯をなす。観る者たちまちにして大笑絶倒し、その響きは岸洞を沸かすばかりである。」（姜在彦訳注『海游録』）

牛窓に残された小童対舞の絵が、木村東介氏所蔵の朝鮮通信使の一大行列図の中に鮮やかなカラーの一コマとして残されていた。

対馬の即興的な笑いの渦は、日本の民衆によってさらに高められる。

「倭通事の一人に茂助という者があり、朝鮮の歌を知っていると称する。歌わせたところその音に断続あり、章を成さず、笑いはさらに笑いをよび、また一段と面白味を添える。」（前出書）

このような交流の歴史は、江戸期が決して鎖国ではなく、朝鮮との特筆すべき善隣友好の時代であったことを教えてくれる。

（映像文化協会代表）

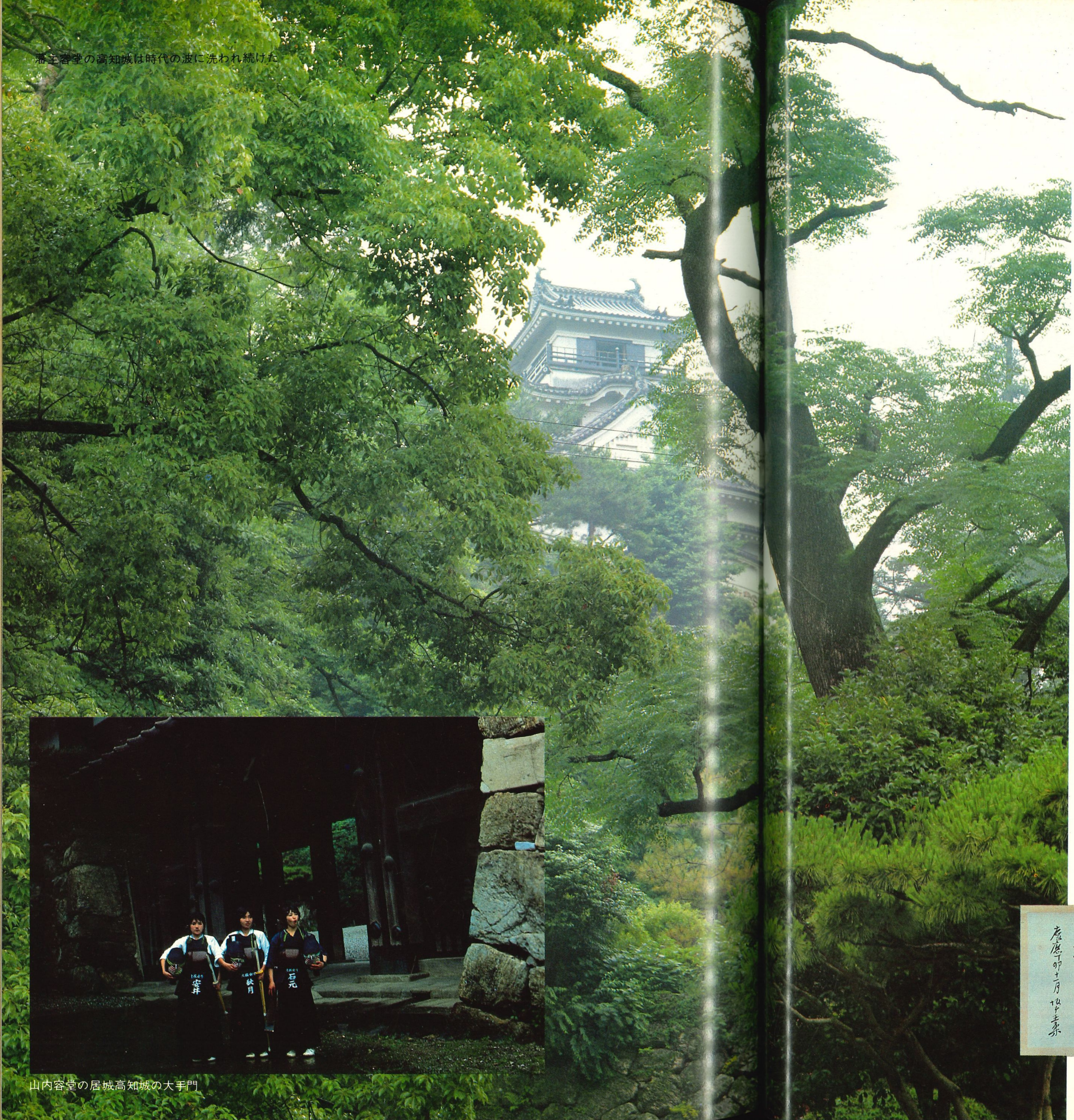


海援隊時代、長崎の写真師上野彦馬撮影と伝える龍馬の写真

「風雲児」というにふさわしい生涯

幕末、倒幕の薩長連合を画策、統一国家のビジョンを夢みながら、維新の夜明けを待たずに斃れた龍馬は、幕末志士のなかでももっとも魅力的な存在である。海運と貿易を興し、五大州を舞台に、大仕事しようという彼にとっては、倒幕革命とは、片手間仕事でしかなかったのだろう。龍馬が〝もし、生きていたら〟維新史もかなり違ったものになっていたろうとロマンをひろげさせ、彼の暗殺は今日にまで謎をもちこさせた。〝風雲児〟というにふさわしい男である。

背景は高知の桂浜。龍馬の視線は太平洋の彼方に向いていた



藩主容堂の高知城は時代の波に洗われ続けた

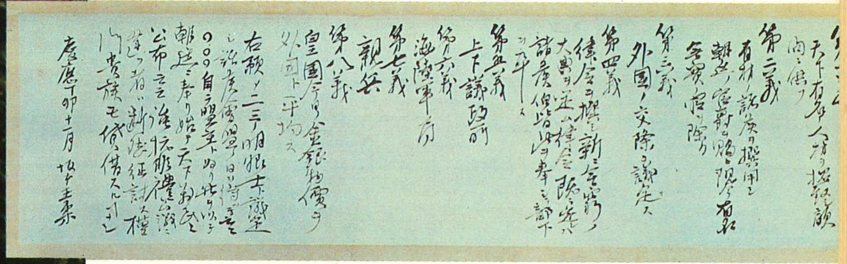
山内容堂の居城高知城の大手門



龍馬の生家跡。生家は高知有数の豪商の分家

なぜ、龍馬は、人気があるのか——

城下町高知の豊かな町人郷士の家に生まれ、幼少期「泣き虫龍馬」とあだ名された彼が幕末期の土佐藩という政治風土のなかで成長し、尊攘志士として活躍、やがては日本の坂本龍馬となり、まったく新しい統一国家を構想して「船中八策」に結実する。そして志半ばで三十三歳の短い生涯を閉じるのだが、彼が今日でも多くの人の共感をよび続けるのは、そこに近代日本の青春をみるからだろうか。



新国家を構想した「船中八策」(長府博物館蔵)



お龍との霧島登山を姉乙女に報告した龍馬の絵入り書簡（京都国立博物館蔵）



龍馬が最初の襲撃を受けた京都伏見の寺田屋



海軍伝習所跡。海舟、龍馬など逸材の揺籃



長崎の眼鏡橋。当時長崎は最も欧風の街であった

長崎と龍馬

日本中を駆け回った龍馬だが、長崎はとくになじみ深い。彼がはじめて長崎へ行ったのは、勝海舟に従っての旅、ここで勝の仕事を見ながら、外国相手の大きな仕事があること、そしてそれは長崎でなければできないことを知った。

その時、師横井小楠を知り、のち海援隊の創設、いろは丸事件、武器買い付けなど、長崎と龍馬は、切っても切れぬ関係となったのである。



遭難時、龍馬の脳漿で染みのついた懸軸。中央下の茶色の斑点が血痕（京都国立博物館蔵）

政治という怪物に殺された男

明治維新は、龍馬や慎太郎など、討幕派の目ざす方向で実現したが、それは龍馬が目標とした明るい、民主的な



龍馬愛用の刀の鐔。金象がんがある（京都府立総合資料館蔵）

近代国家ではなく、明治絶対主義の専制的な体制であった。〝もし、龍馬が生きていたら……〟というさまざまな豊かな、可能性を考えるのも一興だろう。

奇想・奇略に富み、果敢な行動力は、〝曠野の猛獣〟にもたとえられるが、龍馬の一代は、〝革命と海とのいそがしげな往復〟であったともいえる。

ともあれ、龍馬は、政治というえたいのしれない化け物によって殺されたのである。



遭難当時、龍馬が着ていたと伝えられる紋服（京都国立博物館蔵）



寺田屋内部。遺品が多く集められている

龍馬暗殺

三好　徹

■みよしとおる
作家　昭和６年東京都生まれ　読売新聞記者をへて、『聖少女』で第58回直木賞受賞　現在ペンクラブ理事　著書『風塵地帯』『まむしの周六』『決断の時』『龍馬暗殺』

NHK 滝沢孝司



暗殺現場に残されていたのは、刀の鞘と下駄。それらを調べると、刀の鞘は新選組の原田左之助のものらしいこと、下駄はこれも新選組の出入りしている料亭のものであったところから、新選組説が強かったが、決め手に欠け、のち明治三年に五稜郭で逮捕された見廻組（新選組と同じような京都守護職の下の警備隊）の今井信郎の自白によって、今井真犯人説が定着したのである。

しかし、作家・三好徹氏は、今井犯人説の自白調書は証拠能力が弱いとし、意想外な「後藤象二郎犯人説」を推理している。果たして真相はどうか？

龍馬の遺体を京師探索の眼を逃れて運んだ霊山道



京都丸山公園にある龍馬（立）と中岡（坐）像



幕末の奇蹟といわれる坂本龍馬

龍馬が殺された日

龍馬暗殺一か月前の慶応三年十月十四日、十五代将軍徳川慶喜は土佐藩主山内容堂らの建策を受け入れ、平和裡に政権を譲り、徳川家も一大名として存続を図るべく朝廷に大政奉還を奏上した。しかし、ちょうどこの日、薩摩・長州の二藩は、討幕の密勅を引き出すことに成功していた。穏健な公武合体派と急進的な武力討幕派の峻烈な主導権争い、佐幕派諸藩の巻きかえしなど、京都の町には血腥い匂いがただよい、不穏な噂が絶え間なく伝えられていた。

大政奉還から約二か月たった十二月九日、薩長二藩や岩倉具視らの武力討幕派は一気に攻勢に転じ、王政復古を宣言した。時局は急転直下、討幕の道を走り始めてゆく。

この激動の時代のまっただ中、坂本龍馬は暗殺された。

慶応三年（一八六七）十一月十五日、京都の町は比叡おろしが吹きまくり、底冷えのする寒い日であったという。

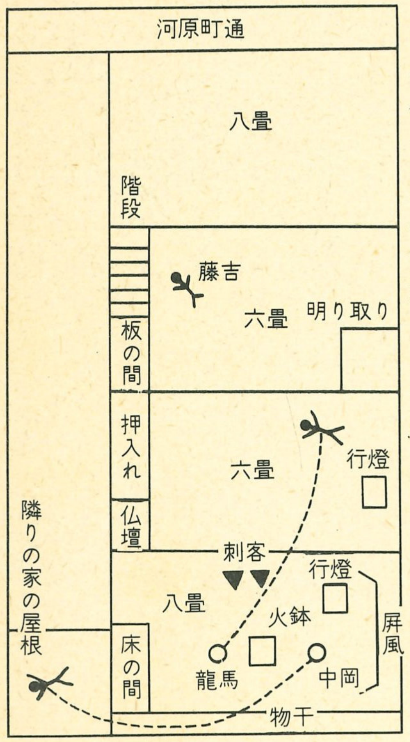
――皆さん、今この時間を、慶応三年十一月十五日の夜八時ごろと思っていただきたいのです。場所は、京都河原町三条下ル蛸薬師角の近江屋という醤油屋の二階。実は坂本龍馬は、ここで暗殺されたのです。しかしながら、テロは一瞬のうちに行われましたので、犯人がわかりません。これから史実を忠実に再現いたしますので、皆さんに下手人を推理していただきたいのです。

残された物的証拠が語る謎

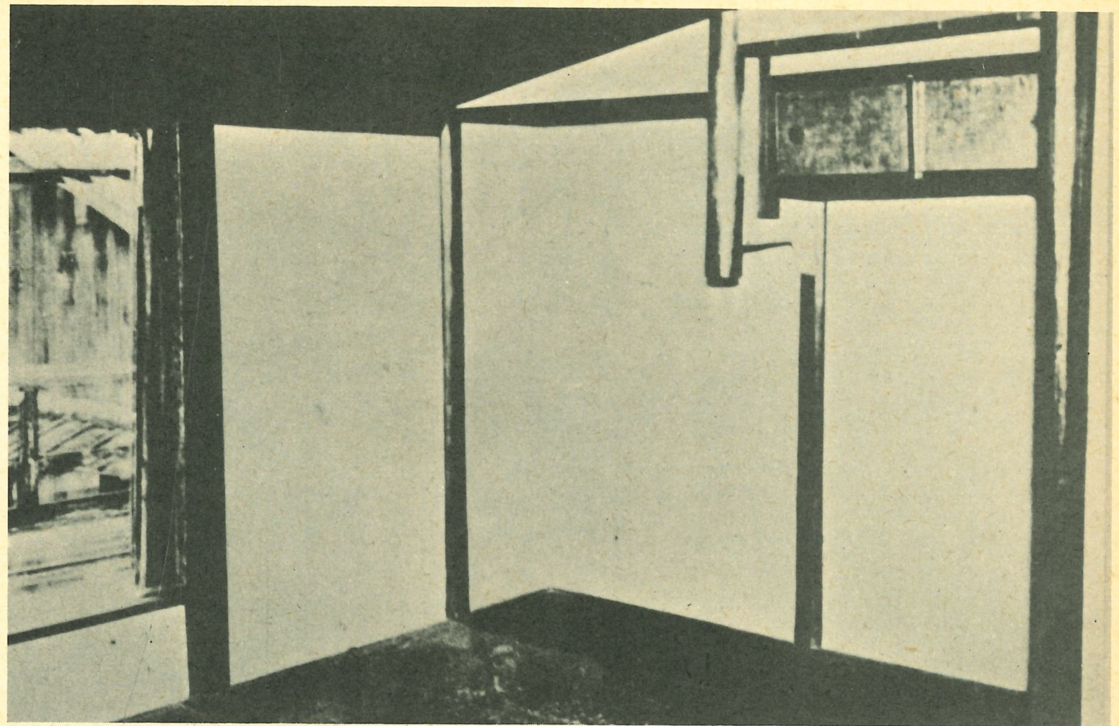
凶行現場となった近江屋の二階の見取り図がある。階段を上がって来たところに、藤吉という男が倒れていた。彼は昔は相撲取りで雲井竜と名乗っていたが、この時は龍馬の下僕をつとめており、肩口から背中を斜めに斬られていた。そして隣の部屋には坂本龍馬が倒れていた。龍馬は愛刀を抜き、それを行燈にかざして自分の傷を見てから息が絶えたといわれている。額を横に斬られた傷と、右の肩から斜めに斬られた傷、この二つの傷が致命傷となったといわれている。

凶行は奥の八畳間で行われた。

龍馬は床の間を背にし、火鉢を前に座っていた。刀は手もとになく、床の間に置いてあったという。そして向かいに、夕方から偶然龍馬を訪ねてきた土佐藩の陸援隊長の中岡慎太郎が座っていた。犯人は階段を上がり、藤吉を一刀のもとに斬り、この八畳間に入ってきて二人に斬りつけたのである。そして龍馬は斬られた



近江屋の犯行現場見取り図



坂本龍馬が暗殺された近江屋の部屋

あと、中岡の身を気づかいながら、君は大丈夫かとか、医者を呼べとか、自分は脳を斬られてもうだめだと言いながら、真ん中の部屋まで行き倒れたのである。

一方、中岡慎太郎は後頭部を斬られて右腕が皮一枚という重傷であったが、窓から隣の家の屋根へ救いを求めて行き、その場で倒れている。知らせを聞いて土佐藩の谷干城らがかけつけ、中岡慎太郎は苦しい息の中から事の顛末を語ったが、二日後に息が絶えてしまった。藤吉は、翌日、死んでいる。

現場に残された物的証拠は、二つあった。一つは、犯人が残したといわれる刀の鞘。もう一つは、ひょうたんの印のついた片方の下駄。これがたった二つの物的証拠である。では、いったいだれが、あるいはどういう組織が、この行動を起こしたのだろうか。

この場面は、中岡の証言をもとにしてさまざまなドラマに展開されているが、ここでは劇画風に暗殺シーンを再現してみよう。

暗殺シーンを再現すると……

ここは京都近江屋。外は寒い風が吹いている。大政奉還により、京都クーデター、武力討幕の計画は一時停止した。この大政奉還を立案し奔走したのは坂本龍馬である。

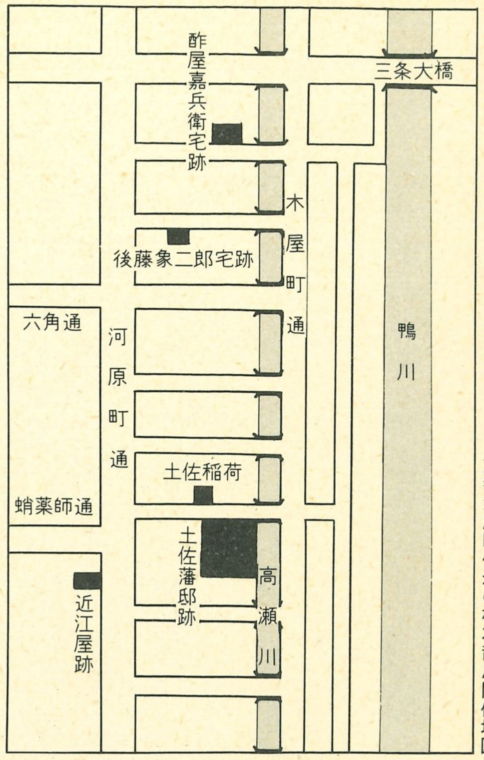
近江屋二階八畳間に二人の男、坂本龍馬と中岡慎太郎がいる。

龍馬は風邪をひき高熱で、ドテラを着ている。

龍馬　「薩摩は不満じゃろ。けんど、あのままいったら、薩長連合が新しい日本の政権となる。それでは土佐藩をはじめ諸藩がかわいそうじゃし、徳川氏も哀れじゃ。まあ、とにかくこれで統一国家の足がかりはできた。少なくとも……新



武力倒幕派といわれた陸援隊の隊長中岡慎太郎



京都河原町付近の板本龍馬関係地図

政府の方針もわしの考えた方に進みそうじゃ。」
（中岡慎太郎は不思議そうに）
中岡「そげに新政府に夢を持っちょるおまんが、どないして新政府に加わらんのじゃ。」
龍馬「わしは、日本を生まれ変わらせよう思うただけじゃ。生まれ変わった日本で出世する気はないでよ。それにわしは、窮屈な役人というやつが嫌いじゃ。」
中岡「それで、おまん、これからどないする気じゃ。」
龍馬「世界の海援隊でもやろうかな。（明るく笑むが高熱を払うように頭を振り）ああ、どうもいかんのお、悪い風邪引いたのか、熱は高いし頭がくらくらするでよ。……シャモ買いにやったけど、おそいなあ――。」



京都の町中を流れる高瀬川

その時、階下でガタガタと音がして、龍馬が階下の方へ目を向け「ほたえな！」とどなる。
八畳間の外で様子を見る刺客たち。ふすまをあけ、飛び込んで来る刺客二人。この時「コナクソ」と叫びながら入って来る。
一人が龍馬の前額を斬る。
血が飛び、床の間の絵にかかる。
もう一人が中岡の後頭部を斬りつける。
龍馬、床の間の刀に飛びついて刀を両手でつかみ、鞘を払おうとするが、二の太刀、三の太刀が彼を襲う。
短刀で渡り合う。中岡が斬られる。そして一人が中岡にとどめを刺そうとすると、もう一人が押しとどめ、部屋から逃げる。
龍馬は、血まみれのひん死の状態で、隣の部屋までゆき、倒れる。

状況証拠

惨劇は一瞬のうちに行われた。しかし犯罪の現場には、無限の証拠が残されていると言われている。この暗殺の場面を忠実に見ていくと、そこに実は、犯人を推理する手がかりがたくさん残されている。もう一度、いくつかの場面を再検討することにする。
龍馬「ほたえな」のシーン。
龍馬は、ドタッという音を聞き、下の者がいつものようにふざけたと思い、土佐弁で「ほたえな」（騒ぐな！　の意）と言った。この音は、恐らく藤吉が斬られて倒れた音であろうが、龍馬も中岡も確認していない。
斬り込みのシーン。刺客のさけんだ「コナクソ！」という言葉は、伊予（現在の愛媛県）を中心とする四国の方言で、「コンチ

龍馬暗殺〈年表〉

天保6（1836）	11月15日、高知城下に、郷士坂本八平の次男として生まれる
嘉永6（1853）	3月、江戸に出府して、京橋桶町の北辰一刀流千葉定吉門下に入る　6月、ペリー来航
安政5（1858）	千葉定吉より、北辰一刀流皆伝の免許を受ける
安政7（1860）万延1	勝海舟らが、咸臨丸でアメリカへ渡る
文久1（1861）	土佐勤王党が結成され、龍馬はこれに加わった
文久2（1862）	3月24日、脱藩する　その後江戸へと向かう　10月ごろ、勝海舟と会見し、勝の開国論に感銘して門下生となる
文久3（1863）	脱藩罪を許され、航海術修業の藩命を受ける　4月、神戸海軍操練所設立のために奔走する　海軍操練所塾頭となる　藩の召喚令に従わず、再び脱藩
元治1（1864）	浪士たちの北海道開拓移住を計画する　8月、江戸から京へ上り、海舟の使者として西郷隆盛を訪問　第一回長州征伐　勝海舟、軍艦奉行を罷免される　龍馬は、江戸に潜行する
慶応1（1865）	薩摩藩の船で、大坂から鹿児島へ　長崎で亀山社中を作る　下関で、木戸準一郎と会見
慶応2（1866）	1月21日、薩長同盟なる　2日後寺田屋で龍馬は幕吏に襲われる　第二回長州征伐　龍馬はユニオン号に搭乗し、幕長戦争に参加した　8月、大政奉還を立案
慶応3（1867）	2月ごろ、長崎で後藤象二郎と会談　4月、脱藩を許され、土佐藩海援隊長となる　6月9日、「船中八策」できる　10月、上京して近江屋に宿をとる　新政府綱要八策を作る　大政奉還が行われる　11月15日、刺客に襲われ、龍馬死す（享年33歳）　12月、王政復古の大号令が下る

クショウ」の意である。
この後、龍馬、中岡の二人は、防戦一方のまま斬られる。そして……刺客が中岡のとどめを刺そうとする時、もう一人がとどめるシーン。ここにもう一つの手がかりがある。刺客は中岡のとどめを刺さず、「もういい、もういい」と言って刀を止め、部屋から立ち去る。

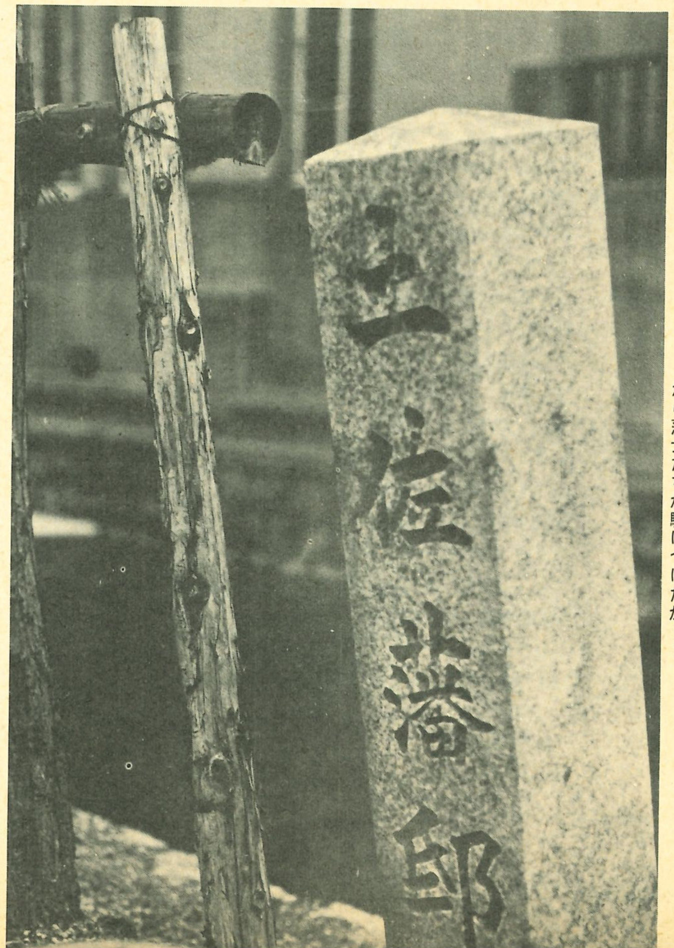
状況証拠が二つある。一つは「コナクソ」という四国の方言、そしてもう一つはなぜ「もういい、もういい」と言ったのかということである。それから、物的証拠として鞘と下駄が残されている。凶行後、知らせを聞いて土佐藩の谷干城（西南の役で熊本城を死守した）らが駆けつけ、中岡慎太郎が苦しい息のもとでこれらの話を聞き、犯人の探索に乗り出して行くのである。

推理Ⅰ　四つの証拠について

――どうも一瞬の凶行なので、完全犯罪の匂いすらしますが、まず物証について伺いたいのですが……。

三好　現場に残されていた鞘と下駄が犯人の遺留品ですが、これについては関係者の証言があったわけです。その関係者というのは、新選組を脱退してその当時薩摩藩邸にいた伊東甲子太郎とかそういった人たちの証言なんですが、ともかく新選組の連中が使ったものである。刀の鞘は、たぶん原田左之助のものである。それから下駄は、新選組の連中はよく先斗町のひょう亭へ行っていた。だから犯人は新選組にちがいない、そういうふうに言う人がいたわけです。

――鞘が残されているということは、どういうことでしょうか。



高瀬川の横にあった京都の土佐藩邸跡　龍馬が襲われたという知らせを聞いて、土佐藩邸から藩士たちが駆けつけたが……

三好　これは非常に微妙でして、犯人が龍馬を斬った時に、あわてて逃げて帰ったため落としたのか、あるいは何らかの目的があって落としていったのか、いろいろと解釈できるわけです。

――侍なら鞘を残していくというのは、ちょっと考えられませんね。

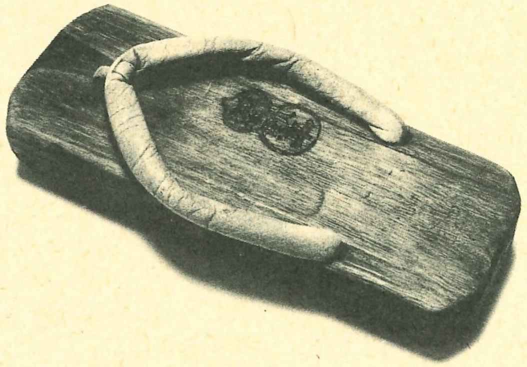
三好　まあそれはいろいろ考え方があるんです。天井も低く、非常に狭い室内では、鞘をさしたまま斬り込むのは邪魔になるから、一応腰から抜いておいたというふうにも考えられるんですね。

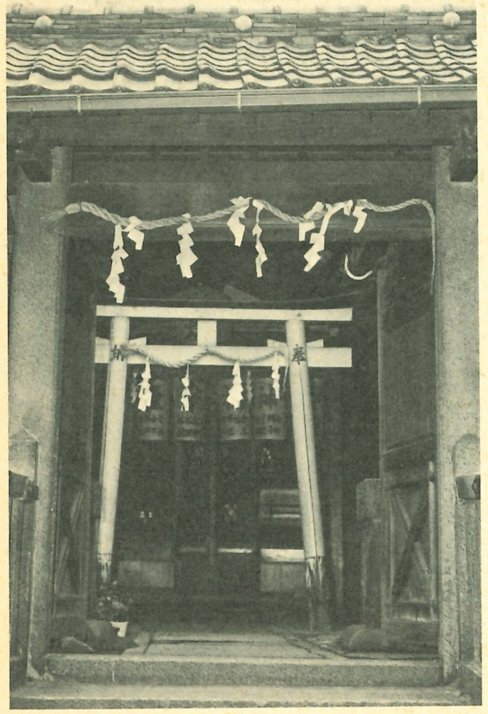
それでその当時はみんな新選組がやったと信じていまして、谷干城などは死ぬまで、あれは新選組であると言っているわけです。

ただ、最大の疑問は、そういういわばテロに非常に慣れた連中がこのような物的証拠を残していくであろうか、それからまた、「もういい、もういい」というのはじゅうぶんに余裕があるんですね。もうやめておけという、それくらい余裕のある人間が、刀の鞘を残せば自分の身元もばれてしまうとすぐわかるわけなんで、それを残していくこと自体おかしい。それからまた斬り込みについて、下駄を履いて斬り込むということは、これはどう考えてもおかしい。下駄と刀の鞘が現場に残っていたということ自体、龍馬を斬った犯人たちは、だれかを犯人らしく仕立て上げたかったのではないか、そのためにわざとこういうものを残していったのではないかと考えられる。

――だれかのでっち上げのように見せかけたということですね。

三好　ほんとうは、新選組ではないんだけれども、新選組はしょっちゅうそういうことをやっているから、そのようにしておけというふうにだれかが考えて新選組を利用したのではないか。そのように私などには考えられるんですね。


ひょう亭の下駄　新選組の連中は先斗町のひょう亭によく通っていたが……


土佐藩邸跡近くにある土佐稲荷

推理Ⅱ　見廻組説について

事件から六十年後の大正十五年に刊行された「坂本龍馬関係文書」に、一つの貴重な史料が掲載されている。明治三年、函館五稜郭で逮捕された元見廻組隊士、今井信郎の自白調書である（見廻組とは、新選組と同じような京都守護職の下の警備隊で、主として旗本の二、三男を集めていた）。

その自白調書によれば、「今井ら見廻組隊士七名は、慶応三年十一月十五日龍馬を仕とめ、他二人の者に斬りつけ」たと記されている。

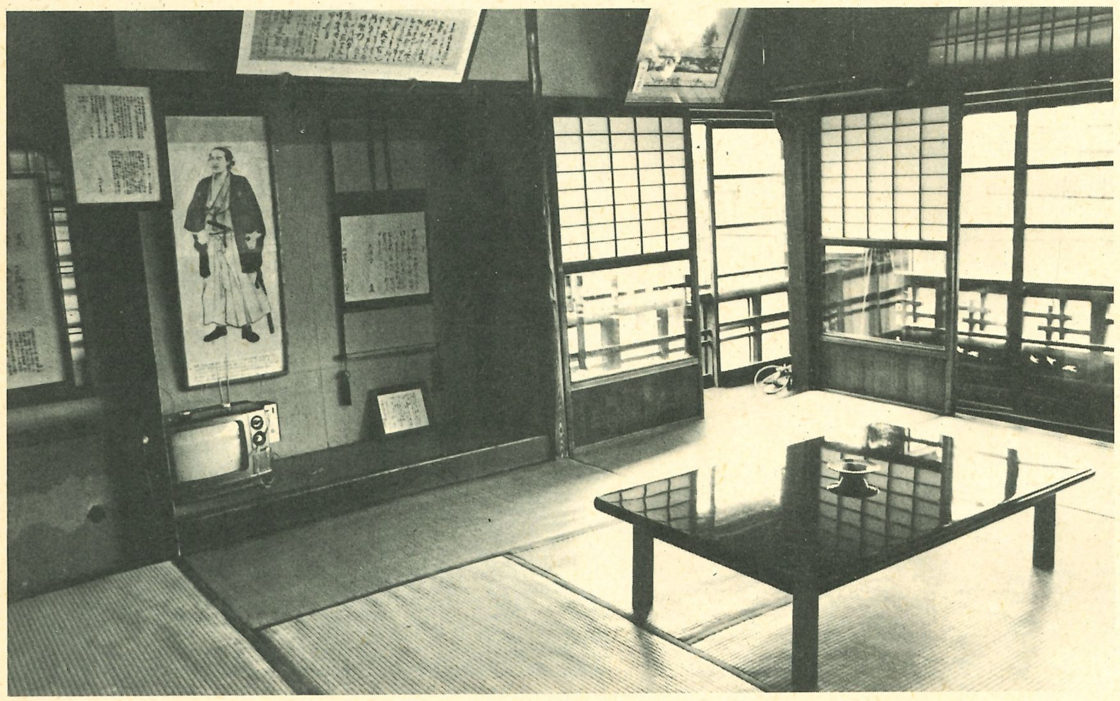
「……十月中頃、与頭(よがしら)佐々木唯三郎旅宿へ呼寄せ候に付、私並びに見廻組渡辺吉太郎、高橋安次郎、桂隼(はや)之助、土肥仲蔵、桜井大三郎六人罷越し候処、唯三郎申聞け候には、土州藩坂本龍馬不審の筋これあり、先年伏見に於いて捕縛の節、短筒を放ち、捕手のうち伏見奉行組同心二人打ち倒し、其機に乗じ逃去り候処、当節河原町三条下ル町土州邸向町屋に旅宿罷在り候に付、此度は取逃がさざる様捕縛致すべく、万一手に余り候へば討取り候様御差図これあるに付、一同召連れ出張致すべし。もっとも龍馬儀旅宿二階に罷在り、同宿の者もこれあり候由に付渡辺吉太郎、高橋安次郎、桂隼之助は二階へ踏みこみ、私並びに土肥仲蔵、桜井大三郎は台所辺に見張り居り、助力致し候者これあり候はば、差図に応じ相防ぐべき旨にて手筈相定め、同日昼八つ時頃一同龍馬旅宿へ立越し候節、桂隼之助儀は唯三郎より申付を受け、一足先へ立越し偽言を以つて在宅有無相探り候処、留守中の趣に付、一同東山



晩年の今井信郎（今井幸彦氏蔵）

辺逍遥し、同夜五ッ時ごろ再び罷越し、佐々木唯三郎先へ立入、松代藩とか認めこれある偽名の手札差出し、先生に面会相願ひたき旨申入れ候処、執次ぎのもの二階へ上り候跡より引続き、かねての手筈の通り渡辺吉太郎、高橋安次郎、桂隼之助付入り、佐々木唯三郎は二階上り口に罷在り、私並びに土肥仲蔵、桜井大三郎は其辺に見張り居り候処、奥の間に罷在り候家内の者騒ぎ立ち候に付取鎮め、右二階上り口へ立帰り候処、吉太郎、安次郎、隼之助下り来り、龍馬そのほか両人ばかり合宿の者これあり、手に余り候に付、龍馬は討ち留め、外二人の者切付け疵負はせ候へども、生死は見留めざる旨申聞け候につき、左候へば致し方これなきにつき引取り候様唯三郎差図に付、立ち出で銘々旅宿へ引取り、其後の仕末は一切存ぜず。勿論、龍馬儀旧幕にて如何様の不審これあるものにや、前件の通り新役の儀につきさらに承らず。且つ旧幕にては閣老等重職の命令を御差図と相唱へ候につき、その辺よりの差図か、または見廻組は京都守護職付属につき、松平肥後よりの差図にや、是れまた承知仕らず……」

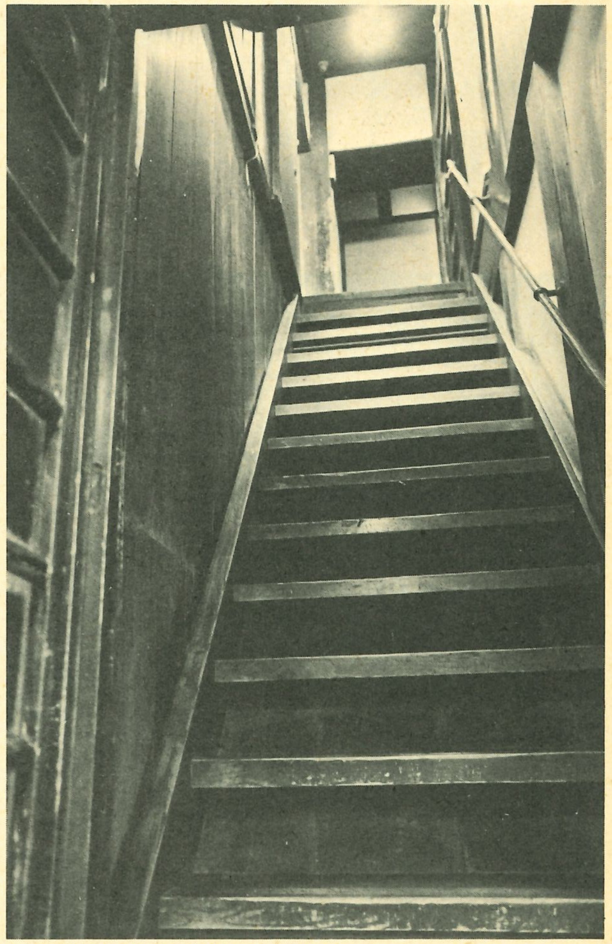
今井信郎の孫、今井幸彦氏によれば、「今井家の中だけで伝わってきている祖母、つまり信郎の妻の話なんですが、ちょうど十一月十五日の朝ですか、かねてから見廻組の中にいた渡辺吉太郎という男が訪ねて来て、二人で長々と何かごそごそ相談して出かけて行った。そしてその晩帰って来なかった。三日目にひょっこり帰って来た。帰って来て、何か黙って部屋の奥の方へ行き、うしろ向きになってごそごそしている。のぞいて見たら、親指のところがパックリあいていたというんですね。それを自分で包帯巻い



旅籠寺田屋には部屋いっぱいに龍馬関係の遺品などが飾られ、泊まり客に喜ばれている

たりしていたので、祖母がどうなされたと言うと、実はあの晩坂本龍馬というものを斬ったんだという話をした、というんです。」

三好　私の考えでは、今井信郎という人は確かに坂本龍馬を襲撃したことに関係はあったかも知れないが、しかし実際にどの程度に関係があったかということになると、ちょっと疑問である。その理由の一つは、今井という人の、現代風にいえば供述調書ですが、それによりますと、佐々木唯三郎から、坂本龍馬という男がもう一人の男とこれこれこういう所に潜んでいる、だから、きょうこれを上のほうからの命令で捕まえに行って、もし反抗すれば斬ってしまうと言われた、と言っている。結果的には確かにそのときに坂本龍馬と中岡慎太郎はいたわけなんですが、しかし中岡慎太郎がそこにいたのはまったく偶然でありまして、風邪をひいていた坂本龍馬ははじめは一人でいたわけです。ですから、今井が命令されたその時点で坂本龍馬がもう一人の男といっしょにいるから行って捕まえてこいというのは、事実に反しています。どうも結果から見て合わした供述調書ではないかというふうに私は感じるわけです。



おりょうは寺田屋を取り囲んだ幕吏にいち早く気づき、裸のままこの階段を駆け上がって龍馬に知らせた

推理Ⅲ　新選組・見廻組説の矛盾

京都市中の取締りをする新選組や見廻組にとって、龍馬は一種の指名手配の犯人であった。寺田屋事件のとき、龍馬はピストルで役人に傷を負わせている。つまり、幕府側にとってみれば、龍馬逮捕は当然の警察行為だったのである。

三好　暗殺の前の年の慶応二年の寺田屋事件というのは、妻のおりょうさんがちょうど風呂に入っていて、刺客が来たのに気づいてそのまま裸で知らせたという有名な事件ですが、そのとき幕府側は手傷を負わされている。いわば公務執行妨害の犯人として、新選組としては逮捕したいし、見廻組も当然の警察行為として追っかけているわけですね。ただまあ、やり方は警察行為でなくあくまでもテロですけど、一応名目は両方の組にあったわけです。

——警察行為であるとしますと、龍馬をやったのは、それはこれこれこういうことだと、言ってみれば大義名分ですね、そのためにやったんだからといって、その直後に発表してもよさそうなものですね。

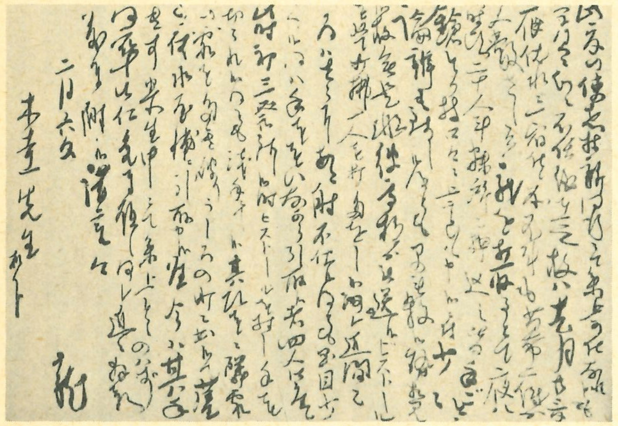
三好　そうなんです。それは別に恥ずべきことでも何でもない。むしろ手柄であるべきなんで、当然そういうことを言ってもいいわけなんですが、もちろん近藤勇は、そのことについて自分はしてないと言っておりますし、見廻組のほうの記録を見ても、そういうことを手柄顔に少しも言ってないわけです。だから、そこのところが、非常におかしいといえばおかしいわけですね。

——そこが新選組でも見廻組でもないという一つの重大な根拠にもなりますね。

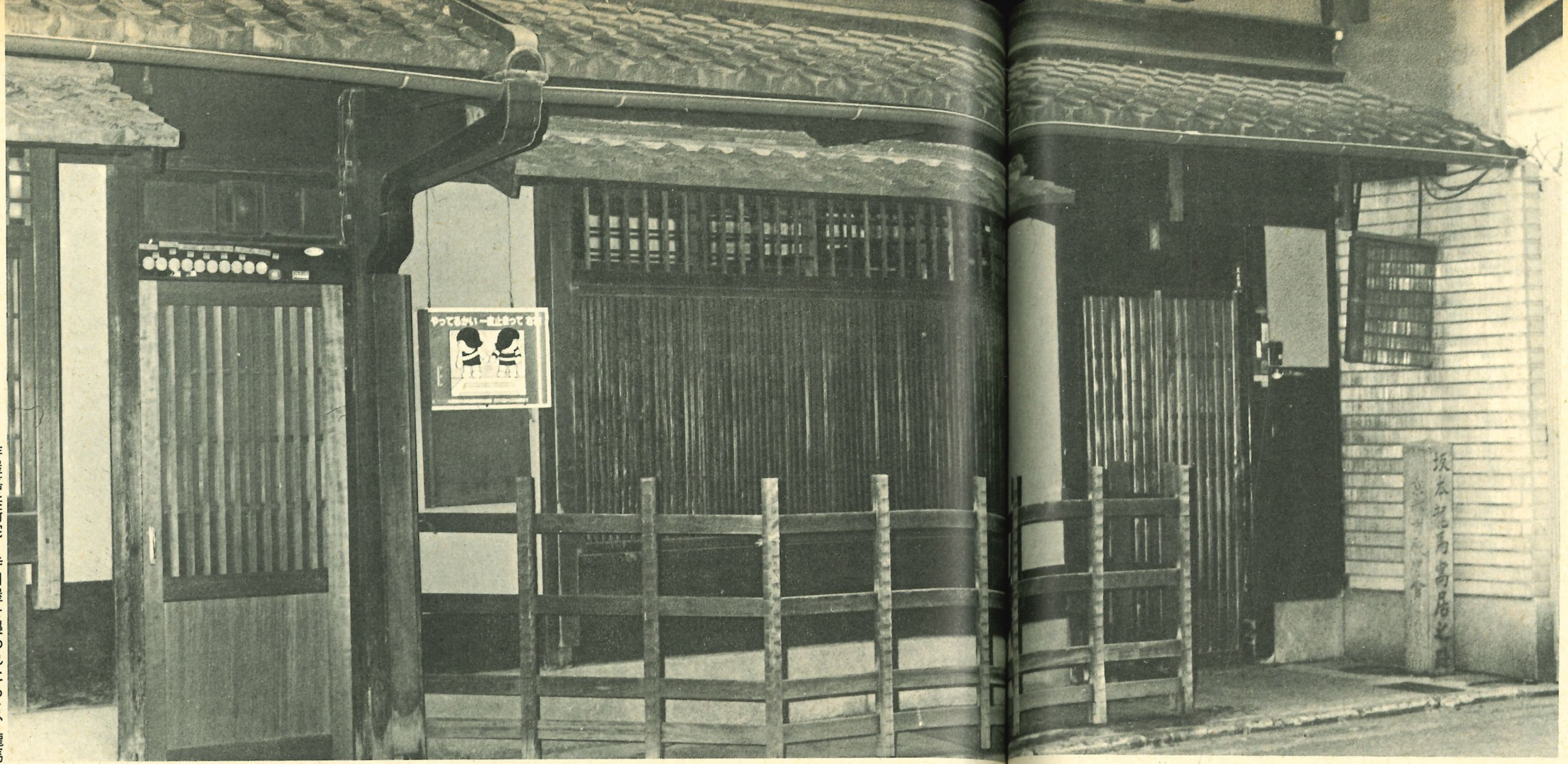
ところが、この暗殺事件のあとしばらくたって土佐藩の海援隊の連中が紀州の三浦休太郎という男を襲撃していますが、これはどういうことなんでしょうか。

三好　これは、その前に海援隊の船と紀州藩の船とが衝突した「いろは丸事件」というのがあったんです。これは明らかに紀州藩の方が航法上でまちがっていたわけなんで、坂本龍馬のために七万両の罰金を払わざるをえなくなる。それについて紀州藩は、龍馬を恨んでいた。それでこの三浦という紀州藩の京都の代表者が新選組の連中と仲がよいというので、どうも紀州藩が新選組を使って殺（や）ったんではないかという噂があったんですね。龍馬と親しかった陸奥宗光などもこれを信じておりまして、三浦が新選組の連中と飲んでいるところに斬り込んだりするわけです。

いずれにしろ、龍馬を斬ったのは、龍馬と対立する側、つまり、幕府か紀州か、そういうふうに考えるのが一般的であったし、ふつうの人もそう信じていた。ですから、見廻組の一人が、自分がやったんだと



龍馬の木戸孝允宛書簡　寺田屋で幕吏に襲われたときの状況を、ピストルをもって打ち払い、隣家を伝って薩摩藩の伏見屋敷に逃げ込んだと書いてある



酢屋嘉兵衛宅　寺田屋を襲われたあと、龍馬はここをアジトにしていた

供述調書を残したことで一件落着と、ふつうの人は考えてしまうわけですね。また歴史的な定説も一応そうなんですが、しかし考えれば矛盾はたくさんある。それをもう一度、百年たっても考える必要はあるんではないかと思います。

推理Ⅳ　なぜアジトが見つかったか

龍馬は、慶応三年の秋、長崎、土佐、福井と縦横に日本中を駆けまわり、十一月五日、京都に戻っていた。幕府側の監視の目をのがれてアジトに潜伏、活動を続けていた。しかし以前からアジトとなっていた酢屋嘉兵衛の家も危険になってきたというので、龍馬が河原町三条の近江屋へ移ってきたのは、事件のわずか三日前のことであった。

三好　またここに隠れていること、近江屋方にいることを知っているのは、ほんとうに親しいごくわずかな人たちだけでした。新選組も見廻組もそういう警察活動をやっていたんですが、なかなかつかみずらかった。そういう状況だったことを一つご記憶願いたいわけですね。

―　もう一つの疑問は、犯人が近江屋に入って来た時に藤吉が下へおりて行った、そこで彼らの一人が十津川郷士だと言って名刺を出したということなんですが、この名刺が残ってないんですね。

三好　そうです、これは残っておりません。下駄や鞘を残して、名刺を回収して帰ったのはなぜか、それを考える必要があります。それから今井という人の供述調書では、十津川ではなくて、信州真田藩のものであると自分は名乗ったということを言ってますね。また中岡慎太郎は、入ってきた犯人は二人だったと言ってるんですが、今井という人の供述では、七人で行ったが、自分を含めて三人は階下におり、佐々木唯三郎は階段の中ごろにいて、上へ行って斬ったのは三人であるということを言ってますね。斬られたほうは二人だと言い、斬ったほうは三人だと言ってるわけですね。まあその辺もこの供述調書の信憑性を疑ってもいいんではないかと思いますが。

推理Ⅴ　「もういい、もういい」の謎

―　それからとどめを刺さず「もういい」と言ったことですね。やはり今おっしゃるように龍馬の傷を見て、これでやったんだ、と。

三好　「もういい」というのは、中岡慎太郎になおも斬りつけようとする共犯者に対して、もういいと言っているわけですね。ですから、これは明らかに龍馬を狙っているわけなんで、犯人の方は、あくまでも龍馬一人さえ斬ってしまえばいい。中岡の方は問題にしていないのです。その龍馬はもう致命傷を受けている。それは斬った手ごたえからも、とどめを刺さなくてもじゅうぶんだったわけですね。

―　ただ、行燈のあかりというのは、私たちが想像するよりはるかに……。

三好　暗いですからね。

―　そうすると、踏み込んだ、そこに二人いた。どっちが龍馬であるか、中岡であるか……。

三好　それは非常にわかりにくいはずなんですね。

―　龍馬は一部のものには顔を知られておりますけれども。

三好　見廻組の連中も、それから新選組の連中も面と向かって坂本龍馬に会ったことはないわけなんで、おそらく知らないはずなんです。にもかかわらずこの犯人は知っていて、龍馬のほうを主にして斬

っているわけですね。だから、これはやはり龍馬というものを知っていた。こういう人間である、あるいはこういう顔つきであるということは、犯人は前もって知っていたにちがいないというふうに思いますね。

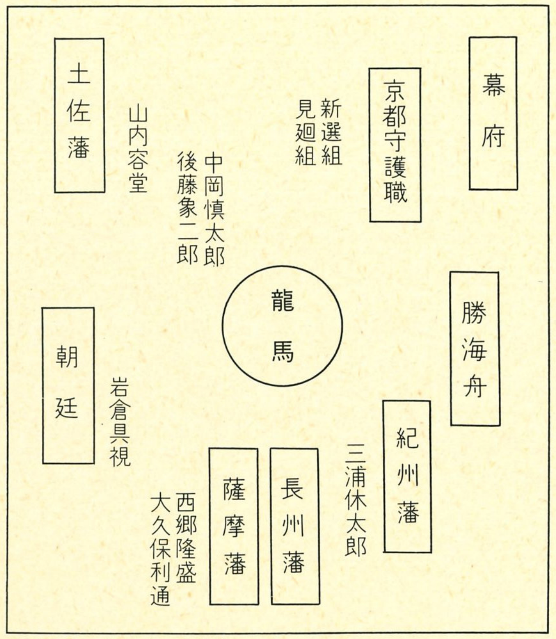
推理Ⅵ　ほかに龍馬を狙うものは……？

確実にいえることが一つある。それはこの犯行が犯人の衝動的殺意によるものではないということである。何かしら計画があり、その計画は、数名の犯人自身によるものか、あるいはその背後に黒幕がいてそれが糸を引いたものなのか。

当時の龍馬をかこむ政治状況をみると、一か月前に、龍馬らが建言した大政奉還が行われた。これは、龍馬から後藤象二郎へ、そして藩主山内容堂に伝えられた。しかし土佐藩内での龍馬の立場は、中岡らと必ずしも一致していない。中岡は武力討幕派であり、この凶行の直前、二人は激論をたたかわしていたともいわれる。また、後藤象二郎とも必ずしもよくなかった。次に、かつて龍馬が仲介した薩長二藩には、大政奉還の同じ日、討幕の密勅が出ていた。とすると龍馬の意見と西郷、大久保らとの意見は必ずしも合わない。そして龍馬の師匠勝海舟のいる幕府は、大政奉還が、結局、幕府の息の根をとめたとして、当然龍馬を狙う。その方法は、京都守護職配下の見廻組、新選組を使う。紀州藩も明光丸事件で龍馬に恨みを持つ。つまり龍馬は、あらゆるところから狙われていたと言えるのである。

三好　龍馬は幕府方から見れば指名手配の犯人だけれども、と同時に薩・長・土の、いわば朝廷方の藩、とくに薩摩の西郷、大久保からみると、龍馬は非常にけむたい存在であったと。その理由の一つは、


土佐藩主・山内容堂



龍馬をかこむ当時の政治状況

霊山に眠る龍馬

東山三十六峰の一峰にあたる霊山(りょうぜん)に、五百四十九柱の志士を葬った墓所がある。世に言う勤王の志士である。

志士の多くは、青春の夢を抱いて脱藩し東奔西走したいわば草奔の志士であるが、ほとんどが維新をみることができなかった。幸運にも生き残って元勲になった連中は別として、無名の志士にすれば霊山の佳域から、王城の地を一望して眠れることは、この上ない幸わせであろう。

この霊山墓地の中央山腹に、龍馬、中岡慎太郎、下僕の藤吉が仲良く肩を並べて眠っている。

慶応三年（一八六七）十一月十五日、京都河原町、醤油商近江屋の二階で何者かに龍馬らが暗殺された。龍馬ちょうど三十三歳の誕生日であった。当時は〝新選組の仕業だ〟と噂が市中に流れた。それも無理はない。三年前の元治元年（一八六四）六月五日、三条小橋畔池田屋で密会中、同郷の尊攘派志士北添佶摩、望月亀弥太らが新選組の手によって血祭りにあげられた記憶も新しい。

葬儀は、三日後の十八日に執行された。午後二時に柩(ひつぎ)（樽棺）は近江屋を出発、先頭に龍馬、慎太郎、下僕の藤吉の順。薩長連合で共に尽力した長州の桂小五郎（のち木戸孝允）が涙をふるって、高知藩坂本龍馬墓、高知藩中岡慎太郎墓と揮毫した墓標を海援隊士が持ち、葬列は土佐藩邸、土佐稲荷と龍馬思い出の地を過ぎて霊山に着いたときには、日はすでに西に歿していた。

葬儀には、海援隊、陸援隊、土佐藩士はじめ各藩の同志が参列したが、いつ新選組が襲撃するかもしれないと、ある志士は懐中にピストルを忍ばせ、またある志士は抜刀していた。この葬儀の裏方は、龍馬が斬られる寸前まで雑談していた土佐藩監察吏岡本健三郎であり、龍馬の使いでシャモを買いに走った峰吉であった。

その峰吉の懐古談に「葬儀当日は、今にも雪が降りそうな肌寒い日でした。祭典が始まるころには、真黒な闇の中で神官の祝詞がもの悲しく聞えたのが印象的であった」と語り伝えている。

葬儀の同刻に、新選組局長近藤勇は新選組から離脱した高台寺党主伊東甲子太郎を木津屋橋の近藤妾宅に呼び出し泥酔させたうえ、帰路を隊士たちに闇討ちさせた、油小路事件を展開していた。維新前夜の京の町は、勤王派、佐幕派のテロリストたちがみずからの政治的主導権を握るために鎬を削りあっていた。

（木村幸比古）

薩長は武力で幕府を倒そうとしているんですが、龍馬の方はそんなことをする必要がない。むしろ徳川慶喜はなかなか立派な人間であるから生かした方がいいんだと、いわばハト派だったわけですね。ですから、それはタカ派の方からみますと、どうも坂本龍馬みたいなうるさい男がいてはけむたいなあ、という感じがあったことは否定できないんで、坂本龍馬を狙うのは必ずしも幕府だけではなくて、薩長が狙ってておかしくない。ですから、以前から薩摩が殺ったんではないかというふうな説もありますし、あるいは長州じゃないかという説もありましてね、決してこの暗殺は新選組、見廻組とは限らない……つまり、そういう非常に微妙な政治的状況に、龍馬自身は身をさらしていたということがいえるわけですね。

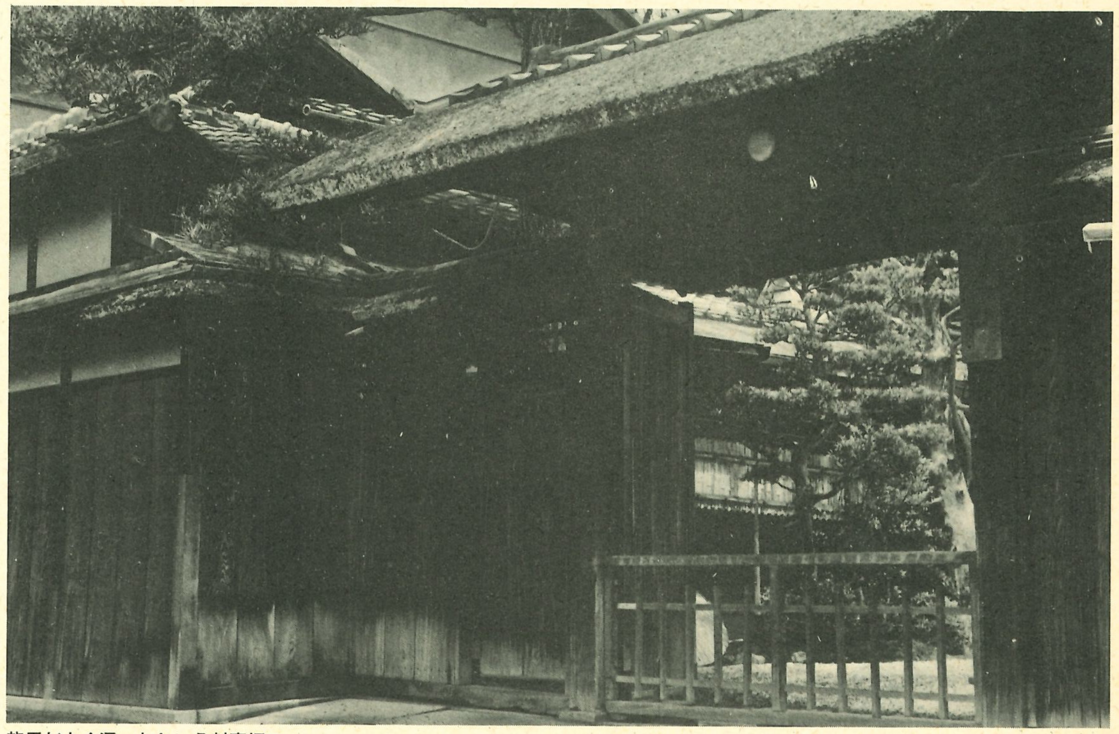
―― 龍馬はそのことを感じていたでしょうか。

三好　龍馬は、天性ほがらかで楽天的な人ですけれども、自分がしょっちゅう狙われているということは知っていたでしょう。しかし死ぬ三日ぐらい前に出した手紙なんかも最近発見されまして、その中で刀のことをしゃべったり、非常に楽天的な、いかにも龍馬らしい文章を書いて、自分の死というものは、これは十一月十五日というのは彼の三十三歳の誕生日なんですが、そこまで迫っているということはまったく考えていなかったようですね。

そして真犯人はだれか……？

―― さて、最後に、三好説はどういうものでしょうか。

三好　私はまず根本的には、今井信郎という人の供述調書は証拠能力がない、信憑性がない。その一つの理由としては、今井という人は、坂本龍馬を斬ったというかどで明治三年に佐々木高行から禁錮五



龍馬がよく通ったという料亭坂口



土佐藩の谷干城は、のちに西南の役で熊本鎮台司令官として熊本城を死守し、また政界に入って活躍した

年という判決を受けますが、実際には三年くらいで自由の身になるわけなんです。問題はこの佐々木高行にあります。彼は事件当時土佐藩の大監察で、もちろん坂本龍馬のことは知っているし、それから坂本龍馬の関係者、谷干城とか田中光顕といった人たちが、いったい斬ったのはだれなんだと言って必死になって犯人をつきとめようとしていたということも知っているわけなんです。谷干城は、その後明治二十年、三十年になっても、二人を斬ったのはだれであろうかということを事あるたびに言っているんですが、佐々木高行は自分が判決を下したにもかかわらず、龍馬を斬った犯人というのはとっくに出ているよ、供述調書もあるよということを谷や田中に一言も言わないわけですね。つまり彼自身が下した判決、今井の供述調書をそっくり認めた判決そのものは政治的な判決、俗にいえば、でっち上げの判決だったことを自覚していたんだと思います。そう解釈する以外に、谷や田中にあえて教えなかった理由の説明がつきません。

―― 何となく一つの結論をだしておけば、みんなが納得するだろうなという……。

三好　ええ、そういうことなんですね。今井自身が、たんなる見張りの役で、自分が斬ったとは言わなかった。そして、つじつまの合わない供述も、やはりそれが止むをえない事情によったのであろうとみていいわけですね。

―― そうしますと、あと残されているのは、例の「コナクソ」という四国の方言ですね。これからたどっていくと、行くところは土佐しかない。

三好　そうですね。これは中岡慎太郎が苦しい息の下から、まさか四国の者ではなかろうなというふうなことを言っているわけです。

「コナクソ」という言葉を彼は聞いているんですが、まさか四国の連中ではないだろうな、と。この場合、龍馬やおれを斬ったのは、まさか土佐藩の連中ではないだろうなと、そういう意味も入っているわけですね。というのは、龍馬も慎太郎も土佐勤王党の流れを汲んでいるわけで、これはその当時の土佐の主流派である後藤象二郎と非常に対立していた派です。事件の前には、坂本龍馬は後藤象二郎と親しくなりまして、「船中八策」という、実は坂本龍馬のアイデアで、後藤象二郎は大政奉還策を将軍家に建白するわけです。

「船中八策」

一　天下の政権を朝廷に奉還せしめ、政令宜しく朝廷より出づべき事
一　上下議政局を設け、議員を置き、万機を参賛せしめ、万機宜しく公議に決すべき事
一　有材の公卿諸侯及び天下の人材を顧問に備へ、官爵を賜ひ、宜しく従来有名無実の官を除くべき事
一　外国の交際広く公議に採り、新に至当の規約を立つべき事
一　古来の律令を折衷し、新に無窮の大典を撰定すべき事
一　海軍宜しく拡張すべき事
一　御親兵を置き、帝都を守衛せしむべき事
一　金銀物価宜しく外国と平均の法を設くべき事

以上八策は方今天下の勢を察し之を宇内万国に徴するに、之を捨て他に済時の急務あるなし。苟くも此数策を断行せば、皇国を挽回し、国勢を拡張し、万国と並立するもまた敢て難しとせず。伏て願くは公明正大の道理に基づき、一大英断を以て天下と更始一新せん。


大政奉還策を進言した功により、山内容堂からビッグ・ボーナスをもらった後藤象二郎

しかし、それを知っている人というのはほとんどいなかった。後藤象二郎といっしょに徳川慶喜に拝謁した土佐藩の重役で福岡孝悌という人がいますが、この福岡なんかも、大政奉還というのは、要するに後藤の考え出した妙案であるというふうに死ぬまで信じ込んでいるわけですね。しかし実際は、この大政奉還策を考え出して、こういうことでやったらいいんじゃないか、そうすれば、山内容堂が言っているところの公武合体論にもいいし、ひとつ言ってみたらどうかと、そういうふうに知恵を授けたプラン・メーカーは龍馬だったわけです。で、後藤象二郎としては、それは非常にうまいアイデアだ、じゃ、そういうことにしようというわけで、国もとへ帰って容堂に建白し、容堂もそれに賛成して——もちろん容堂もそれは後藤の案だと思っているわけですが、それで京都へ行って建白する。その大政奉還策を進言した功労によって後藤象二郎は百五十石から一躍千五百石の褒美、ビッグ・ボーナスを山内容堂からもらって天下の名士になるわけですね。

そういう政治的状況があった。

人が殺された場合、いちばん得をするものはだれか、これは現代における捜査でもそうですが、犯人は被害者を葬ることによってなんらかの利益があるという面があります。現代なら金を奪うとか、あるいは相手の地位をとる。この場合、最大の利益の享受者というのは、後藤象二郎であったというふうに私は見ているわけなんです。

後藤象二郎という人は、本来は坂本龍馬と仇敵、ライバル関係にあった。後藤象二郎の先生である吉田東洋という人、これを暗殺させたのは坂本龍馬の親友であった武市半平太ですね。つまり武市の子分たちが斬っているわけなんで、そういう点からいきますと、後藤象二郎というのは自分の師匠を斬った一派の坂本龍馬に対して決していい感情

四十年祭と展覧会

明治三十九年十一月十五日、東山霊山招魂社境内坂本・中岡両墓前で四十年祭が執行され、この弔祭発起人は、男爵小畑美稲、小松盛政、萩原汎愛らであった。

その際に発行された『坂本中岡両君四十年祭典始末』という小冊子を繙くと、祭典と同時に展覧会が盛大に開催されている。

午前十時祭場に参列者坂本留子ら約百名が参集、第一号砲で神職整服（祭員十二名楽人五名）、第二号砲で参列者着座、第三号砲で清祓式招魂式、神饌は二十台、主なものは、和稲、荒稲、御酒、鏡餅、海魚、川魚、山鳥、水鳥、海藻、野菜、時果、作果、塩水と真賢木壱対であった。

幣帛として明治天皇より祭粢料金百円下賜。その御達書には「贈正四位坂本龍馬同中岡慎太郎儀夙ニ力ヲ王事ニ尽シ遂ニ国難ニ殉シ候処今般四十年祭執行之趣彼聞食　天皇　皇后両陛下ヨリ祭粢料トシテ各金五拾円下賜候条可然取計有之度此段申入候也明治三十九年十一月
宮内大臣　子爵田中光顕」

この日の祭粢料だけでも合計七百六拾五円八拾六銭とばく大な金額であった。また田中光顕は志士時代、中岡慎太郎の陸援隊士で龍馬が襲われたと峰吉の知らせを聞くや、土佐藩邸控屋敷から近江屋にかけつけたが、龍馬は絶命、慎太郎は田中から贈られた信国の短刀で応戦したが瀕死の重体であった。

次に祭主梨木神社宮司野村敷明が祝詞奏上、祭文は大山巌、野村靖、南部甕男、谷干城とかつての同志で最高の顔ぶれ。祭典が午後一時に終了というから三時間の大祭典であった。特別記念講演者谷干城は、講演の中で今井信郎を売名の徒と今井刺客説を熱弁している。

祭典と同時に展覧会が招魂社参道畔の翠紅館で開催され、遺品、遺墨六十七点を展示、この展覧が龍馬、慎太郎に関する最初の展示であった。主な展示品をあげると

和歌短冊　こころから　男爵野村友太郎
拳銃　坂本所持ノモノ　同
北辰一刀流伝書　津野静雄
血痕ノ附着セシ掛物　坂本弥太郎
坂本佩刀　銘吉行　坂本直衛
右鞘　遭難ノ時賊ノ斬付ケタル刀痕アリ

どれをとっても龍馬を偲ぶにふさわしい選品ばかりである。

この年一月十五日、龍馬の妻お龍は横須賀市外深田観念寺裏長屋で六十六歳の生涯をおえている。今でも龍馬の墓前には香華が絶えない。

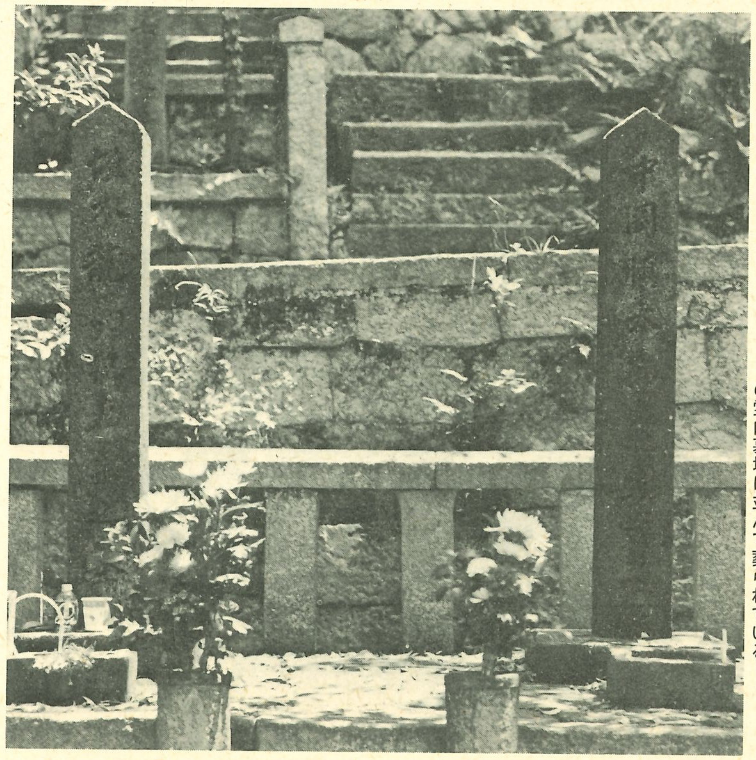
（木村幸比古）

は持っていなかった。しかし、龍馬の持っている雄大な構想力とか、あるいは薩長に対する顔とか、そういうものはできるだけ利用する、まあそういう状況だったわけですね。

――その場合、下手人は後藤象二郎自身ではありませんね。

三好　そうです。後藤象二郎は、この事件の当時は土佐の方へ帰っているわけです。要するに大政奉還策のことについて土佐に帰っている。いわばアリバイですね、それははっきりある。しかしこういう政治的暗殺というのは、直接人を斬る犯人は、いわばこれは凶器みたいなもので、斬るほうについてはまったくそういう政治的な認識だとか、あるいは歴史の流れに対する考えとか、そういうものはなくて、おまえやってこいと言われて行く。これはピストルの弾とか、あるいは刀とか、そういうものとまったく同じ役目しかない。それは政治的暗殺というものの一つの特徴なんですが、龍馬の場合もこれは政治的暗殺で、テロによって何らかの利益がある。その点では後藤象二郎というのは最も利益があったんじゃないか。土佐の人は、龍馬が死んでから龍馬についていろいろなことを言うわけです。板垣退助だとかそういった人たちも話すんですが、後藤だけは、ほとんど死ぬまで坂本龍馬のサの字も口にしないわけですね。自分に対して大政奉還策を授けた龍馬について一言もしゃべらないというのは、おかしい話じゃないか。

ですから、後藤象二郎が直接斬ったんじゃないにしても、後藤が自分の手のものを、ないしは後藤というのは非常に幕府の方にも顔が利きますし、あるいは近藤とか見廻組を預かっている会津藩の連中とか、そういったところにも非常に顔が利きますから、お前たちが捜している龍馬というのはここにいるよと一言言ってやればいいわけですね。



近江屋で襲われた龍馬と中岡慎太郎は高台寺の霊山墓地に並んで葬られている

まあそれで、自分は非常に安全なところにいればいい。

――下手人は金かなんかで、全然関係ないものを雇ってもいいわけですね。

三好　と同時に、やはり見廻組や新選組ならば、あんな間抜けな証拠品を残していくはずがない。これは百年前であろうと今であろうと変わりがないというふうに私は思っております。もちろんこれは私の推理ですけれども、犯人は意外なところに隠れていたんじゃないか。

龍馬の死は、平和革命を狙いとした公武合体派に大きな痛手を与えた。王政復古に武力クーデターが行われたのは、坂本龍馬暗殺後わずか二十五日後のことである。龍馬暗殺、だれが、なぜ、その真実はいまだに歴史の闇のなかに謎のまま残されている。



太平洋のはるか彼方を眺めて立つ、高知・桂浜の龍馬

坂本龍馬暗殺容疑者推理表

容疑者	証拠：物証	証拠：物証	証拠：その他の証拠	証拠：自白	証拠：伝聞	推定材料	推定材料	推定材料	推定材料
新選組	瓢亭の下駄（前日新選組が瓢亭で借りた）	蠟鞘（原田左之助のものといわれる）	〝こなくそ〟という刺客のかけ声と原田の生国伊予	大石鍬次郎 近藤勇	「新選組が狙っている」と中岡坂本に忠告した伊東甲子太郎の言葉	原田左之助は一流の剣客	時勢から見て倒幕派の巨頭を狙う立場	寺田屋で射殺された同心の復讐	制札事件で新選組が捕えた宮川助五郎を放免する時機、これを利用して、中岡・坂本の会合をつかむことができる
見廻組	なし	なし	方言と刺客の生国は合わない	今井信郎	新選組大石鍬次郎の「近藤が凶変後見廻組のしわざだ」といった	天井の低い所で斬ったのは小太刀の名手（今井）	同じ	同じ	同様に宮川放免によって、坂本らの会合を察知したかも知れない
薩摩藩	なし	なし	〃	なし	なし	龍馬が武力討幕の障害になった（船山説）			
後藤象二郎	なし	なし	方言と生国はあう。桑名藩士などを使ったとすると合わない	なし	なし	後藤は権謀家であった（三好説）	龍馬の死でもうけたのは後藤（三好説）	龍馬はもともと仇敵であった（三好説）	龍馬の船中八策を自分の案のように盗んだ（三好説）
紀州藩	なし	なし	なし	なし	なし		いろは丸事件で龍馬に恥かかされた復讐		凶変後新選組とともに土佐浪士の復讐の準備を怠らなかった
伊東甲子太郎一派	なし。但しこれを知れる立場にあった。盗み出すことも他の者よりは容易	前項と同様	原田の生国を知っているから、使って偽装することもできる	なし	なし	中岡（坂本）の居所を知っていた	坂本・中岡に冷たくあしらわれた		制札事件で、土佐十津川浪士らを斬殺し、かつ宮川を捕えたのも伊東一派池田屋で藤堂平助も活躍している。その復讐を恐れ、新選組に偽装して殺った

森川哲郎「龍馬暗殺推理」より

大衆の中の龍馬像

武蔵野次郎

幕末維新の歴史上に登場した史上人物たちに対する一般庶民大衆の抱く親愛感には、とくに根強いものがあるようだ。中でも、坂本龍馬には万人好みの魅力が感じられる。勤王の志士として名を今にのこす多数の英傑の中で、どうしても龍馬だけが、そんなに好まれるのだろうかと考えてみると、やはり、そこにはそれに値するだけの理由が見い出せるのである。

史上実在人物としての坂本龍馬や、その他の数多くの勤王の志士たち、あるいはそれに敵対した佐幕派、たとえば新選組の近藤勇などの連中が、史実として後世までのこしている事実がどんなものであっても、フィクション的要素を多分に加えて創作された虚構の物語世界の場で、颯爽として活躍する人物としての印象を与えつづけることによって、さらに一般庶民大衆のアイドル的人間像に変化してきているということも、否めないところと思われる。



阪東妻三郎の「坂本龍馬」
（佐藤重臣『阪妻の世界』より）

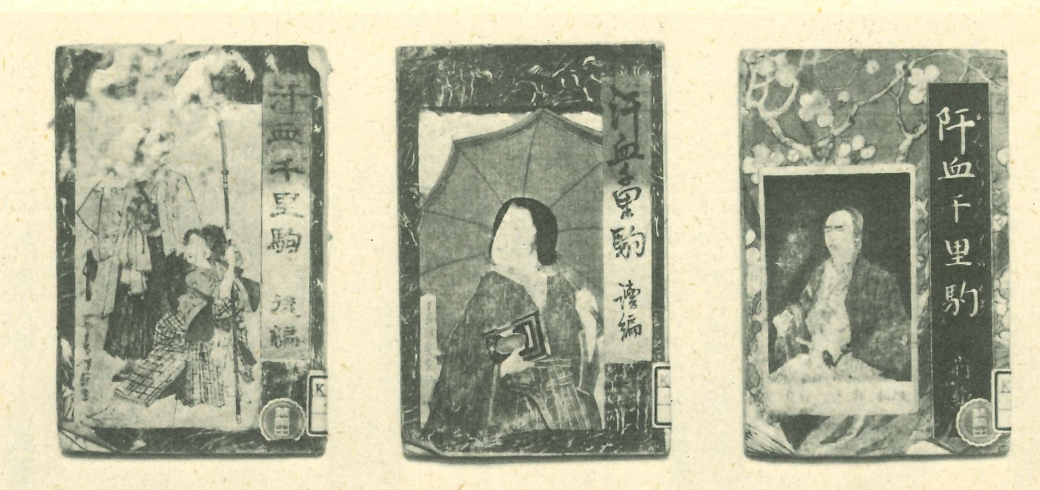
ここに、一枚の映画スチールがある。

それは、阪東妻三郎扮する坂本龍馬が、突如襲ってきた刺客のために額を切られ、顔面も手も流れる血に汚れながら、長刀を抜こうとしながら斃れる寸前の、ご存じ龍馬暗殺の場面のスチールである。この映画（もちろん、無声映画の活動写真時代とよばれていたころ）は昭和三年（一九二八）製作の阪妻プロ作品「坂本龍馬」である（監督・安田憲邦）。主演の龍馬に阪東妻三郎、中岡慎太郎に春路謙作、佐々木只（唯）三郎に春日清、近藤勇に中村政太郎、お龍に森静子といった当時のスター連が出演している時代劇である。薩長連合に働いた龍馬が、次には大政奉還を徳川将軍に決意させたという、志士としての活躍ぶりには華々しいものがあるが、それだけ佐幕派の近藤勇や佐々木只三郎に身辺をつけ狙われることになる。そしてついに慶応三年（一八六七）十一月十五日、京河原町三条下ル近江屋の二階で、刺客の襲撃に斃れるにいたるというのが、この映画のプロット（筋）である。龍馬を切ったのが佐々木只三郎に設定されているところなども、なかなか興味深い。活動写真全盛期の時代から、阪妻の坂本龍馬は適役であり、阪妻扮する龍馬のイメージが、大衆の脳裏に鮮明に刻みつけられたことも否定できない。

戦時下の昭和十七年（一九四二）に製作封切された大映映画「維新の曲」（監督・牛原虚彦）という幕末動乱を描く時代劇大作でも、阪妻は坂本龍馬を演じているのだ。阪妻という最も人気の高かった時代劇俳優がたびたび龍馬を演じたということによって、龍馬の物語とその人物像（虚像としての）は、いよいよ深く大衆の間に浸透していったといえるのではなかろうか。

戦後の時代においても、映画・テレビによる映像文化によって、坂本龍馬は大衆の間に親しめる存在になっていることには変わりはない。勤王志士としてはナンバーワン的実績を持っていながら、三十三歳という若さでこの世を去った龍馬の生涯に、まず大衆は、何よりのロマンを感得させられるのである。戦後に登場した映像の坂本龍馬には、「幕末」（昭和四十五年・監督伊藤大輔）における萬屋錦之介の龍馬、「龍馬暗殺」（昭和四十九年・監督黒木和雄）にお

坂崎紫瀾『汗血千里駒』(高知県立図書館蔵)



ける原田芳雄の龍馬などが目につく。また、NHKテレビ大河ドラマに登場した「竜馬がゆく」(原作司馬遼太郎による)では、北大路欣也が龍馬を演じていた。同じくNHKテレビ大河ドラマ「花神」(原作司馬遼太郎による)の中でも、夏木勲の扮する龍馬が暗殺に斃れるハイライト場面が採り入れられていたのである。

こういうふうに映像文化に現われたかずかずの虚像による坂本龍馬をふりかえって考察してくると、大衆の間に深く浸透していった親愛感のもてる龍馬像というものの由来も理解できるようだ。大正から昭和初期にかけての、所謂、活動写真時代におけるチャンバラを主体とする時代劇では、明瞭に勤王志士側を善玉に、佐幕派を悪玉という具合に、その色分けにも単純明快なものがあったことも、龍馬像に対して好感を抱く所以になっていると思われる。つまり龍馬は善であり、新選組や見廻組は悪であったのだ。こうした明快な色分けによって、京洛の巷を舞台にくりひろげられる剣戟場面の爽快さに一般庶民は拍手をおくったのである。

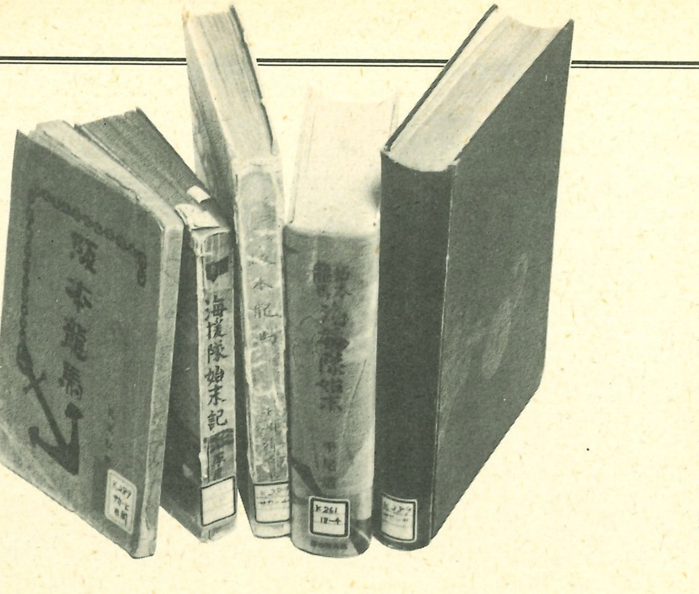
しかも、そういう愛すべき志士である善玉の代表坂本龍馬が暗殺に斃れるのだから、いっそう愛惜感は高まっていったというのも大いに首肯される。戦前のそういう単純明快さとはこと変わって、戦後における龍馬像(映像に現われる)に対する解釈は、より複雑なものになっていることはいうまでもないが、根本の龍馬に対する大衆の親愛感というものは、一貫して変わっていないと思われる。

小説として描き出された坂本龍馬像というものも、大衆に浸透していった度合いの深さでは、映像文化に劣らない強烈なものがある。

坂本龍馬を主人公に描く実録小説の最初の作品としてよく知られているものに、明治十六年(一八八三)に土陽新聞に連載された『汗血千里駒』(作者坂崎紫瀾)がある。自由民権運動家として当時有名であった作者の筆になる作品だけに、開巻から反封建的な思想に裏打ちされた革新的な龍馬の伝記になっている。この小説を筆頭に数多くの龍馬小説・戯曲が書かれているわけだが、戦前の作品では、織田作之助の好短篇『螢』に登場する龍馬に印象深いものがある。この短篇は、昭和十九年(一九四四)に書かれている鬼才織田作之助の時代物というところにも興味をそそられるものがある。伏見寺田屋の女将登勢を主人公にえがきだされるが、龍馬の出し方などにも心憎いくらいの巧みさがある。「やがてそんな登勢を見込んで、この男を匿ってくれと、薩摩屋敷から頼まれたのは坂本龍馬だった」という描写で龍馬が顔を出すのが、すでに後半部だが、それからラストにかけて、龍馬の寺田屋における遭難も、おりょうとの結婚も描写されているという、まことに要領よくまとまっている好短篇だ。この『螢』は映画化や劇化されていることでもよく知られている織田作之助作品の佳篇である。

明治百年を記念して社会的行事も何かと目立っていた三十年代に、タイミングよく登場してきた龍馬の生涯をテーマとする長篇が、司馬遼

太郎の『竜馬がゆく』である。この作品は昭和三十七年(一九六二)六月から、四十一年(一九六六)五月にかけて、「サンケイ新聞」夕刊に千三百三十五回にわたって連載された大作であった(連載時の挿絵は故岩田専太郎)ことも、戦後の新聞小説としては注目されるものがあった。作者の司馬遼太郎は、明治以来の膨大な量に上る龍馬関係の史料をフルに活用しながら、そのうえに、司馬史観と世に称される独自の明快な史的解釈を十二分にほどこしながら、龍馬の物語を明治百年の行事にわく戦後の社会と読者の前に提供し成功を収めたことも、まだ記憶に新しいところだ。この長篇はまた、一年間にわたるNHK大河ドラマとして、広く紹介されたことも前述のとおりである。



平尾道雄『海援隊始末記』など龍馬のことを書いた書物は多い(高知県立図書館蔵)

龍馬を主人公にえがく小説は、どういう点で一般大衆に幅広く受けたかという理由には、いろいろのことが考えられるだろうが、まず、何といっても、封建期の幕末という時代には珍しい自由人であったということが、いちばんにあげられるだろう。土佐脱藩後、幕府側の高官である勝海舟の門弟となり、海援隊を組織し、日本の海軍の創始者という輝かしい業績の持ち主になるというあたりにも、大衆受けする要素に満ちている。正に普通人の端倪すべからざる器量の人物として、龍馬の魅力には大きなものがあったことは万人の認めるところだけに、小説の主人公として描写するには格好のものがある幕末人物なのである。

大衆受けするドラマとして眺めたときに、やはり、最高に興味と関心とをひかれるハイライト場面は、龍馬暗殺事件であることは、衆目の一致するところと思われる。慶応三年(一八六七)十一月十五日夜に勃発した龍馬暗殺が、はたして真の下手人は誰であったのかという深い謎を現在にいたるまでのこしているというあたりには、尽きぬ興味をそそられる。

いったい何度この有名な暗殺場面をドラマの中で見せられたか、もう数えきれないくらいのものだが、何度見ても面白いというのも、ドラマとしての一つのパターンができあがっているからだろう。何故、あのように簡単に切られてしまったのだろうか、それまでの用心深い龍馬が、そして傑れた剣客でもあった龍馬が、刀を抜くひまもなく惨殺されてしまったのは何故だろうかと、ドラマの中のこの場面を見ながらいつも考えさせられるのである。

京都河原町三条下ル近江屋方二階にひそんでいた龍馬と中岡慎太郎の両人を襲撃し、一瞬のうちに切ったのは、見廻組の今井信郎という人物であったという説が、もっぱら一般的になっているわけだが、いずれにせよ、この龍馬の最期の場面には、ドラマとしても最高のロマンを感じさせるものがある。

龍馬暗殺事件の前、伏見寺田屋における遭難事件については、前述の織田作之助の短篇にも描写されているが、その他に、真山青果(『元禄忠臣蔵』他の傑作戯曲の作者)の戯曲『坂本龍馬』でも巧みに描写されていることも付記しておこう(余談ながら、かつてこの戯曲を上演した前進座の河原崎長十郎の扮した龍馬も大へんにすばらしい印象をのこしている)。

黒紋付きの懐手で袴も無造作にはいて、腰には小刀一本をさし、いかにも幕末志士らしい雰囲気を漂わせている龍馬の遺影、あるいは土佐桂浜に太平洋に面して立つ龍馬銅像のすばらしい眺めは、永遠に庶民大衆の歴史に対するロマンをかきたてるものがあると思われる。

(評論家)

もし龍馬が暗殺されなかったら……

三好 徹


龍馬の生家・才谷屋の看板（高知市立市民図書館蔵）

過去の歴史と現在とを考える場合に「もしも……」という仮定は、ほとんど意味がないように思われる。「もしクレオパトラの鼻が低かったら」ローマ帝国の歴史は変わっていたろうとよくいわれることだが、しかし、どう変わったかは、誰にもわからないのである。

同様に、もし秀吉があと十年生きたら、徳川三百年の歴史は変わっていただろうか。もしサラエボにおいてオーストリ皇太子が暗殺されなければ、第一次大戦はなかっただろうか。その大戦のとき伍長だったヒトラーがもし戦死していれば（彼は伝令兵として二回も戦傷して勲章ももらっている）、ヨーロッパの歴史は変わっていただろうか。

こうした問いに答えられる人は、誰もいないだろう。将棋ならば、あの手をこう指していれば勝っていた、ということはありうるが、歴史は将棋とは違うのである。

しかし、この「もしも」という仮定を考えることは、パズル的なおもしろさがある。ちょうど詰将棋で、金を打つかわりに銀を打ってみたらどうか、と考えるのに似ている。つまり、金を打つのと銀を打つのとでは、局面の展開が変わってくるのだ。

その意味でいうと「龍馬が暗殺されなかったら」という仮定は、なかなか興味のある詰将棋といえそうである。

というのは、現実の歴史の進行は、龍馬の死後、十二月九日に王政復古の大号令が発せられ、越えて一月三日に戊辰の役が起きた。そのあと、明治政府は薩長閥によって牛耳られ、征韓論が起きて、西郷は死に、大久保も暗殺される。以後、日本の政治をリードしたのは、伊藤、山県、松方、黒田といった連中で、いずれも薩長派であった。

この薩長全盛の時代に、「龍馬が生きていたらなァ」という嘆声をこめた呟きは、主として土佐派の人たちから洩れた。土佐派は、自由民権運動の中核をなしていたが、政権には程遠かった。板垣退助、後藤象二郎という飛車角を擁していたが、共に政治力に欠けているために、薩長派に歯がたたなかったのである。

なるほど龍馬が健在だったなら、明治政界は様相を変えていたかもしれない。それを裏付けるのは、陸奥宗光の、

「龍馬が生きていれば、あの連中（薩長州）は青菜に塩だろう」

という言葉である。

ただ、陸奥は、紀州出身ながら、土佐派には同情的だったから、この言葉も少しは割り引いて考えた方がいいかもしれない。

では、現実の進行は、どう変わっていただろうか。

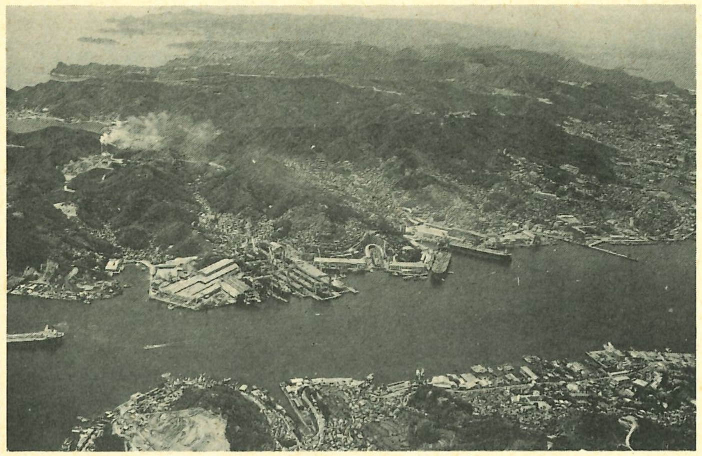
王政復古の大号令までは、変わりようはないだろう。龍馬もそれを目ざして運動していたのだから。

問題は、戊辰の役である。

龍馬は、中岡とは違い、必ずしも武力討幕論者ではなかった。この点で、西郷、木戸、大久保の考え方とは違う。龍馬は、新しい政府は、船中八策にあるように、具眼の士と有材の諸侯によって構成し、その盟主（首相）には徳川慶喜を想定していた。

これは、徳川を徹底的に無力化してしまおうとする薩長とは、違う構想である。そのために、龍馬暗殺は、じつは大久保や岩倉の策謀だという説も出てくるのだ。龍馬がいては邪魔になる、というわけだ。

ここで微妙なのは、慶喜に対する評価である。慶喜が政界に登場してきたときは、家康以来の逸材といわれ、反徳川派には恐れられた。慶喜はたしかに聡明だった。しかし、聡明さと人間的な力量とは必ずしも一致しないのである。


三菱の長崎造船所　龍馬は岩崎小弥太に船の仕事をするとよいとアドバイスした地に、現在三菱の造船所が建っている（三菱重工提供）

それは、鳥羽・伏見の戦いにおける彼の行動を見ればわかる。徳川軍は一万五千の大軍であるにかかわらず、わずか二千五百の薩長連合軍に負けた。

おかしいのは、そのあとだ。徳川軍には、まだ一万の予備兵があり、会桑両藩の戦意は旺盛だった。陣容を建て直して出陣せよ、という強硬派の言をいれて、慶喜は、

「あす出陣」

と宣言し、そうしておいて、こっそり大坂城を逃げ出してしまった。

徳川軍の本当の敗北は、このときだったといっていい。現に、岩倉や西郷は、はじめは勝てるとは思っていなかった。天皇をかついで京を逃れ、西に走って、長期戦をする覚悟だったのだ。

慶喜がもし家康以来の傑物だったならば、こんな卑怯なことはしなかったろう。要するに、頭がいいだけで、危機を切りぬける胆力も人を率いる人間的魅力もなかった。

それを考えると、龍馬は、慶喜という人物の評価を誤っていたとしか思えない。かりに龍馬の政権構想が実現していても、それは決して長くは保たなかっただろう。やはり、岩倉、大久保による政権が以後の政界をリードしたに違いない。なにしろこの二人の政治力は群を抜いていた。

では、龍馬が生きていて、明治の政治に参加していたらどうか。

彼の機略にとむところは、それまでのキャリアで証明されている。板垣、後藤の比ではない。大久保も、龍馬相手の将棋では、さぞかし骨が折れたろう。江藤、板垣あたりは、大久保のハメ手にひっかかって、江藤は殺され、板垣は下野した。しかし、龍馬なら、そんなハメ手には、はまるはずもない。

しかし、肝心の本人は、政治には野心がなかった。それは、維新前に、西郷らが集まってポストを協議したとき、

「おれは役人にはむかない。大臣、参議はまっぴらご免だ。世界の海援隊でもやるさ」

と龍馬はいった。これも陸奥が同席していて、

「あのときほど龍馬が巨きく見えたことはなかった。西郷も木戸も小者に見えた」

とのちに証言している。

世界の海援隊というのは、要するに、海運業を中心とした実業のことである。龍馬は、自分の政治における仕事は、王政復古で終わりだ、と自己規定していたと思われる。だから一度や二度は、参議をつとめたかもしれないが、そのあとは、実業界に転進していただろう。それを思うと、政、官、軍における薩長派の優位は、さして変わらなかったような気がするのだが……。

とはいえ、維新前に死んだ多くの志士の中で、もっとも生かしておきたかったのは、龍馬と高杉晋作の二人だ、とわたしは思っているのだが、いかがであろうか。

（作家）

龍馬をめぐる女たち

阿井景子

寺田屋で龍馬の危難を救ったりよう女の回顧談に「新宮さん（新宮馬之助・海援隊士）は器用な人で、たしか小龍とかいうお方の弟子だったそうで絵も上手でした。ある日、女が丸はだかでいる絵を画いて、腰の辺から股のなかまですっかりかいてありました。美男でしたから、君は男ぶりがよいから女がほれる。僕は男ぶりはわるいが、やっぱり女がほれるなどと龍馬がてごうていました」というのがあるが、記録にある若い龍馬の恋は失恋からはじまっている。

嘉永六年（一八五三）、十九歳で剣術修業に江戸へおもむいた龍馬は、翌安政元年の六月二十三日に帰国し、安政三年の八月十九日まで故郷で過した。多分そのころのことであろう。

高知城下に「小町」とよばれる美少女がいた。彼女は医師岩本里人の娘で、名を徳といい、天保十四年の生まれというから当時十二、三歳であったと思われる。

徳の家には「夜遊び」の若い男たちが毎夜二、三十人はつめかけていた。龍馬もその一人で、熱をあげた龍馬は徳に結婚を申込む。

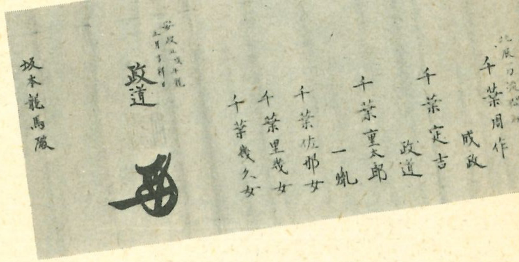
だが徳は、中村市史（幡多郡中村は徳の生地）によると「龍馬さんは土佐に居つく人ではないから」と龍馬の申し出を断った。徳はのちに鴻池善右衛門の妾となり豪奢な生活をするが、そのような少女であってみれば「色が黒うて好男子じゃない」（田中光顕談）一撃剣家にすぎぬ龍馬に、格別の魅力も感じなかったのであろう。

徳は善右衛門の死後は警察官野村信之に嫁ぐが晩年はおちぶれてその日の糧にも困る状況であったという。九十七歳まで生きのびた。

だが、この話はにわかには信じ難い。紙面がないので理由は書かぬが、後述する千葉本家の「家記」と同様に、龍馬の没後つくられたものではあるまいか。夜遊びの習慣は農村のもので町方にはなかったといわれるから、顔くらいは見に行った城下の美少女を、龍馬が有名になってから土地の人々が結び付け、こんな話になったのかも知れぬ。

ところで江戸へ赴いた龍馬は、北辰一刀流、千葉定吉の道場で剣術の修業を行っている。定吉には長男重太郎の他に佐那、里幾、幾久の三女があり、門人の稽古には主として師範役の重太郎と長女の佐那が当たっていた。龍馬と佐那が親しくなるのも当然であろう。

千葉本家の「家記」には「重太郎に一妹あり、初めの名は乙女、のちさな子と改む。……のち、婚を土州の志士坂本龍馬に約し云々」とあり、佐那自身も後年華族女学校の舎監をした時期に龍馬の黒木綿の紋服の片袖をみせ、「わたしは龍馬の許婚者でした」と人々に語っている。



龍馬の北辰一刀流免許皆伝（溝渕増己氏蔵）

しかし、「家記」は龍馬の没後、彼の名が喧伝されはじめてからつくられたものというし、前記りよう女の回顧談にも、

「千葉の娘はお佐野といってお転婆だったそうです。親が剣道の指南番だったから御殿へも出入りしたものか、『一橋公の日記』を盗み出して龍馬にくれたので、龍馬は徳川家の内幕をすっかり知ることができたそうです。お佐野はおれのためにずい分骨を折ってくれたが、おれはなんだか好かぬから取りあわなかった、といっておりました」

とあるから、「婚を約し云々」は真実かどうかわからぬ。ただこの時期、佐那が龍馬に好意を寄せたことは事実であろう。

龍馬の研究者平尾道雄氏は、その著書『龍馬のすべて』に、

「あちらこちらから龍馬との関係をうわさされる。それがたび重なるに従って老年の光子さん（『汗血千里の駒』の主人公で佐那女を思わせる人）は、いかにもそれが事実だったように考え出した。つまり錯覚に陥ってしまったのですね」

と千葉光子と名のる老婦人に会った作家、貴司山治氏の談話をのせているが、案外、こんなところが真相だったのかも知れぬ。

文久元年（一八六一）九月十三日、土佐勤王党の加盟に先だち、龍馬は同志平井収二郎の妹かほに不思議な手紙を出している。

「先ず々々御無事と存じ上げ候

一、高マチ袴

一、ブッサキ羽織

一、宗十郎頭巾

外に細き大小一腰に御用意あり度く存じ上げ候」

というもので、前記平尾道雄氏は「男装して京都御所か所司代か、または街頭に出て時勢の動きを探索することを（かほに）要求したものか」と、疑問を投げておられるが、かほ自身は、依頼された品々を用意して龍馬を待っていたという。

三条公睦の未亡人信受院（山内家から嫁いでいる）に仕えたかほは才色兼備の女で、それゆえに兄収二郎は、かほと龍馬の仲を心配したふしがみられる。かほにも龍馬に寄せる思いがあったのであろう。

龍馬が脱藩した文久三年三月二十五日付の収二郎の手紙には「龍馬国を出ずる前は、そこもとの事につき逢い申し候。たとい龍馬よりいかなる事を相談いたし候とも決して承知致すべからず」「もとより龍馬は人物なれども、書物を読まぬゆえ、時としては間違いしことも御座候えばよくよく御心得あるべく」とあり、龍馬より四歳年少のかほが龍馬の手にのらぬよう戒めている。

安政六年（一八五九）の末から文久二年（一八六二）の十月八日まで三条家に仕えたかほは、帰国後、兄収二郎の自刃（青蓮院の令旨請下運動に連坐した罪で）という悲しい場面に直面する。龍馬は家信で「誠にむごいむごい、妹かほのなげきいかばかりか」と、かほを気遣っているが、この女こそ龍馬の初恋の人ではあるまいか。

かほはのちに西山志澄（のちの警視総監）の妻となり、明治四十二年七十二歳で歿した。

次ぎに有名な寺田屋と龍馬の関係は、寺田屋の女主人とせの娘りきによると、「龍馬先生とは元から御懇意ではなかったのです。薩摩の邸からの依頼で、どうも坂本を邸におけない事情もあり、そうかと言って市中へ下宿さして置くのも危険だから、おとせに頼めば大丈夫何んとかかくまってくれるだろうとの事で、宅にお出になりました」という事情である。

寺田屋が薩摩藩と深いつながりを持つのは、文久二年の「寺田屋事件」からであるが、商売を嫌がる主人伊助にかわって家業をきり回していた内儀のとせは、志士たちが訪ねてくると快よく引受け、彼等のために尽力した。

龍馬もとせのことを「これは学問ある女、大人物なり」と評価し、寺田屋に来ると「安田の順蔵さん（龍馬の長姉の婚家）に居るようなこころもちにて」とくつろいでいる。度量・侠気を兼ねそなえた女傑のとせは、龍馬にとっては長姉千鶴と似た感じがあったのではないか。とせもまた龍馬をよく理解し、二つ返事でりよう女を預かったのであろう。

それを裏付けるように龍馬の死後、高知から京へ舞いもどったりようは、彼女を（寺田屋時代）養女扱いにしてかわいがってくれたとせを頼らずに、自活の道を求めている。龍馬に寄せるとせの女の感情が、りようの神経にさわるものがあったとみるのは、うがち過ぎであろうか。



寺田屋の女将とせ



開港とともに横浜には諸外国人の姿が見られるようになった
(五箇国人物歩行図・神奈川県立博物館蔵)

平松武兵衛像(黒田伝四郎氏のスケッチ)

碧眼紅毛の会津武士

プロシア人ヘンリー・シュネル、またの名を平松武兵衛という。安政条約による横浜開港以来、はるばると海を渡って多くの異人がやって来た。アメリカ、イギリス、フランスなど……多くはアジアのこの小国に夢と金を求めていた。その中に不可思議な異人、髪を切り、羽織袴に大小を差したこの男がいた。





上 龍馬の妻となったりようの晩年の写真
左 龍馬の姉の乙

龍馬より五歳年長のとせは明治十年、西郷が自刃する二週間前の九月七日、四十八歳で急逝した。

さて、最後にりよう女であるが、彼女が龍馬といつ何処で知り合ったかは不明である。龍馬の手紙によると、りようの父楢崎将作が獄中で病死(安政の大獄で拘引された)した翌年か翌々年、つまり文久三年か元治のころと思われる。

母と弟妹を抱えて生活と格闘している美貌のりようのけなげな姿に龍馬が同情して、「此者ら」を「大仏(京都方広寺)辺りに養いかくし」、池田屋騒動後、捕吏の目が光りはじめると、りようの母貞を杉坂の尼寺へ、妹君江、弟太一郎を勝海舟へ、りようを寺田屋のとせに預けた。

りようが命がけの機転で龍馬を救う寺田屋の危難はあまりにも有名なので省くが、りようの献身的な愛情に感動した龍馬は、六歳年下のりようを西郷の媒酌で妻にする。龍馬によればりようは「日々縫物や張りもの」をしているが、「白刃を恐るる事を知らぬ」「誠に妙な女」、「月琴をひき申す」「おもしろき女」であった。

龍馬は湯治をかねた鹿児島行きにりようを伴っただけでなく、長崎に住んでからは「亀山社中」の仲間が訪ねてくるのを気にして、「他人の妻女には手を出さぬこと」の一条を規則に付け加えている。

また家信に「この龍女が居ればこそ龍馬の命は助かったり」と寺田屋の危難を報告し、折にふれ「わたしの妻は」と、りようのことを書き送っているが、これは故郷の厚い壁を知るゆえの龍馬の心遣いであったと思われる。

龍馬横死後、りようは高知の坂本家に入った。しかしこの厚い壁をうち破ることができずに、わずか三、四か月で高知を去り、京の近江屋をたずねている。

龍馬が遭難した近江屋に数か月滞在し泣き暮らした。

三十歳なかばになって、神奈川宿で知り会った西村松兵衛と夫婦になるが、りようは「龍馬の妻」だったことをわめきちらし、晩年は酒に溺れる生活であったという。「龍馬の妻や」を叫び、しがない露店商の年下の夫を罵倒することで、りようは自分を支えたのかも知れぬ。没年は明治三十九年一月十五日、六十六歳であった。

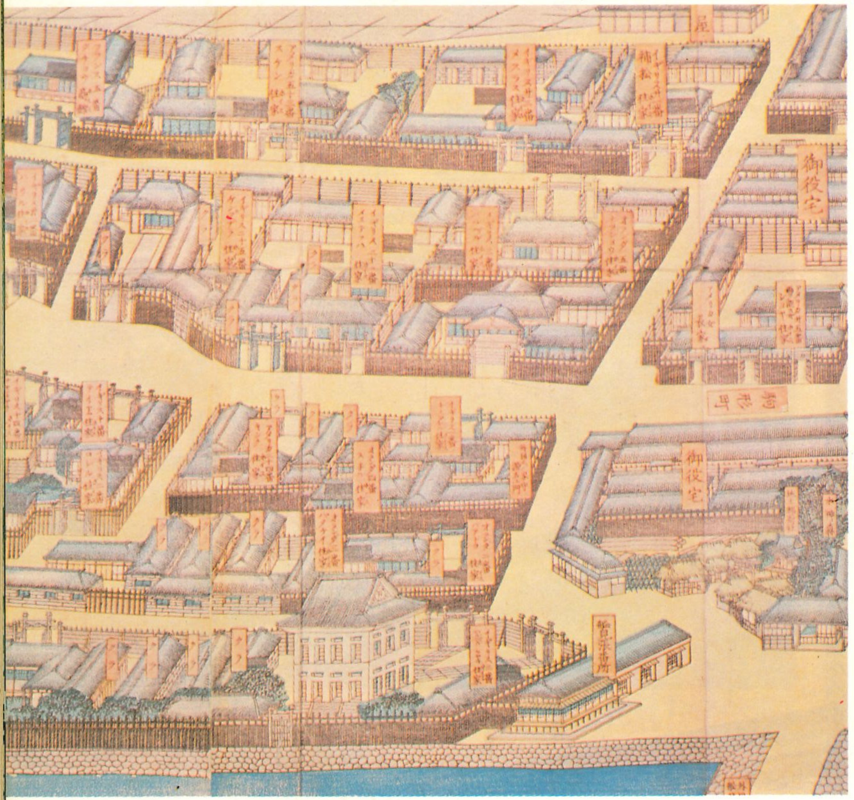
以上が龍馬をめぐる(主な)女たちであるが、いずれも外向型・勝気、強烈な個性の持ち主である。

彼女らは「天下の世話は大ざっぱ、命さえ捨てればおもしろき事なり」という龍馬の潔ぎよさと、「墨をすって墨が手につくと、その手を袴へなすりつける」龍馬の無頓着さに母性をくすぐられたのであろう。危険をかえりみず、龍馬のために尽している。

龍馬はあねご肌の彼女らに甘え、おどけ、時にはくせのある性格に辟易しながらも、その個性をおもしろがり、がっしりと受け止めたと思われる。ちなみに「龍馬さんは男らしい男だった」というのが晩年のお徳の感想である。

(作家)

オランダ４番にエドワード・シュネルの屋敷が見える
（外国人住宅之図・神奈川県立博物館蔵）





死の商人によって当時日本に送り込まれた先
込めのゲーベル銃（所荘吉氏蔵）



横浜海岸各国商館図（横浜市立図書館蔵）

華やかな異国情緒の裏で

当時、横浜には異人館が建ち並び、ビロード・ギアマン等々の珍奇な物産が華やかな異国情緒を醸し出していた。一方、武器の輸入は次第に増え、華やかな異国情緒の裏に、血腥い陰が潜んでいた。折しも幕末、風雲急を告げ、横浜には、武器取引きがもたらす尨大な利益の蜜に、死の商人が吸い寄せられて来た。碧眼の会津武士ヘンリー・シュネルの弟、エドワードも、そのうちの一人であった。彼は横浜に居を構え、兄ヘンリーを援けて、奥羽越の諸藩に銃器を送り込んだ。



死の商人を諷刺した『横浜新報もしほ草』
（神奈川県立博物館蔵）

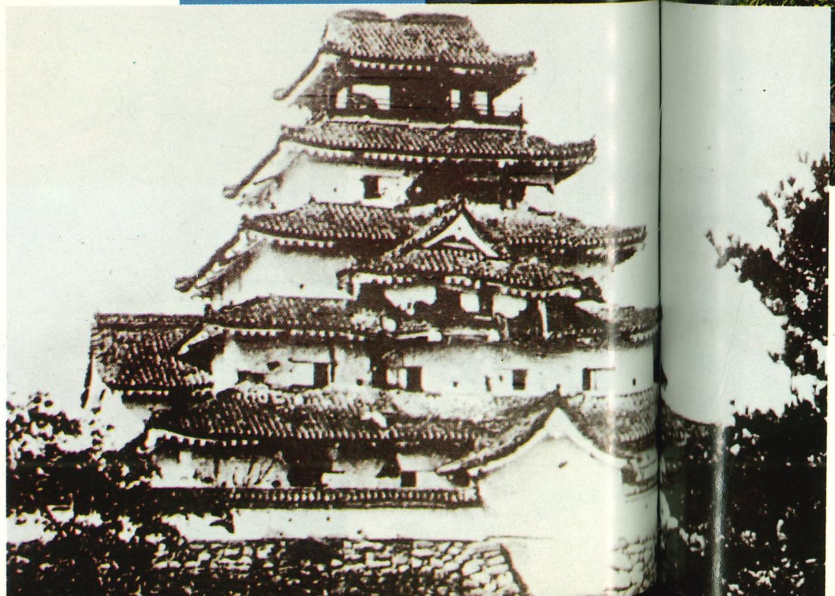
会津魂に燃えた武士・兄ヘンリー

戊辰戦争は、いよいよ決戦の時を迎えようとしていた。会津二十八万石は緊張と混乱が渦まきつつも、信義と誠実という会津気風にもとづき、戦いへの決意を固めていた。ヘンリー・シュネルは、プロシャ領事館の書記官という職を拋ち、この会津へ忽然と姿を現した。会津藩主松平容保らの要請を受けて、越後方面軍の軍事顧問となったのである。シュネルは会津若松城下に屋敷を拝領し、戦塵の中にのめりこんでいった……。





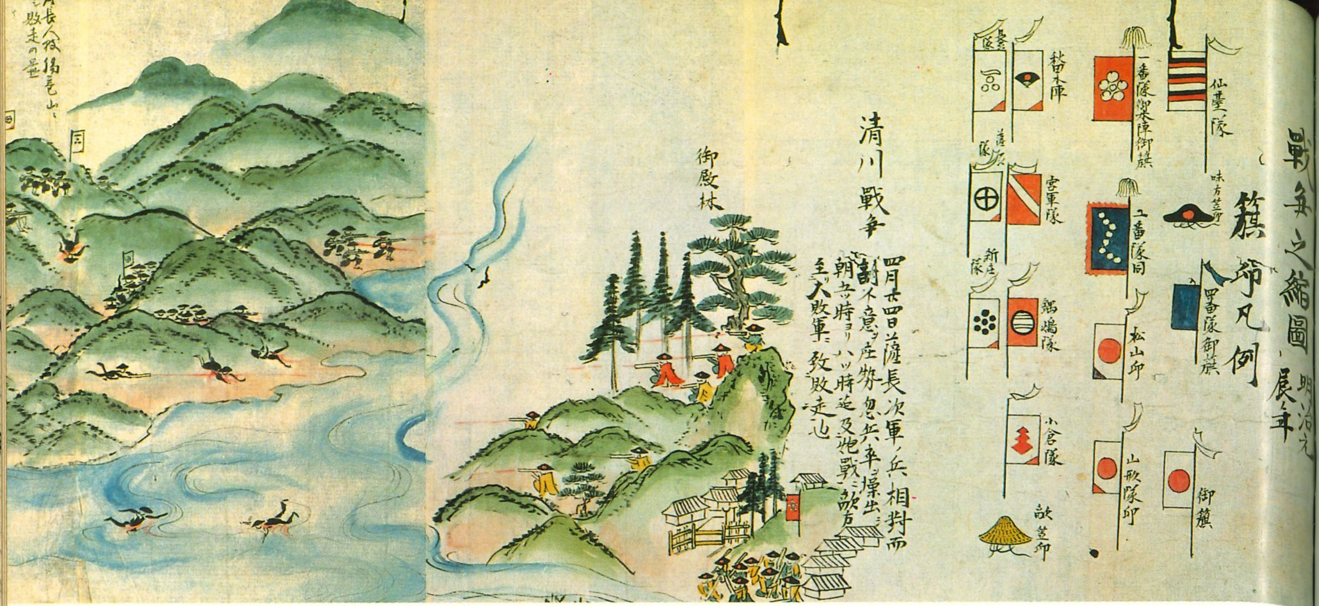
上　シュネルの屋敷と伝えられる会津若松市内の異人屋敷跡
左　松平家御廟所中の松平容保侯墓（会津若松市）



砲弾跡も著しい戊辰戦争直後の鶴ヶ城
（写真提供　会津若松市役所観光課）



再建され秀麗の姿を誇る現在の会津鶴ヶ城（会津若松市）



奥羽の戊辰戦争の模様を伝える絵巻（戊辰戦争絵巻・鶴岡市致道博物館）



奥羽越同盟軍に属した庄内藩の戦いぶり（同上）



新政府軍兵士に斬られる庄内藩士（同上）



奥羽越同盟軍旗（宮坂考古館蔵）

奥羽越諸藩の挽歌

平松武兵衛ことヘンリー・シュネルは、武器の調達と製造を助け、兵法を建言し、またみずから前線に立ち大砲を放つなど八面六臂の活躍を見せた。しかし、新政府軍の怒濤のような進撃に奥羽越の諸城は次々に落城し、鶴ヶ城もまた、明治元年（一八六八）九月、ついに落城。だがそのとき、シュネルの姿は、会津にはなかった……。



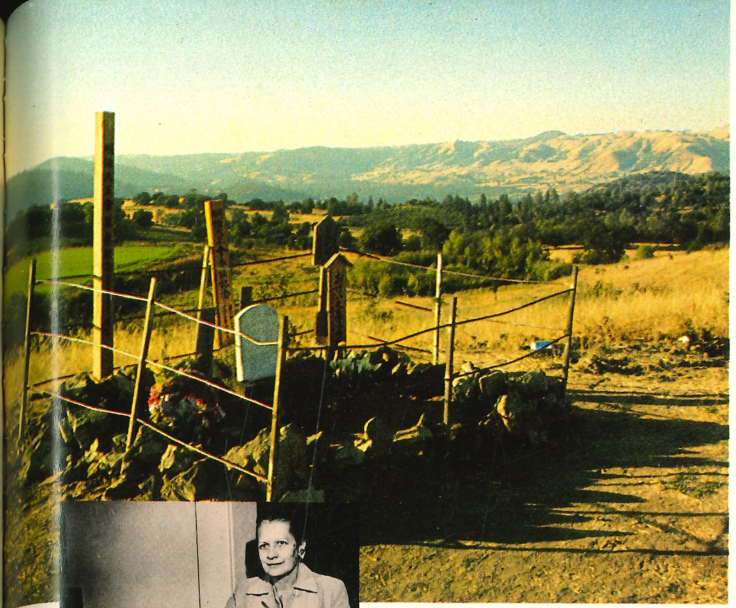
会津藩の本陣が置かれた滝沢本陣跡（会津若松市）

背あぶり山から見下す会津若松市

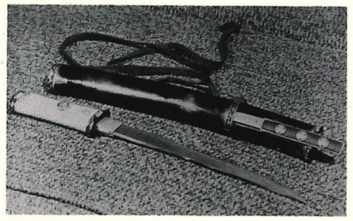


新天地の夢にも敗れたシュネル

会津城下から姿を消したヘンリー・シュネルは、仙台と国際都市・上海に姿を現したと記録にある。そして会津落城から明けて明治二年（一八六九）、シュネルは米国に突如出現する。百二十人の日本人農業移民団を率い、中に妻と子、そして子守役の少女十七歳のおけいがいた。シュネルらが耕した農場は「ワカマツコロニー」と呼ばれた。しかし農場は二年ほどであえなく失敗し、シュネルは、松平容保から拝領した脇差と旗を残して、いずこへか去っていった。ほかの日本人も四散して行方が知れないが、少女おけいの行方は知ることができる。十九歳で病没したおけいの墓は、今もその地に残されているからである。









上　おけいの墓のあるカリフォルニカ州のコロマ村ゴールドヒル（写真提供・早乙女貢氏）
中右　シュネルが残していった三つ葉葵紋の脇差（写真提供・会津若松市立図書館）
中左　同　三つ葉葵紋の旗（同）
下　昭和三十二年、会津若松市背あぶり山に建てられたおけいの記念碑

碧眼の会津武士

早乙女　貢

■さおとめみつぐ
作家　大正15年中国ハルピン生まれ『僑人の檻』で第60回直木賞受賞　現在ペンクラブ常任理事　著書『おけい』（朝日新聞社）『奇兵隊の叛乱』『会津士魂』（連載中）

NHK 北村真征

英姿颯爽・碧眼の武士

賊軍の汚名を着せられたまま会津鶴ヶ城は、慶応四年（一八六八）、戊辰の夏を迎えようとしていた。

新政府軍はすでに会津国境を越え、東軍最後の砦へ怒濤のような進撃を続けていた。

緊張と混乱の渦まく会津藩二十八万石、なかに一人の碧眼の会津武士がいた。髪を切り、羽織袴に大小を差したこの男、プロシャ人ヘンリー・シュネル、またの名を平松武兵衛という。

――おもしろい男だったんでしょうね、こういう動乱期に日本に来ていて何でもするというのは。

早乙女　羽織袴で大小を差し、髪を切って平松武兵衛と名のって会津城下を闊歩したというんですから、これは相当変わった男ですよ。

――平松武兵衛という名前は、自分で付けたんですか。

早乙女　これは会津藩主松平容保に拝領したんだと思いますけど、松平の姓は由緒のあるものでさしさわりがあるから、ひっくり返して平松にしたんでしょうね。

――その全体の活躍ぶりから判断すると、この男はどういう人物なんですか。

早乙女　前後の行動を見ましても、ちょっと一口で言えない端倪すべからざる男でしょうね。生まれもはっきりしないし謎があるといいますか、なかなか不思議な男です。動乱の江戸末期を日本中かなり駆け回っていまして、一儲けしようという人はたくさんいましたけど、ここまで日本人にのめり込むという人は少なかったと思います。非常に稀有な存在ということがいえるんじゃないでしょうか。その心意気というか、のめり込み方は、これは一種のアラビアのローレンスという感じですね。



奥羽越列藩同盟軍の中心となった会津藩主松平容保（鶴ヶ城天守閣蔵）

群がり寄った死の商人たち

安政六年（一八五九）六月二日、わずか十数戸の漁村にすぎなかった横浜は、総工費十万両を注ぎ込んで、華やかな港へと変ぼうする。

はるばると海を渡り、夢と金を求めて、アジアの一小国日本にさまざまな冒険商人たちがやって来た。街には異人館が立ち並び、世界各国の万物が異国情緒をかもし出していた。ビロードやラシャ、ギアマンなどの華やかな輸入品の中に、やがて武器の輸入が目立つようになる。

当時、世界では、一八六一年に起きたアメリカの南北戦争を一つの契機として、武器が驚異的な進歩を遂げ、大量生産が行われた時代である。

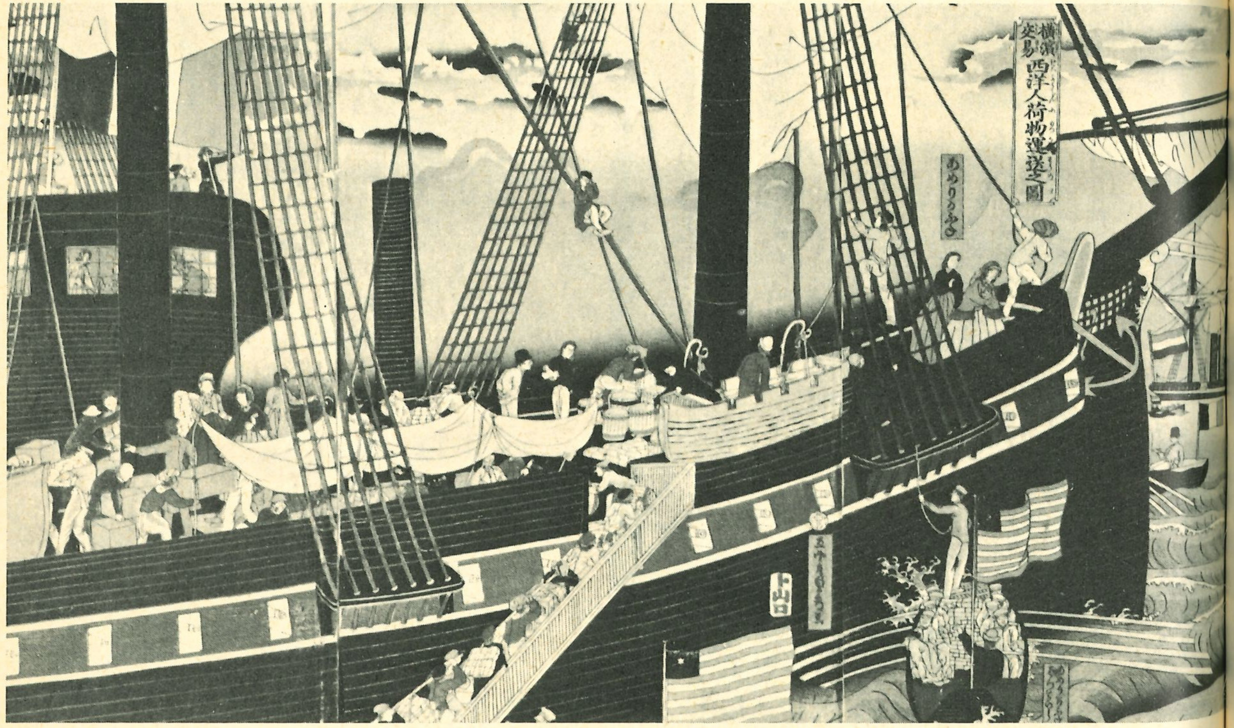
南北戦争も終わり、あの有り余った武器が、維新の内乱をあて込んで、急速に日本に流れ込むのである。

小銃だけでも、ミニエー、エンフィールド、シャープス、スナイドル、ウィルソン、アルビニーなど種類は百を越え、その数は六十万丁とも七十万丁ともいわれている。

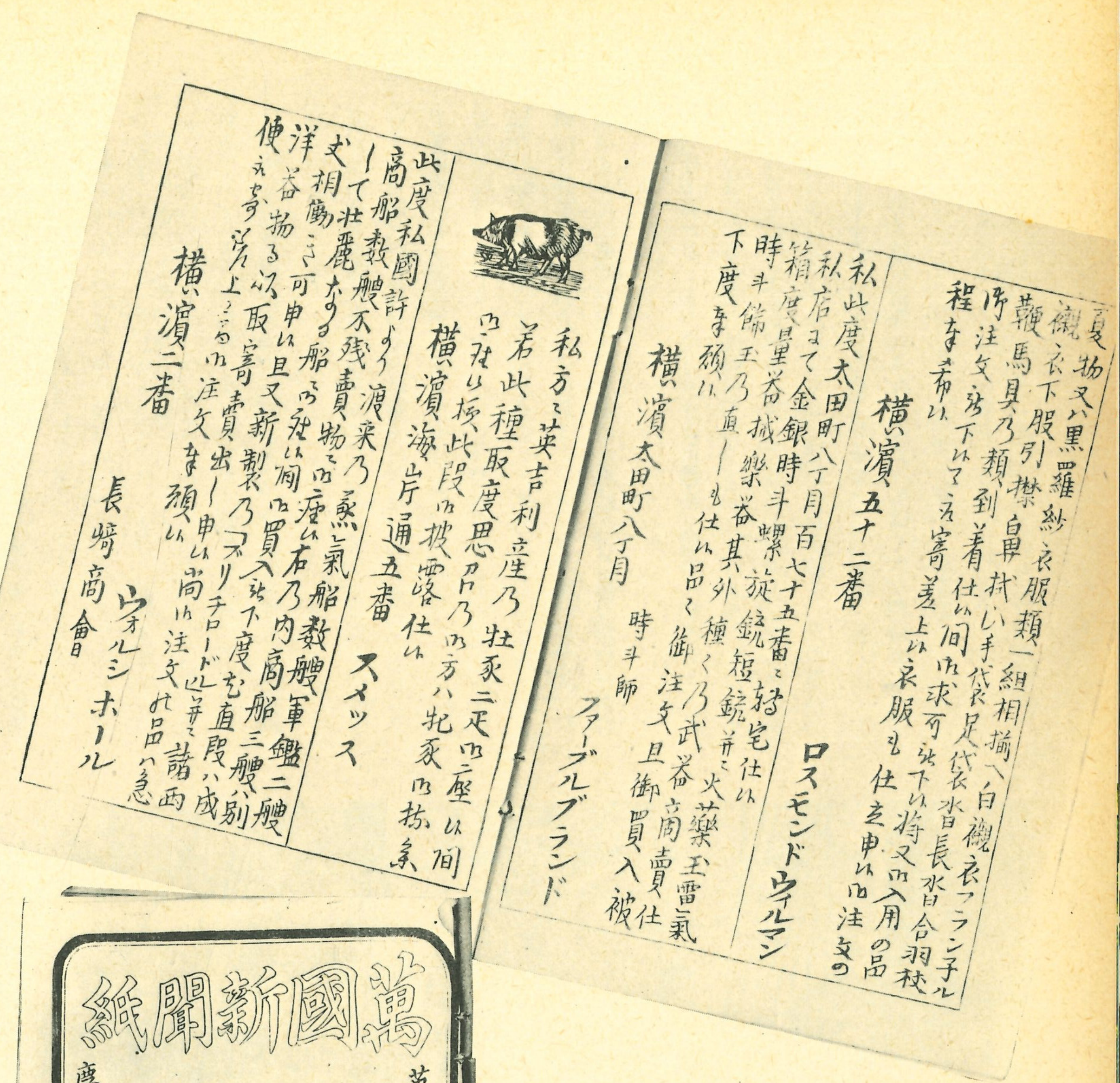
武器の取り引きは、冒険商人たちにとってばく大な利益を生んだのである。

当時の横浜を物語るたくさんの資料の中から二つ紹介しよう。

一つは、慶応三年（一八六七）一月に創刊された「萬国新聞紙」、



横浜交易西洋人荷物運送之図（神奈川県立博物館蔵）



萬国新聞紙の広告ページ（横浜市立図書館蔵）



萬国新聞紙　郵船によって運ばれた外国新聞の翻訳・国内ニュース等が掲載された（横浜市立図書館蔵）

イギリス領事館付きの宣教師ベーリー（Buckworth Bailey）が作ったもので、定価三匁目となっている。初めのほうは世界各国の紹介だが、終わりの半分がちょうど今の新聞と同じように広告になっていて、外国の商品や船の出帆日時のお知らせなどが掲載されている。例えば慶応三年三月発行のものには、

「パン、ビスケット、ボットル、右品物私店に御座候間多少に寄らず御求被成下度奉願候。」

広告主は、横浜元町一丁目の中川屋嘉兵衛で、日本での最初の新聞広告であるが、それはさておき、同じ年の十月発行の広告に次のようなものがある。

「私此度太田町八丁目百七十五番に新宅仕候　私店にて金銀時計螺旋銃短銃并に火薬玉雷気箱度量器械楽器其外種々乃武品商売仕時斗飾玉乃直しも仕候品々御注文且御買入被下度願候
　　横浜太田町八丁目時計師ファーブルブランド」

このように、武器弾薬を売っておりますという広告が大変多い。



横浜新報もしほ草　外国勢力の恐ろしさを繰り返し掲載した（横浜市立図書館蔵）

もう一つは、「横浜新報もしほ草」、アメリカ人バン・リード（Van Reed）が主宰し、岸田吟香が共同経営にあたった新聞。この慶応四年（一八六八）六月五日号には、外国の武器商人たちの暗躍と、日本の危機を痛烈に諷刺した戯画と絵解きの文が載っている。

つまり戊辰の役あたりは、いわゆる死の商人にとっては、日本はかっこうの商売の場であったわけだ。鳥羽・伏見の戦いの前の年、慶応三年の貿易額を見ると、全体のなかで二十パーセントが武器弾薬の販売額になっているし、翌年には二十五パーセントにも跳ね上がっている。そのころ横浜には、武器弾薬がもたらす利益を求めて、多くの死の商人が集まっていた。

外交官兼務の商人たち

ヘンリー・シュネルがいつ横浜に上陸したかを示す記録はない。彼には弟がいて、その弟、エドワード・シュネルが先に来日していた。万延元年（一八六〇）の横浜居留地借地人名簿には、イギリス人十八名、アメリカ人十一名、オランダ人五名、計三十四名となっているが、その内のオランダ人の中に、エドワード・シュネルの名が初めて見える。

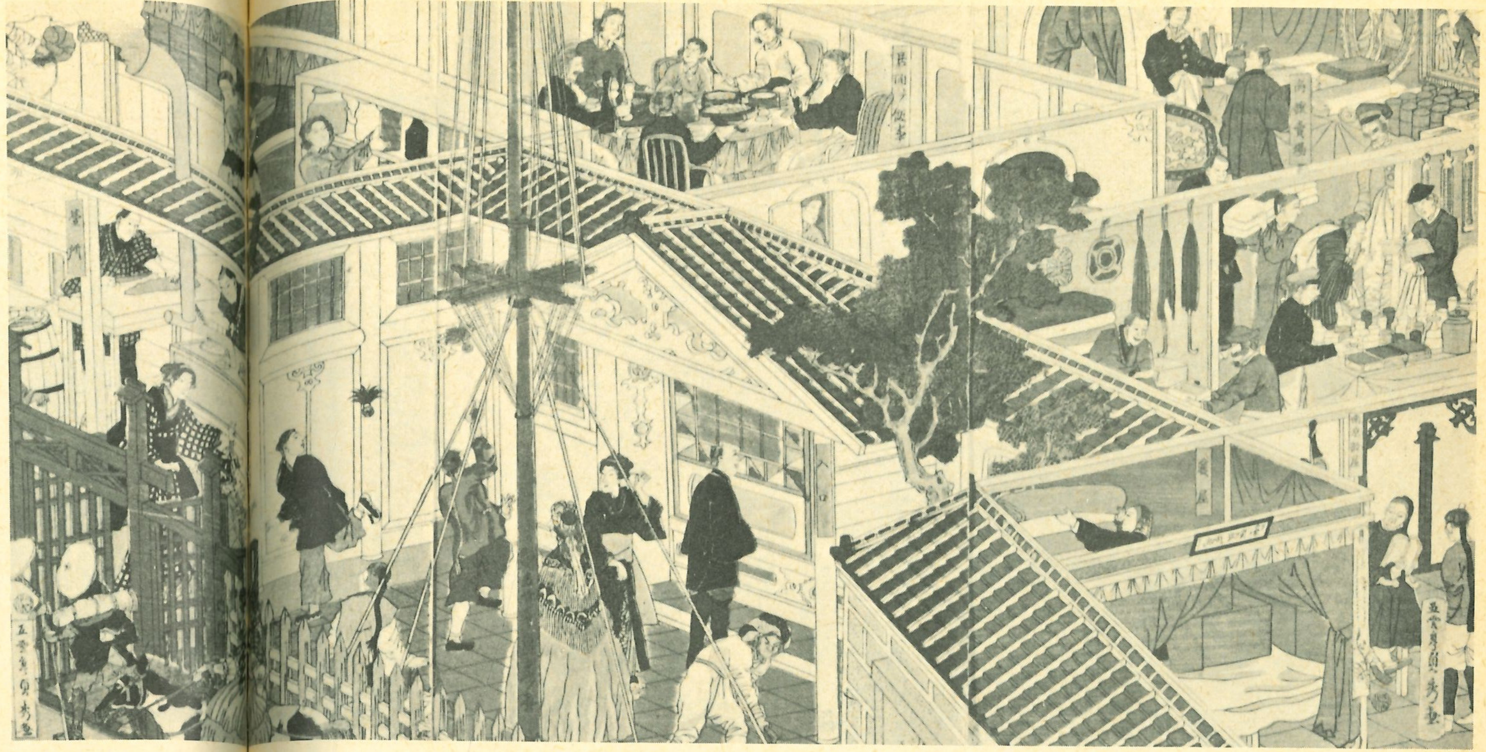
弟エドワードは、やがて死の商人の一人となるが、初めはさまざまな商売に手を出している。文久二年（一八六二）に発行された木版刷の「萬国航海図」には、校正者としてシュネルの名が見える。また横浜居留地の前田橋ぎわに牧場を開いて、日本で最初の「牛乳搾取所」を開き、外国人に牛乳を売ったのも彼であった。居留地四十四番に商館を構え、瑞西時計などの輸入にあたり、一

萬国航海図　Ed.Schnell の名が見える（横浜市立図書館蔵）





エドワード・シュネル　プロシャ人だと思われるが，日本がプロシャと国交のない時期だったためオランダ人として入国した（今泉亨吉氏蔵）



異人商館内部の模様（神奈川県立博物館蔵）

方で、文久三年の日瑞修好条約の締結を機に、瑞西（スイス）領事国の通訳官にも就任している。

兄のヘンリー・シュネルの名は、元治元年（一八六四）プロシャ領事から金川奉行に宛てた外交文書に訳官として初めて登場する。

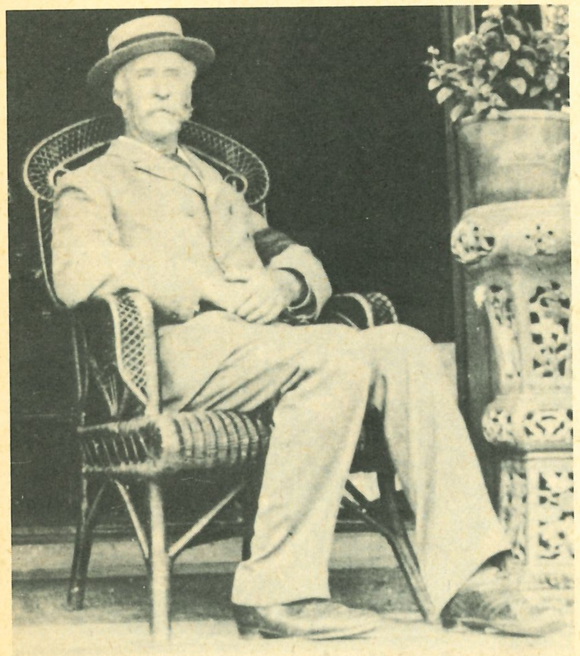
恐らく、万延元年（一八六〇）に調印された日普修好通商条約によって、プロシャ領事館の書記官として来日したのではないかと推測される。彼は、プロシャ軍の武官出身であった。

――弟のエドワードなどみますと、外交官でいながら商売もやっていたということになりますね。

早乙女　ええ。これは当時の横浜在住の外人の非常におもしろいところで、最初は外交官として入ってくる。そこでまた商売を始める。その逆に、商売人として来て、日本内地のことに通じているということで外交官に任命される。それもいろんなよその国の外交官を兼ねたりして、その辺は非常におもしろいところです。つまり通商条約をしているところが数の少ないうちは、他の国がなんとかして入り込もうとするものですから、顔の通じている人にそれを頼む。だから、兼任という形も生じるわけで、オランダ系プロシャ人であって、スイス領事館で書記官を勤める者があっても不思議ではないわけです。

〝異人に蹴られ、聞けばいいわれがないそうだ〟

――しかし全体として、横浜に住んでいた外人というのはどういう人たちだったんでしょう。日本はそのころ世界全体から見れば新興国ですからね。



イギリス人のトーマス・グラバーは，1859年長崎に来てグラバー商会を営み，主に薩長に武器を売った（長崎県立図書館蔵）

早乙女　やっぱりヨーロッパから見ると、植民地化しようという気があったろうし、そういう意味で、それに乗じてもうけようという人たちが多かったんじゃないでしょうか。いわゆる七つの海を股にかけた連中、荒っぽい商売でもうけて一旗揚げよう、と。東インド会社の進出ぶりをみても、かつては東南アジアや中国でいろんなもうけ方をして、それから日本に入ってきたのですから。

――吹き溜まりみたいなところがあるわけですか。

早乙女　そうですね、そういう表現取ってる人もいましたね。ヨーロッパの掃き溜めとかですね。

――この横浜にたいして、西の長崎でもそうだったんでしょうか。例えば、トーマス・グラバーという人がおりますね。

早乙女　長崎は、出島に限られて、制約されたところですし、長い歴史もある。グラバーも商売人としては巧妙で巨利を得ていますが、あくまで長崎の外人としての立場を崩そうとしていなかったようです。ところが横浜というのは、通商条約で開港した所で、つまり何もなかった寒村を埋め立てて造ったわけですから、これはまるっきり自分たちの町だという意識が強かったわけでしょうね。居留地ですからね、横浜は。だから外人は大手を振って歩いていた。一方長崎では、かなりビクビクして歩いているようです。

――すると日本人はかなり肩身の狭い思いで横浜を歩いたわけですね。

早乙女　攘夷問題なんかがさかんになって、異人斬りなどが出てきますと、武士は刀を持って入っちゃいけないとか、入る場合には身分を糺した上で刀に鑑札をつけて入る。つまり関門で鑑札をくれるわけです。今日の銃砲刀剣携帯許可証です。そういう形で歩きますから、



外国人遊興之図のうち有名な岩亀楼の内部
（横浜市役所提供）

必然的に日本人の方が肩身が狭いわけで、闊歩するというわけにはいかないでしょうね。結局まるでよその国を歩いているような感じになってしまうわけです。そういうことも攘夷浪人たちを歯軋りさせて、テロ行為を激化させることにもなったわけです。

―― 今から考えますと、終戦直後に進駐軍が来たとき、私たちはちょっと恐れをなして見ていた。何も理由がないのに、いきなり殴られても黙っていなければならないというような時代がありましたけれども。

早乙女　そっくりそのままのことがあったらしいですね。ひどい連中が乱暴したりしましたが、乱暴したって、結局通商条約で来ているわけですから、幕府は腫れものにさわるように戦々恐々としている。いくら神奈川奉行所に訴えてもだめなんですね。「異人に蹴られ、聞けばいわれがないそうだ」という、こういう歌がはやったんですが、庶民の憤りのやり場のなさが表れています。靴で蹴飛ばされて、なんとも文句が言えないということなんですから。

幕末の〝アラビアのローレンス〟

慶応三年（一八六七）十一月二十四日、幕府の軍艦順動丸が品川沖からあわただしく大坂に向けて出航した。ヘンリー・シュネルもまた、プロシャ国代理公使フォン・ブランドと共にこの順動丸に同乗している。

世は風雲急を告げていた。十月には、討幕の密勅が下され、将軍慶喜が大政を奉還する――維新に向けての最後のすさまじい駆け引きが、京都・大坂を舞台に繰り広げられていたのである。シュネルたちの一行が順動丸に乗り込んだのも、この政変を見届けるためであった。そしてシュネルの運命も大きく変わっていく……

十二月九日、王政復古の大号令、十二月十二日、慶喜は、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬らを率いて二条城から大坂城に退き、十六日には、イギリス、アメリカ、フランス、オランダ、イタリア、プロシャの六か国公使を引見し、政体の変革を報告した。この会見に、ヘンリー・シュネルも通訳として恐らく同席したはずである。慶喜の怒りをこめた薩長批判を聞き、また会津藩主松平容保とも会っているに違いない。彼がそこで何を感じ、どう思ったかは、むろんわからない。その六日後の十二月二十二日付をもって、一つの通告がプロシャ公使館から、在大坂外国奉行に届いた。それは、ヘンリー・シュネルがプロシャ公使館書記官を離任した旨を告げる文書であった。歴史が大きく変わろうとする、まさにその時、彼は何故外交官の身分を投げ捨てたのだろうか――。

一介の浪人となった彼はどこへ行こうとするのだろうか。

慶応四年（一八六八）一月三日、徳川慶喜の官位辞退・所領返納の問題を機に、鳥羽・伏見の戦いがおきた。新政府と旧幕府との内乱、すなわち戊辰戦争の始まりである。

この鳥羽・伏見の戦いから三か月ほどたった慶応四年の四月、山々に囲まれた会津若松に、シュネルは忽然と姿を現した。敗亡の兵たちが続々と流れて来て、

　会津見るなら今のうち見やれ
　　今に会津が江戸になる

という俗謡がはやったころである。

―― シュネルはなぜ会津へ行ったのですか。

早乙女　招聘されたのではないかということです。その以前に容保と大坂城で会っていますから、武器の売買だけでなく、その話が出たことは考えられます。彼自身がどうしてそこまで会津にのめり込んだかということは、資料がありませんから推測するしかないんですが、まあちょっと違っていた。性質もあるのでしょうが、浮薄なヤンキーとプロシャ人との違いではないか。結局会津武士といろいろな武器の交渉などやっているうちに、会津の立場を理解し、共感し、そういう精神的なもの、日本的な伝統をもっている会津武士の古風な精神に惹


天文台跡　戊辰戦争の時には，学問の場であるこの天文台にも砲台がおかれた

かれたんじゃないかという気がするんです。

―― 横浜でしたら、地理的にいっても、江戸幕府側へ武器を売ったり、あるいは交渉に行ったりする機会が多かったろうと思いますが。

早乙女　行きがかりはあったでしょうが、当時彼らから見て、どう考えても勝ち目があるのは薩長側だということは、客観的に見ればわかるわけです。殊にそういうことには目の利く連中でしょう。にもかかわらず会津のほうに肩入れした。これはほかのいわゆる死の商人たちとはかなり違っている。欲得ぬきの部分があるんです。それを私はさっき「アラビアのローレンス」なんて言ったんですけれども。

―― しかし、彼は外交官ですから、そのままの身分で向こうにいくというわけにはいかなかったでしょうね。

早乙女　これはやはり困ることで、領事あたりからも当然止められるわけなんです。ですから、決然として外交官の職をなげうって、会津のほうに行ったということです。

―― 彼が会津に惚れ込んだというのは、その反対の西軍の連中のやっていることに気に入らないところがあったんでしょうか。

早乙女　まあ相対的な問題ですけども、そう思いますね。たとえば話は前後しますが、長州の伊藤俊輔、のちの伊藤博文、それから井上馨なんか英国に密出国して行きますが、彼らが帰ってきたときは、西洋かぶれして変な洋服を着て帰ってくる。当時としては日本人の洋服を着た姿なんていうのは、これはサマにならないんでね（笑）。ですから、非常に滑稽だし、軽薄な感じをうけたと思うんですよ。とくに、鉄砲も、まだ土方歳三なんかは鳥羽・伏見の戦さで敗けるまで大事だと思ってなかったぐらいで、会津のほうでも古い長沼流軍学を捨てきっていない。片一方の薩長のほうでは何でもかんでも新しいものを入れよう、新しい格好をしようというようなところが、非常に軽薄に感じたんじゃないかと思いますね、シュネルからみますと。そういったことも、古風で純朴な武士の心、日本精神のほうが好きだ、という気持が、会津にのめり込ませることになったんじゃないかと思います。

容保から姓名拝領〝平松武兵衛〟になりきる

五月二十二日、奥羽越同盟の軍事会議が開かれた。会津藩主松平容保らの要請を受けて、シュネルは越後方面軍の軍事顧問に就任する。

「時にスネル、深く米会の義挙を悦び、専ら尽力する心得にて髪をきり、日本製の袴、羽織を着し姓名を改めて平松武兵衛と称する……そもそも平松年頃三十歳前後、眉目清秀、会老侯（会津藩主松平容保）より賜りし小脇差を帯し来る。実に一箇の美男子なり。」

同席した米沢藩士、甘粕継成の記録である。（『甘粕備後継成遺文集』）

「将軍のためにはあらゆる犠牲を払うべきこと。」

会津二十八万石は、藩祖保科正之の遺訓を連綿と守り続け、信義と誠実という独特の会津気風を完成させていた。

平松武兵衛と名のったシュネルは、市内に屋敷を貰い、日本人の女性を妻にし、会津武士になりきった。

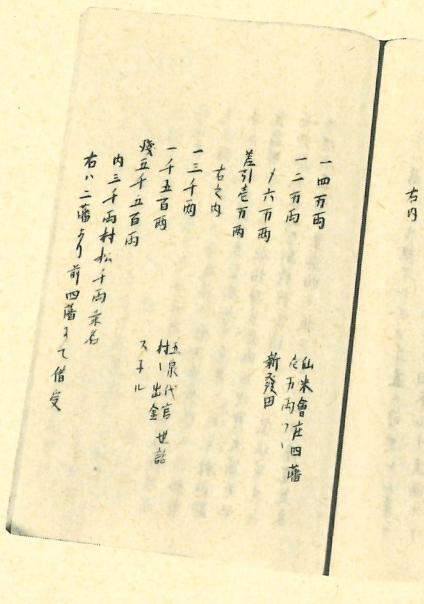
八面六臂の軍事顧問

―― 松平容保は、シュネルをよんで何をさせようと思ったわけですか。

早乙女　やはり、一つの戦法といいますか、近代戦の顧問という意味もあったんじゃないでしょうか。それと、非常におもしろいのは、シュネルは兄弟です。ヘンリーとエドワードと。ヘンリーのほうが顧問になっても、エドワードのほうは武器を運んで来ることができる。いわゆる調達係みたいな形になります。ですから、兄弟うまく呼吸を合わせて活躍したんじゃないかと思いますね。

―― 彼は軍事面でこういうことをやれということは献策してるわけですか。

早乙女　ええ、彼のほうから献策しているらしいですね。つまり、そのために材木町に火薬鋳造所なんかを造っているわけです。どれくらいの石高をもらったかははっきり出てませんが、それだけの存在ですから、そこで生活しながら、会津だけじゃなくて、米沢藩からも顧



上杉家文書　軍艦買入れなど武器の調達には、シュネル（ス子ル）が一枚かんでいた（市立米沢図書館蔵）

碧眼の会津武士〈年表〉

嘉永7（1854）	日米和親条約が結ばれ、200年以上続いた鎖国に終止符が打たれた
安政5（1858）	日米修好通商条約が結ばれ、以降、露・蘭・英・仏の各国とも同様の条約が結ばれる　安政の大獄
安政6（1859）	神奈川（横浜）・函館・長崎の三港が開港された 外国製武器の購入が許可される
万延1（1860）	この年の横浜旧居留地の借地人名簿に、エドワード・シュネルの名が見られる 12月、プロシャとの間に通商条約が結ばれる　兄ヘンリー・シュネルの来日は、この年と思われる
文久1（1861）	米国で南北戦争が起こる（～65）この戦争の廃銃は「死の商人」を通じ、日本に流れ込むことになった
文久3（1863）（1864）	12月、スイスとの間に通商条約 弟エドワードは、スイス領事館書記官となる　シュネル兄弟は、ともに書記官を勤めながら、協力して商売に精を出していた
慶応3（1867）	10月、大政奉還 11月、ヘンリーは、プロシャ領事とともに、船で大坂へ発つ　12月、徳川慶喜、大坂城で各国公使と引見　ヘンリー書記官を離任
慶応4（1868）明治1	1月、ヘンリー、会津に現われ、会津藩軍事顧問となる　9月初め、榎本武揚と会見　9月22日、会津落城　10月ヘンリー、上海に現われ、渋沢栄一らと会見
明治2（1869）	初春、ヘンリーと農業移民団の一行は、カリフォルニア州のコロマ村に到着　その農場を“ワカマツ・コロニー”と名づけ、茶の栽培などを始める
明治4（1871）	ヘンリー、コロマ村を去り、他の移民らもちりぢりになり、“ワカマツ・コロニー”は解体した　コロマ村に残った移民団の少女おけい病死す 7月14日、廃藩置県の詔書が出る

問になってくれと言われる、それから長岡藩からも頼まれる、という記録が残ってます。他にも軍艦を買って高田を衝けとか、戦費調達のために鉱山を発掘し金を鋳る策だとか、そのため県内の鉱山調査なんかにも歩き回ったりしてます。それと、新潟が重要な地点だということもしつこく言っています。会津から新潟にどんどん兵隊を送り込ませる。さらに新潟に、台場建設も品川沖にもある、あれですね。いわゆる砲台を置くところです。その台場を造れとか、いろんなことを献策してます。

—— 実際にそれは出来るわけですか。

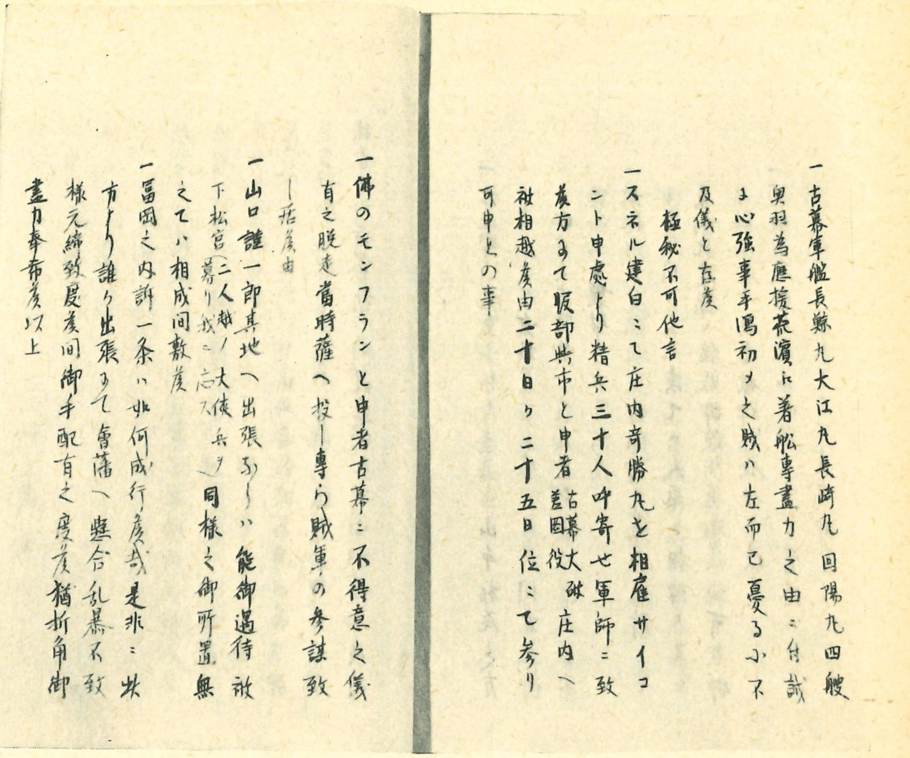
早乙女 いや、造りかけたようですが、出来なかったです。もうそんな余裕もなくなっていたし官軍はいろんな道から攻めてきましたから。それからおもしろいのはインドから外人部隊を連れてきたらどうだとか、奨めているんですよ。どうしてインドと言ったのか知りませんけど、インドがいちばん外人部隊を募集するのに近いという感じだったんでしょうかね。もちろん、オランダの東インド会社の勢力範囲だし手づるもあるから、ルートとしては考えられることですね。

—— もしそれが実現したらえらいことでしたね。

早乙女 これはたいへんな戦争になっていたでしょうね。戊辰戦争が長引いていたであろうことは考えられます。

先込め（会津）と元込め（官軍）の差でついた勝負

戊辰戦争はまた、武器の戦いであった。シュネルは、弟のエドワードとともに武器の調達に奔走する。しかし時はすでに遅い。着々と準備を進めてきた西南諸藩は、すぐれた鉄砲装備をもって、圧倒的な軍事的優位を誇っていた。


一古幕軍艦長鯨丸大江丸長崎丸回陽丸四艘
奥羽為應援荻濱ニ着船専盡力之由ニ付誠
ニ心強事ニ候初メ之賊ハ左而已憂るニ不
及儀と存候
極秘不可他言
一スネル建白ニて庄内并勝丸を相雇サイコ
ント申處より精兵三十人呼寄セ軍師ニ致
候方ニて服部典市と申者 古幕大砲差図役 庄内へ
被相越候由二十日ヶ二十五日位ニて参り
可申との事
一佛のモンフランと申者古幕ニ不得意之儀
有之脱走當時薩へ投し専ら賊軍の参謀致
し居候由
一山口謹一郎其地へ出張ありしハ能御遇待被
下松宮（二人越ノ大使兵ヲ募り我ニ応ス）同様之御所置無
之てハ相成間敷候
一冨國之内訴一条ハ如何成行候哉是非ニ此
方より誰々出張ニて會藩へ懸合乱暴不致
様元締致度候間御手配有之度候猶折角御
盡力奉希候以上

上杉家文書　シュネル（スネル）**建白の記録で、サイゴンから精兵30人呼び寄せると言ったとある**（市立米沢図書館蔵）

明治元年九月十日号の「横浜新報もしほ草」は、戊辰戦争について武器の観点から次のような鋭い観察を載せている。

「奥州よりの新報に曰く、官軍平方を取り、白石の關門外まで來り、勢に乘じ仙臺へ攻入るべき景色あり、新官軍方は追々馬手となる。只今外國公使の取扱にて、和睦の沙汰に及ばず、終には滅亡に至るべきか。當時仙臺・會津・米澤・庄内にて日本國中の官軍を相手にとり戰ふことなれば、敵に新手を入かへせめられ、力つきるにいたるべしと。外國人はこれを案ぜり。殊更南方の兵は、亞米利加製のスペンセル元込の銃を用ひ、北方の兵は古風なるゲベールを用ひ、敵十發の内僅一發を放つ事なれば、今春鳥羽・伏見の敗北もどうやうの譯なり。かく兵器あしくては勝利を得べき見据なく、日の漸々と沒く如く亡びん事いかにもきづかはし。」

—— ここに二つ鉄砲がありますが、大きい方がゲベール銃ですね。

早乙女 そうです。これは火薬を筒先きから詰めまして、弾を押し込んでやらなきゃならない先込めなんです。発射速度も遅いし、時間がかかってしようがないですね。

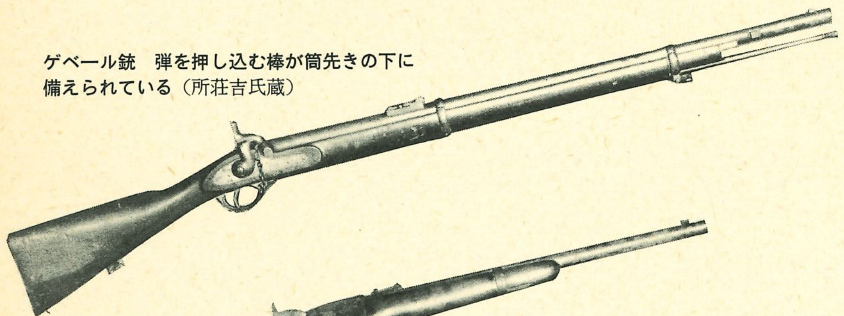
—— なるほど。もう一つの小さい銃のほうがなにか近代的な感じがしますが。

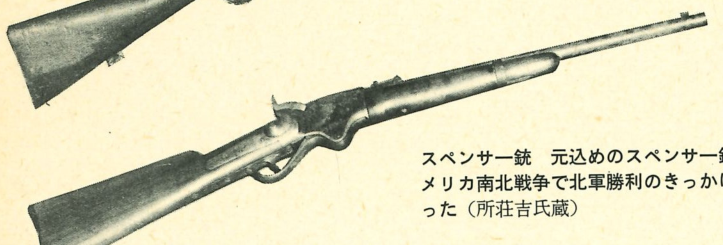
早乙女 これはスペンサー銃です。いわゆる元込め銃です。近代銃のはしりで、手元で弾をつめることができますから、先込めとは全然発射速度と頻度が違います。先込めで一発射つ間に、元込めの銃は何十発も射てるという形になります。戦闘能力が比較にならない。第一、銃身が短かくて携帯に便利ですしね。もっとも、これがさらに進歩しまして、ウインチェスターの七連発とか、ガットリングガンと言われた機関銃なんていうのも当時入ってきてたんですけどね。

—— 西部劇みたいですね。

早乙女 ええ、西部劇で使っているのと同じです。ゴールドラッシュの二十年後ですから。そういう新式鉄砲と旧式のでは、ふつうの状態でもとても勝ち目はないですね。

ゲベール銃　弾を押し込む棒が筒先きの下に備えられている（所荘吉氏蔵）

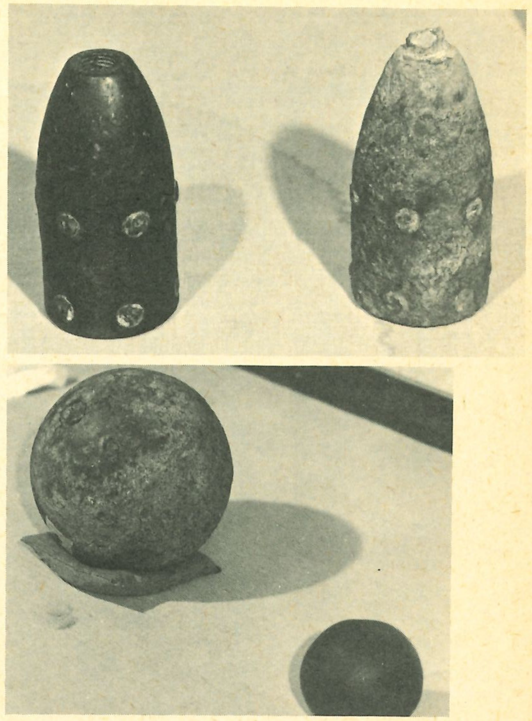


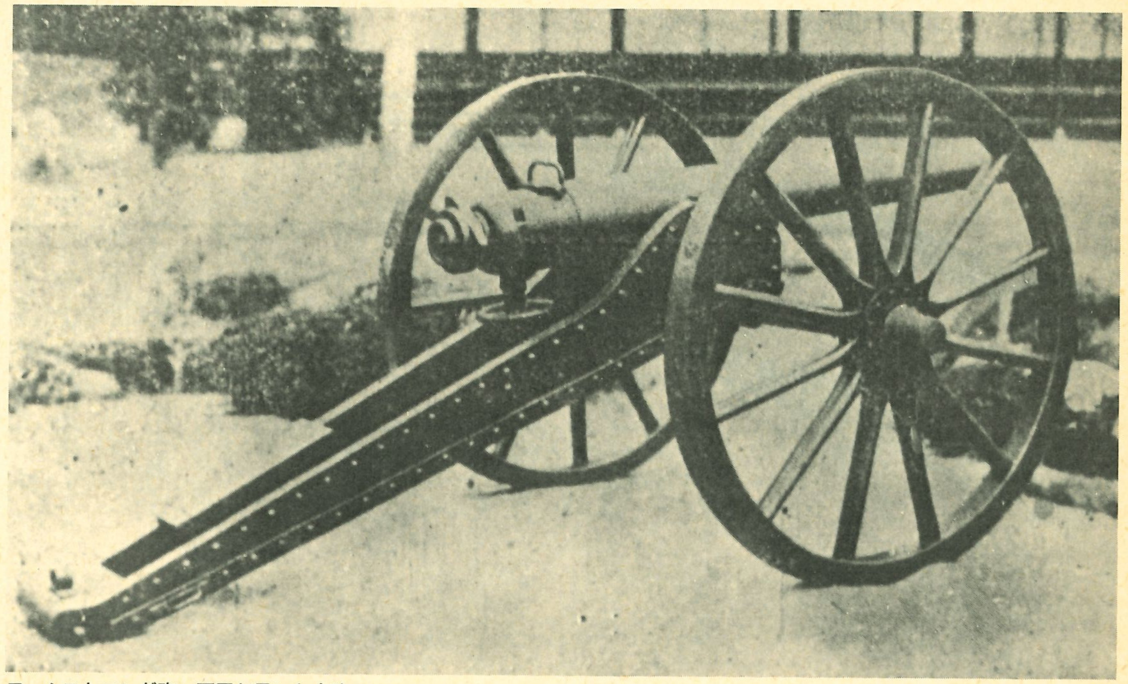


スペンサー銃　元込めのスペンサー銃は，アメリカ南北戦争で北軍勝利のきっかけともなった（所荘吉氏蔵）

――　この鉄砲をかりに旧式のと新式のとあるとしますと、会津では官軍というと叱られますが、西軍といいますか、西軍が買うか東軍が買うかが勝敗の分れ目ですね。そのうしろには財力の違いもあって、そういうことで戦争は決定的になりますね。

早乙女　なりますね。会津としては初めから戦争などする気持はなかったわけですから、西軍が攻めてくるのは避けられないとなって急に新しい鉄砲を入れようと思ったので、これはやっぱり無理なんですね。前にもちょっと言いましたが、鳥羽・伏見の戦いのあと、新選組の土方歳三は敗亡の船のなかで、これからの戦争はどうしても鉄砲だというようなことを言っているわけですね。それまで鉄砲ということは、実感として感じてなかったということなんです。武士ですから、刀でやりさえすればいいという気持だったわけです。鳥羽・伏見というと慶応四年の正月、武力で天下を取るつもりでいましたから、薩長側は長崎からすでにいい武器をどんどん手に入れていたわけです。早い話が、高杉晋作なんかは上海からピストルを買ったりしていますからね。坂本龍馬だってご存じのようにピストルをふりまわしていますからね。そこへいきますと、佐幕派側は、テロリストじゃないからピストルなんて全然持ったこともないという人たちが多かったわけですね。


鶴ケ城に撃ち込まれた砲弾（鶴ケ城天守閣蔵）


アームストロング砲　西軍が用いた大砲で，ロケット型砲弾を使い，飛距離，破壊力とも他の型の大砲に比べてすぐれていた（白虎隊記念館提供）

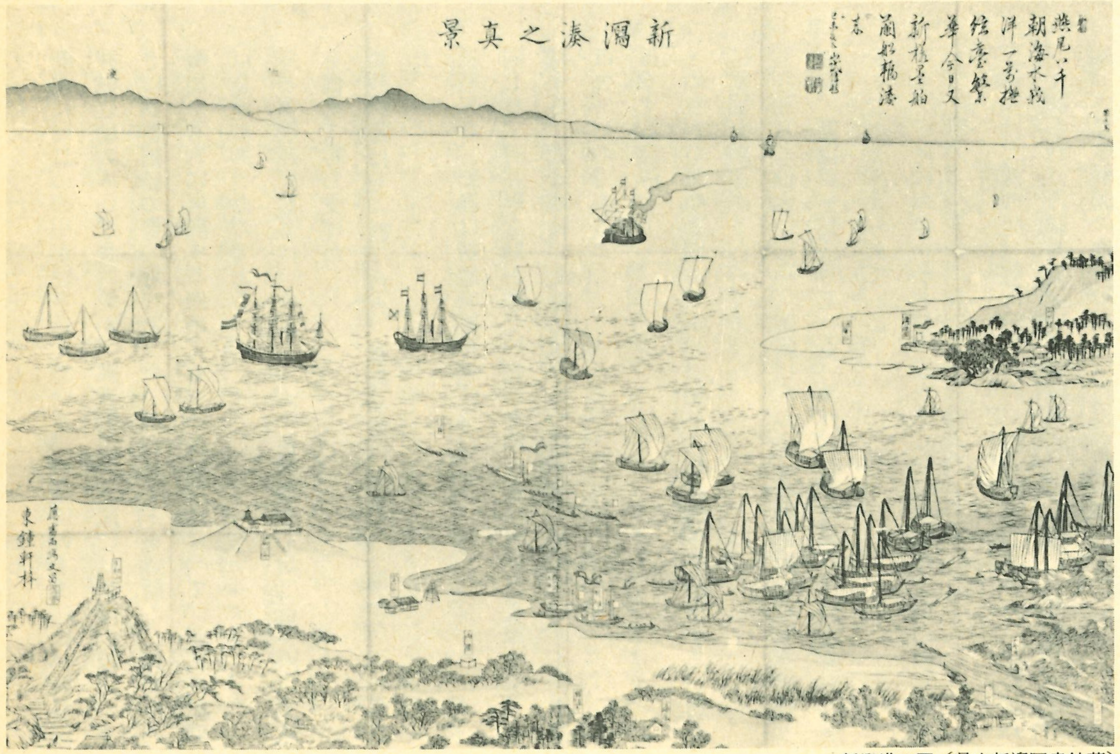
――　そうなりますと、明らかに何の武器を持ったかで、東軍・西軍の旗色というのは……。

早乙女　はじめから決定的ですね。それにもかかわらずシュネルとしては、やはりなんとかして助けようと思って――もちろん商売でもありますけどもね。だけど、そこまでまいりますと、もう商売を超えてしまうんじゃないかと思うんですよ。商売でやっているんだったら、とっくにこれ、身を翻していると思いますね。商人というのはその辺のところはひじょうにさといですから。負ける方に売り込んでももうけにはならない。彼を動かしたのは奥羽同盟を助けたい、会津を助けたいという気持でしょう。平松武兵衛という日本名前をもらったときの喜びがわかります。

会津の生きる道を求めて必死の紅毛武士

慶応四年七月二十七日、戊辰戦争の雌雄を決する戦いの火ぶたが切られた。新潟港攻防である。

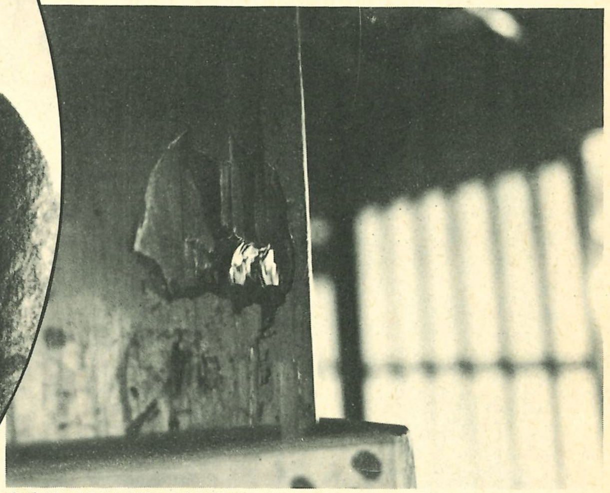
鳥羽・伏見の戦い以来、怒濤のような進撃を続けてきた新政府軍は、五月の奥羽越列藩同盟の成立以来、実に二か月、戦局の停滞を余儀なくされていた。それは東北一帯に戦線の広がった新政府軍が武器補給に悩まされている時、奥羽越同盟軍はこの新潟を通



新潟港の図（県立新潟図書館蔵）



榎本武揚は函館で徳川家臣団の総裁となり，戦争を指揮した



会津藩の滝沢本陣に残る弾痕

して補給を受け、戦力を強化していたからである。

新潟には二つの川が注ぎ込んでいる。信濃川の上流には、智将河井継之助の率いる長岡城が、阿賀野川の上流には会津が控え、まさに武器補給の要（かなめ）の地であった。そのルートを遮断し、停滞した戦局を有利に展開するためにも、新政府軍にとって、新潟港攻略は急務であったのである。

守る奥羽越同盟軍は、会津・米沢・長岡藩など兵三百、港に大砲を備えて待ち受けた。

新政府軍はその数千余人、軍艦四隻に分乗し、海から攻めて来た。

激戦三日、新潟は新政府軍の手に落ちた。

同じ日、河井継之助が激しい戦いを繰り広げていた長岡藩も、落城する。武器補給、北越諸藩とのつながり、その二つとも会津藩は失ったのである。

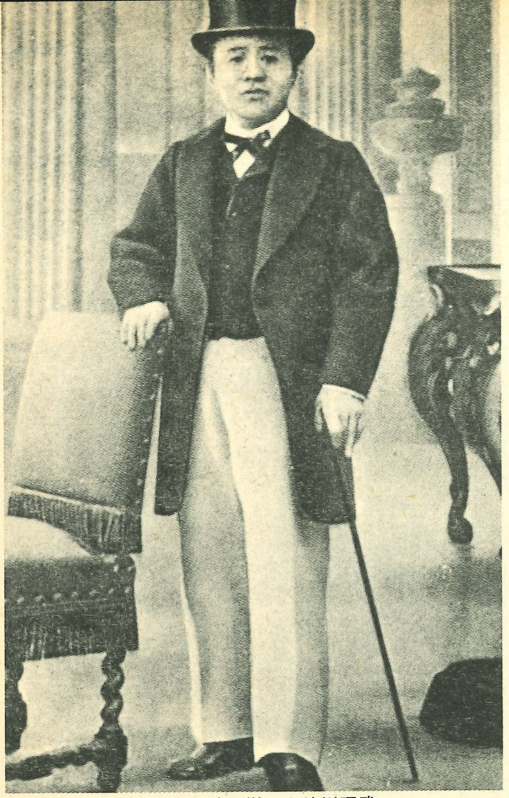
孤立する会津――

そのなかで軍事顧問シュネルは秘かに会津城下を脱出する。新たに武器を調達するためであった。

九月五日、仙台に出現、函館に向かう幕府海軍副総裁榎本武揚と会見、善後策を協議している。また、松平容保の外国亡命の献策をしたとも伝えられている。

そして、そのほぼ一か月後、シュネルは国際都市上海に姿を現すのである。

上海には、その時、徳川昭武らの一行が寄港していた。前の年パリで開かれた万国博覧会に日本代表として出席し、日本の内乱を知って急ぎ帰国の途についていたのである。



シルクハットをかぶった渋沢栄一　徳川昭武の使節団の一員としてヨーロッパの土を踏んだ渋沢は，この視察の経験を生かしてのちに実業界で活躍することとなる（渋沢秀雄氏蔵）



将軍の弟徳川昭武は，パリ万国博覧会の視察を終えて帰国途中であった（横浜市立図書館）

十月二十八日、シュネルは、一行に面会を求めた。徳川昭武は、十五代将軍徳川慶喜の弟にあたる。このとき十六歳であった。昭武の随員、渋沢栄一の日記によれば、シュネルはその夜、渋沢との間に激論をたたかわしたという。

――渋沢はそのときどんな話をしたんですか。

早乙女　これは渋沢が書いていることですから、必ずしも信じていいかどうかわからないんですが、渋沢たちの耳には、もはや会津は落城したというようなことはわかっているわけですね。

――それはパリから帰る途中にわかるわけですか。

早乙女　ええ。上海に報告が来ていたんでしょう。それでもうだめだということを言うんですが、シュネルのほうは、そんなことはないとしきりに抗弁するんです。何しろ平松武兵衛ですから（笑）。

――まだ会津は落ちてない、と。

早乙女　またよしんば会津が落ちていたとしても、まだそれで佐幕派が全滅したわけじゃない。例の函館ということもあるし、函館のほうでひとつ徳川昭武を海軍総裁にお迎えして、一種の独立国として戦ったらいい、やるべきだということを力説するわけです。徳川昭武さんは上海からまっすぐ函館へ行きなさい、と。これは空論じゃない、シュネルは自分の船を持っていますから。それを渋沢栄一はむきになって反対するんですね。だいたい渋沢はもともと武士じゃないんですから。あれは埼玉県の豪農の出で、算勘に明るく、頭が切れる人です。それが清水家（御三郷）に抱えられ、それから慶喜にも抱えられるわけですが、だいたい本質的には渋沢栄一は武士嫌いな人ですからね。金儲けはしたい、出世はしたいが、武士の世界に何の執着もな

い。武士の精神より金儲けですから、佐幕で戦うということには反対するわけですね。公子をそういう危険な所に連れて行くわけにいかないと頑強に反対するんですね。

――また実際にそこまで追いつめられて改めて函館へ行って戦っても、勝ち目はないということなんでしょうね。

早乙女 そうですね。私がおもしろいと思うのは、徳川昭武が徳川慶喜の弟だということをシュネルはじゅうぶん知った上で議論しているということなんですよ。やはり慶喜はとにかく最後の将軍ですから。最後の将軍の弟です。こんどはその次の将軍ぐらいにしようというような、そういう希望があったとすれば、これは筋が通らないことじゃないわけです。外人がそういう日本の複雑な係累関係を理解して盟主にしようというのは、相当日本を理解していたということがいえるんじゃないかと思うんです。

ミカドに対抗して戦った男の戦後

九月二十二日、会津落城。すでに年号は明治と改元されていた。敗戦という現実は、会津藩にとって苛酷であった。戦死者の遺体の収容、埋葬は許されず、家老は切腹、松平容保をはじめ藩士たちはお預けの身となって、各地に散っていった。

そして渋沢栄一と会った上海での記録を最後に、日本でのシュネルの消息は、すべて途絶える。しかし明治二年、アメリカのいくつかの新聞に突然シュネルの名が登場する。

記事は、農場建設に励む日本人移民のこと。団長はシュネル、日本の北部に長く住み、ミカドに対抗して戦った男とある。上海から日本に戻ったシュネルは、会津藩士たちを連れてサンフランシスコに向かったのである。

一八六九年五月二十七日（明治二年四月十六日）付の「デイリー・アルタ・ニュース」には、さらに次のような記事が載った。

「……三人のプリンスも、シュネルのあとを追って来るということは、噂のみではないらしい。シュネル氏は百二十人の家の子郎党を持っている。彼等は、シュネル氏を命の親と思い、彼もまた、自ら面倒を見、この国（アメリカ）の法律や習慣に従わしむべく導くのだという。彼等は決して農奴ではなく、自由民である。もし、プリンスが来れば、もっともっと沢山の移民とその家族がやってくるだろう……。」

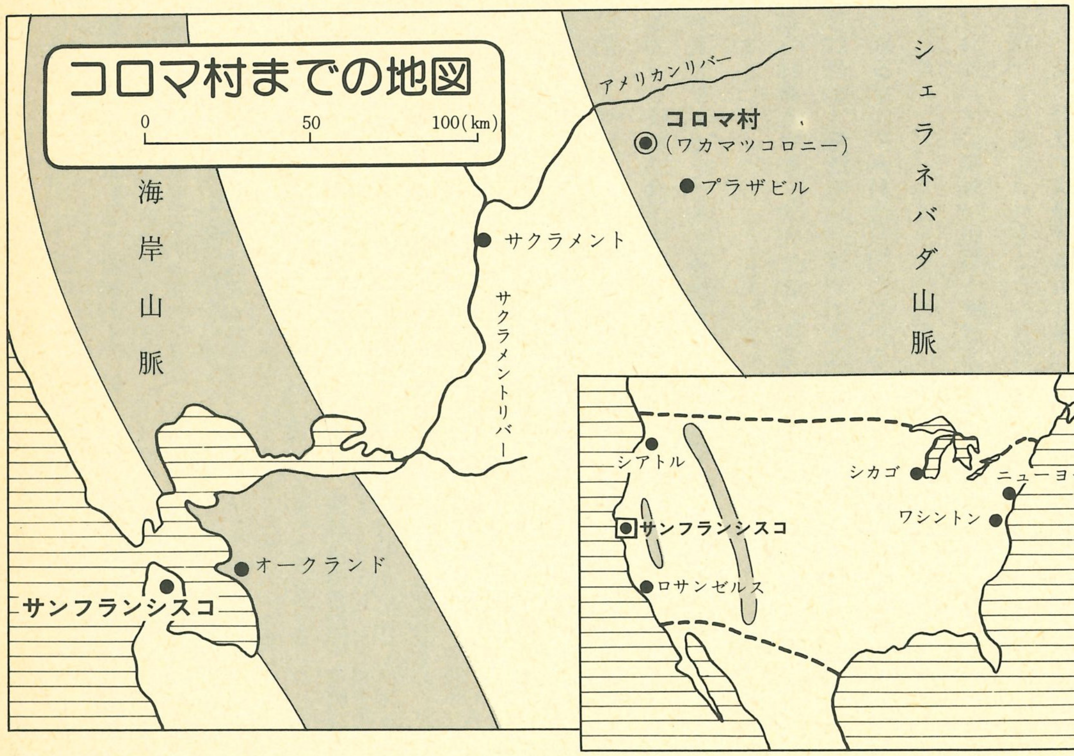
早乙女 カリフォルニアの有名なゴールドラッシュの跡、サクラメントから少し山のほうへ入って行きますと、エルドラド郡のコロマ村という所があるんです。シュネルたちはそこで開拓を始めるわけです。

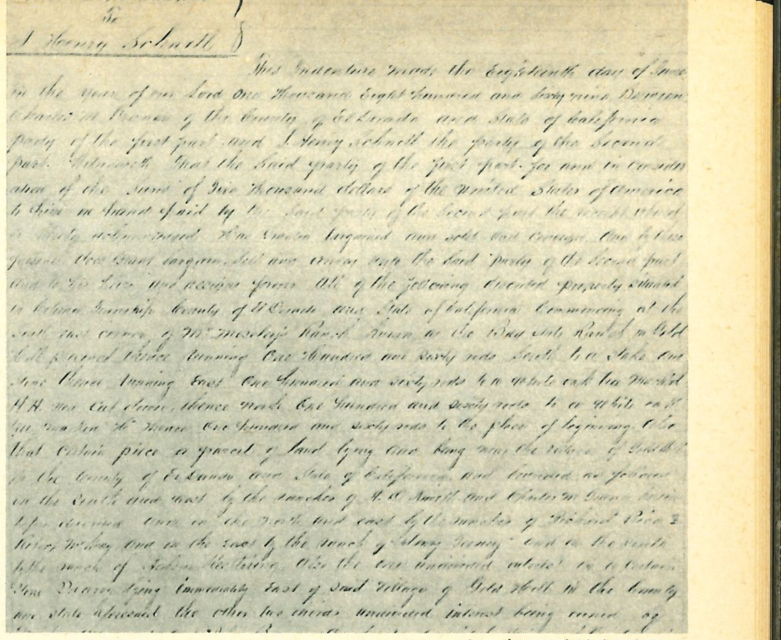
――ゴールドラッシュが終わってまもなくのころですか。

早乙女 まもなくでもないです、もう二、三十年たってますから。『おけい』という女性を主人公にした小説を書くために、前後三回現地に行って調べたんですが、金はだいたい二十年ぐらいで掘り尽くしているんですよ。今でもあの鍋で砂をしゃくって流す、あれをやると多少出て来ますけどね。わたしもサクラメント・リヴァーで金粒を拾って来ましたが、とてもペイしない。一日やったって、せいぜい二ドルくらいのものです。あちこち掘り尽くして二十年ぐらいでだいたい終わっています。ただ、ゴールドラッシュでいろんな人が居つきましたね。その中にオランダランチ――オランダの農場なんかがあるんです。その人たちをシュネルが知っていた。どういう関係だったかはわ



シュネル一行のゴールドヒル到着（ゴールドヒルに住む米人画家が描いた絵）




To
J Henry Schnell

This Indenture made the Eighteenth day of June in the year of our Lord One Thousand Eight Hundred and Sixty nine Between Charles [illegible] of the County of El Dorado and State of California party of the first part and J. Henry Schnell the party of the second part Witnesseth That the said party of the first part for and in consideration of the sum of Five Thousand dollars of the United States of America …

シュネルの土地売買契約書

かっていませんが、そこに行って新しく会津の人たちのためになんとか新天地を開拓してあげたいという気持があったと思います。

——それはどうやって募集したんですか。

早乙女　その辺の細かいところはよくわからないんですが、やっぱりヘンリー・シュネルが会津でそれだけ信頼をおかれていたということじゃないでしょうか。だいたい会津地方は全然海のない土地ですからね。それが太平洋の荒波を越えて、当時ですから一か月近くかかります。そのくらいかかって向こうへ行こうというんですから、よほどの決心とよほどの信頼感がなきゃそんな船に乗れるものじゃない。いろいろ調べてみると、これは一種の密航の形をとっています。もっとも明治二年というと、政府もあやふやですから、正式なパスポートも発行されていないような時だし、賊軍の関係者は、みんな出身地を隠して行動したのです。

女性移民第一号おけい

——そこの農場はうまくいくんですか。

早乙女　それがうまくいかないんですよ。最初は売買契約を結びまして、向こうでかなりな土地を買っちゃうんですけれども、それがどうも変な形で、あとからだまし取られるような形になるんです。もともと、公有地を私有地だとだまされて買っているんです。そういうところを見ると、ヘンリー・シュネルも、カリフォルニアは一応知っていたとしても、気候風土の理解や法律知識に欠けていたんじゃないかと思います。また、弟のエドワードの方は商売人で才覚はあるが、ヘンリーの方は人生意気に感じるなどという気持が強くて、商売下手だった。そんなところも会津武士と心が通じた理由じゃないでしょうか。

彼らは鍬だとか、竹だとか、お茶だとか持っていくわけですね。向こうでそれを植えるんですけれども、そのお茶ができまして一応サンフランシスコの品評会に出しているんです。お茶がこれだけ出来たというんで。ただ、あまりいいお茶は出来なかったらしいんですね、カリフォルニアの気候は乾燥しすぎますから、茶っ葉がバリバリになってしまう。

——そこが失敗すると、彼はその責任を取らなきゃならないということになるんですが、それはどういう結末になるんですか。

早乙女　結局仕方がないからまた日本に引き揚げてくるわけです。二年にはなっていないですね、一年半ぐらいでしょう。それで失敗して、もうだめだということで引き揚げてくるんです。シュネルと、それから会津からいっしょに行った人たちですが、そのなかで残った人も何人かいます。向こうでさっき言ったおけいという十九歳の女性が亡くなっちゃうんですけども、そのほかに向こうの人と結婚したりした人も二、三人いました。異人と結婚した人の子孫がこのあいだ名乗り出て来ましたけども。

——おけいというのは、女性移民第一号といわれている人ですね。

早乙女　ええ、移民第一号というよりも、向こうで亡くなった第一号でしょうね。まだ十七歳で行って、二年後に亡くなったわけで、大理石の墓が藪の中から発見されるまでは誰も知らなかったんです。私が調査に行ったときも、彼女の働いていた家の、ビアカンプという人の子孫ですが、なぜ百年も前の、そんな女のことを調べに来たんだ、といって不審がられましたけどね。

——ところで、日本へ帰ってきたシュネルは、そのあとどうなるんですか。

早乙女　これもはっきりしないんです。弟のエドワード・シュネルのほうは、新政府にたいして訴訟を起こしたりしていますが、ヘンリーのほうの消息というのはちょっとわからないんですよ。なかには、つまりだましたという結果になったので、斬り殺されたという説もあるんですが、はっきり証拠がありませんから、そういう話が残っているというだけですね。

——そうすると、彼は謎のように日本へ来て、そして謎のように日本のどこかで亡くなったか、あるいは日本以外の……。

会津城下のヘンな外人

「碧眼の会津武士」平松武兵衛ことヘンリー・シュネルは、会津藩主松平容保から、会津での屋敷を拝領している。建物は、シュネルのために新築されたものである。シュネルはその真新しい家に、大和撫子の妻、そして二人の間に生まれた赤ん坊といっしょに住み、何人かの下男下女をかかえていた。戦時下とはいえ、そこでは暖かく幸せな家庭生活が営まれていたかも知れない。

ところが、シュネルが会津の人たちに暖かく迎えられていたかというと、どうもそうではないらしい。

シュネルの屋敷があった居高町（現在の材木町）は、城下町の外側に位置し、当時は忍びの者など特殊な仕事についている人びとが住むところであった。軍事顧問という大層な肩書の割には、敬して遠ざけられているような按配である。

それというのも外国人といえば、こんな風に思われる時代だったからであろうか。飯盛山で自刃した白虎隊のただ一人の生き残り飯沼貞吉が、軍事教官として会津に来ていたフランス人を見たときのことを、こう回顧している。

「城下を通行する仏蘭西人を見ては、これを異人と称え、その穿ちたる靴を見て、〝異人の足には踵がないので、履物に踵をつけたのである〟と、これも真面目に語り合って居った。」

わが「碧眼の会津武士」はといえば、羽織袴のいでたちとはいえ靴をはいていたので、やはり〝踵なし〟のクチだった。ちなみにシュネルの格好を、当時の記録や会津に残る言い伝えを総合して見てみると、頭は縮れた髪を後に束ねて月代を剃っており、着物の下には洋風の衿なしシャツを着込み、時には大小をたばさんだ上から革ベルトにピストルをぶら下げていたというから、みごとな和洋折衷だったのである。

そして、シュネルが、この武士らしい（？）格好で城下を歩けばどうだっただろう。会津に残る言い伝えによれば、「異人」とすれちがうときの人びとは、道の端に避け、鼻をつまんで顔をそむけ、その上ごていねいにも扇で自分の顔を覆って、「異人」をやりすごしたという。会津に、ここまで「異人」アレルギーの強い人がいたとすると、シュネルがいくら羽織袴に大小をたばさんでも、むしろその分だけ、「ヘンな外人」だと思われたのではないだろうか。

道行く人に顔をそむけられて、「碧眼の会津武士」ならぬ、「ヘンな外人」ヘンリー・シュネルの心境やいかに。

早乙女　またドイツかオランダに帰ったかです。その辺のところは謎です。

――　おもしろい一生ですね。

早乙女　そうですね。あの動乱の間に躍った外人としてはですね。

――　あれから百数十年たちますが、同じ会津人としてシュネルへの想いというのはどんなものでございますか。

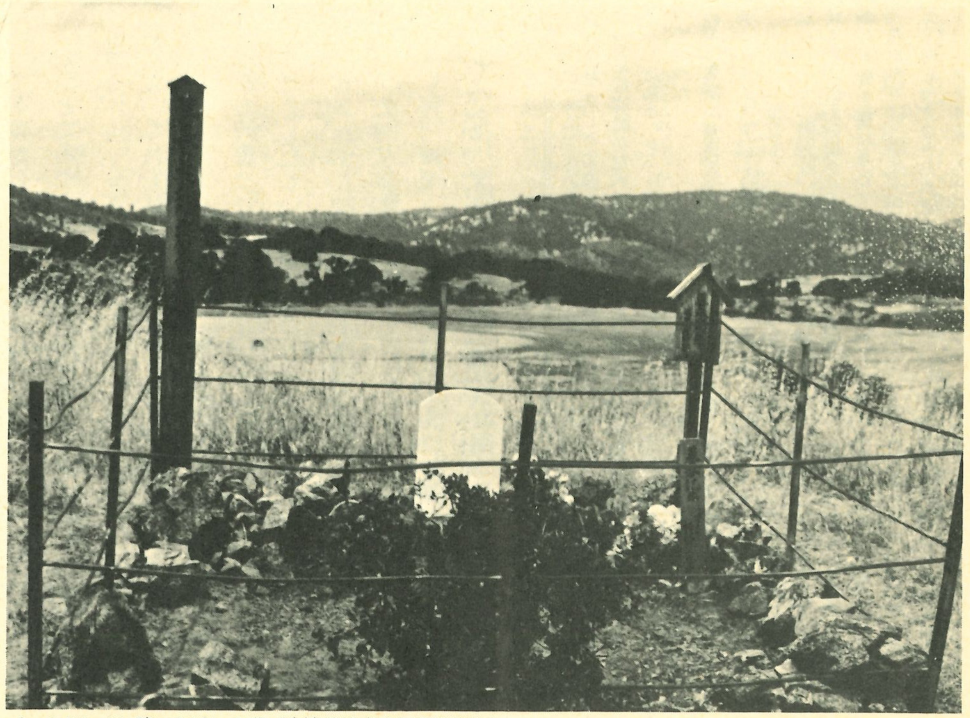
早乙女　そうですね、わたしはもっとヘンリー・シュネルという男を知りたいと思いますね。ドイツにいって何か記録が残っていないかどうか調べてみたいという気持があります。

シュネルたちの開いた農場はワカマツ・コロニーと名づけられたという。

そのワカマツ・コロニーの跡を見守るように、山の中腹に一つの小さな墓が立っている。シュネル親子とともにアメリカに渡り、異邦の地で十九歳のはかない青春を終えたおけいという女の墓であった。おけいは、シュネルが会津で住んだとき子守りに雇われたのが縁であったともいう。

明治四年十二月六日、このサンフランシスコに、新政府の特命全権大使岩倉具視をはじめとして、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文らの一行が到着した。日本の近代国家の出発を世界に告げるためであった。

それは、会津藩士たちの農場が解体し、おけいも死に、シュネルもいずこかに立ち去ってからまもなくのことである。



ゴールドヒルに建つおけいの墓（会津若松市立図書館提供）

ワカマツ・コロニーのシュネルを探る

編集部

大正五年（一九一六）竹田文治郎（雪城）は、カリフォルニア州エルドラド郡コロマ村ゴールドヒルの雑木林の奥深くに、一つの墓を見い出した。

竹田は、コロマ村に入植している日本人から、この墓のことを聞いたのである。ゴールドヒルには、古くから日本人少女の墓があるという。

米国に在ってすでに十余年を過ごしていた竹田は、この話に心を動かされるものがあった。邦字紙の記者をしているという職業的な勘が働いたのか、それとも、この十余年、移民の哀しい話を聞いていたせいか。とにかく竹田は、この少女の墓を捜してみる気になった。自分の住んでいるところからゴールドヒルまで何度も通った。自転車で、往復するのに二日がかりという山道である。その上目あての墓は、人気のない深い雑木林の中にあった。

ようやく見つけ出したその墓にはこうあった。

In Memory of OKEI Died 1871. Aged 19 years. (A Japanese Girl)

そののち、竹田が墓の立つ土地を所有しているビヤカンプ家を訪れると、当主のヘンリー・ビヤカンプ老人から、こんな昔話を聞かされたという。

ヘンリー老人が青年だった一八六九年ごろ、「松平シュネル」と名のる男に引き連れられて、日本人の一団がゴールドヒルにやってきて農場を始めた。そのなかにおけいという十七歳の娘がいた。二年ほどして農場は失敗が明らかになり、「松平シュネル」は、日本へ金策に帰ると去っていった。だがシュネルは戻らず、コロニーの日本人はちりぢりになってしまう。おけいと桜井松之助という青年は、ビヤカンプ家に引きとられ、働くことになった。

しかし、まもなくおけいは、マラリアらしい病気にかかって、その短い生涯を終え、松之助は、その後もビヤカンプ家で働き、おけいの死後十五年ほどのちに墓を建て数年して死んだ。

この昔話を聞いているときに、竹田は、ヘンリー老人から、「松平シュネル」が、日本へ帰るという時に残していったという、三つ葉葵の紋がある脇差と旗を見せられた。

おけいという薄幸の少女、三つ葉葵の紋のついた脇差と旗を持った「松平シュネル」という外人、それに彼に連れられた日本人の移民たち、謎はふくれ上がるばかりだった。

この竹田雪城から話を聞くなどして移民団の話を知ったカリフォルニア州に住む河村幽川は、昭和四年「文芸春秋」誌上に、その紹介文を掲載した。移民団については、すでに明治二年「官准　中外新聞」で日本国内で報道されていたが、六十年を過ぎて、人びとには忘れ去られていた格好である。昭和六年、この河村の文章に刺激されたのか、木村毅などの研究家がコロマ村を訪れ、調査に乗り出した。

そして、この移民団について各誌で発表され、また異国の地で死んだ少女というのが興味を引いたのか、脚色されて、『明治建設』（木村毅著　昭和十年）などの小説や、「黄金の丘」（山田五十鈴主演　昭和十三年）という映画にされたり、演劇「黄金の丘」（歌舞伎座　昭和三十四年）にされたりもした。

こうして、「松平シュネル」率いる日本人移民団は、日本国内の人びとに知られるようになった。ことに、移民団の日本人の多くが会津藩出身だとされることから会津若松市民の間で強い関心が持たれるようになった。

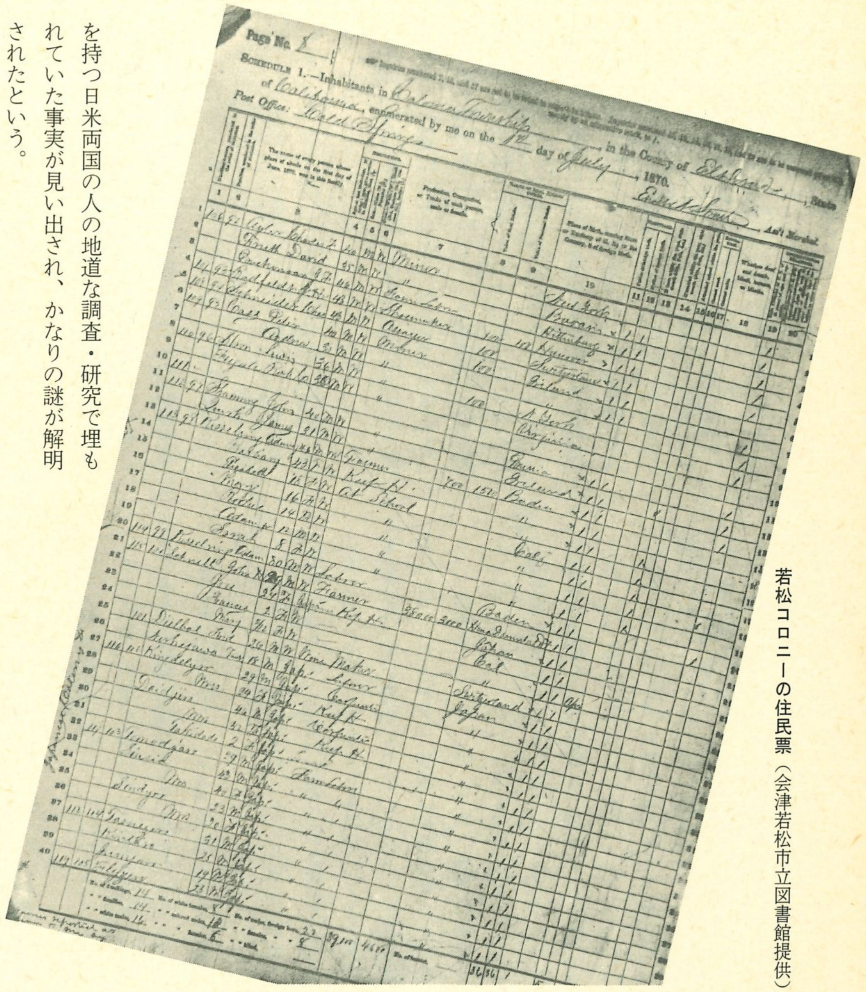
米国でも、竹田雪城の記事を契機に日系人の間に関心を呼んだ。

戦後、この移民団や「松平シュネル」に関心

を持つ日米両国の人の地道な調査・研究で埋もれていた事実が見い出され、かなりの謎が解明されたという。

そこで、この移民団研究に携わる一人である、会津若松在住の竹田正夫氏にお話をおうかがいすることにした。まず、「松平シュネル」について――

「『松平シュネル』というのは、幕末期にプロシャ領事館の書記官をし、のちに会津藩の軍事顧問となったヘンリー・シュネルのことです。


Page No.
SCHEDULE 1.—Inhabitants in
Post Office:

若松コロニーの住民票（会津若松市立図書館提供）

ところが、このことが明らかになったのは、そう以前のことではありません。『松平シュネル』は、ヘンリーの弟のエドワード・シュネルだと思われていたのです。」

竹田氏――誤解のないように付記しておくが、おけいの墓を「発見」した竹田雪城とこの竹田氏は何の関係もないそうである――の話によれば、弟のエドワードは、戊辰戦争終結時に、彼にとっての商品武器弾薬を官軍に没収された。明治期になって、その損害賠償を求める訴えを明治政府に対して起こし、死の商人として高名であったため、のちにシュネルといえば、エドワードのことだと思われたらしいのである。だから、当時の文献には、「ス子ル」などと姓を書いて名を書いてないものが多いから、平松武兵衛でさえも、エドワードだと思われていたのであった。

「しかし、河村幽川が発見した、ワカマツ・コロニーについて報道した新聞のほとんどは、Mr. Schnell などとなっているが、一つだけ J. H. Schnell となっています。そして、戦後、ファンセイヤー夫人という、おけいにいたく同情した女性がエルドラド郡の登記所で発見した土地売買の記録書に、ヘンリー・シュネルという名がはっきりと書かれていました。このヘンリーがエドワードの兄であり、平松武兵衛であるとつきとめたのは、もう亡くなられましたが、山形の高嶋米吉さんでした。」

高嶋米吉氏は、幕末の外交文書や書簡などの史料を丹念に当たり、エドワードにはヘンリーという兄がいたこと、そして、エドワードが新潟にいた同じ日に平松武兵衛こと「ス子ル」が会津にいることなどから、平松武兵衛はヘンリーであると発見したのであった。また、「松平シュネル」が米国で農場を経営している時に、エドワードは日本にいた。したがって、「松平シュネル」もまた、ヘンリーでなければならないとしている。

わが「碧眼の会津武士」がヘンリー・シュネルだとは、かくして証明された。

「でも、古い文献に依って、今だにエドワードだとしているものもあります。早乙女貢さんの書いた『おけい』は、新しい研究と史料を参考にしておられるから、ヘンリーで書いておられるが、何しろ史料が少ないので、フィクションの部分が多いです。」

その早乙女氏の『おけい』では、シュネルの一行は、チャイナ号という船で渡米し、馬車でゴールドヒルまで行くことになっている。

「チャイナ号は、その当時日本からアメリカへ渡っている船で、シュネルがチャイナ号でアメリカへ渡ったというふうに書いてある本があるから、そんなふうに発想されたんでしょうが、



けやきの木（会津若松市立図書館提供）

これは確実な史料はありません。馬車というのも、荷物があったでしょうから、馬車とも考えられますが、これもわかりませんね。小説は、その点、自由に本当のように書けますから。」

では、移民団の人数は――

「これについては、日系二世のヘンリー・タケタ氏が発見した、コロマ村の住民調査表があります。一八七〇年六月第一日曜現在のものです。シュネル一行は、一八六九年二月ごろ渡米したと考えられますから、一年余りを経たものです。ヘンリー・シュネルを筆頭に、その妻や子ら、それに日本人移民たち、総計二十二名の名前が見えます。しかし、シュネル以外おけいとか、桜井松之助など、知られている名は一つもありません。ただし、欄外に調査官の書いた但書が見えます。〝日本人についてはシュネルより聞いた〟という内容のものです。だから、書かれてある名前も、あやしいのではないか、という感じがしますし、移民の多くは会津藩士だとすると、明治政府にとっては戦争犯罪人ですから、偽名を使っていたのかもしれません。また、ワカマツ・コロニーにはシュネルとともに来た移民のほかに、第二陣が来たという説もあり、そうだとすれば、この調査の段階で第二陣が来ていたのか、まだなのかがわかりませんから、移民団の人数は確定できなくなります。」

では、ワカマツ・コロニーでのシュネルは――

「美しい妻と、その子守役をしていた美しい娘のおけいにかしずかれて、王様のようにふるまっていたと、当時少年だったケインという人が老人になって話したことを河村幽川が報告しています。」

竹田氏は、史料に忠実でなかなか慎重である。

「会津は戊辰戦争の敗戦国で、今日史料となるような文献が、みんな焼けてしまいました。それで、史料があれば、と思うことが多いものですから、自然と史料に慎重になったんでしょうか……。

次に、私がアメリカで見てきたものについて話しましょう。グラナーハウスといって、ゴールドヒルの元の持ち主の家です。そこに一本のけやきがあります。これはアメリカではない種類のもので、日本人移民が植えたものです。向こうの人は、ジャパニーズ・エルムと言っています。おけいが植えたなんて、言われてますよ。そして藤がありました。これも向こうにはありません。アメリカの人は藤棚を造らないものだから、めちゃくちゃに伸びほうだいでした。

そして、おけいの墓です。昔は、雑木林の中にあったのですが、今は雑木林がなくなって、はげた丘の上にあります。これは、今、カリフォルニア州の州指定史蹟になっています。以前私どもが背あぶり山におけいの碑を造ったら、アメリカの研究家たちが、会津でそんなに頑張ってるんだったら、負けてられないと言って、運動したんですよ。おけいの墓は、日米友好に、少しは役に立ってますかね。」

幕末に躍った死の商人

早乙女貢

幕末の戊辰戦争を決定的ならしめたものは、武器の優劣であることは論を俟たないがこの優秀な武器の大半は、舶来モノ、つまり輸入品であった。当時、すでに幕府でも各藩でも、鉄砲の開発と自家製に手を染めてはいたが、そして、相当数、製造されたようではあったが、全体から見るとしれたものだし、また実際の役に立った数は少なかった。

討幕の機運の盛り上がってきた文久三年（一八六三）から、慶応四年（一八六八）までの六年間に、大体どれくらいの鉄砲が輸入されたか判然としない。が、英国公使パークスから、英国の外相に発した書簡（明治元年の日本貿易に関する報告）の〝武器・弾薬及び軍需品でも、その取引が大きく且つ有利〟と報じられていて、データがあげてある。それでみると、小銃一万余、大砲八門、弾薬八千二百九十二箱となっている。がこれは明治元年中に横浜その他開港地を経て来たものの、つまり公式記録だから、蔭の取引はどれくらいあったかわからない。

それらのものを、参照、類推して、はじきだすと、前記の六年間に輸入した小銃は、およそ五十万丁以上、七十万丁以内ではないか、といわれている。

これらのばく大な量は、いうまでもなく、わが国の内乱に乗じての利益のためであったから、その価格も法外なものだった。

前記の明治三年の分だけで、二百七十三万ドルに及んでいる。

これらの輸入に関係した、いわゆる武器商人たちは、有名無名、雑多であった。

当初は無名のほとんど無一文の連中が、ただ同然の廃銃のようなものを運んで来たが、銃器の需要が多いとなると、領事と公使も一枚かんで、商人をバックアップした。

当時の領事や公使は、シュネルの場合を見てもわかるように、任意的な存在であり、国民の栄光と責任を背負っての行動とは思われないような者が多い。

「――其頃日本に来ていた外国商人は、皆な大したものではなかった。本国に立派な根拠を持った商人は来ていなかった。オリエンタル・バンク。ホンコン・シャンハイ・バンク。ジャーデン・マジソン。ネイズルランド・トレーヂング・カンパニー。この四つの外は皆食い詰め者ばかりのやうであった。茶や生糸の商売で、諸藩に武器や船などを売込むのが商売で、茶や生糸の商売を大きくやるやうになったのは、余程後のことである」（益田孝男『懐旧談』）とあるが、この中で認められているジャーデン・マジソン商会は、英商で一番最初に横浜へ店を開いた、英一番館だが、ここですら、一般商品の輸入で汽船、保険、金融などを扱いながら、武器の輸入も大いにやったのだ。

明治になってから生糸だけを扱ったような顔をしている連中も、大半、というより例外なく武器の輸入に携ったと見てよい。だがその扱い高が多いか少ないか、上手にやったか下手にやったか、悪どかったか、そうでもなかったか、の違いだけである。

当時輸入された鉄砲は、ゲベール、ミニエー、エンフィールド、スペンサー、スナイドル等々、判明しているだけでも、三十種に近い。もっとも、改良されて名前が変わったもの、さらに改良を重ねられたもの等あるにしても、多様であったことは否めない。これらの小銃の価格だが、大体、メキシコドルで十ドルから二十ドルくらいの幅がある。

文久三年からの六年間に、どんどん改良進歩していったので、値段も変動が激しいのは当然だが、利潤もまた大きかったろう。

会津若松の鶴ケ城が攻められたとき、西軍のメリケン・ライフル砲二門、ならびに四斤半施条砲一門の威力に、会津武士らは地団駄踏んで、

「薩長真田に大砲なくば、西軍破るも何のその」

と、いきまいたという。真田は、ペルリ再訪のときからすでに、オランダ式野砲などを入手していたくらいだ。

日本の戊辰戦争に、ばく大な銃砲が輸入されたのは、アメリカの南北戦争の影響が大であることはいうまでもない。南北戦争の廃銃が、大いに、死の商人たちを喜ばせたのだ。

「――去年（明治元年）の戦争に諸大名つまらなく数万両の金を出し銃砲を買い入れ、用い方も知らず、其金は皆役人が君侯を欺き、自分の懐中にちゃくぼくなし、其金高の品物は買わず、兵隊の勝つも負けるも死ぬのも構わず、只安き品のみ買入れ、君侯をだませしこそ、苦々しき事どもなり」（「もしほ草」第三十四編）

とあるのを見ると、実際に藩から支出した金は、取り引き額よりも、ずっと上回ることになる。

「――薩摩・長州の如きは、彼の戦争の後は忽ち外国人につきて〝ライフル〟砲を用ざればかなわぬ事を学び、アメリカ内乱中発明せし尤も結構なる武器を買入れ〝ケーベル〟といふやくざものを買入れたる奥羽の太名を散々と追散せり」（同上）

と、武器の優劣が、戊辰戦争の勝敗を決定したことを記している。

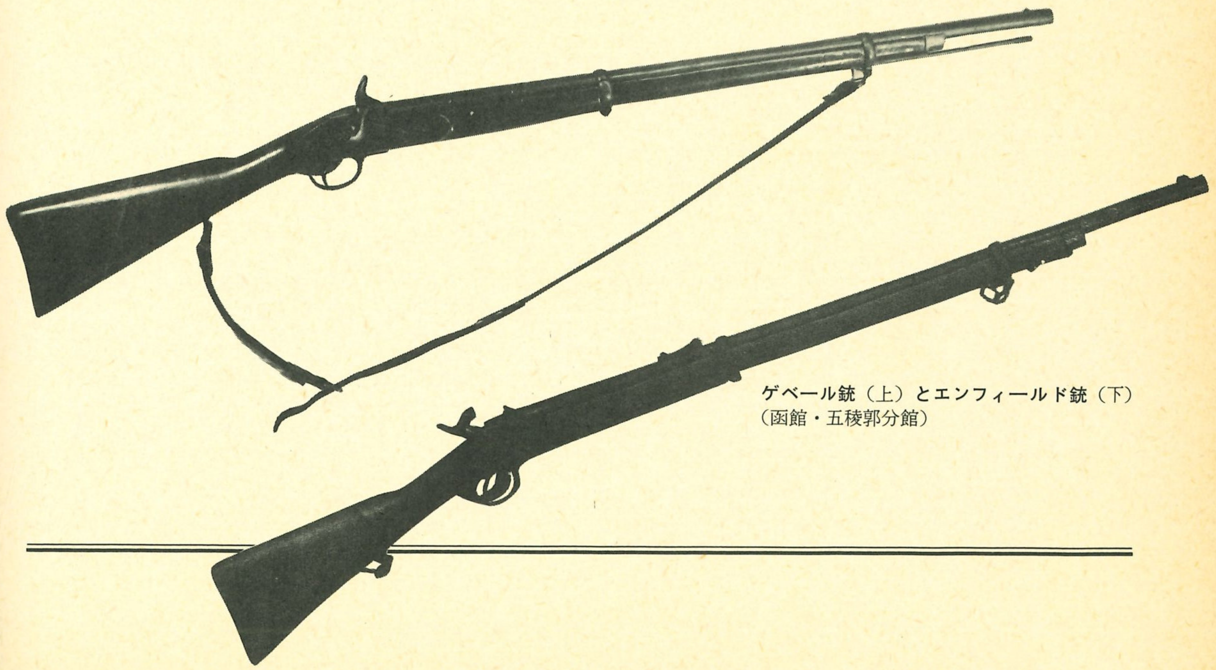
死の商人として、エドワード・シュネルの名が高いのは、東軍にも売ったことと新潟へ迎えた汽船に満載した武器を西軍に没収され、戦後、その返還を裁判で争ったからにほかならない。もっと悪徳な者が多かった。

亜米三といわれるアメリカ三番館のR・スミスや蘭八ことオランダ八番館のヘッセ・リリアンタルなども武器で大いにもうけた口だ。

また横浜甲九十番の総支配人であった英人ウォーターなどは、馬車をかって奥州を駆けめぐり銃器を売りこんだ。この男は日本語がぺらぺらで、楠正兵衛と名乗っていたというから、ヘンリー・シュネルの平松武兵衛と好一対かもしれない。この男の死の商人ぶりは一時的ではない。明治になってからも、次々と売りまくっていたが、戦争が終わったことで、他の連中が生糸や平和商品に切りかえても、彼はやめなかった。その倉庫には、常に銃器が積まれていたが、大正の十二年の震災まで、倉庫の奥には戊辰戦争当時の古い型の鉄砲が転がっていた。そして、その商会の門前には、古い大砲が鎖をかけて据えつけてあり、看板の役目をなしていたというほどだ。

ともあれ、戊辰戦争の悲劇も、死の商人たちの跳梁も、銃器の改良による長足の進歩も、南北戦争に負うところが多い。もしも南北戦争なかりせば、戊辰戦争における彼我の銃砲による死傷者の数は、けた違いに少なかったのではあるまいか。したがって、死の商人の利益も、また。

（作家）



ゲベール銃（上）とエンフィールド銃（下）
（函館・五稜郭分館）

横浜開港夜話

石井光太郎

開国への舞台となった漁村横浜の海岸に急造された応接所（日本側では通称御仮屋、アメリカ側では条約館とよんだ）で、日米和親条約が締結されたのは安政元年三月三日（一八五四年三月三十一日）。当日は曇のち晴で南風の天候だった。村役人石川半右衛門も応接の役人にまじって、上陸したアメリカの高官に扇面に記念のサインをたのんだ。中国人羅森を介して。この扇面は大正十二年の震災で焼けてしまったが、ペリー自筆の扇面といわれたもので、裏面に「四海之内皆兄弟也如見亜美理駕各国人宜恭迎之　甲寅三月初六書於鮑丹火船之上　合衆国人美士被理」と意訳されている。実物は焼けてしまったので見ることが出来ないが、写真で見ると扇面の表のサインには March 3rd 1854 とよみとれる。この日は陰暦の二月五日に当たる。まだ日米会談は双方了解の段階に入っていない時である。このサインの日付の一八五四を安政元年、当時の嘉永七年とよみかえないとあわなくなる。

サインをもらった半右衛門の兄は徳右衛門といい、横浜村の名主で舞台の裏方をつとめていた。無事条約もむすばれ、所期の目的を達したペリー一行は帰国にさきだち三月十日、民情視察のため横浜村近傍をおとずれた。椿さく丘のふもと、増徳院（その境内は今、外人墓地になっている）の近く、名主徳右衛門宅を訪問、酒肴の接待をうけた。女房かつと妹のぶが手伝った。一家の態度は異国人に対して少しも卑屈ではなく平常どおり振舞った。

ペリーに会った日本人は多くはいない。数少ない日本人の一人として徳右衛門一家はペリーから祝杯をうけた。一家の健康を祝して、『日本遠征記』には訪問の様子が記されている。ついでに村役人の筆記を紹介するが、きわめて簡単。「……徳右衛門庭上の松を見物いたし当家の座敷にて一時ばかり休息す……座上の異人茶菓子酒も猪口に二つ位呑もあり、焼餅も食、家の主し、又内室にも対面いたし、ペルリより巡席に一々名を申し……各々丁寧に暇乞して立出候」

横浜でむすばれた日米和親条約が神奈川条約とよばれているように、当時の横浜は戸数百にみたない農漁村で、それにひきかえ神奈川は東海道の宿駅、戸数千五百、開港場をアメリカが神奈川をと主張したのはもっともなことであった。

安政六年（一八五九）三月、外国奉行は戸部村の願成寺を宿舎にさだめ、開港場の施設の具体化につとめた。奉行所、運上所、波止場、役宅、新道、橋など重要な施設は開港の期限の六月には、ほとんど完成をみた。

横浜村の海岸のほぼ中央に運上所をおき、西を日本人商業地区、東を外国人居留地とした。しかし、みなと町の都市計画に社交場（異人遊興場）をのぞくわけにはいかない。一説によるとオランダ人からの示唆があったという。

横浜に遊郭を設けることは幕府の既定方針であったはず。外国人の神奈川居留を思いきらせ、横浜を繁栄させるもくろみであって、その規模は江戸の吉原をまねし、外国人のあつかいは長崎の丸山にならうこと、場所は取締りに都合のよい海岸からはなれた市街（日本人街・外国人街）予定地の先の沼地一帯を指定（現在の横浜公園、市民球場）、出願の形式で品川宿の旅籠屋（当時はめしもり女をおいた）岩槻屋佐吉、神奈川宿の同業者鈴木屋善二郎など五人に一万五千坪を貸し町づくりをさせた。



岩亀楼で踊り見物をする異人たち（横浜市役所提供）

安政六年三月に出版された一枚刷の横浜の案内図（「御貿易場」）に「太田新田、遊女屋丁」と記し「遊女町一万五千坪」と説明をくわえている。このことは横浜の都市計画には遊女町の建設が含まれていたことをこの時点で公表したとみてよい。

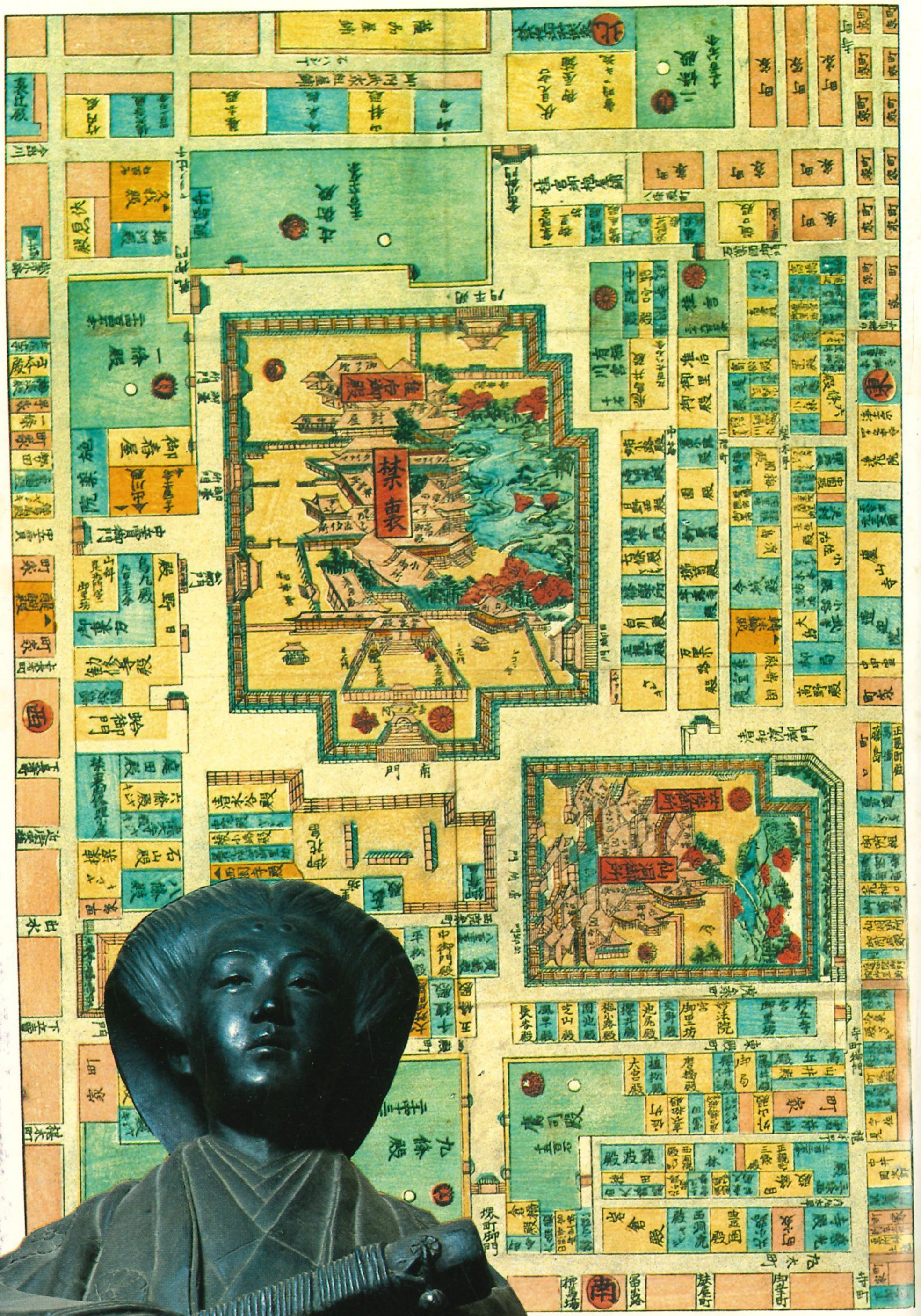
佐吉らが出願したのは三月で、期限は二か月、開港の月の前月までであった。しかし沼地の埋め立てで予想以上の難工事となり経費も多額にのぼった（佐吉らは予定地の変更を願ったが不許可）。期限の五月末になっても完成の見通しすらつかなかった。

開港の期日がすぎ、六月七日にはオランダ人から遊女町開業のさいそくがあった。神奈川奉行は佐吉らに対し督促するとともに応急の対策として運上所（現在の神奈川県庁舎）のちかくに建設してあった外国人用貸長屋三棟を仮営業所として使用することをみとめ、急場のため遊女は神奈川宿をはじめ川崎・保土ケ谷・戸塚・藤沢などの宿から人数を割あて、飯盛女を集めた。岩亀楼・出生楼・五十鈴楼・泉楼・保橋楼の五軒が十日開業にこぎつけた。外国人の来泊をおさえるため七月神奈川宿で飯盛女をかかえることが禁止された。

仮宅営業のかたわら岩槻屋佐吉が代表となって本格的な遊女町の建設は昼夜兼行でいそがれ十一月十日、一応の竣工をみた（完工は翌万延元年閏三月）。遊女町はみよさき町（港崎）と命名された。佐吉は名主役を命ぜられ、その特権をたもった。この佐吉が経営したみせが有名

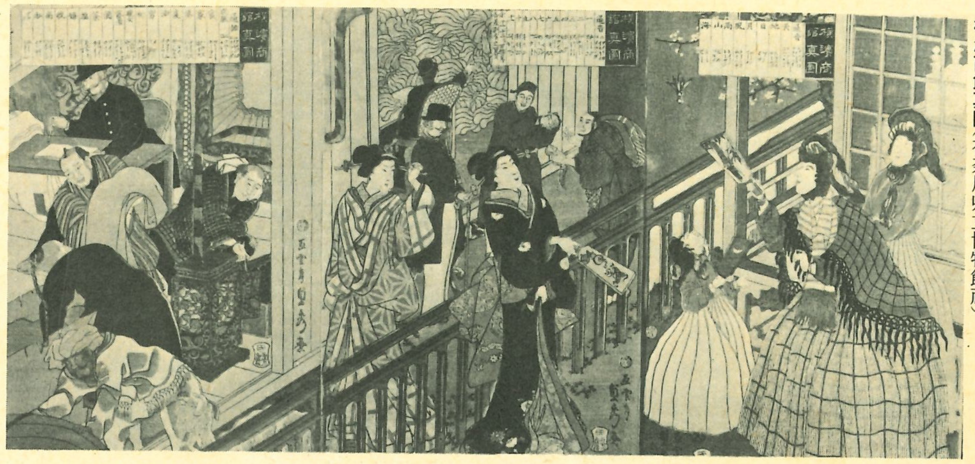
時代が生んだ政略結婚

万延元年、幕府は朝廷に対して、皇女和宮の降嫁を願い出た。時あたかも、尊王攘夷の嵐が吹き荒れるさなかであった。幕府は和宮降嫁によって、この難局を切り抜けようとした。この時、和宮十五歳。時代の流れに押し出されるような孤独な生涯が始まる。



内裏之図（京都・大塚隆氏蔵）


静寛院宮（和宮）像（芝増上寺蔵）と静寛院宮の自署（岩倉公門跡保存会）


横浜商館真図（神奈川県立博物館蔵）

な岩亀楼である。

「らしゃめん」という言葉は開港後、横浜で用いられた異人の妾（めかけ）となった女をさす。洋妾・洋娘・綿羊女・綿羊娘・羅紗女・羅紗娘などとあて字する。外国商館では単に「むすめ」とよんでいた。

「らしゃめんという意味は……よく敷物か何かに使ってありますラシャは暖かいでせう、その意味を取って女を抱くから、らしゃめんといったんだろうと思います」と昭和十一年、当時七十三歳になるハマの古老が、ある座談会で記者の問いに答えている。が幕末の出版物『横浜奇談』には「異人の妾となりし女をさしてラシャメンと唱るなり、此名を負し元というは、異人、彼国より連れ来たりしラシャメンといふ獣あり、其性、素直にしてよく人の馴したしむものなり、船中にてマドロスども煩悩きざしたるときは、此獣をとらへておかす事ありとぞ、此故に異人に犯さるるの義よりしてラシャメンといいならはせるも理なり」とみえているのが語源になろうか。異人風俗の紹介を目的とした「横浜絵」（港崎町が完成をみた万延元年から刊行される）のうちに、右に述べてある動物の紹介がある。二代広重の「横浜売物図会之内」（万延元年閏三月）に、「ラシャメン——此毛を俗にらしゃになると云伝ふなり」、また十月に刊行された「万国入船寿語録」に「らしゃめん」と題して、遊女（洋妾）と動物を対比して出している。

横浜の開港以前、鎖国の窓であった長崎。そこの丸山の遊女が出島のオランダ屋敷に出かけた。オランダ行とか出島行とかいわれているが、開港になると長崎の例にならい、遊女の外国人行がみとめられた。

日本人・外国人ともに遊興できる港崎町で「異人にいづる、らしゃめん女郎は別にあるなり。異人見立、気に入候へば、屋敷（異人）連れゆき、一夜洋銀三枚なり、尤此内にて岩亀楼への割駕籠ちんまで持切なり、此外屋敷に居るめかけもあり」（『珍事五か国横浜はなし』——文久二年刊）と記しているように、岩亀楼の特権の一つに「らしゃめん鑑札」の発行権があった。遊女の異人行は岩亀楼の特権で岩亀以外のところでは歩合金を払い、また遊女以外での異人行は、一度岩亀の遊女となって、名主佐吉から鑑札を下付されなければ許可されなかった。これを商館行といった。

仮宅時代は商館行も岩亀の特権でなかったらしく、最初の商館行遊女は仮宅営業開始の翌日、安政六年六月十一日、善二郎召抱えの亀島、初菊の両人であろうか。一か月十五両。ゆく先は恐らく神奈川在留のオランダ人かと思うが確証はない。

らしゃめんで有名なのは、オランダ領事ポルスブルクに見染められて、素人娘から岩亀楼抱えの遊女長山という源氏名をなのった、本町二丁目の文吉の娘おてふ（二十一歳）で、万延元年十月八日から月ぎめ十五両で領事館邸（当時神奈川長延寺）に通った。

（横浜市史編集室）



四季花鳥図（京都・宝鏡寺蔵）

孝明天皇像（京都・泉涌寺蔵）



兄の孝明天皇は、幕府の執拗な要請を断固として却下し続けたが、度重なる幕府の催促に、和宮は兄の苦衷を察して、将軍徳川家茂のもとについだ。

いま、京都の宝鏡寺に、和宮愛用の遺品「四季花鳥図」が残されている。

人形寺として有名なこの寺には、幼少の和宮がよく遊びにやって来たという。女ゆえに悲劇の生涯を歩まねばならなかった宮は、絵の中の無心な小鳥や花の美しさに、ひとり悲しみを慰めたことであろう。





将軍家茂上洛よりの復路の行列は蜒々と…
（東都高輪風景・貞秀筆・浅井コレクション蔵）



狐の嫁入り図（国芳筆・浅井コレクション蔵）

空前絶後、降嫁の行列

和宮降嫁の行列――それは空前絶後の大行列であった。中仙道を下っていった行列の長さは、延々五十キロ、一つの宿を通過するのに四日かかり、行列が江戸までに動員した沿道の民衆は六、七十万人であったという。

ところで、この和宮降嫁を当時の民衆はどのように見ていたのだろうか。ここに、浮世絵師国芳が描いた「狐の嫁入り図」という奇妙な絵がある。貴族のなりをした狐たちは何を意味しているのだろう。

和宮降嫁から二年、将軍家茂は尊王攘夷で揺れ動く京都に出かけていった。今や政局の中心は、江戸から京都に移っていたのである。

静寛院宮御一周忌に用いられた皇族用の盆提灯（京都　宝鏡寺蔵）









夫家茂将軍と並び葬られている和宮墓所（芝・増上寺）

徳川家ゆかりの女性たちの墓が多いという満徳寺は、有吉氏の仮説では和宮と関わることになるのだが…（左上下　太田市・満徳寺）



徳川家代々の墓のある芝増上寺

めまぐるしく政局が動く中、慶応二年、家茂は二十一歳でこの世を去った。夫の死後、静寛院宮と呼ばれた和宮は、鳥羽・伏見の戦い以後、幕府と朝廷との板ばさみの中で、徳川家存続のため奔走することになる。かつての許嫁であった有栖川宮が東征大将軍として江戸に乗り込み、やがて明治となった。そして、時代の波にもまれ続けた和宮は、明治十年、三十二歳でなくなった。その亡骸は遺言により増上寺に眠る夫家茂のかたわらに葬られたのであった。

しかし、和宮にまつわる謎は深い。政略結婚の犠牲となった和宮は、はたして替え玉でありえたのだろうか。

皇女和宮の謎

有吉佐和子
鈴木　尚

■ありよしさわこ
作家　和歌山県生まれ『華岡青洲の妻』で第6回女流文学賞受賞　現在文芸家協会理事　著書『紀ノ川』『出雲の阿国』『恍惚の人』『和宮様御留』(講談社)『複合汚染』

■すずきひさし
明治45年埼玉県生まれ　成城大学教授　解剖学・人類学　著書『化石サルから日本人まで』『日本人の骨』(岩波新書)『増上寺・徳川将軍墓とその遺品』(東大出版会)

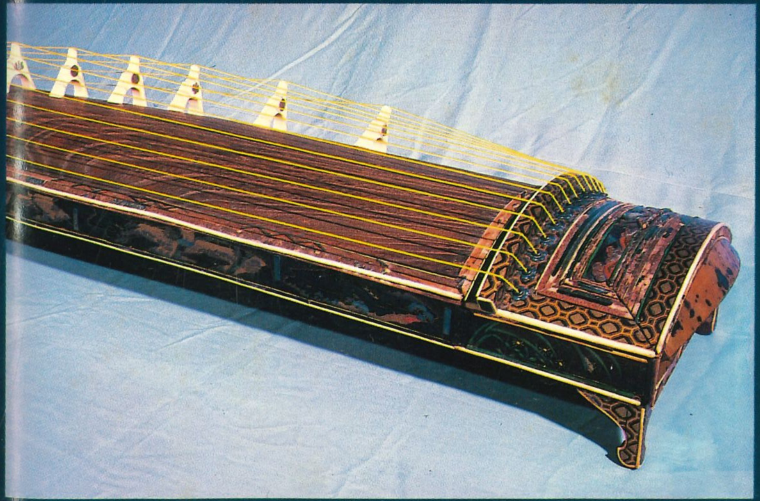
NHK 中田整一

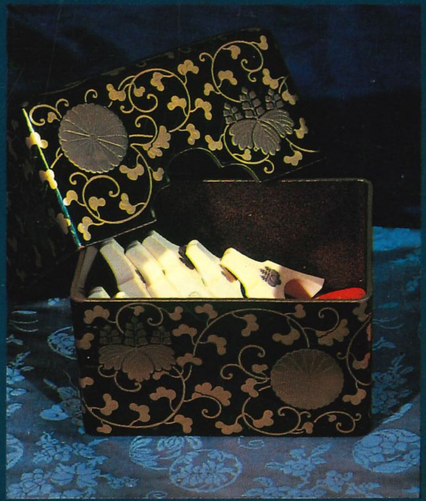




和宮遺贈の御懐剣
(日本刀剣協会蔵)

静寛院宮御着用の絽地束ね花模様小袖（サントリー博物館蔵）





和宮御愛用と伝える御琴(左)と御琴柱(右)（村井資長氏蔵）

謎だらけの和宮降嫁

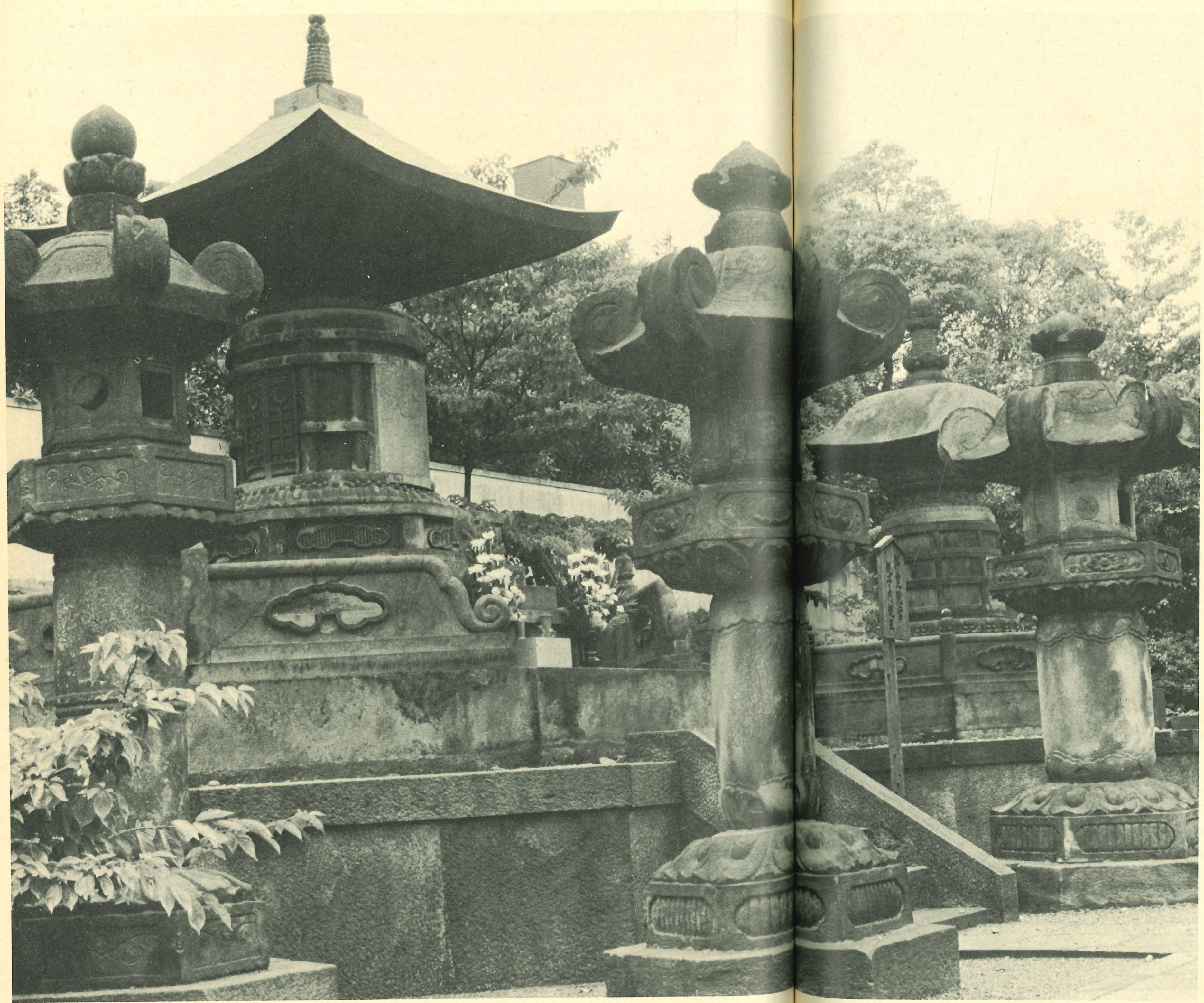
——有吉さんご自身の和宮替え玉説を決定的にしたのは何でございますか。

有吉　最初、七、八年前に、増上寺に納まっている和宮様はほんものの和宮様ではありません、ほんものの和宮様は私の家で亡くなられましたと言って、幕末に高田村の名主だった新倉家のおうちの方がおみえになって、私に教えてくだすったのです。そのときは私は信じませんでした。そんなばかなことがと思ったんですけれども、ただ、その後いろいろ気にしていますうちに、変だな、変だなと思うことがありました。和宮様に関しては非常に謎が多いのです。

勝海舟の『氷川清話』の中に、和宮様が将軍家茂と天璋院と揃って御浜御殿にいらしたときの話が出てきます。宮様のお履物だけ上の段にあって、家茂の草履が沓脱石(くつぬぎ)の下にあった。それを見た宮様がピョンと飛び降りてご自分の草履と家茂の草履を置きかえたというものです。これを読んだとき、すぐ変だと思いました。侍女が大勢いるというのに、宮様ご自身がなさるはずがない。宮様育ちの方が、出来るはずがない。第一、宮様はおみ足が悪い。ピョンと飛び降りることなど出来るはずがない。まあ後になって、天璋院も宮様も、御浜御殿にいらしたことがないことがわかりまして、勝海舟の話がでたらめだったのがわかりましたが、きっかけはこの逸話でした。

決定的になったのは、あの有名な徳川家を救ったと言われる手紙が武家言葉で書かれていることと、あの水も漏らさぬ論理的な文章と、宮様の残された短歌が、あまりにか弱いのと、別人が書いたとしか思えなかったのです。

家茂の死後の、「静寛院宮様御日記」も、急に文体が変わりますし、

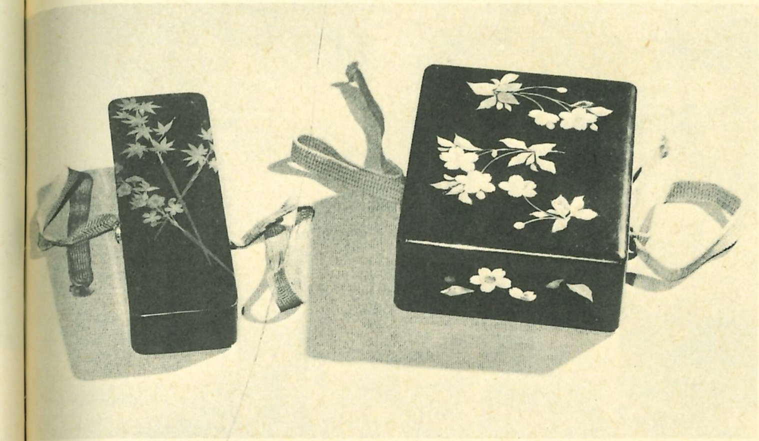

徳川家茂と和宮の墓がある増上寺の徳川歴代将軍の墓地

徳川家瓦解の前後は、はっきり武家言葉で、京都からいっしょにお伴した女房の文章でさえなくなっています。それから、家茂の死後、宮様は一時期京都に帰りますが、あんな貞女と言われている宮様が、家茂の一周忌に、増上寺の法要に侍女を代参させ、ご自分は病気でもないのに京都に残っています。妙なことばかりです。

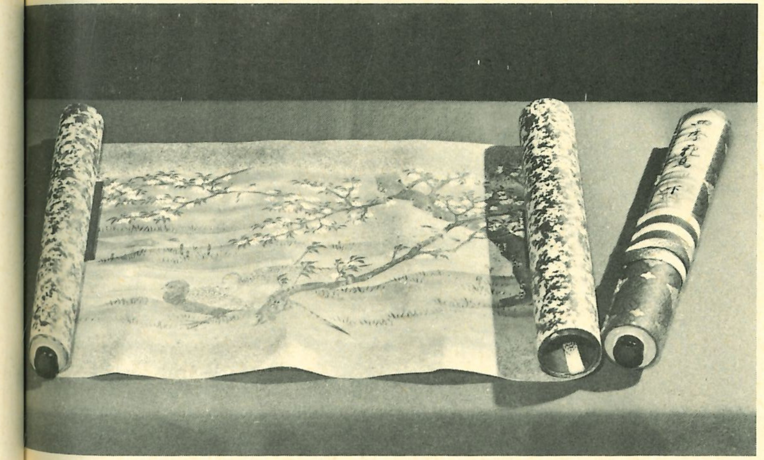
徳川家の菩提寺・増上寺に伝わる等身大の和宮像。

〝増上寺に眠る和宮は替え玉である〟——作家の有吉佐和子さんは、東京のとある旧家の言い伝えを手がかりにこのショッキングな仮説を発表した。

今日、和宮には、生前の姿を伝えるこの像をはじめ、正史として数多くの記録が残っている。このようななかで、替え玉説の推理はどのように成り立つのであろうか。



宝鏡寺に遺る和宮のお手文庫



和宮が終生秘蔵した四季花鳥図（宝鏡寺蔵）

人形で知られる京都の宝鏡寺——。幼い日々、和宮はこの人形寺に遊んだという。

弘化三年（一八四六）、和宮は仁孝天皇と典侍橋本経子の間に生まれた。だが、それは不幸にも父天皇が崩御されてまもなくのことであった。

いま宝鏡寺には、和宮遺愛のいくつかの品が残されている。なかでも和宮が終生秘蔵した「四季花鳥之図」。

幕末動乱、女ゆえに悲劇の生涯を歩まねばならなかった宮は、絵の中の無心な小鳥や花の美しさにひとり悲しみを慰めたという。

和宮は六歳で有栖川宮と婚約した。だが、その人生に思わぬ破局が訪れた。

万延元年（一八六〇）、幕府は突如朝廷に対して和宮の降嫁を出願した。

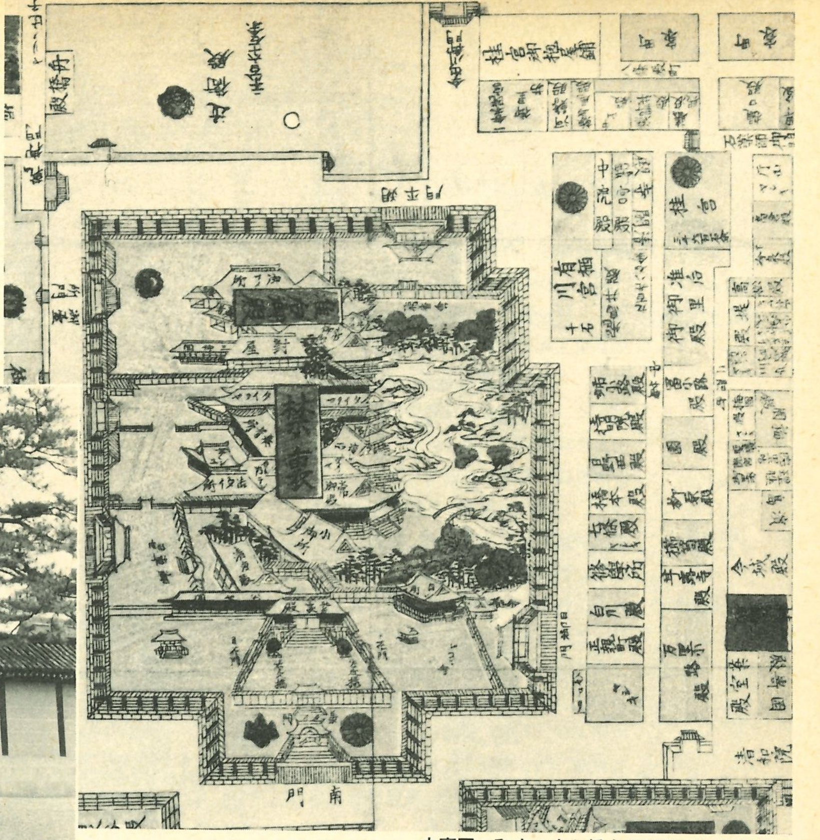
時あたかも尊王攘夷の嵐が吹き荒れるさなか、幕府は、和宮降嫁、つまり公武合体策によってこの難局を切り抜けようとした。時に和宮十五歳、相手は同年の十四代将軍徳川家茂であった。しかし時の孝明天皇は、執拗なる幕府の要請を断固として却下した。

——それはそうせざるをえない事情が、当時の幕末にかけての情勢のなかであったということでございましょうか。

有吉　そうですね。強烈に和宮自身がお嫁には行かないと言いはっていますし、孝明天皇さんも、自分の妹だけれども腹違いであるし、だから先帝の姫宮であるということでたいへんご遠慮になっています。そしてこわごわいろいろと説得をするんですが、和宮自身は行かないと言い張って聞かないんですね。そういう事情がございますし、和宮様の降嫁の十五年前、家茂将軍の前の代ですね、十三代家定将軍に一条家から替え玉が入っていまして、これは公然の秘密どころか公開されています。その十五年前に替え玉をした人というのが、ちょうど和宮を生んだお母さんの叔母さんにあたる人なんです。私の小説では勝光院という薙髪してからの名前で登場しますが、彼女は将軍家定の時代は姉小路（あねがこうじ）という名で大奥に勤め、老中の水野忠邦と同格の権力を持っていました。十三代将軍は配偶者運が悪く、最初の奥さんは鷹司家から迎えていたのですが、その人が亡くなると、姉小路が京都へ行って一条家の明君（はるぎみ）というお姫さまを連れて来るんです

皇女和宮の謎〈年表〉

弘化3(1846)	閏5月10日、和宮誕生
嘉永4(1851)	7月、有栖川宮熾仁親王と婚約
安政5(1858)	6月、日米修好通商条約調印　紀伊慶福（のちの家茂）将軍継嗣となる　7月将軍家定死す　8月、朝廷は、一橋慶喜を将軍継嗣とするように幕府にほのめかす 井伊直弼、安政の大獄で一橋派を弾圧　9月、彦根藩士長野主膳は朝廷対策として皇女降嫁を建言 10月、家茂将軍となる
安政6(1859)	4月、和宮は、明年冬に有栖川宮熾仁に入輿することが内定する
万延1(1860)	4日12日、京都所司代酒井忠義は幕命により、和宮降嫁を出願する 5月4日、天皇、請願を却下、11日再願、19日却下　6月3日降嫁の請願　20日、天皇は、攘夷を約束の上請願せよと答える　7月4日再請願、しかし攘夷の具体策が提示されていないため、18日却下 29日、幕府は攘夷実行を約束し降嫁の切願　8月8日、和宮は降嫁を固辞　13日、和宮の代わりに寿万宮降嫁を天皇が思召　15日、和宮は橋本家の行末を慮り降嫁を承諾　10月、幕府の正式請願に対して勅許が下りる
文久1(1861)	7月、幕府は9～10月の東下を請う　和宮は明春を切望　天皇東下延期を下命　22日、酒井忠義今冬の東下を強請 10月15日、和宮、御暇乞の参内 20日、京都出発 11月15日、江戸到着、23日の入城を延期、御所風遵守などの問題で幕府と交渉の末、12月11日、入城する
文久2(1862)	2月11日、婚儀成立
慶応2(1866)	7月、将軍家茂死す　12月、和宮は薙髪して静寛院と称す
慶応4(1868)	戊辰戦争始まる　和宮は、官軍の江戸進撃猶予をたびたび嘆願する
明治10(1877)	9月、心蔵発作のため死亡（享年32歳）
昭和34(1959)	和宮など歴代将軍家の墓発掘調査



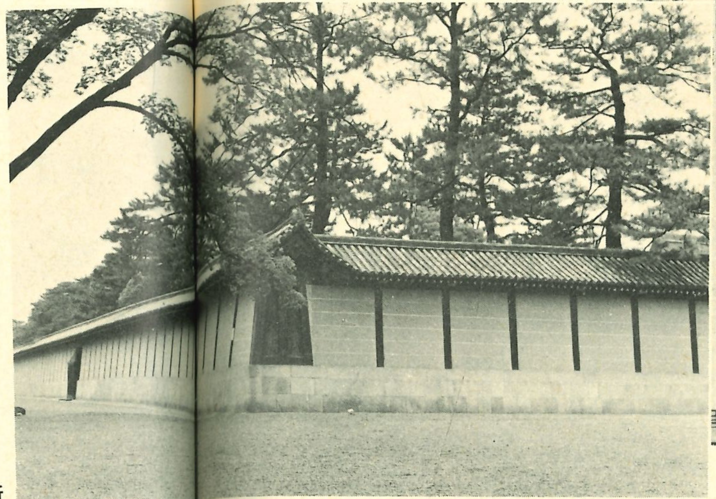
内裏図　和宮の出た橋本家は御所の東側の公家屋敷の中ほどにあった（大塚隆氏蔵）

が、これは倭人症とでも呼ぶのでしょうか、立っても襖のひき手までしか身長がなかったといいます。

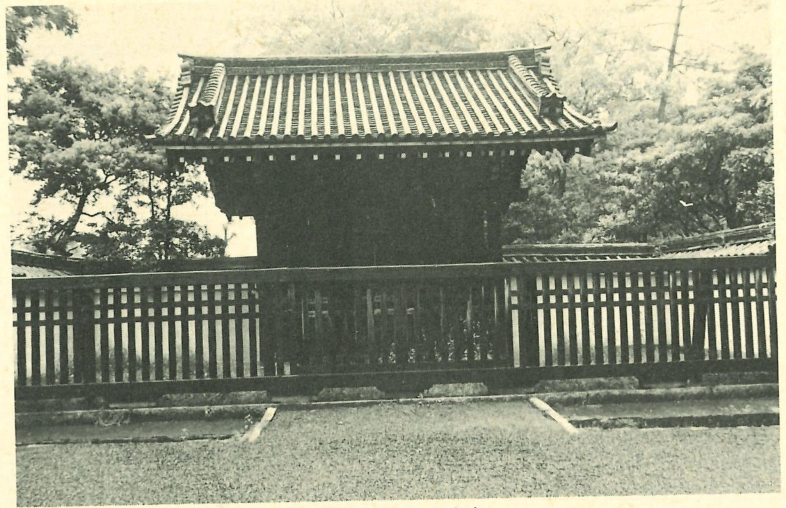
家茂が毬つきの真似をして遊んだと言われていますが、このお姫さまが一条家の女でなかったことは事実で、江戸へ来て六か月で死んでいます。ですから天璋院は三度目の奥さんなのですが、これは近衛家の養女として江戸城に入っていますが、薩摩藩島津家のそれも分家の女で、一度本家の養女になってから、さらに公家の養女になっているので、当時としてはあまり出自がいいとはいえません。それも姉小路の失脚につながるのかもしれません。ともかく和宮降嫁には姉小路である勝光院が最初は猛運動をするんですが、いざ和宮が江戸へ来ると、勝光院にはお召しがないという不思議なこともありました。ただ、勝光院つまり和宮の叔母さんが、替え玉を使っている事実から、発想としてごく簡単に出てきたと考えられます。

――あれほど江戸へ行くことをいやがっていらっしゃった宮様が、ご本を拝見しましても、かなり唐突にという感じがするんですが、江戸へおいでになることを、今流にいえばOKなさる、これは何か背景に動くものが大きかったのでしょうか。

有吉　決定的なのは方位です。文久元年（一八六一）の秋、それまでいやだの一点張りだったのが突然ガラッと変わるのは、来年になると東が暗剣殺になるということを江戸側から言ってくるんです。それともう一つは、酒井京都所司代のほうで弾圧をどんどん加えてきます。そして和宮が出た橋本家ですが、橋本家に橋本実麗（さねあきら）という中将がいるわけですが、それに対して橋本家の断絶、それから橋本実麗の落飾、お坊さんにしてしまう。それから家禄の没収、それから和宮を落飾させるなどと言って脅しています。ちょうどその前に、鷹司さん



京都御所



桂宮邸跡　和宮は桂宮邸を降嫁までの仮の住まいとした

親子とか、近衛さんとか、徳大寺さんとかが、江戸に反抗したために全部落飾させられている事件があるんです。たいへん家柄の高い人たちもどんどんお坊さんにされちゃうわけで、そういう前例がありますので、これはたいへんだということが一つ。それと方位というのは、来年は東へ行くと暗剣殺で命が危ない、だから今年中に行かなきゃいけないというので、文久元年の秋にあわただしく決まってしまうんです。でもその前から御付女官も決まってますし、準備万端は整っていました。和宮様は八方から攻め込まれて、逃げ切れなくなっていたという状況でした。

中仙道始まって以来の大事件

中仙道大湫（おおくて）の宿――。

文久元年の秋、和宮は兄天皇の苦衷を察し、政略結婚の犠牲となって、厳重なる警固のなか、この街道を下っていった。

和宮の行列がいかに空前絶後のものであったか、この宿場にはそれを物語る資料が残っている。

一行の宿割図である。

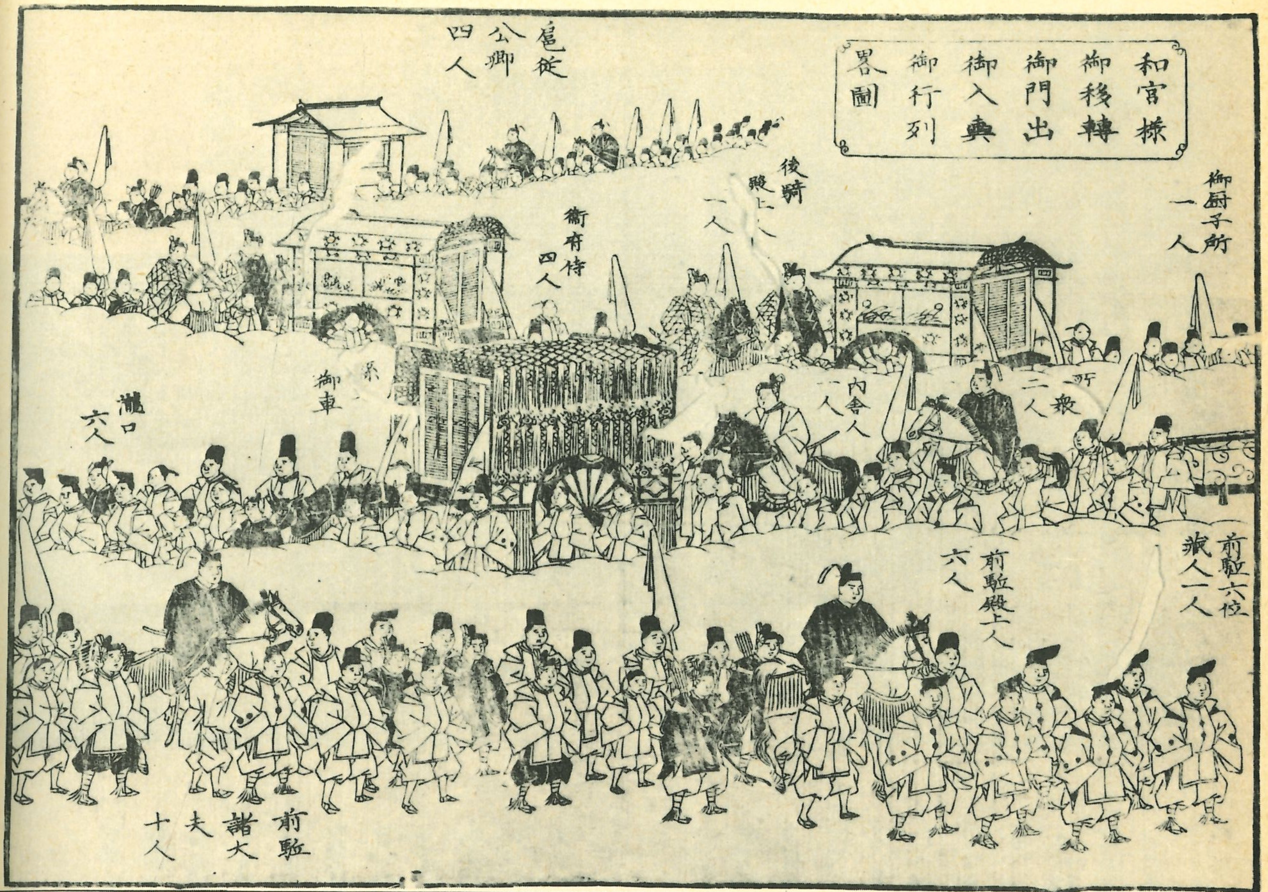
行列の長さ延々五十キロ、通過するのに四日かかり、旅人も一週間の通行止めとなった。

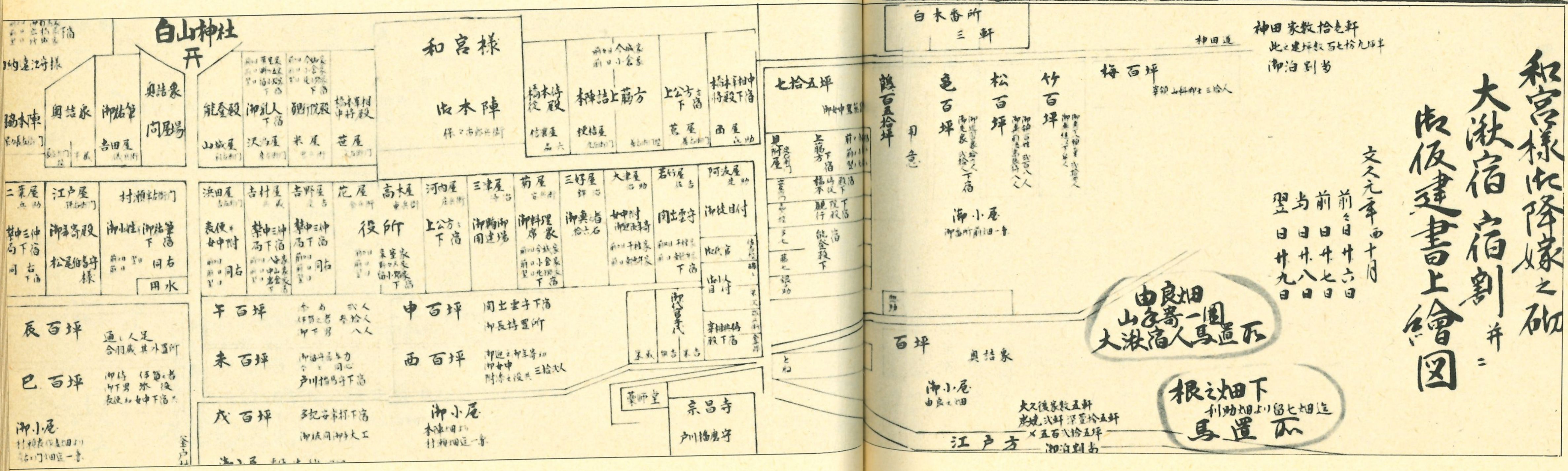
戸数七十軒、この小さな村に命じられた人夫の動員数延べ二万八千人、馬八百頭。

さらに、村に命じられた布告の数々――音を立てるな、稲を刈り取れ、井戸を掘れ、家を普請せよ、牛馬や犬猫をつなげ、大酒飲みやわがままな者には番人をつけよ――。

和宮降嫁は中仙道始まって以来の大事件となった。

和宮様御移轉御門出御入輿御行列畧図（大塚隆氏蔵）

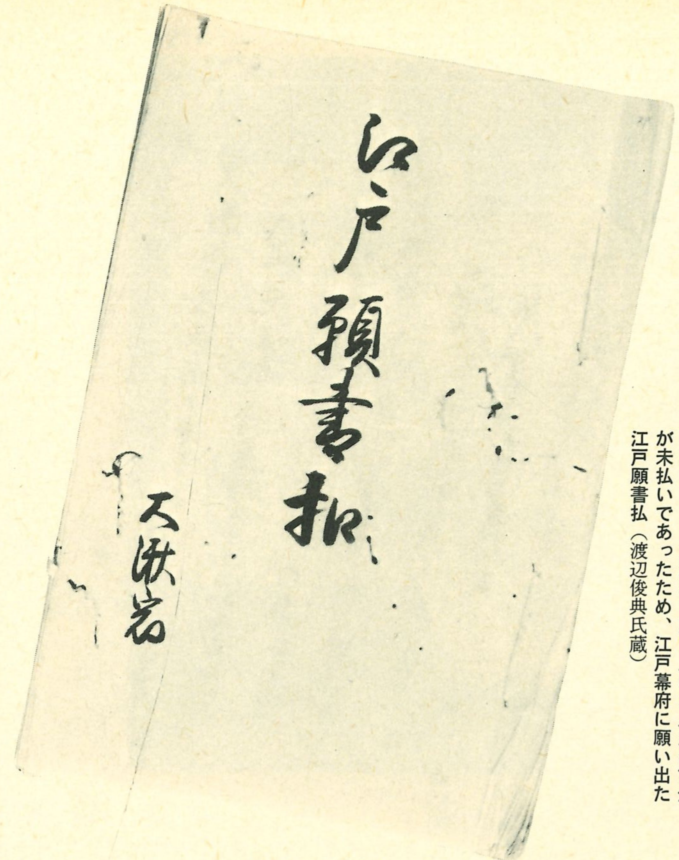




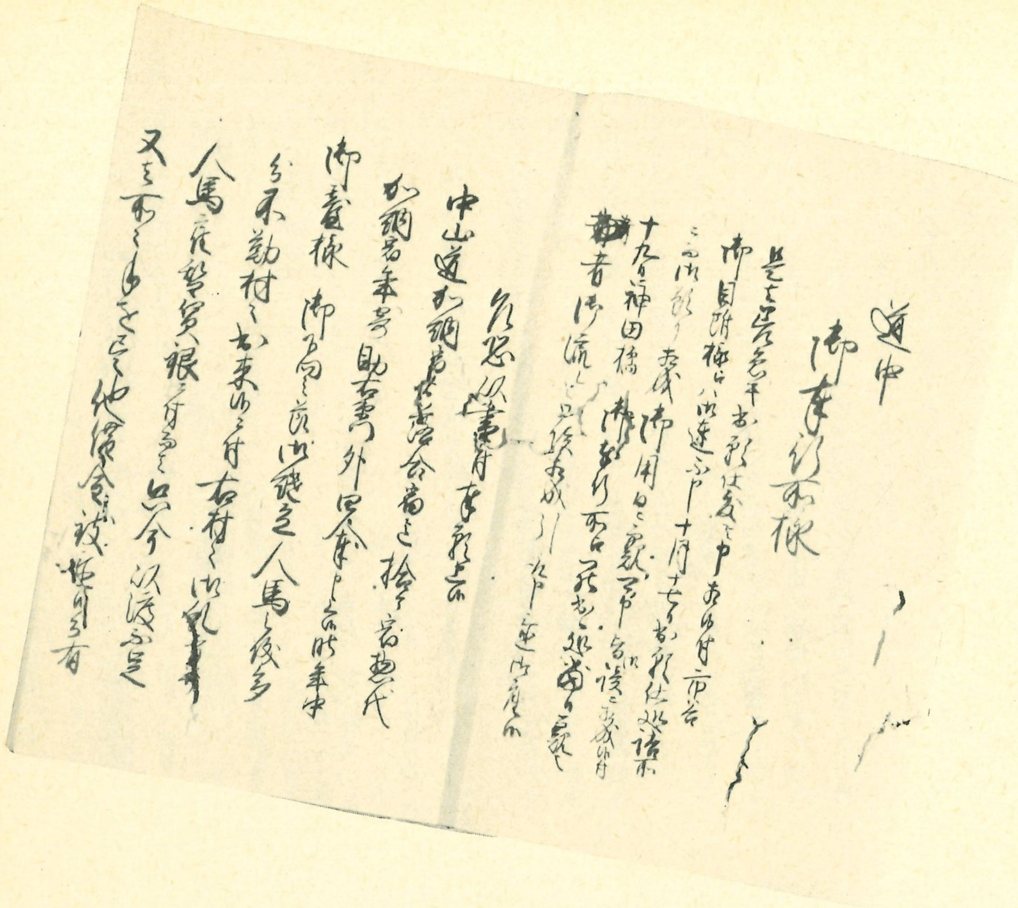
史料をもとに作図した和宮降嫁のときの中仙道大湫宿の宿割図（渡辺俊典氏提供）

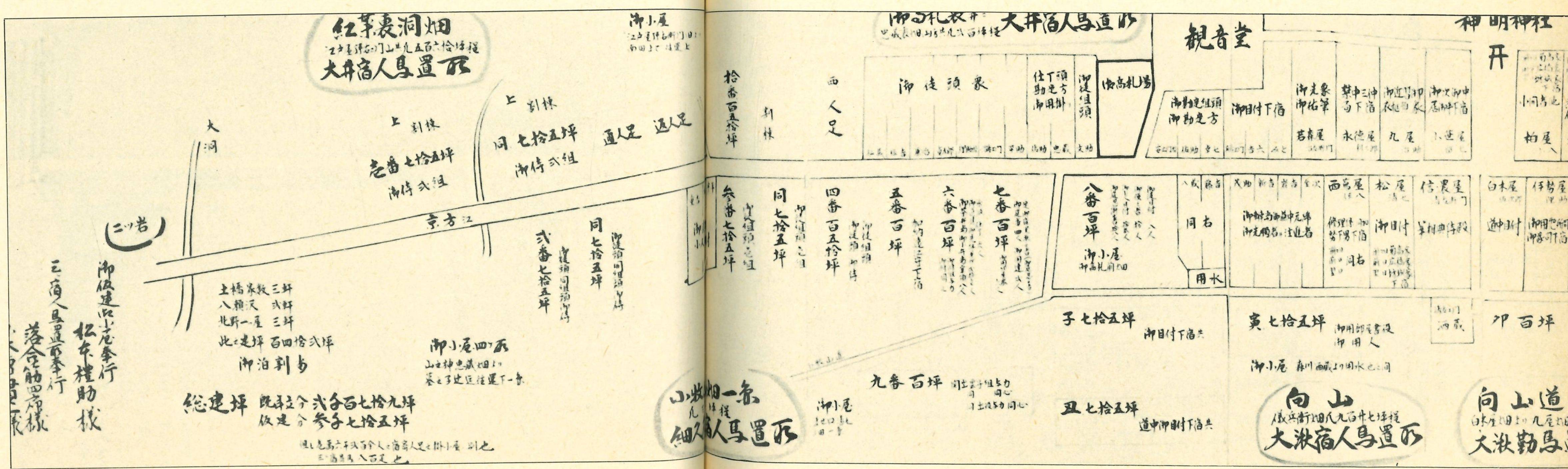


降嫁のときの御用金出納勘定帖（京都府立総合資料館）



降嫁のおり、大湫宿で雇い上げた人馬の賃金が未払いであったため、江戸幕府に願い出た江戸願書払（渡辺俊典氏蔵）





行列が江戸までに動員した沿道の民衆六十ないし七十万人、直接経費だけでもいまの金で総額百数十億円、その後幕府の支払いもままならず、大湫宿もすっかりさびれてしまった。

ところで、和宮にちなむ奇妙な絵が残っている。浮世絵師国芳の描いたものである。

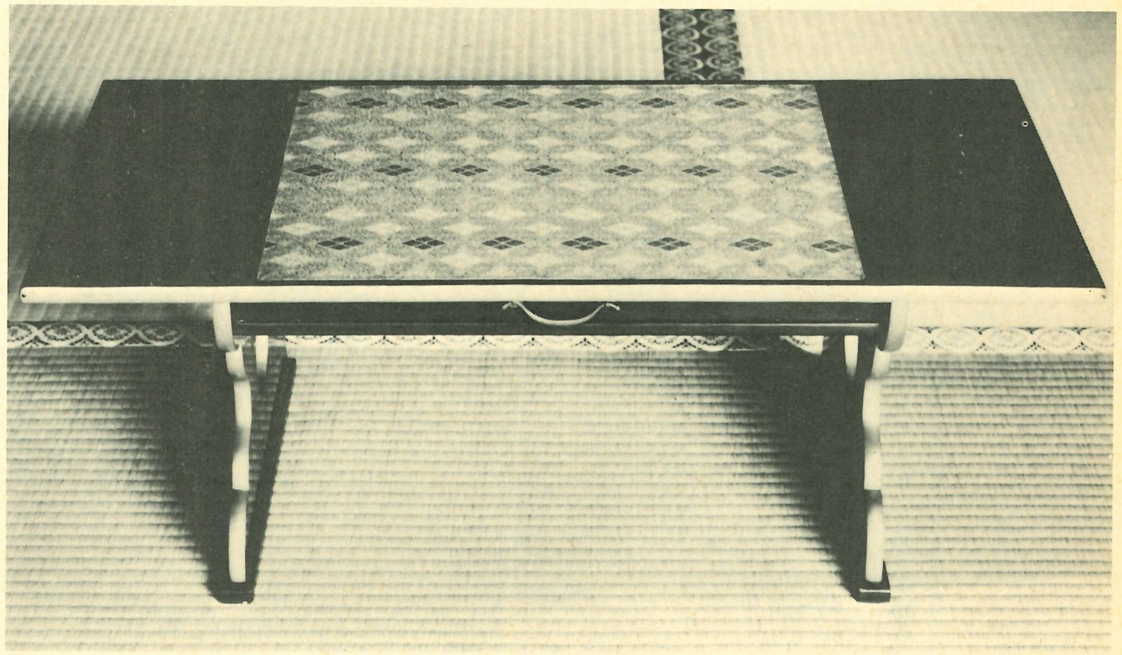
狐の嫁入りに見たてたこの絵は、何を意味するのだろうか。和宮をあまり歓迎できない寓意とも、朝廷が何かをたくらんでいるともとれる構図である。

和宮降嫁について当時の庶民がどう見ていたか一つの材料である。

和宮・謎の部分を推理すると……

有吉　和宮さんに関しては非常に謎が多いんです。それでおかしい、おかしいと思っているうちに、昭和三十四年に芝の増上寺にある徳川家歴代将軍の墓が全部発掘されまして、そのとき和宮様のお墓も発掘されました。和宮様に関する資料――それこそ発掘資料ですから一等資料となるわけでございますが、その結果、京都にいらしたころの和宮様は足がご不自由で、小さなころから孝明天皇の勅願で、お寺や神社に足が治るようにというおすそ患いご平癒祈願というものを何度もなされているんですね。病名は現代風にいえば関節炎で、この関節炎というのは、左が悪かったか右が悪かったか書いてありませんが、両足の場合もあります。いずれにせよ、かかったほうの足に必ず負担がかかりますので、和宮様の遺骨が発掘された段階で両方の足に異状がない、それがはっきりしたときに、替え玉だったというのはやっぱり信用していいんじゃないか、信用せざるをえないですね。つまり京都の和宮様は、はっきりいって足が悪い。それは必ず骨に響いてくる病気で、それは私も書く以上は専門家に一応確かめました。しかも驚くべきことに左の手首がないんです。これは発掘の最中になくしたかという推論も成り立つんですが、左手をかくしている生前の絵姿があります。お習字を遊ばしているときの絵姿で、左手を不自然に隠しておいでになるのですね。それから没後――和宮様は明治十年に亡くなられているんですが、お亡くなりになってすぐ、増上寺で塑像がつくられました。その塑像を見ても左手首がないということははっきりしているんです。ですから、私は、骨は見つからなかったのではなくて、最初からなかったのではないかと思います。

そうしますと、いよいよおかしいのは、京都にいらっしゃった和宮様は、お茶のおけいこを藪内でなさっているんです。藪内竹猗という家元が桂の御所へおけいこに伺って、お茶をなさっていらっしゃる。それからお琴もあそばしていらっしゃる。これも同じように左手がなかったらできないことでございます。ですから、これは違う人間が納っているという新倉家の伝承というものは、信ずる以外にどうしたらいいかわかりませんね。決定的な資料になったのは、やはり発掘です。



和宮の文机（曼殊院蔵）

完全でなかった遺体の保存状況

東京タワーの下、徳川家の菩提寺・芝増上寺では、昭和三十四年、悲劇の皇女和宮など歴代将軍の墓の発掘調査が進められた。遺体を納めた柩は長い歳月に朽ち果てて、往時をしのぶよすがもなかった。いっしょに出てきた将軍佩用の剣、襪（しとうず）と呼ばれる足袋、ぼろぼろになった殿中衣裳がたくみに継ぎ合わされていた。

和宮御降嫁を偲んで…

明治十年、和宮が逝去された時、「東京日々新聞」の記者は、御降嫁当時のことを偲んで古式ゆかしい名文を綴っている。

「想い回せば、頃は安政五年七月の事にてありき。徳川十三代の将軍家定公（温恭院殿）御遺言に、紀伊宰相慶福卿を迎へて世嗣とは定め給ひたり。卿は時甫て十二歳なりしが、家茂と改名して十四代の将軍に立ち、正二位内大臣とは成り給ひける。時に攘夷の詔出でて和戦の義は公武の間にて二つに分れ、……さしもに厳しき幕府の威権も、あはや此時にて衰へたる有様となりければ、幕府の執権は公武御合体こそ国家の急務なりとて、勝定院（橋本氏）を上京せしめ、家茂は皇妹和宮に尚し奉らんと請ひ申しぬ。然れども和宮は有栖川宮に適せ給ふべき御兼約あればとて、今の程は許し給はざるを猶も様々に申し請ひしかば、国家の為なりとて吉子内親王の御例に依り、皇妹の降嫁を許し給ひつる先帝の叡慮こそ有難かりけれ。

内親王は、昭徳公の御西上の間は、断えず消息ども、まめまめしく書き送らせられ、深く公の御首尾をのみ案じ煩はせ給ひ、常に御簾垂れ籠めて、ひたすら徳川氏の繁栄をぞ祈らせ給ひしに、果なくも大坂より訃音を聞かせられ、引かづきて悲傷の涙せき敢へ給はず、千筋の黒髪を切りて仏門に入り、静寛院の法号を受け給ひて、只管先公の御菩提を弔ひ、念仏三昧をぞ修行し給ひけるが、其後滄桑の変に当り、心ならずも一旦は西京に赴かせ給ひつれども、再び東京に帰りて御座けるが、浮世をあぢき無しとや思し召けん、兎角御心地も勝れ給はず、今はの際の御遺言に、我は故将軍家茂公の未亡人なれば、必らず先公の御廟側に葬れよと仰せられて、薨去ましましけるぞ哀れなる。嗚呼徳川氏の二百五十年の栄華は、慶応の一夢に消て跡なく、将軍家の名残とては、只此の内親王のみぞ御座しける程に、流石に東京の士民は、懐旧の情に於て、最も和宮様は、静寛院宮様はと、陰ながら大方ならず貴み奉りつるが、夫さへ今は鶴天上に翔て、九転の丹を求め難く、人山頭に去て、空く三更の夢に逝き、敢なく成り給ひけるぞ果なけれ。去りながら、御遺言に従ひて、昭徳公と廟坐を同うし、御葬式も将軍家の例に依らせ給ふを見れば、是なん所謂る衛風には、首に共姜之貞を著し、春秋には、特に伯姫之卒を書するに比しければ、独り故内親王の今はの思召を遂げさせ玉ふのみならず、東京の士民を争でか之を喜び申さざる事やあるべき。」



発掘調査が行われる前の増上寺の家茂と和宮の墓

──和宮様のご遺体の保存状況というのは、どの程度でございましたですか。

鈴木（尚）　棺そのものは三重だったのですが、蓋が腐って中に落ちこみ、黒土が入り込んでいましたから、ご遺骨はまあ比較的完全とはいっても、細部になりますと、若干こわれているところ、なくなっているところがございました。

──そうですか。例えばお顔とか、そういうところなどはいかがでございましたでしょうか。

鈴木（尚）　顔はちゃんとしておりました。しかし四肢の関節のように海綿質でできた部分は多少いたんでおりました。

──そのときの写真も残っているんですが、土にまみれておりまして、鮮明じゃございませんですね。

鈴木（尚）　そうなんです。先ほど申しましたように柩の蓋がこわれていたものですから、泥が中に入り込んでいましてね。もし泥が入り込んでいなかったら、もっと保存はよかったろうにと思うんですが。

──左の手首は発掘のときはどうだったんでしょうか。

鈴木（尚）　確かになかったようです。ただ、骨の保存が非常によいとはいえませんでしたから、ほんとうになかったかどうかということになりますと、残念ながらちょっと確信がないような状態です。

──あのときの発掘の状況は、かなり短時間のうちにやらなければならないという……。

鈴木（尚）　いろいろ事情がございまして、急いでやらなければならなかったということもございましたし、骨の保存も必ずしも良好というわけでもなかったし、いまになってみると、もう少し時間をかけてゆっくり正確にやればよかったと思っております。

──もう一つ、和宮様はおみ足が悪かった。それは関節炎ではなかったろうかという推理があるのでございますが、ご遺体からはどうでございますか。

鈴木（尚）　骨を調べる段階で、例えば膝の関節には、とくに病的と思われるところは見られませんでした。健康な関節をしておりました。

和宮であることを演じる

ここで、有吉さんの替え玉説を一度整理してみると、推理の大きな根拠となるのは、足の関節炎、および左手の問題である。また、和宮のものと伝えられ、夫家茂の柩に納まっていた毛髪が和宮のものとは異なっていたこと、和宮の日記が幕府瓦解のころから急に文体がおかしくなっていること、などである。

──実際問題として、将軍の奥方であり、そして徳川家、将軍家というのは、天下の人たちが注目しているうちですね。そのなかにあって周囲の人たちがこれはほんとうの和宮さんなんですよと言い続ける、少なくとも五年間は、あるいはお亡くなりになるまでは言い続けたろうと思うんですね。それはたいへんな努力で、はかりごとは密なるをもってよしとするどころではありません。どこから漏れるかわかりませんですね。

有吉　でも、替え玉を使われたということは徳川家の恥でしょう。当時の天皇家も表向きとしては困ることでしょう。そうすればみんな必死で守ったと思いますし……。どうも替え玉だということは双方で

知っていたけど、知らないふりを通したというふうに思えます。和宮の夫である家茂の養子家達と、天璋院がいっしょに暮らしていたのも変ですし。

――しかし、その替え玉となった本人の気持になりますと、朝から晩までおおぜいの人の前で和宮であることを演じなければいけませんですね。

有吉　でも、お姿を見る人というのは限られていますし、人に姿を見せる機会というのはほとんどないわけですから、和宮様をはじめとして和宮様東下に関係した人たちすべてが犠牲ですから、その犠牲者の一人として大変だったけれども、隠すほうも一所懸命でしょうからね。ですから一人でやっていたわけじゃない。少なくとも四、五人でまわりを守るのもいたし、それは必死だったと思いますが、ご当人もそれはたまらなかっただろうと思いますね。

江戸城にご奉公に上がっていた女の証言ですが、これは天璋院づきの女なのですが、「和宮様はいつも几帳を立てて姿を見せず威張っていらした」というのがあります。几張を立てて見えないようにしていたのは、公家風を守ったともいえますが、めったな人間には顔も姿も見せないためにはいい口実になったと思います。

勝海舟は天璋院と宮様の二人を呼んで食事をさせたなどということも書いていますが、これもでたらめでして、勝海舟の身分では、天璋院にも宮様にもお目見得は許されていないのです。ごく一部の公家以外は見ていませんよ。

――ほんものの和宮様は群馬の満徳寺というお寺においでになったという……。

有吉　それは私の仮説ですよ。満徳寺とそれから鎌倉の東慶寺とい



ほんものの和宮は満徳寺に入った……

うのは駆込み寺なんです。満徳寺には有栖川宮家と関係のある庵主さんがいて、その庵主さんのお墓だけがないんですね。これがちょうど和宮さんのご降嫁前後にぶつかりますので、これもほんとうに謎なんです。

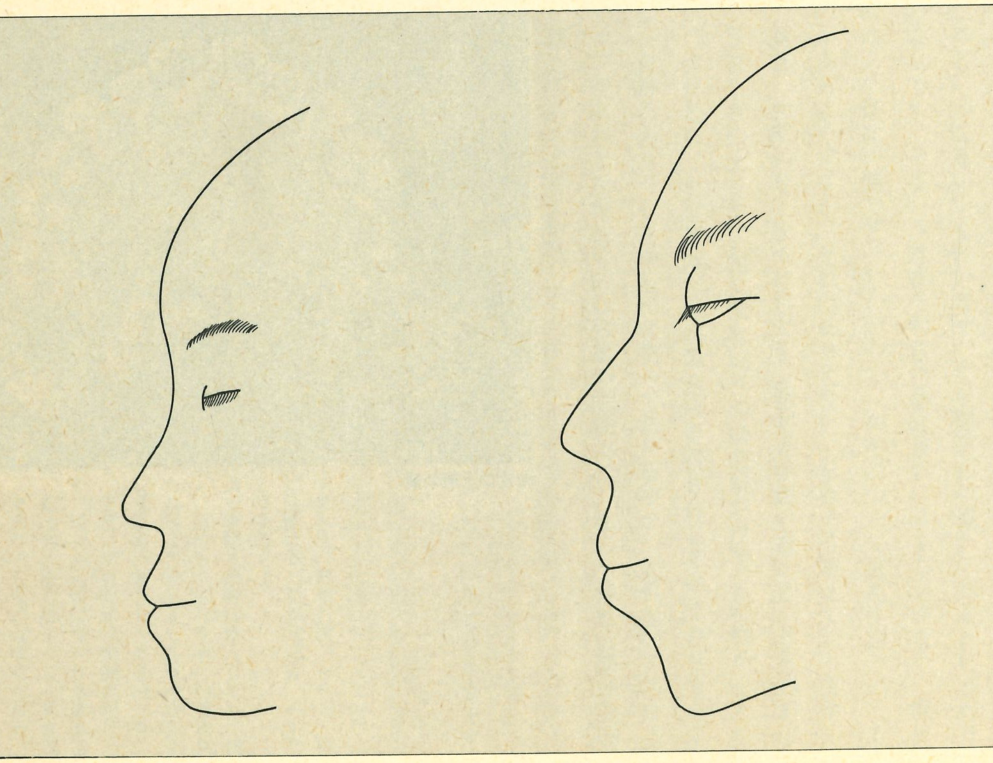
――では、ほんものの和宮様はいったいどこにいらっしゃったんだろうか、これの証明ができれば、替え玉説というのはもっと完全なものになるんだという気がするんですがね。

有吉　でも、そんなことがバレるようなばかなことしていませんよ。どうせ命がけでやっていますからね。たとえば一条家だって、和宮様の十五年前にほんもののお姫さまはどこへ行ったか誰もわかってないでしょう。だから、それはわかりっこないですよ。ただ、私は、にせものではなかったといって私の書いたものを論破する資料は何もないと思います。

貴族そのものの顔・和宮

――発掘後先生は、残されておりましたお顔の骨を全部復元されたそうでございますが、それから出てきた特徴というのはどういうものだったでしょうか。

鈴木（尚）　そうですね、ひと言で申しますと、貴族の顔であるということがいえます。日本人の顔というのは、時代とともに変わってまいりましてね。この意味で江戸時代の庶民というのはそれなりの特徴を持っております。ところが江戸時代の大名や貴族は、いわゆる貴族型ともいうべきタイプの顔をしています。つまり庶民の顔は丸顔で、鼻のつけ根は平たく、眼窩は低い。これに対して将軍など貴族の顔ははなはだしく細面で、鼻もすんなりと長く、そのつけ根は高く隆



遺骨から復元した家茂（右）と和宮（左）の横顔（鈴木尚氏提供）

起し、眼窩も上下に非常に高いのです。最も興味があるのは、骨から推察される限りにおいて彼らの咀嚼器官の発育がはなはだ悪いということです。

ところで和宮も同じタイプの顔である。したがって和宮の顔は貴族の顔であるという結論を下したわけです。

——こういう形になる生理的な原因というのはあるのでございましょうか。

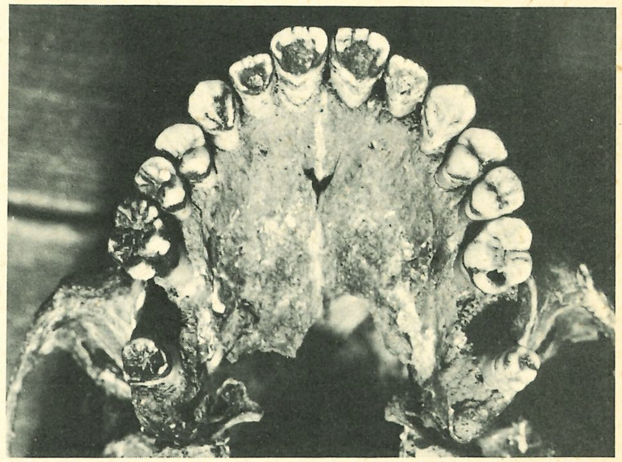
鈴木（尚）　徳川将軍や諸大名など貴族の顔を形態学的に分析するとき重要なポイントが二つあると思うんです。その一つは、今申しました物をかむ器官、つまり咀嚼器官が非常に発達が悪いということ、これは特別の食生活に基づくものだろうと思います。

——柔らかい物ばかり召しあがる……。

鈴木（尚）　たぶんそうだと思うんですよ。ですから、十二代将軍家慶のように六十歳になった人でも全然歯は擦り減らないで、歯が生えでた少年のころそのままの姿であったのは正に驚きというほかありません。

——ここに歯の図がありますが。

鈴木（尚）　これは和宮のものですが、ほんとうに歯が生えたころそのままの状態ですね。全然擦り減っておりません。しかし三十一だから擦れていないとおっしゃられる方があるかもしれませんが、一般に将軍では中年のみならず老年になっても擦り減らないんですね。これははなはだ特殊な食生活によるものと思われる。たぶん生まれた時から非常に軟らかい食事をとっていたためでしょう。したがって、咀嚼のための筋肉の発達は阻害され、それに伴って上・下顎骨も特殊な発育をしています。



和宮の上顎の歯

——家茂と比べたらどうでしょうか。

鈴木（尚）　家茂の顔を調べますと、庶民のものと比較しまして顎が全体としてうしろに退いております。これは咀嚼器官の萎縮、または発育不全を意味すると思われます。

それからもう一つのポイントは、奥方や側室にどういう人を選ぶか、配偶者の選択にも原因があります。増上寺には、正室、側室がたくさん葬られていましたが、ひと言で申しますと、庶民は前に申しましたように丸い顔ですけれども、正室はむろんのこと、側室はどれも庶民とはちがって現代的な瓜実型の顔で、当時としてはごく稀な、いわば高嶺の花が選ばれております。このような配偶者の選択法を代々くり返してまいりますので、後の世代の将軍ほど貴族特有の長い顔が現れてまいります。ついでに申しますと、骨からみました和宮の顔と、骨をもとにした家茂の顔を比較しますと、お二人は系図の上で血のつながりは全然ありませんが、解剖学的にはまったく同じなんですね。瓜二つといってもいいくらいです。ただ男と女の違いがあるというだけのことです。そういう意味で和宮の顔は貴族にはまちがいない。庶民にはあり得ない顔です。したがって、和宮について替え玉説というものがあるようですが、それはありえない、私はそう考えております。

有吉　お断わりしますけれども、歴史と小説の違いというものがはっきりございまして、歴史家というのは史料だけでしか物がいえない。けれども、小説家は、私の場合は史料をねじまげておりませんし、史料のありったけのものは使っておりますが、史料というのは点です。点と点とを埋めるのは作家の想像力で、私の小説では豪華絢爛に埋めてあります（笑）。

——まさにそのとおりで（笑）。

有吉　小説にとっていちばん大切なのは、これがほんとうかうそか

縁切り寺

姑婆かまくらさして追う気なら

縁切り寺をめざして逃げる嫁、駆け込まれてはならじと、姑も負けずに追いかけるというこの川柳は、嫁いびりを揶揄しているが、迷いに迷った揚句、寺を目指してひた走る嫁は必死である。江戸と鎌倉は歩いて二日、十三里の道程であり、しかも多摩川を渡らねばならない。

嬉しや、寺まであと一息というところで屈強な追っ手の足音が迫ってくる。門を目の前にして振り返る余裕もあらばこそ、吐く息も荒い嫁は、かんざしを引き抜いて、ヤッとばかり門に向かって、投げつける。

下駄でもかんざしでも身に付けているものを寺領内に投げ込めば、もはや取り押さえることができず、訴えは成立したといわれるが、これには誇張があるようである。

江戸時代には、ふつう妻からの離婚の申し立てはできないことになっていたが、その寺に駆け込めば離婚が認められるという寺が、縁切寺、または駆込寺と呼ばれた。

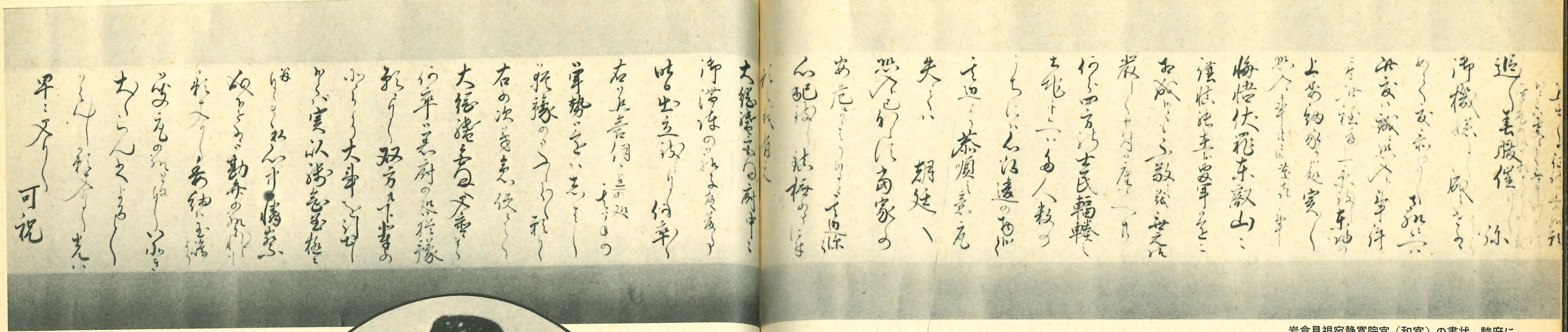
江戸も初期のころは尼寺ならどこの寺でも縁切寺としての特権をもっていたといわれる。もともと尼寺は、代々格の高い家の女性が住持として入っているから、みだりに寺内に入ることを許さない権威をもっていた。その聖域に駆け込んだからには、夫たりとて手出しはできないという安心から女たちは尼寺に助けを求めたのであろう。

それが中期になると、寺はしだいに権威を失ない、辛うじて、鎌倉松が岡の東慶寺と、上州新田郡徳川の時宗満徳寺にその特権が保たれることになる。

とくに東慶寺は「松が岡」の名で知られ川柳などにもしばしばとりあげられているが、ことの起こりは、豊臣秀頼の忘れ形見がのち天秀尼としてここの住持になり、逃げて来た妻子を助けたことに始まるという。

さて、駆け込んだ女はどうなったかといえば、まず念入りに身元が調べられる。調べが済むと寺側は夫と妻の関係者、名主や仲人などを呼び出す。

この時点で実家と婚家は仲人とともに相談を重ね、いわゆる「三行り半」の離縁状をしたため夫側は名主とともに寺に持参する。こうして離婚が成立したときは、寺には入らず、実家に戻れたが、夫側が呼び出しに応じず、寺側が仲裁に出向き示談とならなかった場合、妻は夫の出方によって一年または二年間「寺入り」しなければならなかった。だが期間があければ自由の身、だれと再婚しようがお構いなしとなる。



岩倉具視宛静寛院宮（和宮）の書状　駿府にいる大総督宮へ願出の儀につき、何分のご返答あるまで軍勢の進攻を止められたいと申し入れたもの（岩倉公門跡保存会蔵）

ということでなく、これがどれだけリアリティーをもっているか、読者をどれだけ説得できるかというところに小説の値打ちがあるわけです。けれども和宮様の「御側日記」を見ますと、家茂も和宮様も若いのに病気ばかりしていたことがわかります。病人の食養生は当時、お粥みたいな流動食が常識ですから、病気ばかりで育った人たちの歯がどんなものだったか想像するのは簡単ですね。

当時の天皇の召し上がりものは記録がありますが、お気の毒なほど質素です。しかし、将軍家茂は、もとは豊かな紀州の殿様なのですから、幼時病弱だった以外に、歯の退化現象は説明がつきません。江戸城に入ってからの和宮様は、病気ばかりして、亡くなる三十二歳まで強健だった時期はありませんでした。それは、「御日記」に記録されています。

正史は女を切り捨てる

慶応四年（一九六八）正月、鳥羽・伏見にとどろいた一発の砲声は、和宮をふたたび歴史の舞台へ引きだすことになる。

そのころすでに母を失い、夫家茂や兄孝明天皇にも相次いで先立たれ、静寛院宮と呼ばれていた和宮は、日々克明に日記をしたためている。そこには朝廷との板ばさみになった女の苦しみがある。

和宮は徳川家の存続のために奔走した。宮は幾度も幾度も嘆願状をしたためた。その官軍の倒幕征討大総督は、皮肉にもかつての婚約者有栖川宮であった。

「何卒私への御憐愍と思し召され、汚名を雪ぎ、家名相立ち候様、私身命にかへ願い上げまゐらせ候。



有栖川宮熾仁親王　和宮のかつての許婚は、今は征東大総督であった

私事も当家滅亡を見つゝながらへ居り候も残念に候まし。急度覚悟致し候所存に候。」

――この事実を通じていちばんお書きになりたかったというのは、どういうことなんでございましょうか。ただ推理のおもしろさだけではないように私は思いますが……。

有吉　私は人間にかかわることを書けば何でも小説になると考えておりますし、それから、どんな時代でも人間は同じことを考えたというのが私のいつも変わらない歴史観なんですが、いままで日本史にかぎらず世界じゅうどこの国のヒストリアン、歴史家というのは、その多くはというか、ほとんどが男性なんですね。男の人たちは、自分が母親から生まれたことも、自分に姉や妹がいることも、姉や妹のおかげを被っていることを忘れている。たとえば岩倉具視などは、なぜ維新史にあれだけ活躍するかといえば、自分の姉さんが孝明天皇の二号さんだったということなんですね。それは正史に出てきませんでしょう。正史は女を切り捨てるんですよ。だけど、それは重要なことじゃありませんか。男性によって書かれた歴史のなかで、女性というものは不当に低く評価されているというのが私の正史にたいする大きな不満なんです。ですから、私は女だから女を書くという単純な理由じゃなくて、あまりにも多くの女が存在をないがしろにされてきたではないかというのが、ときどき私の歴史小説のなかでは私の主張として出てきますので、おそらく『和宮様御留』のなかでも、私自身が持っている一つの歴史に対する不満、これまで書かれてきた歴史に対する不満というものが形をなしていて、女を忘れていませんかということが主軸になっているかもしれません。



岩倉具視（石黒敬章氏蔵）

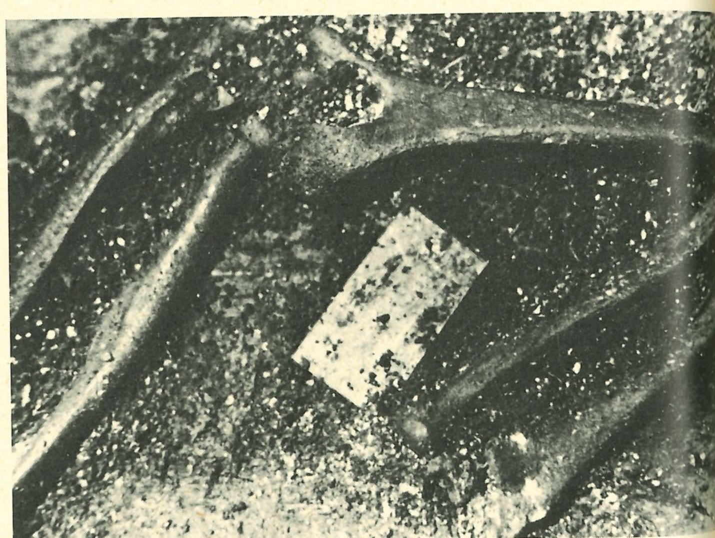
消えた湿板写真

明治十年、和宮は世を去った。行年三十二歳であった。その亡骸は、遺言により増上寺に眠る夫家茂のかたわらに葬られた。

昭和三十四年、和宮の墓地が発掘されたとき、柩のなかにキラリと輝くものが発見された。それは和宮の胸に抱かれた一枚の湿板写真であった。

そのとき、このガラス板のなかには烏帽子、直垂（ひたたれ）の男の姿が写っていたという。人々はこれを家茂であろうと推定した。ところが、和宮が八十年間抱き続けたこの写真は、大気にふれて一夜のうちに幻のごとく消えてしまった。

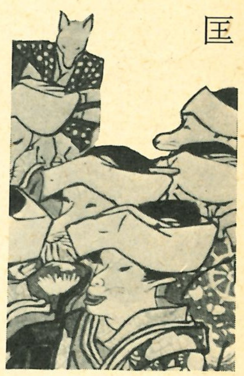
消えた湿板写真のように、和宮は永遠のロマンと謎を今日に残している。



和宮の胸に抱かれていた湿板写真

国芳の「狐の嫁入図」の謎

飯沢　匡



歌川国芳は、この間まで浮世絵研究の学者の間では、頽廃期に属するマイナーの画工の一人で、「その洋風画法を採り入れた風景画に見るべきものがあるに過ぎない」といった評価が圧倒的であった。私は日本の刺青の芸術性が国芳の下絵から発していることに気づき、反抗という視点から国芳の業績を跡づけしてみたところ、この画工が並々ならぬ視点の持ち主であり、またその視点に見合った技法の習得者であることを発見、ますますこの画工に傾倒し、いくつかの小論文を発表、それを集大成したような『天保の戯れ絵』という多幕物を書き上げ、前進座で翫右衛門氏を主演として上演した。

このころから、いわゆる国芳ブームが生じ今は国芳の見直しがなされ「遊びの精神」あるいは「叛骨」あるいは「近代写実主義」とさまざまな視点から、この画家の特徴が捉えられ、ますます国芳の声価は内外共に高まり、つい先日もリッカー美術館でアメリカのビットウェル・コレクションの国芳展が開かれ、また続いて国芳の「水滸伝」のみに限った展覧会も催された。

私が騒ぎ出す前に鈴木重三氏は奇想の画家として国芳を捉えられ、また辻惟雄氏も『奇想の系譜』の中にとり入れられていた。

私は、いわゆる勇みの江戸っ子気質の国芳を時の権力の徳川政権——すなわち武士階級に対抗する町人ないしは職人、言葉をかえるなら市民のエネルギーの代表者として捉えたのであった。

このエネルギーを頽廃と捉えていた従来の史観に囚われた美術史家たちは、上から体制側つまり取り締まる側の目で、これら市民の希求の体現者であった国芳たちを見ていたのである。もちろん、国芳も英泉も、いわゆるワ印（笑い絵の異称）春画を描いていた。

国芳のごときは西洋の科学的な写実的な観察力を駆使して性を描いたので、取り締まる側からいわせれば「猥褻」であったろう。それを「頽廃」と捉えた美術史家は徳川時代の儒教精神から一歩も出ていなかった。つまり「分際を守る」ことを何よりも重大事とした馴致された江戸市民の退嬰的な精神そのものであった。

しかし幕末、国芳の生きた時代は四海の波は決して穏やかではなく、西欧のアジア植民地化の欲望がむき出しになって日本に迫って来ていた。そして武士階級は三百五十年の泰平の代の連続に、すっかり能吏化して、積極性を失い、財政も逼迫して、ともすれば町人の経済力に圧され勝ちであった。

江戸は大きな都市集中が始まり世界一の巨大人口を持ち、文明は爛熟していた。それを背景に国芳たちは江戸市民の欲望を反映しながら作画していたのである。だから体制側、徳川幕府としては、しばしば倹約令を出して市民の消費生活を圧迫した。その時に真先に槍玉に上がるのが遊里とか劇場の世界であった。流行の衣裳も、みなこれらの世界が源をなしていたから、その宣伝や伝播を受け持つ浮世絵が弾圧されたのは当然である。弾圧されれば市民の内圧はいっそう高まり、取り締まりをすり抜ける危い橋を渡っても市民のエネルギーの捌け口を見いだすのである。

国芳は浮世絵師には珍しい「戯画」という世界を開拓した。彼は、わざわざ自らの署名の下に「戯画」とつけた作品をいくつか描いている。つまり「戯れ絵」であり今でいう漫画である。しかし彼の「戯画」はしばしば毒を含んでいる。つまり諷刺である。時の権力者、為政者への「あてこすり」が画中にあったのである。

将軍そのものをはじめ、その娘、あるいは今の総理大臣に当たる老中まで槍玉にあげて彼は市民の不平不満をぶちまけた。

といってもあくまで「江戸文学」特有の「うがち」や「趣向」で間接的表現をやった。

当時は厳重な検閲制度があり、それを通過しなくては浮世絵は刊行できなかった。ほとんどの作品には検閲者の検閲印があり、これが版画に彫り込まれていた。ごくわずか、この印のない時期があるが、これは例外といってよい。つまり江戸文化を論ずる時に、この検閲下の文化ということを抜きにしては考えられない。

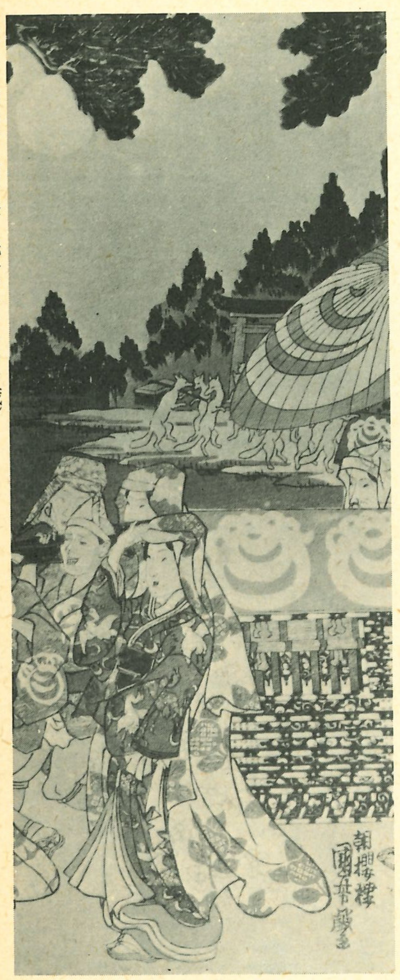
ただ儒教文化の特質として「建て前」と「本音」の二本立てで表の「建て前」の方だけ峻烈でも「本音」の裏の方では抜け道があったことも忘れてはならない。

さて国芳の「狐の嫁入図」を紹介するのに前口上が長くなったが、この三枚続きの作品は眺めれば眺めるほど謎に包まれている。

これには検閲印が、どういうわけかないのである。だから海賊版ということも考えられるが、秘密出版にしては国芳は堂々と署名しているのである。しかし彼が好んで押した「芳桐」の印は使用していない。この芳桐はわざと徳川家が嫌った豊臣秀吉の千成瓢簞の印に似せてあるのも彼の叛骨を表わしている。また、この版画には通常必ず入っている彫師、刷師の名も印刻されて居らず、見当のつかぬ印が白抜きで一枚にだけ押してあるだけだ。出版元も省略されている。こうしてみると、やはりこれは秘密出版かとも思われるが、公儀には届けの不要の私家版として出したものであろうか。

先に挙げたアメリカのビットウェル・コレクション所蔵の「狐の嫁入図」は色数も少なく貧弱の感を免れず、私は期待しただけに失望したが、私の所蔵のものは色数も多く保存もよく、大いに目を楽しませる。

これはまったく視覚的作品で、題名の「狐の嫁入図」以外は署名があるだけで、あと文字はいっさいない。絵以外の情報はないのである。しかもその絵と来たら昔からのいい伝えのいわゆる「狐の嫁入り」以外の何者でもないのは、ここに白黒版で掲げた挿絵を見て頂く通りなのである。



狐の嫁入図部分（国芳筆　浅井コレクション蔵）

三枚の中央の一枚に金蒔絵で飾った輿がある。その輿を守護するごとく何人かの被衣を被った上臈が付添って歩いている。輿に近い人物は完全に人間の顔貌を保っているが、輿から離れるのに比例して人物は狐に近くなる。そして行列の先頭と最後尾はまったくの狐の群れになっている。

しかしこの行列の重々しいことは美々しい衣裳や従者の持ち物などで最上位の人の輿入れということが判る趣向である。

そして上臈たちの衣裳の文様が菊や橘といったいわゆる「御所どき」有職風つまり京風なのである。ここいらに、何か国芳の意図したものがかくれているらしく思われるが、それを明瞭に指摘するわけにはいかない。私は「和宮降嫁」とみるのだが……。

普通「狐の嫁入り」とは子供を相手の口碑に過ぎない。それをこれだけの密画で表現し、これだけの綿密な彩色でこの絵を仕上げたのはいかなる考えであろうか。売品としてなら高価に売らねば引き合わぬ出版である。

私はこの絵のために国芳が捕らえられたという情報を持っていない。彼は役人から何かいわれても「ただ狐の嫁入りを描いただけでございます」と白ばくれたことだろう。しかし、例の国芳の戯画にある以上、ただごとではないことは大方の市民が知って居り口から口に取沙汰したのである。もうそれで国芳の意図は十分に達せられていたといってよいのであろう。諷刺とはまさにそういうものであるからだ。（劇作家）

当時の記録から

神谷栄子

東京芝増上寺の徳川将軍家墓地の改葬に伴う遺品・遺体の調査が開始されたのは昭和三十三年（一九五八）八月の二代将軍秀忠（台徳院）からであった。引続き六代将軍家宣（文昭院）がその年の十一月、翌昭和三十四年（一九五九）一月に十二代将軍家慶（慎徳院）、そして二月に静寛院宮と夫君の十四代将軍家茂（昭徳院）、三月に九代将軍家重（惇信院）、四月に七代将軍家継（有障院）、その後昭和三十五年（一九六〇）一月末までの間に将軍の奥方や側室、御子様方の改葬があり、私共その都度現地に赴いて調査に当たった。

遺品の調査がその分担である私共は、当然のことながら、二代、六代、十二代、十四代将軍のように副葬品が非常に多く、また比較的よい状態で出土したものに関しては、当時の記録がまことに詳しく、その後の調査内容も充実するのであるが、静寛院宮に関しては副葬品がほとんど残っていなかったため、記録ノートもスケッチの図を入れてさえ五頁に満たない。次にその中から抜粋して説明の補足になる写真など挿入し静寛院宮御改葬の模様を伝えようと思う。

昭和三十四年一月二十七日（火）晴

静寛院宮の御棺が愈々現われるというので（筆者現時点の註・宝塔——写真右——の解体から石室掘り等、御棺の出現までには作業に相当の日数がかかる）山辺先生と増上寺に行く（午後二時）。石室の蓋にあたるところが窪んでいるというので棺は潰れているのではなかろうかと予測されているが、今日石室の側石を除去する作業が進められていく中に次第にその予測が当たっているような諸状況が現われた。東西の側石の上部がはずされると、その中に炭（木炭）が現われ、石灰のようなものが見えた。その中に木棺らしいものが見える。工事監督の石屋さんが墓穴に入って当たって見る。その棺はぼろぼろに朽ちていて、その中に手を入れてみると、中にもう一つの棺があって手に触れたという。それも木はぼろぼろになっているそうである。今までのように棺を小屋まで持ち出すことは不可能なので今度の調査は墓穴の中で行うことに決まる。一月三十日午前十時から調査と決定。



発掘前の静寛院宮宝塔

一月三十日（金）曇時々小雨、午後晴

山辺先生、写真の市川さんと共に増上寺へ、昨日の雨で地盤もよくないし、鈴木先生も御都合が悪いというので、来週、二月五、六日ということになって十一時引き返す。

二月五日（木）晴

午前十時作業開始、先ず御対面（筆者現時点の註・御棺が現われた段階で徳川将軍家の御当主家正氏が御越しになられて御対面の儀式が行われる。写真右は当日御対面直前の写真）十一時に調査の私共の作業が始まる。木棺は桧製で、三重になっている（写真左）。石室と外棺との間には木炭が詰まっている。外棺の木の厚みは三寸で、外棺と中棺との間に石灰が詰まり、中棺と内棺の間は空洞である。中棺の外に麻縄がかけてあるが、朽損が著しくそのかけ方や結び方は不詳。棺の蓋は朽ちて遺体の上に落ちてしまっている。蓋の下はすぐに骨、北に頭して東方（正面）に横向き膝を曲げて納めてあることがわかる（半屈葬？）。木棺の蓋が御遺体の上にもろに落ちてしまっていたため か頭部が潰れている。後頭部の下方、首のうしろに束ねた御髪であろうか遺髪が見られる。歯は染めておられるので黒い。御鼻が非常に高い方だそうである（筆者現時点の註・鈴木先生の御見解）。これまでの将軍方の御骨にくらべて静寛院宮の御骨は非常につややかなので鈴木先生にうかがったところ、若いと骨のキメもこまかいのでとおっしやった。キメが細やかだと光線の反射の関係でつややかに見えるのであろう（筆者現時点の註・その時、恐れ多いことながら筆者は静寛院宮の没年と同年であったため、わが骨の光沢を想いまんざらでもなかったことを記憶する）。

副葬品はほとんどない。まったく不思議なほどない。着装の衣服さえ肩のあたり、膝のあたり、足のあたりに平織り（絹か麻の見分けなどとてもできそうにない）の裂がごく少々あっただけである。それと頭部近くにあった紐のようなもの、及びはじめ鏡かと思われ、後で写真ではないかと想われ始めた両腕の骨の間に見られたガラスの小片、以上。

午後三時半、棺の底に格を当てて（棺の底は割合しっかりしていて移動にも心配はないというので、途中から棺を小屋に移して作業を続けることになる）吊り上げ（写真次頁）、人夫さんたちが担いで小屋まで運ぶ。午後五時半までかかって骨をきれいに出す（筆者現時点の註・調査員総がかりで丁寧に御骨を拾い鈴木先生にお渡しした。にもかかわらず左腕は手首までの骨で、それより先の掌の骨は一片もなかったとのことである）。

六時半近く博物館に帰る。山辺先生は例のガラス板をあかりに透かして御覧になり、やはり写真らしいとおっしやる（湿板写真）。

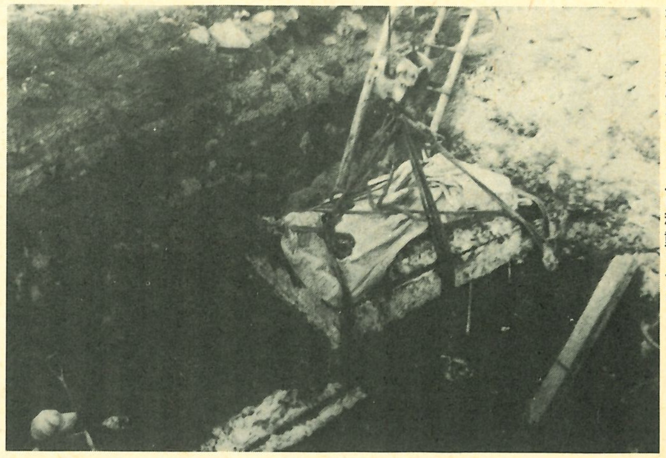
御所風のものと御殿風なものとがどの程度混



静寛院宮の御棺が現われる



桧製の御棺は三重になっている



御棺を墓所から吊り上げ移動させる

じっているか、今回の静寛院宮の副葬品には大きな期待をかけていたのだが、これでは全くどうしようもない。

二月六日（金）晴

山辺先生は昨夜は夜っぴて例のガラス板を御覧になったそうである。その結果、烏帽子をかぶったまだ十七、八歳の童顔の御夫君家茂公らしい御顔がかすかに見えたとおっしゃる。影像がはっきりするようなことでも出来たら、また、何かに影像を写し出すことでも出来たら、とその筋に問い合わせることにした。

二月九日（月）

写真の小沢さんに例の写真らしいガラスの小片を渡して調査を依頼する。金丸重嶺氏に電話連絡して調査の具体的な方法など聞いておられた。

二月十日（火）

小沢さんも昨夜一晩中写真と睨めっこをされたところ、やはり山辺先生同様に目鼻立ち等影像の一部が見えたと言われる。精査してもらいに小沢さんと保存科学に行く。この影像は次第に薄れて行くのだそうで早いところ精査を了らせなければならない。

二月十七日（火）

保存科学の江本さんは科研に例のガラス板を調べに行って下さる。

二月十八日（水）

江本さんは昨日の検査の結果では銀は発見されなかったと言われる。写真だという判定は下せない。さらに今日再び科研に行って調べて下さる。

三月三日（火）

保存科学の江本さんに写真の件をうかがいに行く。銀の検出は未だなく写真であることは実証できない現状、さらに一、二の検査をして下さるとのことであるので御預けしたままにしておく。

なお、静寛院宮の御改葬調査のすぐ後、二月十一日から十七日まで、大映系及び東急ニュース館で上映された「毎日世界ニュース三九二」の内容ノートもあるので加えておく。このニュース映画は筆者記録の番号を「歴史への招待」のスタッフの方が当たられたところ現存したので「皇女和宮の謎」にも挿入してある。

「毎日世界ニュース三九二　週間の話題」として「徳川家将軍家墓地の発掘」のタイトル

1増上寺の発掘現場　二月五日の静寛院宮の発掘現場

2遺品　十二代家慶将軍の平緒、飾太刀、襪

3遺品整理作業　(イ)六代家宣将軍の小袖水延し　(ロ)二代秀忠将軍の小袖接ぎ合わせ　(ハ)二代秀忠将軍の小袖

（東京国立文化財研究所主任研究官）

将軍の顔・庶民の顔

鈴木　尚

私ども日本人のからだは決して遠い昔から現在まで固定していたのではなく、時代とともに、顔や目、鼻の形など、あらゆる点でかわってきた。この意味から、それぞれの時代に特有な庶民の顔というものがあり、江戸時代も例外ではない。ところが同じ江戸時代でありながら、大名や貴族は庶民とひどくちがった顔形をもち、大名の統領である将軍はこの意味で最高に違っていた。

東京芝増上寺には、二代将軍徳川秀忠を初めとして三代将軍家光の子で、四代と五代将軍の兄弟である徳川綱重、その子家宣（六代将軍）、孫の家継（七代将軍）、家重（九代将軍）、家慶（十二代将軍）、家茂（十四代将軍）の七人の将軍、準将軍のほか、二代、六代、十一代、十三代、および十四代将軍の五人の正室および家光の側室桂昌院、家宣の側室月光院など五人の側室、その他将軍の子女を含む三十八人が埋葬され、その壮麗な霊廟は戦前、国宝に指定されていたが、戦災ですべて烏有に帰した。昭和三十三年から三年間にわたって、これらの墓地が改葬され、その際、筆者は遺体を調査研究する機会が与えられた。これら七名の将軍の顔には個人差はあっても、当時の庶民とは違ったある共通点がある。

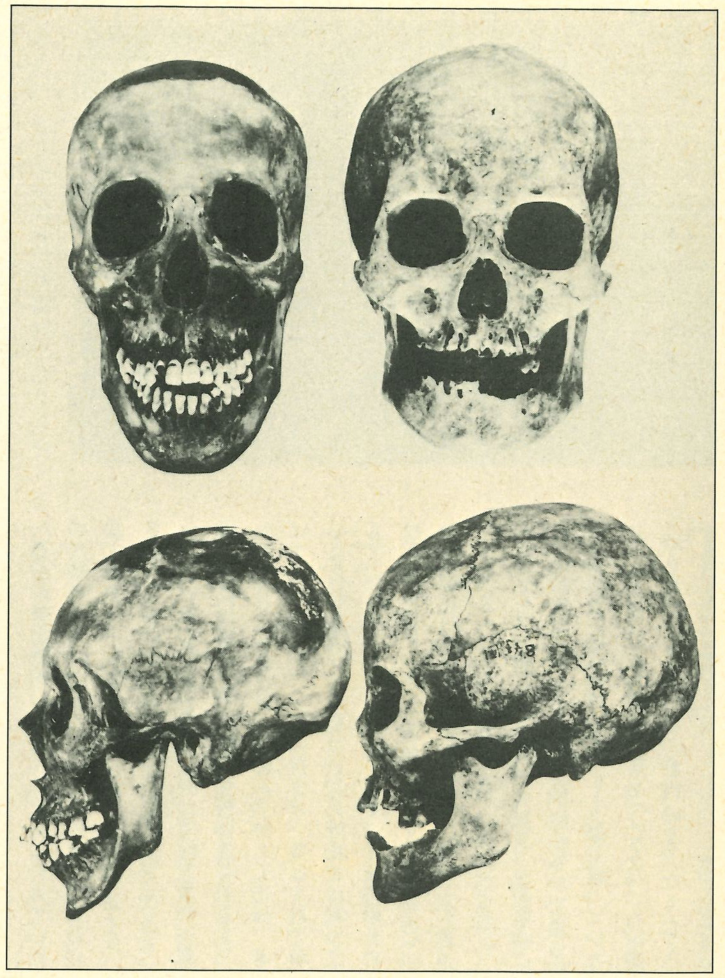
ところで日本の庶民は鎌倉時代、室町、江戸と時代が新しくなるほど、顔の形は長くなるが、将軍の顔は、当時の江戸庶民はもちろん、現在の日本人よりも長いくらいで、しかも後代の将軍ほどその程度が著しい。

最古の徳川秀忠は顔部がひどくこわれていたので細部までは判らなかった。古さではこれに次ぐ綱重は七将軍の中では最も丸顔であるが、それでも当時の庶民としては長いほうである。ところが最も新しい家茂に至っては、江戸の庶民の中には彼ほど長い顔の男性は見られなかっただろう。これは彼の顔幅が当時としては、並はずれて狭いのに、顔の長さは、並はずれて長いことによる。また鼻は一般の庶民では幅が広くて、しゃくれているのに将軍では後代のものほど幅が狭く、しかも高く隆起しているので、家茂の鼻は、当時としては最高に鼻すじが通っていた。

しかし反っ歯だけは現代人はもちろんのこと、当時の庶民よりむしろ強いくらいである。また将軍の歯は例外なく少しも磨り減っていない。七将軍のうち最高の年令で亡くなった家慶（六十歳）ですら、この磨耗はまったくなく、少年のように美しく輝いていた。このことはいうまでもなく、日常、噛む必要がないほど柔らかい食事を取っていたことを物語るもので、このことは将軍の顔の構造にも影響をおよぼし、将軍の顔の特殊性を生ずる原因の一つにもなったようである。しかし将軍のこのような特殊性が、それだけできまるはずはない。当然、彼らの母、つまり将軍の夫人、側室にどのような顔の女性が選ばれたかが問題である。

江戸時代の一般女子を標準にするとき、徳川の夫人たちは例外なく、当時、稀にしか見られなかった文字通り現代的な美人といってよい。もちろん静寛院（和宮）も例外ではなかった。細面で、鼻は高いが、横からみるとゆるやかに彎曲し、お歯黒をつけていた。また前関白鷹司政凞の姫の十三代家定夫人（天親院任子）は、すべての将軍の夫人、側室を通じて、最も現代的な美人であったと思われる。

このことから徳川の夫人、側室の選定に当たっては、美人という観点から厳選されたとみられるが、その際の基準はどんなものであったろうか。それは当時の美意識を知るうえでも興味がある。特別に意識しないまでも、仮に選定の基準があったとすれば、その条件として欠くことのできない形質は、それを庶民の変異の中に位置づけしてみると、変異の幅は小さいはずであるし、無関係な形質は逆に大きいだろう。



徳川家茂（左）と庶民（右）の頭蓋骨

この点に着目して顔の形質を変異が小さいものの順に並べた結果からみると、夫人の選択にあたって、面長な顔が望ましいが、当時の標準より長ければ許される。しかし、あごの幅は狭くなければならないし、鼻は高く隆起していなければならない。丸顔であごの張った女性は失格である。また顔と目の位置関係は、当時の平均型がよく、どちらに片寄ってもいけない。時代性と見なされる反っ歯や口がつき出した顔も、実は望ましい形質ではなかった。何百年もの間、徳川や諸大名の間で採用されたであろうこの選定基準は、将軍の顔の母型としてまことにふさわしく思われる。

　このようにして先祖を中世の庶民の中に発しただろう大名貴族の家系は、江戸時代に入ると彼らを育む生活様式と配偶者の選択によって、彼らの形質は急速に庶民のそれから離れ、超現代化の道をたどった結果、いわゆる貴族的タイプを生むようになったようである。

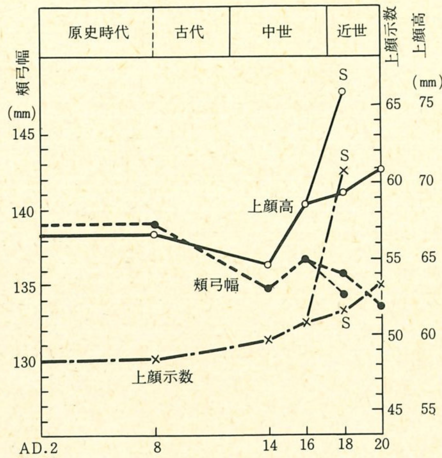
　これに対して一般庶民は中世以後どのような道をたどっただろうか。中世の庶民の特徴は長頭型つまりサイ槌頭で、顔は寸の詰まった丸顔、鼻は幅広く、鼻の付け根が広いばかりでなく、この部分はほとんど高まっていない。目は今の人よりも釣り上がり気味で、反っ歯のため口もとは突き出ている。

　続く江戸時代の庶民はやや現代的にはなってはいるがそれでもまだ丸顔で、鼻のつけ根が低くしゃくれた鼻に反っ歯をもつ伝統的な顔が多かった。

　ところが現在の日本人はどうだろうか。頭は後頭部が絶壁となった短頭型で、顔は瓜実型、鼻は顔の形につれてすんなりと鼻すじが通り、反っ歯は消え去り、今や巷には美男・美女が氾濫するようになった。

　このように骨でみる限り江戸時代の庶民と今の日本人との間には顔の形質に格段の差があることから見ると、江戸時代以後、日本人の形質は飛躍的に変化したことが想像される。そうすると当然、この二つの時代の間にある人びとは中間の形質を示すはずであり、この意味で、幕末から明治の初めに生をいとなんだ人びとの顔がどんなであったか、まず知りたいところである。

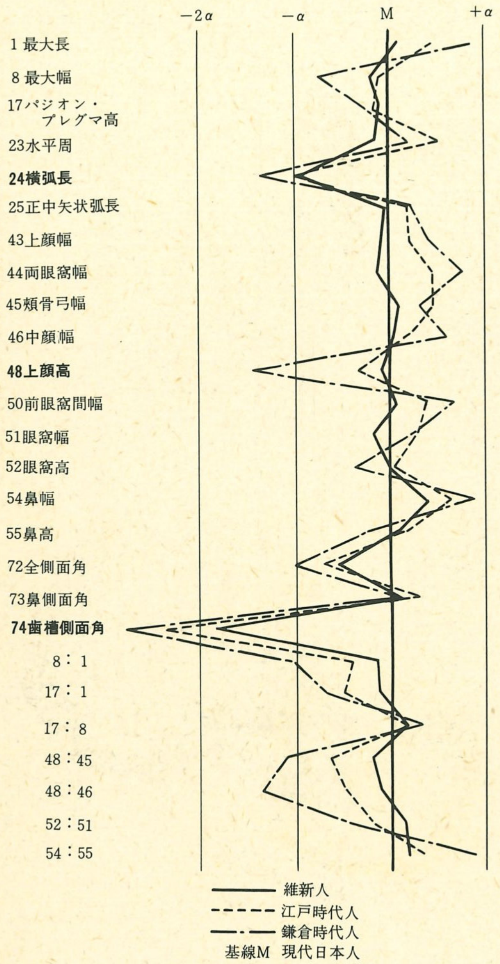
江戸時代庶民の顔の時代的推移と将軍の顔の特殊性（Sは将軍における各計測値の平均の位置）



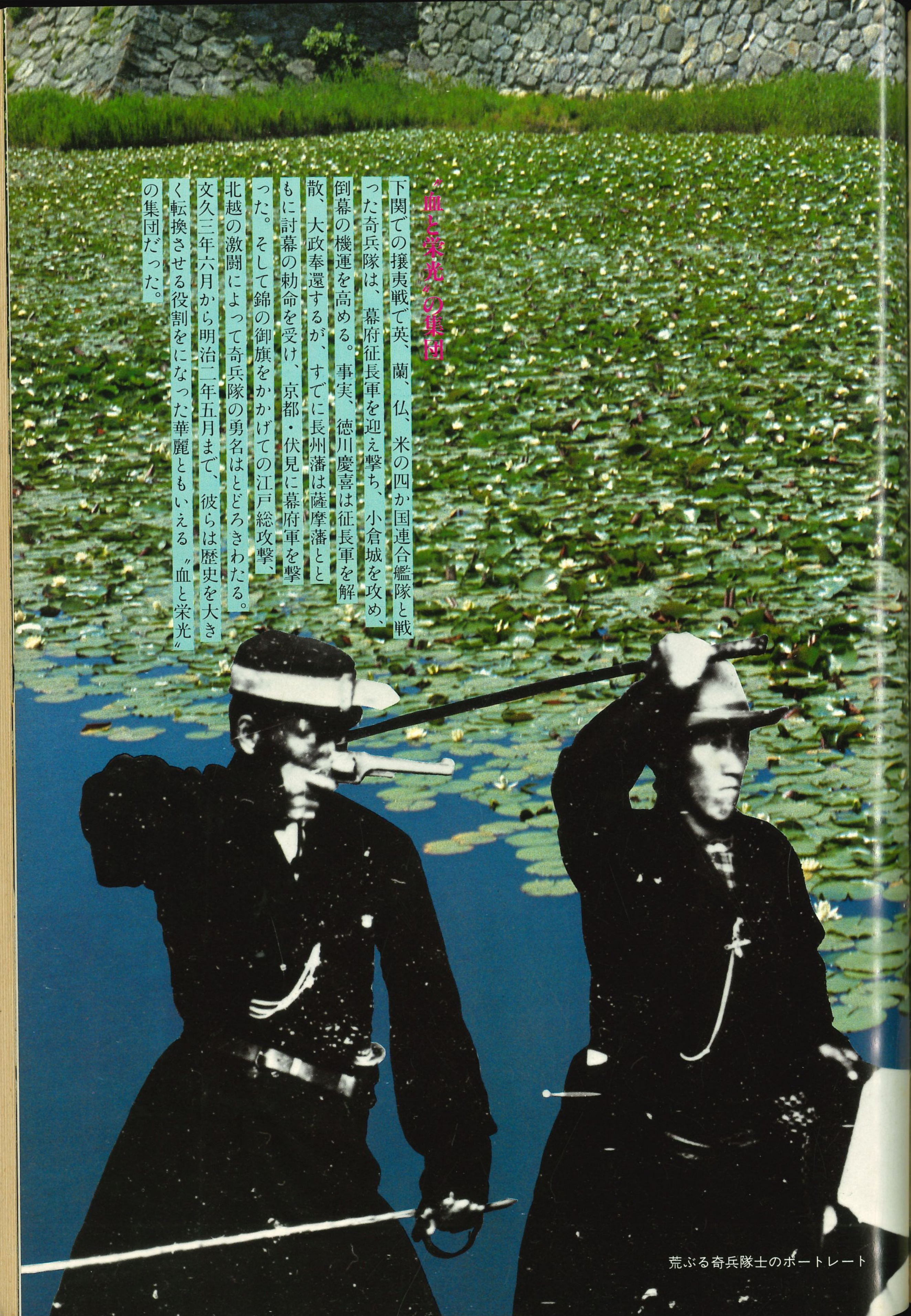
　昭和二十八年末、東京芝白金にある旧海軍墓地（今の明治学院大学敷地）の改葬に際して、埋葬された人骨を調べることができた。この墓地には初期の海軍軍人六百柱が埋葬してあった。これら埋葬者の生年は文政元年（一八一八）から明治十三年（一八八〇）に及び、死亡年は明治六年（一八七三）から大正十二年（一九二三）の間で、その大部分が一八四一年から七〇年の間に生まれ、一八七三年から九〇年の間に死亡した者であるから、幕末から明治前半にかけて生存した人々といってよかろう。

　人類学的に研究した結果によると、これら明治維新の人びとの頭形は、江戸時代人よりも短頭の方向に進むが現代人には及ばない、いわば両時代人の中間的タイプを示していた。また彼らの顔は江戸時代よりも瓜実型のタイプになっているが、やはり現代人ほどではない。その理由として、顔の形はもともと顔の幅と顔の長さできめられるが、明治維新の人びとの顔の形の幅はわずかではあるが江戸時代人よりも狭まるのに対して、顔の長さは逆に延びていることに基づいているが、今の日本人ではそれがもっと進んでいるということである。鼻の形は顔の変化につれて、やはり維新の人々の方がわずかながら江戸時代の人々よりもすんなりして、現代人に近づいている。これは主として鼻の幅が狭くなることに基づくようである。

　次に江戸時代の庶民の鼻の付け根はすでに述べたように現代人よりも広くて隆起は低い。ところが維新の人々はこの部分の幅が江戸時代の人よりもごくわずかながら狭いのに、この部分の隆起に沿って測った弧の長さには変わりがないので、両者の比の値は江戸時代人よりもわずかに小さく、したがって江戸時代人よりもわずかながら高い鼻根隆起をもつことになった。それでも維新人の鼻根の隆起は現代人には遠くおよばなかったらしく、むしろ江戸時代人に近かったようである。さらに江戸時代人の反っ歯は中世以来の伝統として伝えられてきたが、維新人はかなり改善されたとはいえ、なお現代人よ



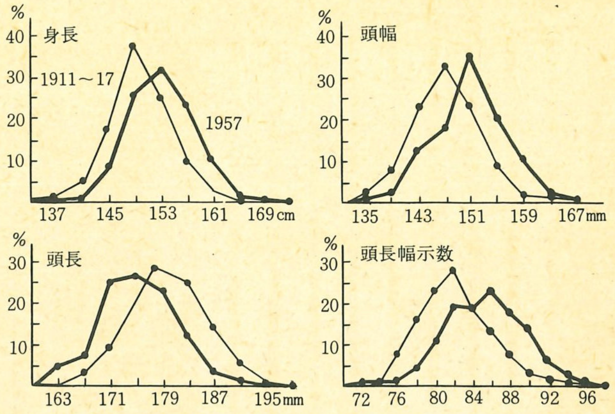
鎌倉時代以後の庶民頭骨形質の時代的推移（数字はR. Martinの人類学教科書の計測項目番号による）



〃血と栄光〃の集団

下関での攘夷戦で英、蘭、仏、米の四か国連合艦隊と戦った奇兵隊は、幕府征長軍を迎え撃ち、小倉城を攻め、倒幕の機運を高める。事実、徳川慶喜は征長軍を解散、大政奉還するが、すでに長州藩は薩摩藩とともに討幕の勅命を受け、京都・伏見に幕府軍を撃った。そして錦の御旗をかかげての江戸総攻撃、北越の激闘によって奇兵隊の勇名はとどろきわたる。文久三年六月から明治二年五月まで、彼らは歴史を大きく転換させる役割をになった華麗ともいえる〃血と栄光〃の集団だった。

荒ぶる奇兵隊士のポートレート



最近四十年間における日本人女子学生の身長と頭型の変化（――は一九一一～一七年〈松村瞭博士〉、――は一九五七年〈柳沢澄子博士〉の調査である）

りひどい反っ歯であった。

このようにしてみると維新人は大体において江戸時代人と現代人との中間に位置しているが、細かくみると顔の形では確かに今の日本人に近づいてはいるものの、ひしゃげた鼻と反っ歯とはまだ江戸時代人からあまり出ていないことがわかる。

要するに明治維新に生をいとなんだ人たちの顔は江戸時代人よりも現代的になったといっても、その顔貌はまだ江戸時代的な印象が強かったようである。このようにして中世日本人の顔は江戸時代人から明治維新人へと変化が進行して現代の日本人になったとみられる。

上に述べた変化は日本人が長い年代にわたって経験した時代的変化の一環であることはいうまでもない。この時代的変化を起こした原因が何であるかは別にして、変化が持続的に進行したものであれば、現在に近い年代をとってみても形質によっては、この年代に相当する形質変化が認められるはずである。この種の形質としては頭型をあげることができる。

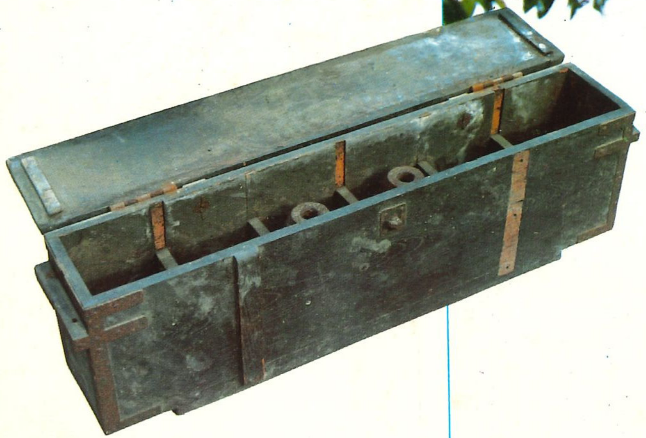
日本人の頭型は中世の長頭型から近世・現代へと次第に短頭化の方向をたどったが、生体の調査からみると、この傾向は現代でもなお進行しているようである。

一九一一年から一九一七年の間に日本全国の男子大学生六千人についておこなわれた頭形の調査によると頭示数の平均は八〇・八で中頭型、これに対する女性二千人の値は八一・九で短頭型であった。ところがその後、約三十年を経た一九四四年度の男子大学生の同じ数値は八四・一で短頭型となっていた。同様に女子学生でも一九五七年度の調査によると八五・九（短頭型）を示した。すなわち男子学生では三十年に頭示数で三単位、女子学生では四十年に四単位の増大があり、ともに十年に一単位の割合で短頭の方向にずれていたことになる。このことは、男女ともに頭長では十年に一センチの割で短くなるのに対して、頭幅では十年に一センチの割で幅が広くなったことに原因がある（上図）。

このように中世から今日まで持続的に日本人の頭が短頭化したことは、わが国だけにみられる特殊な現象ではなく、地球上の人々に共通にみられるいわゆる短頭化現象（Brachycephalization）の日本版とみなされている。

こうして日本人が中世から現在まで経過する間に受けた変化は短頭化をはじめとして、顔が細長くなり、すんなりした鼻と鼻根の隆起が強まることなど、ひとことでいえば徳川将軍ほど速度は早くはないが、形質の貴族化とみられる面がある。つまり私ども庶民も、ゆっくりではあるが、貴族化していると見ることもできそうである。こう考えると庶民の時代変化を起こした原因も、やはり将軍や大名に貴族的形質が生まれたのと同じ過程で現われたと見なす可能性がある。おそらく時代の経過とともに一般庶民の生活も向上し、貴族化した上に、無意識ながら遺伝的な選択がおこなわれたことが重要な因子となったのであろう。

（成城大学教授）



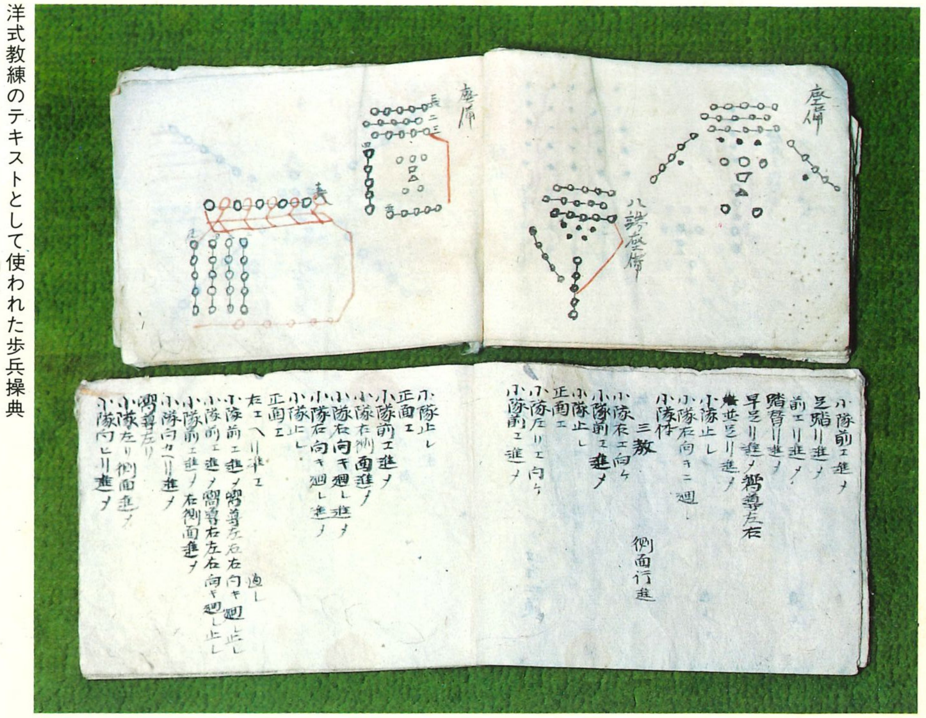




下関市日和山の頂きに立つ高杉晋作の陶像



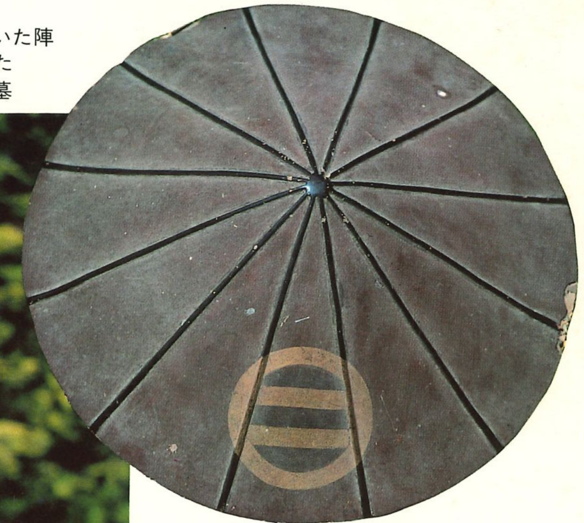
上・中　奇兵隊、遊撃隊など諸隊が使っていた砲弾入れの木箱と火薬箱（周東町通化寺）
下　ロシア軍の銃剣といわれる長目の短剣



洋式教練のテキストとして使われた歩兵操典

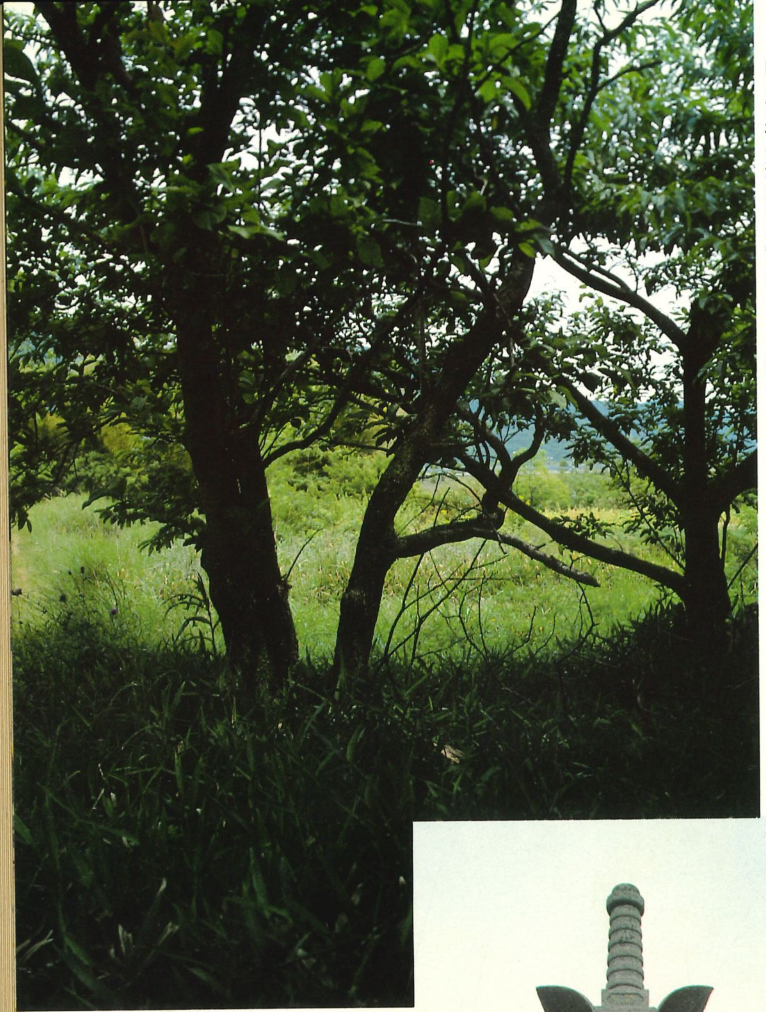
右　遊撃隊隊長来島又兵衛がかぶっていた陣笠。彼は後、蛤御門の戦いに没した
下　下関市吉田、東行庵。高杉晋作の墓





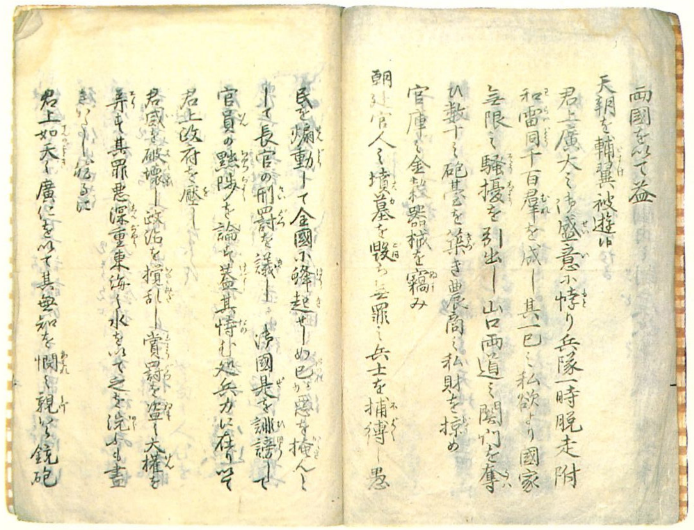
近代的軍隊の雛形

「その出身を論ぜず、老幼を問わず、一片殉国の志ありと思わん者は来り投ぜよ」と、高杉晋作（東行）が創設した奇兵隊に続いて生れた諸隊は、やがて五千人にもふくれあがる。正規軍の下級武士、農民、商家の若者などである。晋作はこの寄せ集め部隊に洋式訓練をほどこし、鋭利なエネルギーとした。



山口市柊の刑場跡は鬱蒼とした木立ちの中である





左　遊撃隊行進の図（周東町正蓮寺）
下　脱隊兵討伐のための藩庁檄文



叛乱隊士は防府・勝坂で藩庁軍と戦った。最激戦地といわれ、この敗戦が帰趨を決めた。



柊刑場跡に建てられている脱隊諸士招魂碑

用ずみの隊士は首切り

官軍として戊辰の動乱を戦った奇兵隊は、胸を張って長州へ帰った。だが、同時に彼らは藩にとって無用の存在となっていた。常備軍に選ばれなかった下級隊士など約二千人が、やがて脱隊。藩庁を包囲し、各地で常備軍と戦うことになる。そして鎮圧された後、投降したものは斬首、遠島、投獄など、きびしい処分を受けた。



殉国の万骨枯る

脱隊・叛乱兵の死刑になったものの半数は農民だった。あるものは首謀者として、さらし首になり、あるものは郷里へ逃げたところを捕えられ、わが家の田圃で首を打たれた。殉国の志をもって身を捨てて戦った結末がこれであった。

一方、動乱のなかに戦い倒れた隊士たちの約半数は〝神霊〟として下関市桜山神社に祀られている。吉田松陰、高杉晋作、久坂玄瑞以下無名戦士の霊である。



右　長門市大羽山。藤村虎之助らはここで処刑された

下　周東町通化寺境内の遊撃隊招魂碑

左　下関市桜山神社。三百九十一の霊標



綺羅を連ねる将星たち

維新政権から明治政府に移ると、西郷隆盛、大久保利通ら薩摩勢に対して、伊藤博文、井上馨、山県有朋、桂太郎ら長州閥が急速に勢力を伸ばす。伊藤は足軽の子、山県はさらに低い身分の子だが、ともに奇兵隊で出世の糸口をつかんだ。伊藤は総理となり、長州藩の軍制改革を指導した大村益次郎のあとをついで"天皇の軍隊"組織をつくった山県は、陸軍卿として徴兵を実施する。奇兵隊で生き残った彼らが、日本の事実上の支配者となったのである。

薩摩の大山巌③が日露戦争に出征した時の記念写真。最前列には薩長の巨魁が綺羅星の如く居並ぶ。皇居内で撮影されたもの①桂太郎総理大臣 ②伊藤博文侯爵 ④児玉源太郎陸軍大将 ⑤山県有朋陸軍元帥 ⑥寺内正毅陸軍大臣等が長州出身。他に薩摩の山本権兵衛、野津貫道、松方正義等の顔が見える



奇兵隊叛乱

奈良本辰也

■ならもとたつや
大正2年山口県生まれ 前立命館大学教授 日本近世史 著書『高杉晋作』(中公新書)『明治維新論』『葉隠』『吉田松陰』『近世日本の思想と文化』(岩波書店)

NHK 佐久間 宏

明治政府の屋台骨を揺るがした男たち

山口県――

かつて防長二州の毛利藩として徳川幕府を倒し、維新回天の主役となったこの県の歴史は彩りに満ちている。

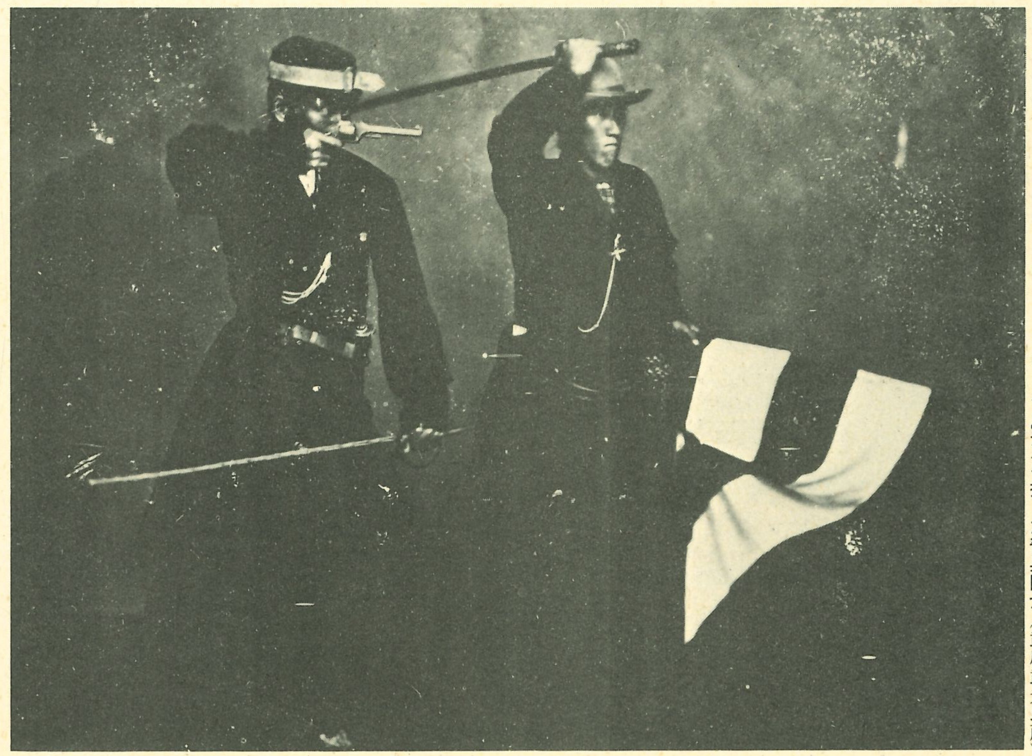
しかし、明治維新を成し遂げた直後、この県で起こった一つの悲劇的な出来事についてはあまり知られていない。

木戸孝允、西郷隆盛など維新の立役者たちを驚がくさせ、誕生したばかりの明治政府の屋台骨を揺るがしたその事件とは、奇兵隊の叛乱であった。

官軍の主力として幕府を倒し、その後も明治新政府の軍の中核をなしていた長州奇兵隊が、維新直後の明治二年暮れ、山口藩庁を取り囲み、みずからの手で樹立した新政府に公然と叛旗をひるがえしたのである。正に驚天動地の出来事であった。

では、奇兵隊とはいったいどのような存在だったのであろうか。

ここに三枚の古ぼけた写真がある。この写真を見ると、奇兵隊というものがどんな軍隊であったのか理解出来るかも知れない。二人の人物がピストルを持ち、軍刀を持ち、軍旗を持っている写真。これは正に近代的な軍人らしい写真であるが、もう一枚の写真では、白足袋をはき、向う脛を出して浴衣のすそをはさみ、帯をして煙草入れを下げ、首には手ぬぐいを巻いている。おまけに手には当時最新流行のこうもりがさをさしている。なんとも珍妙な格好だがこれもまた奇兵隊士の写真なのである。そして、三枚目の写真。向かって左から二番目の人は、ぼくは船来の時計を持っているよと自慢そうに見せているし、一番左端の人などは恐らく年端もいかない子どもだと思われる。ちょんまげの人もあればマフラーをしている人もある。およそ服装、年令、顔つき、どれをとってもてんでんばらばらの軍隊であることがわかる。

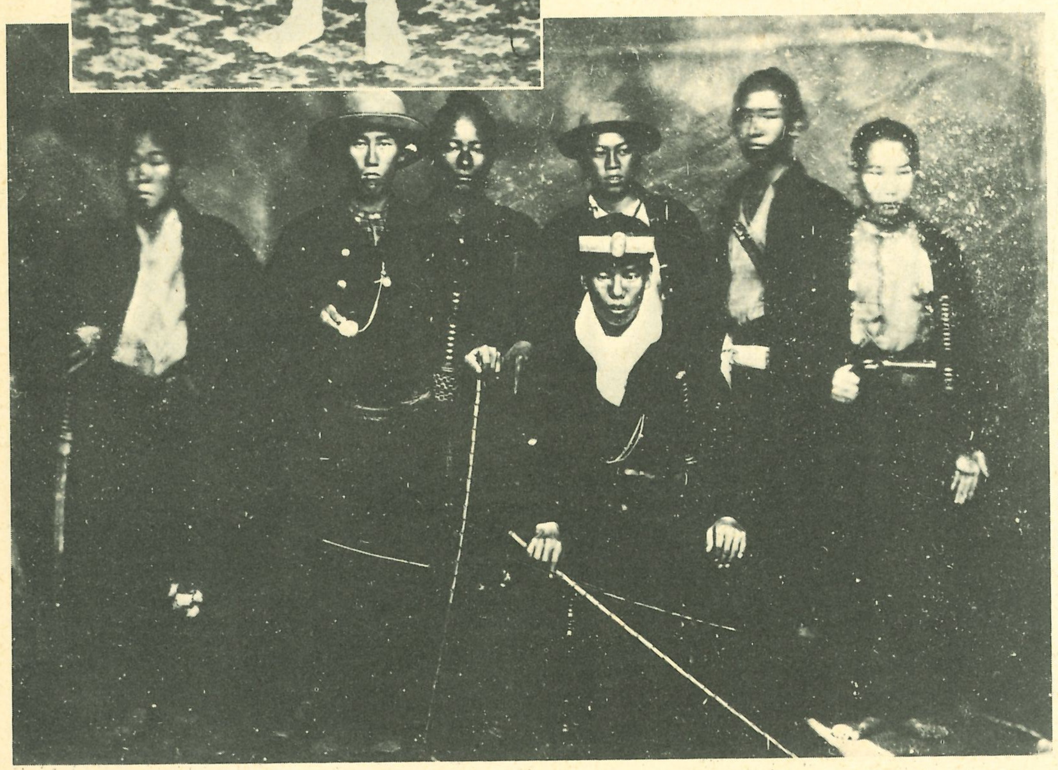


ピストルと軍刀を持った奇兵隊士（武広武夫氏蔵）

これらの写真は、明治二年（一八六九）秋、つまり叛乱の直前に下関で撮影されたものだが、一目見ただけで、奇兵隊がいかにさまざまな階層の人々が参加していた庶民の軍隊であったかをうかがい知ることが出来る。



こうもりがさをさした浴衣姿の奇兵隊士（浦上豊氏蔵）



時計を自慢そうに見せたり、マフラーを巻いたりしている奇兵隊士たち（武広武夫氏蔵）

近代的な軍隊——奇兵隊の誕生

奇兵隊の「奇兵」とは、中国の史書『史記』などに記された〝奇を以って兵を用いる〟からその名を由来する。すなわち藩の正規兵である世禄の武士たちとは別に、あらゆる階層からの志願者によって編成された新しい軍隊である。

この時期、長州藩は幕末の激動の中にあった。かねてからの「攘夷」の主張を実行に移し、関門海峡を通過するアメリカ、フランス、オランダの艦船を砲撃したのが文久三年（一八六三）五月。



高杉晋作　外国艦隊の報復攻撃により長州藩が滅亡の危機にたたされたとき、25歳の晋作は「我に策あり」といって奇兵隊を創った（長府博物館蔵）

洋夷退散と大いに意気上がり朝廷に報告して褒勅を賜ったのもつかの間、翌六月には外国艦隊による報復攻撃が下関で開始された。この戦いで、長州武士団はみじめな敗北を喫する。戦国時代以来の鎧、兜、旗さしものという武士たちは、外国軍隊の圧倒的な火力の前にほとんど戦わずして壊滅したのであった。下関を中心とする海岸線の砲台は占領され、破壊される。しかもなお第二、第三の攻撃が予想されその上に幕府による重圧があった。長州藩は滅亡の危機に立たされたのであった。

ここに一人の天才が登場する。百五十石取りの藩士高杉晋作である。この時、二十五歳。「汝、策ありや」との藩主毛利敬親公の問いに答えて、「我に策あり。有志を募りて一隊を創立し、名付けて奇兵隊と言わん」（『奇兵隊日記』冒頭の一節）と述べたという。もはや頼りにならない世禄の武士を除いた階層、すなわち農家の二、三男、商人、職人、神主、僧侶など長州のあらゆる階層の人々から志願者を募って生まれたのが奇兵隊である。明治維新に先立つこと五年、奇兵隊はそれまでの封建武士団に代わって庶民が初めて公式に戦いに参加したという点で、日本で最初の近代的な民兵の誕生であった。

外国艦隊との戦闘、その後に続く幕府軍との戦争、その間に長州では奇兵隊に続き遊撃隊、力士隊、八幡隊、整武隊などさまざまの名の庶民軍が生まれ、その数は百六十一隊、五千人に達した。

長州諸隊のひとつ遊撃隊が使っていた諸道具が残っている。陣笠、正式には薮くぐり笠という、鳥羽・伏見の戦争など今残っている戊辰戦争の絵でおなじみの官軍の陣笠である。そしていわゆる剣付き鉄砲の剣、それから弾薬入れに地雷の火薬入れの桶、当時使っていた木の弁当箱もある。さらに注目されるのは『歩兵操典』とでも言うべきものである。非常に細かく、しかも懇切丁寧に書いてあり、例えば「小隊前へ進め」だとか、「足踏み進め」、「前へ進め」というような現在私たちが使っている号令が当時からこうして使われていることがわかる。「並み足進め」、「小隊止まれ」、「小隊右向きまわれ」といろいろあり、しかもその図解があってだれでもわかるようになっている。

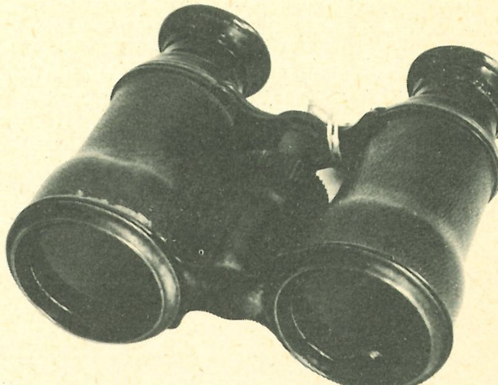
——かなり西洋式の訓練がされていたようですね。



奇兵隊の結成は回船問屋の白石正一郎の家で行われた



奇兵隊の生みの親である高杉晋作の生家



高杉晋作所用の双眼鏡（長府博物館蔵）

奈良本　まったく西洋式の訓練ですね。多分近代兵制の創始者といわれている大村益次郎が訳したやつを写して持って来たものでしょう。大村は山口にそういう学校を開きますからね。

――高杉晋作は最初から西洋式の訓練をする洋式軍隊を作ろうと考えたんでしょうか。

奈良本　高杉は上海に行ってますから、イギリスやフランスの軍隊の強力なことを見てきておりますし、ああいう軍隊を作ろうという考えがあったのかも知れませんね。

〝幕府がやって来る〟

――それにしても高杉の呼びかけに応じてあっという間に有志が集まりますね。その理由は何だったんでしょうか。

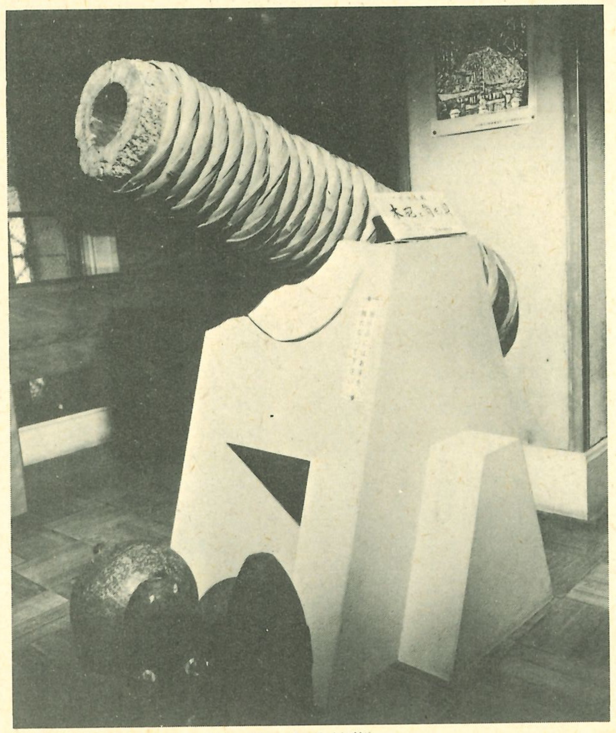


外国艦隊の兵士たちに占拠された前田砲台（東行庵提供）

奈良本　一番初めに奇兵隊に参加したのは豪商の白石正一郎でしょう。それと弟の廉作。それが六十人ばかりの有志を率いてやって来るんです。白石正一郎というのは国学者でもあるんですね。だから国学を学んで尊王攘夷に燃えた青年たちが最初に集まったとみたらいいんじゃないでしょうか。その後に一般庶民がやって来ますが、これは段々変質すると言っちゃおかしいんですけど、第二次長州征伐の時に兵隊が決定的に足りなくなり、そこでだれも彼も大いに煽って呼び入れるんですね、奇兵隊へやって来いと。その時の言葉が「幕府がやって来るぞ」という言葉なんです。私は大島口の戦いがあった周防大島生まれなんですが、その当時の生き残りとも言うべきおじいさんの話を聞くと、幕府がやって来る、幕府がやって来るとみんな言ってたそうですね。幕府がやって来るというのは、幕府軍が上陸して家が焼き払われるぞ、それから強姦とか強盗とかも戦争にはつきものじゃ。断固として立ち上がらなければ、えらいことになる。何としてもわが長州藩を守らなけりゃいかんと、いわゆる長州のナショナリズムを煽って、それが爆発してみんなどんどん参加していったのだと思いますね。

――庶民の軍隊というのは強かったんでしょうか。

奈良本　古い侍たちは、鉄砲を使うのがあまり好きでないんです。あれは足軽のやるものだ――と。大砲もあまり好きでなかったようですね。しかし、下関でそのために外国軍隊からさんざんやられて、そしてついにこれはもうだめだということになるわけですけれども、そういう次第で西洋式が採り入れられる。それにいちばん適しておったのは、格式とか因習とかを持っていない奇兵隊ということになりますね。



馬関戦争の時の木砲と砲弾（長府博物館蔵）

——なるほどね。侍は前の見方が……。

奈良本　どこか残っていますね。高杉晋作が組織して、それを徹底的に訓練したのが大村益次郎ということになるわけですよ。

——で、実際に強かったんでしょうか。

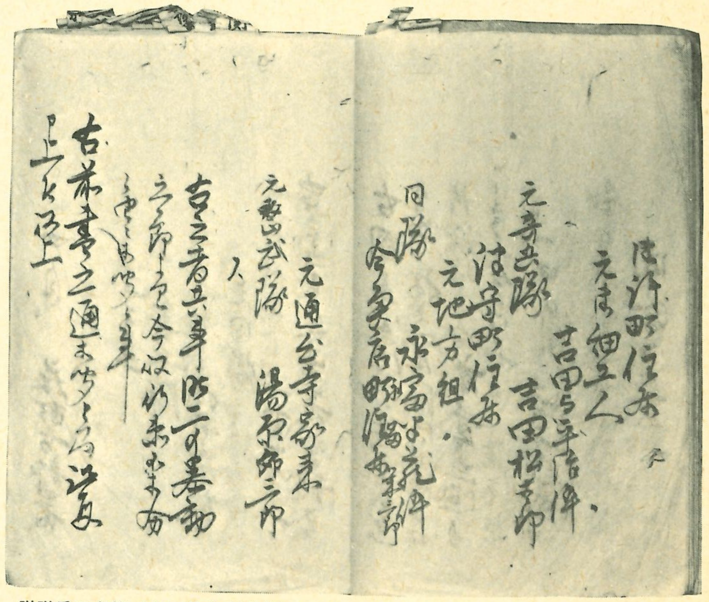
奈良本　幕府軍の方は古いでしょう。井伊も榊原もかつては徳川四天王といわれたがみな古い。ところがこの奇兵隊というのは、いってみれば根っからの近代的な軍隊です。しかも歴戦のつわものです。一番初めに下関の砲撃、その次は蛤御門の戦い、それから第二次長州征伐、それから東北戦争、それらに全部参加して嚇々たる戦果をあげているのですからやはり強い。それに長州というのは意気盛んだった。おれたちがやらなきゃというわけで。その時の歌にありますが、「明治維新に長州がなけりゃ、いまに日本は唐の国」、あるいは「江戸が見たけりゃ長州にござれ、いまに長州が江戸となる」と、そんな歌を作って歌っているわけです。非常に意気盛んだった。だから士気も高い。歴戦の上に士気が高ければやはりこれは強かったでしょう。

栄光の代償は〝首切り〟だった

幕末の激動の中で奇兵隊は官軍の主力として各地を転戦する。庶民の軍隊「奇兵隊」は世直し、四民平等をめざす倒幕、維新の象徴的存在であった。そして明治二年五月、函館五稜郭の榎本武揚軍降伏によって長い戦争は終わった。新しい時代の始まりである。

しかし、山口に凱旋した長州軍の兵士たちを待ち構えていたのは思いもよらぬ知らせであった。

すなわち、当時御屋形とよばれた山口藩庁からの発表である。それは奇兵隊などすべての長州諸隊を解散し、新たに選抜によって四大隊からの常備軍を作るというものであった。

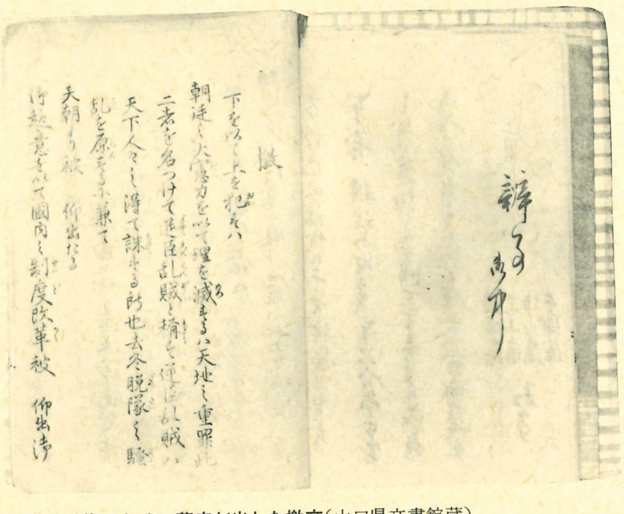


脱隊兵の名簿（山口県文書館蔵）

当然兵士の数は減る。倒幕戦での戦功に対して恩賞を期待し、将来にわたって明治新政府の軍のかなめとなることを予想していた長州諸隊の兵士たちには思いもよらぬ発表であった。おびただしい血を流して明治維新を成就させた代償がこの首切りにも近い新政府の措置であった。

諸隊から山口藩庁に嘆願書が差し出される。恩賞を公平に分配せよ、栄誉ある隊の名を残せ——と。しかもその嘆願書は、不正幹部の非行をつき、軍や政治の改革を要求していた。しかし、藩政府は諸隊の要求を拒絶。選抜と整理による大隊編成を強行したのであった。

明治二年十二月、二千人の兵士が大砲を引き、武器を手に山口の



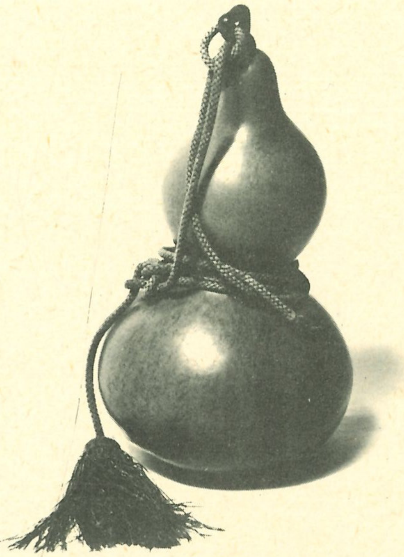
脱隊兵討伐のために藩庁が出した檄文（山口県文書館蔵）

奇兵隊叛乱〈年表〉

文久3（1863）	5月、長州藩は下関で米英蘭の船を砲撃する　6月、米艦ついで仏艦が報復攻撃し砲台を占領　その直後6月6日、高杉晋作、奇兵隊を結成する
元治1（1864）	7月、禁門の変に対して長州追討の勅命下る（第一次長州征伐） 8月、米英仏蘭の連合艦隊、下関砲撃　長州藩はこの敗北により攘夷の不可能を悟った 10月、長州藩幕府へ恭順　奇兵隊をはじめ諸隊へ解散命令 12月、高杉は遊撃・力士両隊を率いて功山寺で挙兵し、馬関襲撃「謝罪恭順」を唱える保守派に対し、「武備恭順」「尊王倒幕」の藩論を固めるべく立ち上がったのである　奇兵隊もこれに呼応した
元治2（1865） 慶応1	2月、藩論を「尊王討幕」に統一 9月、将軍家茂、征長の勅許を得る（第二次長州征伐）
慶応2（1866）	1月、薩長同盟成る 8月、将軍家茂死去により、征長停止の勅命下る
慶応3（1867）	4月14日、高杉晋作死す 10月、討幕の密勅下る 12月、王政復古の大号令
慶応4（1868） 明治1	戊辰戦争始まる　奇兵隊など諸隊は奥羽各地で戦果を上げた　11月ごろより順次凱旋
明治2（1869）	5月、五稜郭の榎本武揚軍降伏 9月維新の功に賞典の詔書　山口藩庁，長州の解散と常備軍設置を発表　11月、奇兵隊など諸隊名廃止　12月、脱隊兵が煽動した百姓一揆各地に起こる
明治3（1870）	1月、奇兵隊など諸隊の脱隊兵、山口藩庁を重包囲　2月、木戸孝允、藩兵を山口へ進め叛乱を鎮圧 2月20日、政府は常備兵編成規則を各藩に通達　士族・卒族のほか、新たに兵隊取立を禁止するというものであった　2月末、脱隊兵の大量処刑

兵営を脱走、その刃を藩政府に向けた。兵士たちのやり場のない不満の爆発であった。

奈良本 藩の政府が非常に無能なんです。というのは、有能な人間は全部明治政府に行っているでしょう、東京に。しかも長州藩はあの動乱の中でずいぶんたくさん有為な人材を失ったですね。周布政之助、久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿、時山直八……、たくさんの人間が死んでしまった。かろうじて生き残った有能な人間はみんな明治政府に出仕している。このため藩政府に残っているのはあまり能力のない人たちです。それが解隊の責任者でしょう。それにケチなんですよね。戦死者にだけ三両ほどやったという。わずか三両ですよ。それで諸隊が怒るわけですよ。戦死者に三両ということは、生きている者にとっては一体何両だろうかということになってきますわね。もっとも藩政府の側にも苦しい事情がありましてね。約五千人いた諸隊の費用をどこから賄っていたかということです。これは正確にいうと浜田県とか、小倉とか占領地の年貢から出していたわけですよ。つまり大村益次郎が攻めていって浜田を占領した。小倉もそうでしょう。この二つの地域からあがってくる年貢で兵士を養っていた。ところが明治新政府になって占領地なんてのは許されませんよね。だからそれを藩の政府に突き返す。ところが、彼らがいうがままにすると金がなくなる。しかも現実には五千人もの人間を養うことはできなくなっているのです。そこで奇兵隊側では大村益次郎なんかと相談して、新政府の常備軍としてそのうちの二千人を長州諸隊から出そうじゃないかと、今度は東京の新政府で養ってくれというわけなんです。それが常備軍四大隊の構想なんですね。



高杉晋作所用の瓢（ヒサゴ） 晋作はこれを山県有朋に贈ったがのちに返してもらった（東行庵蔵）

アブレ者たちの鬱憤

—— しかし、五千人の中から二千人を選ぶのが大変ですね。三千人はあぶれるわけですし……。

奈良本 そうです。その場合やはり選ばれるのは、成績優秀な者とか、血筋正しき者とか、そういう人たちが選ばれるでしょう。つまり年寄りとか、けがをした者とか、身もとが確かでない者とか、そういう者は省かれますわね。その人々は除隊させられるわけです。ここに問題があるわけです。

—— 当然その人たちは、ご一新になればいい生活ができるんじゃないかという希望もあったでしょうね。

奈良本 自分たちはこれほど命を投げ出して戦い、しかも奇兵隊といえば天下にうたわれた兵隊だと。

—— いわば軍功第一ということですね。

奈良本 それが弊履のごとく捨てられる。自分たちは下級武士くらいの待遇は受けるのじゃないかと思っていた望みがふっ飛んでしまった。そしてろくに金もくれないということでは、やはり不満も持ちますよね。しかも帰るにしても、かれらには帰るところがないですよね。まあ僧侶とか神官は大丈夫でしょうが、それも長い戦争の間にことによると他の人が入っているかもしれない。それから大体農家の二、三男が多いですから帰って何をするかということですね。非常に前途が不安なんです。いってみれば再就職のあてがなくて、しかも退職手当もないというようなものですからね。

—— 不満が爆発するのはあたり前ですね。

奈良本 そして当時は日本中に不満が渦巻いています。百姓だってそうでしょう。もっといい政府が来るのかと思ったら年貢は同じように取られますしね。しかも四民平等といって平等になったけれども、これだったら平等でなくってもいいや、と。まだ下に人がいる方がいいんじゃないかと、そういうような気分ですよ。だから不満が国内にみなぎっているような状態でした。

叛乱した兵たちは、おれたちが起ったら百姓も参加してくれるだろう、自分たちは一人じゃないんだという期待もあったでしょうね。助けてくれるだろうというね。それに、藩の政府軍ぐらい大したことないと見くびっていた。あの無能な連中が指揮してるんだったらというような気持もあったでしょう。それで兵営を脱走して山口で藩知事になっている毛利の殿様を脅かすわけです。

高札と俎板

奇兵隊関係の資料は、おもに山口県文書館、長府博物館、東行庵などで観ることができる。

山口県文書館は脱隊兵名簿、脱隊兵討伐のための藩庁檄文など毛利藩の文書を完全に整理保存している。長府博物館には、白石正一郎の馬関日記、馬関戦闘図、報国隊旗や木砲、高杉晋作が白石正一郎へ上海土産に買って帰った双眼鏡などがある。東行庵はほとんど高杉晋作の遺品が多いが、元治元年、功山寺で挙兵の折に三条実美卿が贈った奇兵隊旗「忠義骨髄を塡む」がずっしりと重い。

さらに遊撃隊本営が置かれた周東町の通化寺。意外なほどたくさんの品が遺されている。墨が薄れた一枚の高札は——

「去冬脱隊の者とも一身の私より御国の御大事を引き出し乱暴の所業言語に絶し候処殿様にはいろいろ御なだめ、遊ばされ是までの罪は御とがめ無之とまで御云され候処　いよいよ逆賊はつのり御趣意にそむき鉄砲を以て立さわぎ……実に古今まれなる大逆無道　もはや御両国中士農工商をいはす身命をなげうち殿様の御悪難をすくい奉り候は勿論の事にて片時も捨置かたし　天兵を以て御征伐仰出され候事必然に候　乍去やむを得ず同意いたし候者もあるべし今日先非をくひ罪を謝し義兵にくしみ候ハハ決して御咎無之候　萬一迷をとり悪逆をたすけ候者ハ一人ももらさす誅滅いたすへき者也　明治二年二月　海陸軍」　また、「撃軍陣営」の文字が読める分厚い板がある。住職の説明では、遊撃軍陣営所の門札。上下を切り落として俎板に使っていたらしい。

いかめしく山門にかかげられていた門札が外され、放り出されたとき、かわりに「一人ももらさず誅滅いたすべき」という高札が立てられたのであろう。門札を俎板にしたものが使った庖丁は、遊撃軍が遺した刀であったろうか。

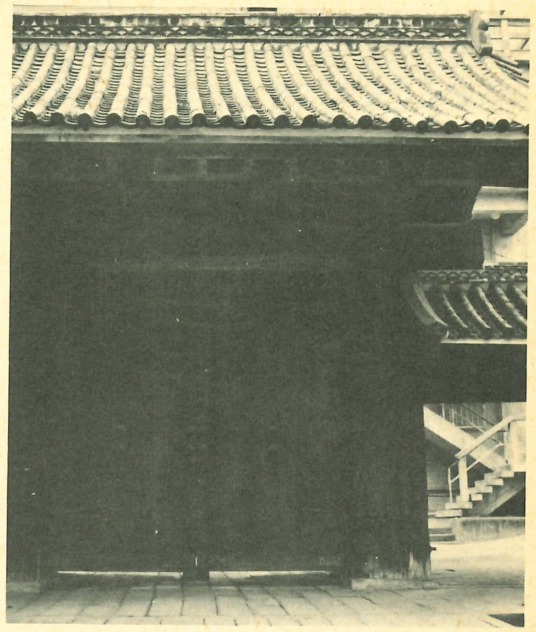
粗末な白木綿に「維新団」と墨をにじませた肩章も、通化寺にある。このあたり、被差別階級出身者で組織された維新団の故郷でもある。それは、官軍であったころの奇兵隊士が身につけた錦の肩章とくらべると、あまりにも歴然とした格差であった。彼らは多分、通化寺の本営に出入りすることも、隊伍を組んで行進することもないままに逆賊とされ、あるいは誅され、あるいは身を隠すために故郷を捨てたのではあるまいか。

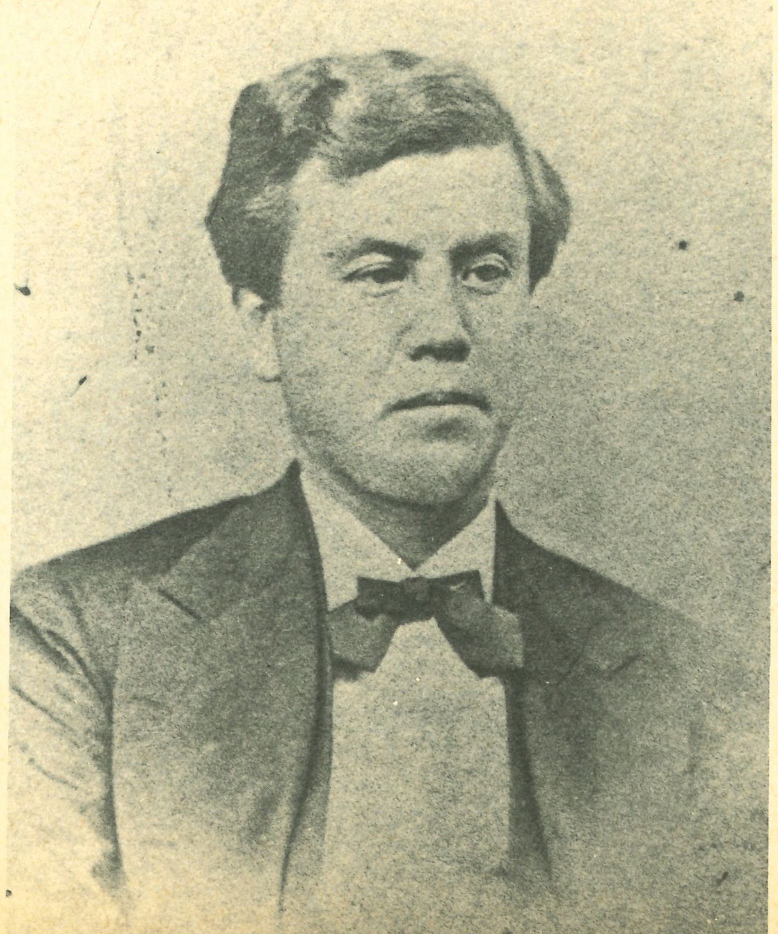
藩のエース・木戸孝允の立場

叛乱兵は、山口から十六キロ南の防府に集結する。彼らは各所で物資を調達、あるいは百姓一揆を煽動して、長州各地を無政府状態に置いた。叛乱軍は山口に向かって十八か所の砲台を築き、藩庁に要求の実現を迫った。

明治三年一月、山口藩庁は叛乱兵の手で重包囲され、藩知事以下が中に閉じこめられ、食糧の搬入さえ難しいという容易ならざる事態となった。

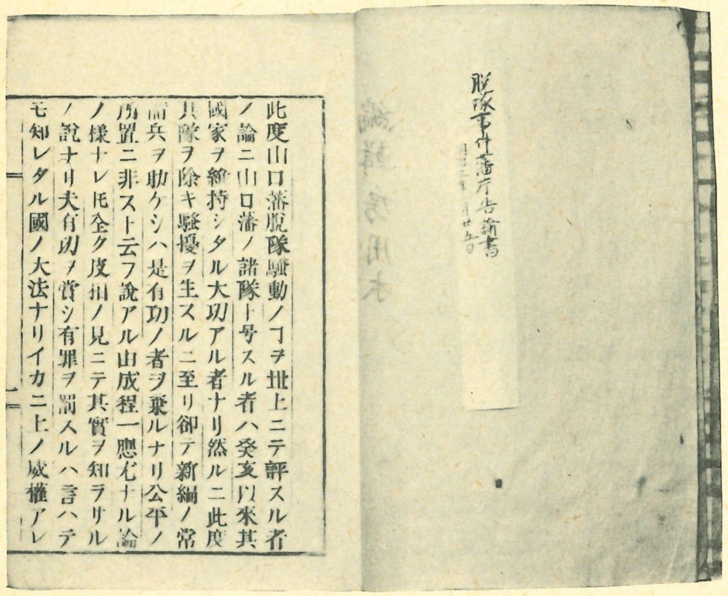
事件は東京に急報される。誕生したばかりの明治新政府にとって足もとを揺るがす大事件であった。長州出身の新政府参議木戸孝允が急ぎ現地へと向かう。東京・大阪に出張中の藩兵が呼び戻された。


藩庁の表門　かつて若き高杉晋作や桂小五郎らが肩をいからせてこの門を出入りしていたが、奇兵隊の叛乱によって脱隊兵たちに包囲された藩知事たちはこの門内に閉じ込められてしまった


長州出身の新政府参議木戸孝允は、おのれの政治生命をかけて叛乱軍鎮圧の指揮をとった

二月八日、叛乱軍への攻撃が三方向から開始された。維新の元勲木戸孝允がその一隊をみずから率いて、かつての同志の討伐に向かったのである。

奈良本　木戸は初めはそれほどと思ってなかったんですよ。ところが郷里に帰ってみると大変でしょう。山口へ入ろうとしても、とても入れない。だから、これは断固としてやらなきゃいかん、と。ちょうどその時西郷がやって来ましてね、叛乱鎮圧の兵を貸そうかと言うんですよ。肥前の佐賀藩も兵を貸しましょう、肥後藩も兵を貸しましょうと言って、あっちこっちから申し出があるわけです。というのは当時は統一的な軍隊がまだなくて、各藩がばらばらに軍隊を持てるわけです。長州藩の場合、叛乱鎮圧に使えるのは、東京と大阪に出しているわずかな兵隊と、萩に干城(かんじょうたい)隊といってもとの世禄武士の隊、あとは岩国、清末(きよすえ)、長府という支藩の兵です。だから鎮圧軍といってもあまり数はいないわけです。しかし、木戸は独力で解決しようとする。つまり他藩から援助されたら長州の発言権が小さくなる、自治能力なしと見られるわけですね。長州はだめじゃないか、自分のところの藩も治められないで何を言ってるんだということになる。そこで木戸は本気になるわけです。これはなんとしても長州だけの力でやっつけてしまわなきゃいけない。つまり薩摩も来るかも知れないが、その前にかたをつけてしまおうということで、自分は長州で集めた兵、それに井上馨も大阪から兵を率いて来て、というような形で急きょ立ち向かう。だから戦闘の初めではそれほどたくさん兵はいないんですよ。木戸の日記を見ますと、たしか叛乱軍の三分の一ぐらいでやっていますよね。

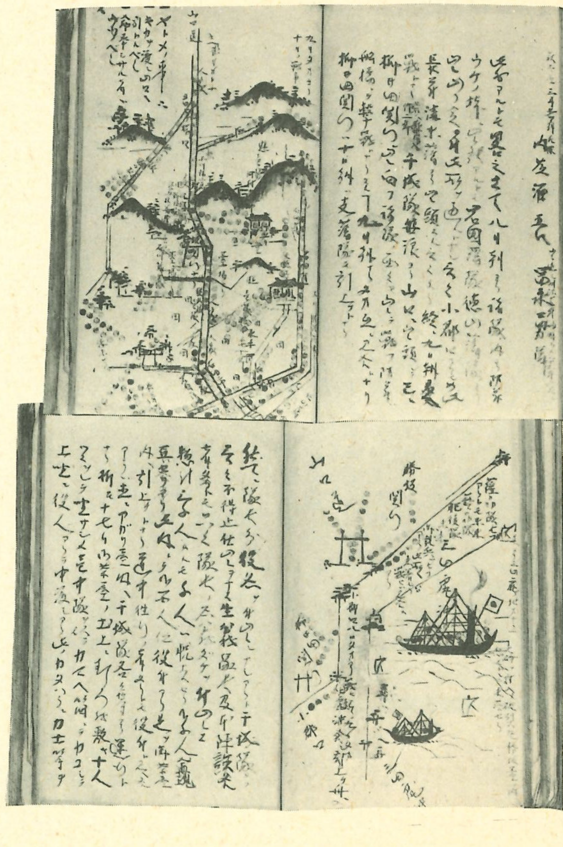

脱隊事件藩庁告諭書

此度山口藩脱隊騒動ノヿヲ世上ニテ評スル者
ノ論ニ山口藩ノ諸隊ト号スル者ハ癸亥以来其
國家ヲ維持シタル大功アル者ナリ然ルニ此度
其隊ヲ除キ騒擾ヲ生スルニ至リ却テ新編ノ常
備兵ヲ助ケシハ是有功ノ者ヲ棄ルナリ公平ノ
所置ニ非スト云フ説アル由成程一應尤ナル論
ノ様ナレ𪜈全ク皮相ノ見ニテ其實ヲ知ラサル
ノ説ナリ夫有功ヲ賞シ有罪ヲ罰スルハ言ハテ
モ知レタル國ノ大法ナリイカニ上ノ威權アレ

脱隊事件藩庁告諭書（山口県文書館蔵）



叛乱軍の中心人物の一人であった橋本亀十郎がのちに戦況を書き記した閑居録（西村厳氏蔵）



「十一時から十二時の間、脱隊の徒、銃を束ねて襲来、一時大烈戦。第四大隊の死傷はなはだ多し。漸く三方の敵を払い、銃声漸く静かなり、我が兵は最初百余人、敵勢はその三、四倍、防禦はなはだ難し。漸く百余人を加う。この他に一人の遊兵も無し、兵士ははなはだ疲労す」（木戸孝允の日記より）

奈良本　圧迫されて非常に苦戦して一時退いていますよ。ところがあとから援兵が各支藩から出て来る。それから海軍が海から大砲を撃つということで戦況が変わるわけなんです。

——そのあたりの戦況が、叛乱側の中心だった橋本亀十郎という人が後になって書いた『閑居録（かんきょろく）』という本に図入りで書かれていますが、山口と防府の中間の勝坂という場所の戦闘で木戸も戦ったわけですが、これを見ますと最初は叛乱軍が埋めつくし、討伐側はちょっぴり。それがあとの方になりますと、いまお話にありました海に軍艦もいますね。そしてここに「薩州隊来たらず、芸州隊、肥後隊来たらず」と書いてありますが、結局到着しないわけですね。

奈良本　ですからその前にやっちゃうわけですよ。もう済みましたというわけですね。

——もう少し長びけば……。

奈良本　長びけば来ましたね。そうすると、もしかしたら中央政府における木戸の発言権がなくなって、維新の三傑といわれたその一傑がことによるとなかったかも知れない（笑）。

——数の上で優勢だった叛乱軍が敗れた理由は何だったんですか。

奈良本　叛乱軍の方は戦況が悪くなって負け始めると、ガタガタとくずれちゃうんです。いってみれば烏合の衆ですからね。指揮官、隊長というのは全部鎮圧側でしょう。隊長がいなかったら号令がかけられないわけですよ。小さな小隊ぐらいだったら何とかできるでしょうけど、中隊の指揮はとれなくなる。近代的な軍隊ですからね。先ほどの『歩兵操典』なんかで完全に洋式に訓練されたことが、叛乱軍にとっては裏目に出てるんです。つまり、下士だけでは近代的な戦闘はできませんわね。だからいくら意気盛んでも、結局全体を統括する指揮官がいなかったことが、叛乱側の弱さになったということでしょうね。それで木戸たちの鎮圧軍に最後には負けてしまうということになるんです。

革命の持つ宿命とはいいながら……

降伏した兵たちに残酷な処分が下る。

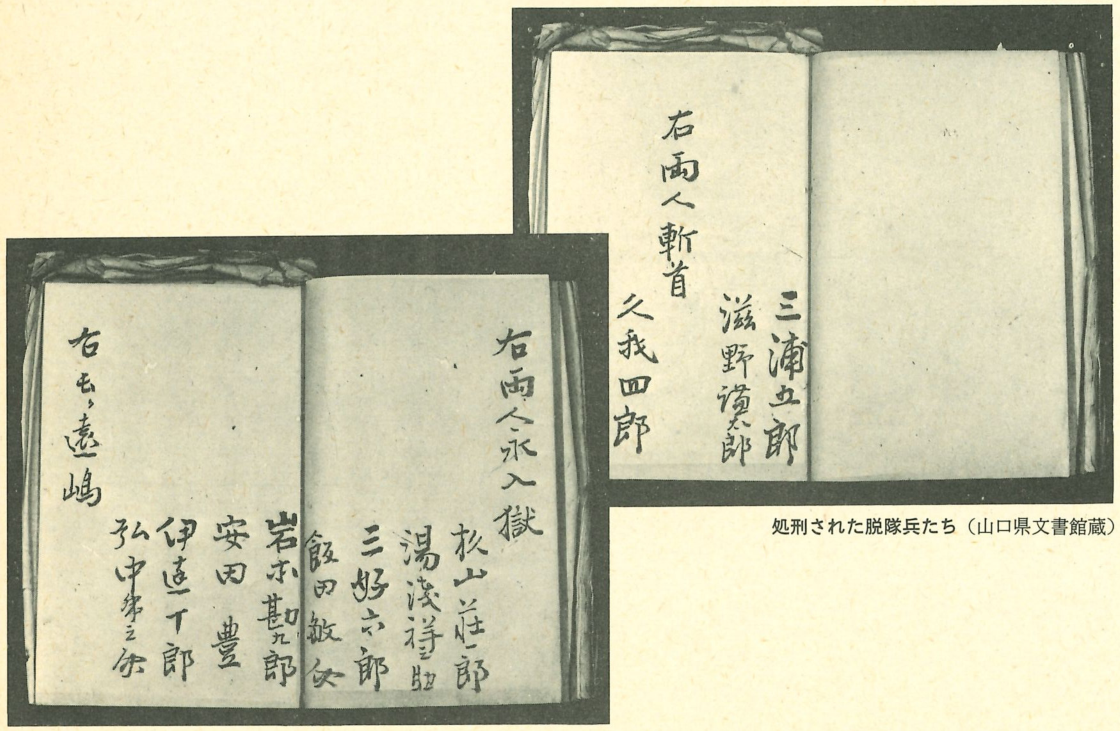
死刑百三十三名。投獄、流罪にされた者は数知れなかった。処刑は山口郊外の柊（ひいらぎ）刑場で行われ、見せしめのため、首がさらされた。刑場の小川は処刑者の血で赤く染まり、首のない死体は近くの古井戸に容赦なく投げ込まれたという。

逃亡した叛乱兵は全国に指名手配され、その探索は十年にも及んだ。

処刑者百三十三名のうち、およそ半数が百姓出身であった。

前記橋本の『閑居録』に、惻々と読む者の心に迫る一文がある。

「三月朔日トナリ八百万神ヲ拝シテ故郷ノ方ヲ眺ムルニ如何ヤ自然トタ空トナリ桃ノ花ヤアンスノ花イト盛ンナリ半ハタ風ニ飛行



処刑された脱隊兵たち（山口県文書館蔵）



萩城址

モアリ日ハ西山ニ入タリ橋の坊ノ鐘ノ音ハナントアワレ誘ヒケン

無月在星独帳然
北風万感難成眠
夜来落涙花飛盡
郷有地郷己七年

亀山ノカラスハヤミ夜ニ声長々アリ然ルニ十二時ニモ至ルアランヒソカニ飛聞アリシニ只今ヨリ柊村ニヲヒテ死罪アリ由ナラン小人ヲ以テ聞ク如何己ニラッパノ声アリ長々タランはや明方トナリニ中隊ヲ以テラッパノ音声ヲ厳然トナシ人ノ声音ノ無キ様ニナシテ只荒ナワニくゝり柊村ノ野中ノ松木ニツナキヲキテニケ所ニ定メテ都合ニ十七人斬首ニ行ナワレアリタリ当日七時頃ニモアリシニ生義三拾余人御用所ニ呼出アリ如何ヲ聞クニ橋ノ坊ニ宿替トアリ飛言ニハ切腹トモ聞ヘアリ一同ニ呼出ニ應シタルニ堂内ハ紡々議論トナリアトヨリ聞クニ木戸準一郎氏帰国シ該人等ノ死ヲ許シテ云々ノ由ナラン折モ夕方トナリ拟ヘアリタシト内令アリ明ルニ三日トナルナラン桃ノ花ノ賀タラン一日黄泉道ノ延ンヤト案スルナリケン（後略）」

——結局叛乱側が最終的に期待したものは何だったんでしょうか。やはり明治維新の時の功労を認めてくれ、生活を保障してくれ、それだけのことだったのでしょうか。

奈良本　まあそれが一番大きいでしょうね。イデオロギーとしては、例えば大村益次郎はけしからんというので、大村の墓をあばいていますよね、大村は近代主義者ですから。そんなことをしたり、斬髪、廃刀への反対ですね。こんなものはいやだ、けしからんというようなことを言っていますから。

——新体制になじめなかったということもあるわけですか。

奈良本　いや、それは金さえ出して保障してやればなじめないことはないでしょうね。ところが実際は素っ裸で放り出されたわけですから、これではちょっとかないませんわね。いまの会社を馘になるのに、退職手当もなければ先の見込みもないということで首切ったらストライキが起きます。

——一揆みたいなものですか。

奈良本　実際に一揆も起こしています。例えば長州の占領地の大森代官領で一揆が起こるんですが、そこには脱走兵が六人ほど入って煽ってますからね。ですから一種のストライキですね。イデオロギーとしてはいろいろ難しいことを言っているけれども、根本にあるのは生活の不安、前途の不

無明に眠る萬骨

関市長府・功山寺境内、長府博物館の横に萬骨塔なるものがある。

「皇国の為に尽したる古今無名の士を祀る所なり　此塔の礎石は全国縁由の地より寄贈されたる記念石にして——」とあって、数百の名を刻んださまざまの石が土饅頭をつくっている。だが、その名は吉田松陰やら梅田雲浜やら前原一誠やら、知名の士ばかり。知名の士によって無名の士を祀るというポリシーのようだ。しかし、そういう形が無名の士の霊をやすめるものかどうかは、別の問題だろう。

国木田独歩『富岡先生』のモデル、富永有隣は松下村塾で維新の元勲たちを教えたが、彼は世に出ることなく終わった。独歩の文章を引用すれば、「妙なはずみから雲梯をすべり落ち」て、むなしく故郷で朽ちようとしていたが、娘の婿探しに上京して井下聞吉（井上馨）や江藤三輔（伊藤博文）を訪ねる。二人とも教え子である。ところが、「それをなんだ！　侯爵づらや伯爵づらを遠慮なくさらけ出してその傲慢無礼な風たらなかった。おれもグイと癪にさわったから半時もおらんでずんずん宿へもどってやった」というわけである。

下関の豪商白石正一郎も、長州志士のスポンサーとして名は残っているが忿懣を抱いて死んだ一人ではなかったか。

彼の邸は下関駅近くにあった。当時は海に面していた、その浜門がいま国道二号線ぞいの松小田町に移されている。高杉晋作らが足繁く出入りしただろう瓦葺きの門は多少傾き、土塀も痛んでいるが、さすがに貫録の風情が残っている。住んでいるのは、国道で、「一八食堂」を経営している山下さんという人である。

高杉に惚れこんだ白石は奇兵隊づくりの資金を提供し、ほとんど蔵を空にした。いわば革命道楽である。だが、高杉が早世しなかったらどうだったろう。維新の元勲たちの上に立つ高杉のゴッドファザー的な存在として、巨大な政商になっていたのではないか。そのことを商人の白石が考えなかったわけではあるまい。

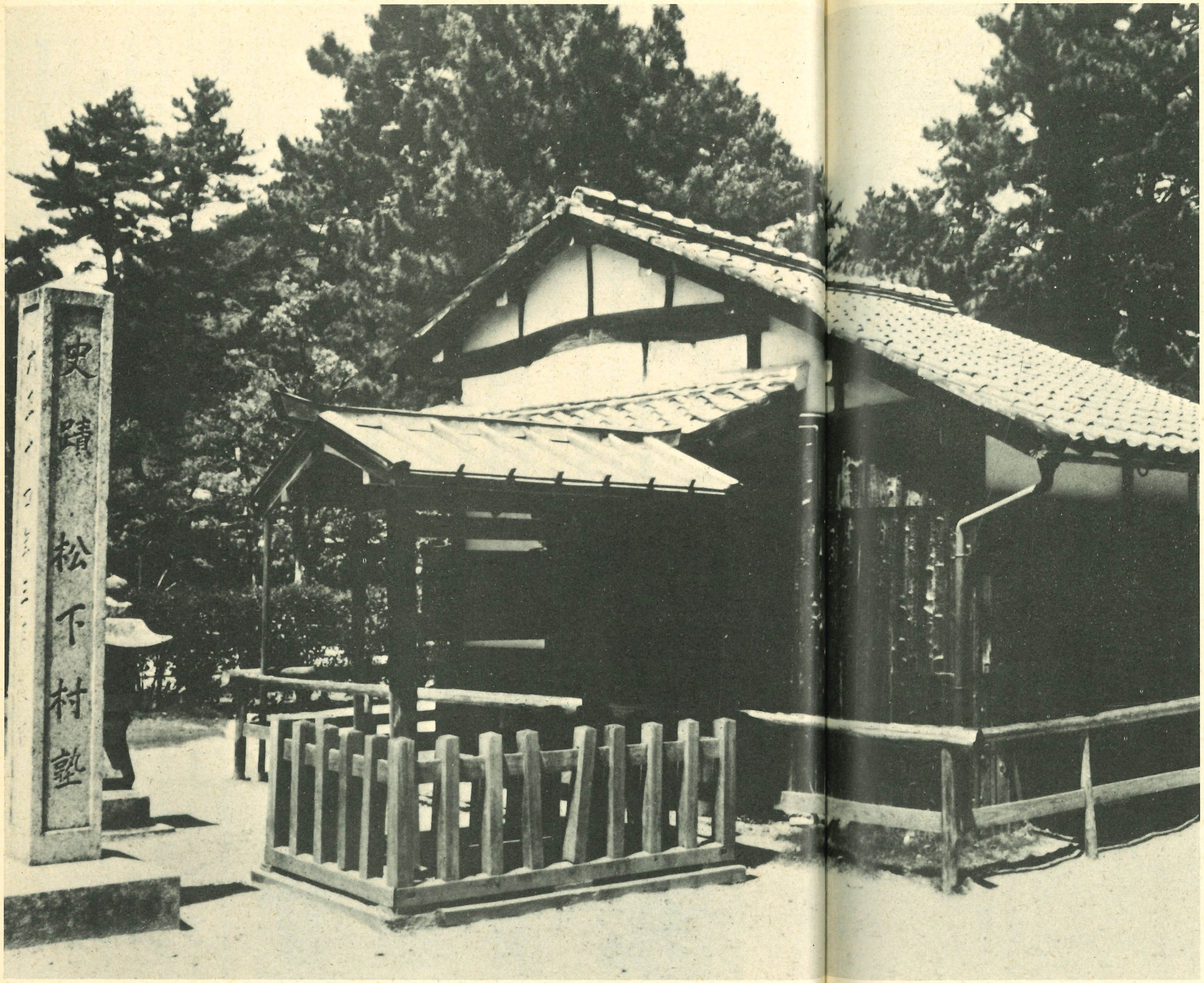
現実は、白石にとって不運だった。高杉は死に、生き残った長州の志士は権勢を誇るが、彼を思い出すものはいなかった。革命は成就したが、白石は落魄した。彼は後に、安徳帝や平家一門の墓がある阿弥陀寺が赤間宮となっての初代宮司になる。

しかしいま、朱色の竜宮造が海峡の白波に美しいコントラストをみせている赤間宮のどこにも、白石の名は見当たらない。

安、これです。
——非常なものですね。
奈良本　革命というものは、いつでもそういうものを振り落として いきますよね。どこの場合でもそうです。世の中が変わるとついて行けない人間もいれば、あるいはこうじゃなかった、もっと素晴らしいものができるはずだったという大変な理想主義者がいます。理想と現実は違うじゃないか、これならもとの方がよかったじゃないかという人もいるでしょうし、いろいろいますわね。
——いわば革命の持っている宿命みたいなものでしょうか。
奈良本　まあ宿命だと思いますね。いつでもそういうことになる。一番不幸なのはイデオロギー過剰の連中です。例えば、神代直人とか大楽源太郎とかいうのが長州にいますが、そういう人たちはイデオロギーを本当に信じ込んでいる。ところが革命が終わったら、さておれたちが命を的にして戦った成果がこれなのか、こんなものだったのかと、そういうような絶望感がある。そうすると、それがぱっと爆発していろんなものになるわけですね。

栄光の男たちと夢破れた男たち

一枚の写真が残されている。
明治三十七年、日露戦争に出征する満州派遣軍司令官、大山巌の宮中での壮行会に出席した人々の記念写真である。この中に、長州閥とよばれるひときわ目立つ一団がいる。
総理大臣、後に公爵・桂太郎。
陸軍大臣、後に総理・寺内正毅。
日本最初の総理・元老の伊藤博文。
陸軍の総師、後に総理・公爵にもなる山県有朋。
日露戦の総参謀長・児玉源太郎。
四十年前の幕末維新の時期、この人々は長州の無名の若者であっ



吉田松陰の松下村塾　松陰の門下から高杉晋作や久坂玄瑞ら多くの逸材が出、ある者は悲惨な死を遂げ、またある者は栄光の明治を迎えた

た。奇兵隊、力士隊など長州諸隊で、ご一新を目指し、懸命な青春の日々を過していた人たちである。

――幕末から維新にかけて日本の激動の真只中にほうり込まれたのが長州ですね。しかしながら、明治になってみますと、例えば伊藤博文や山県有朋のように位人臣をきわめる人も出てくれば、戦場の片隅でひっそりと息を引き取っていった名もない人々もいる、あるいは叛乱を起こして処刑される人もある、というように単に人間の運命というだけでは片づけられない何かを感じるんですが、長州のご出身といたしましてはどのようにお考えですか。

奈良本　いや結局それが革命というものの非情さでしょうね。歴史の非情さというのは、そんなところにあるんですけれども。

しかし、もうひとつ言いますと、大きな目で見た場合、明治維新というものがあれでよかったのかということが常にあると思うんですね。要するに大久保が出てきて日本を近代化していく。ヨーロッパをモデルにしてぐんぐんひっぱっていく、それが最高だと彼は思ったわけですよね。確かにそのことにおいて日本はいわゆる強国の仲間入りをしましたが、しかしながらもう少しテンポがゆるくてもよかったんじゃないかということも考えられるわけなんです。

例えば前原一誠という長州出身の人がいますが、この人なんか吉田松陰そっくりの人物だといわれて、実際本当によく似ている人なんです。精神主義者でね。彼は北越戦争に出陣して行って、越後で農民の悲惨な状態を見るわけです。で、その悲惨な状態はどこからきているんだろうかと考えて、それは信濃川が毎年氾濫して、せっかくの農民の苦労を駄目にしちゃうからだと確信する。だからこれを分水したらいいんじゃないか、信濃川の分水計画というのは前からあったんですが、それを実行に移すのはこのおれだというので、戦争が終わるとすぐ――まだ全体の戦争が片づいていない前に、分水計画に手をつけるわけですよ。ところが、大久保からそんな金はないと断わられる。そうしますと彼は、じゃあ明治政府になけりゃ越後の年貢を自分にまかせてくれ、その年貢でやってみせるからと、そう大久保に言うわけです。そんなことをやられたらたまらないというわけで、大久保は彼をすぐぱっと参議に任ずる、つまり大臣にするわけですよ。まあいってみれば前原は地方官みたいなものでしょう。それを大臣にして東京に呼び寄せるんです。大変な抜擢でしょう。それで彼は兵部大輔になるわけなんですが、前原は鬱々として楽しみませんわね。つまり、こんなはずじゃなかった、農民の生活を楽にしてやるのがおれたちの仕事じゃないか、それなのに、こんなことをしてて良いのだろうかと。そして彼は辞めて長州へ帰って来るでしょう。やがて萩で前原一誠の乱を起こすわけです。

西郷だってそうじゃないかと私は思うんですよ。西郷もやはり何かもっと彼の理想があったと思う。「敬天愛人」というようなことを言っているんですからね。その理想とまったく違って、ヨーロッパそのもののような近代主義がローラーのごとく日本をならしていく。それに対するひとつの絶望感というか、あるいは悲憤といいますか、そういうものが西郷の中にあったと思います。明治維新というものは、そういう前原や西郷の目で見てやるともっといろいろなイメージを持てると思います。だから、奇兵隊の叛乱の中にも無名の庶民たちにそういうひとつの夢があって、それが無惨にこわれた。そしてあとから出てきて、彼らの命の上をすうっと押しならしていったものは、近代のローラーである、近代化である、ということでしょうね。


奇兵隊ゆかりの人々が祀られている下関市の桜山神社

文久三年（一八六三）、長州の危機に際し奇兵隊に参加した人々は、百姓、町人、僧侶など多くが十代や二十代の若者であった。彼らは維新の正義を信じてみずから志願兵となり、戦い、多くは非業の死を遂げた。そしてその功により、この人々は神としてまつられた。

しかし、新しい世を目指し、同じようにみずからの血を流して戦いながら、明治二年の反乱に加わった兵士たちの名はこの中にない。処刑された兵士たちの多くは、世間の目をはばかった遺族によって、墓すら与えられなかったのである。

下関市の桜山神社。

靖国神社より早く、日本最初の兵士たちの招魂場として慶応元年（一八六五）に設立されたこの場所は、いま長州奇兵隊ゆかりの人々がまつられている。その数三百九十一柱、ほとんどが無名の兵士たちだが、現在ではその中に奇兵隊の創立者高杉晋作や明治の元勲山県有朋の名もある。

奇兵隊回向

谷 玉仙尼

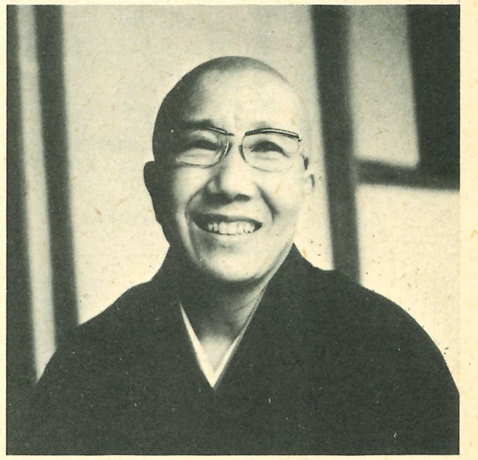
私がこの東行庵に参りましたのは、大正が昭和と改元された年、数え年七歳の冬でございます。当時はうっそうとした松林のなかにポツンと取り残されたような庵でした。

幼なかった私には、この東行庵がどういう由緒のあるところか知りませんし、師である二代目庵主の梅仙尼も、あまりくわしく話してはくださいません。

そのうちに、東行庵が高杉晋作の号に由来していること、初代庵主の梅処尼が高杉晋作の愛人であったことなどが、知らず知らずにわかって参りました。

二代目から、くわしくお話をうかがったのは、きびしい修行を耐えた私に、三代目として後を継がせるお気持がきまってからのことです。

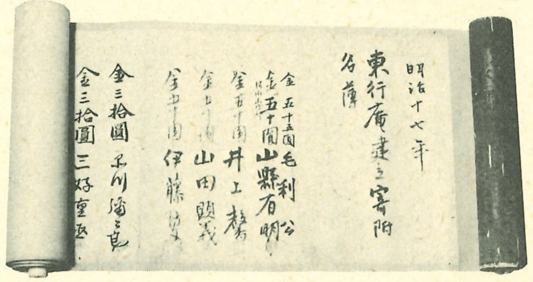
この東行庵を継ぐには、谷家に養女として入籍することになっていますが、谷家とは慶応三年三月に、藩主の命によって谷家を起こし、高杉は谷潜蔵と改名して、公的には谷姓となったのです。

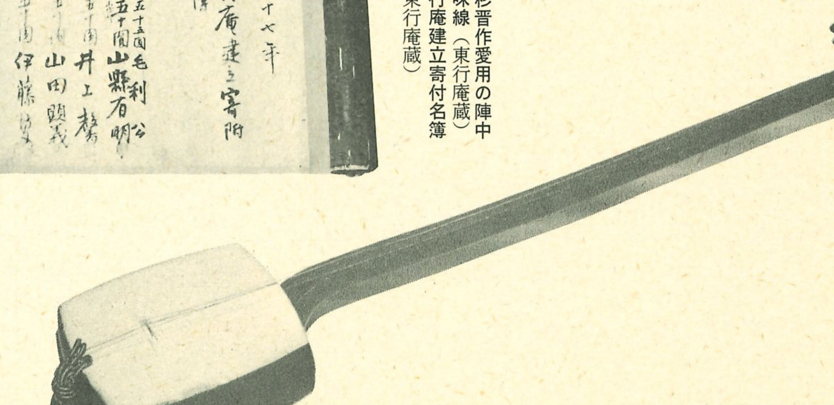

東行庵主の谷玉仙尼

戦前は〃高杉晋作〃と呼び捨てにする人などいません。みんな「東行様」とか「東行大臣」と呼んでいました。子どもだった私には、なんとなく〃えらい人〃という感じしかもちませんでした。

昭和三十四年に二代目が八十二歳の高齢で入寂いたしまして、私が三代庵主となったのです。

昭和四十一年は東行死後百年に当たり、高杉東行百年祭を催しました。めくら蛇ものにおじずのたとえ通り、私は東京、大阪などの政財界の人たちに寄付をお願いに上がり、記念事業を達成するために寸暇を惜しんだことを、昨日のことのように思い出します。

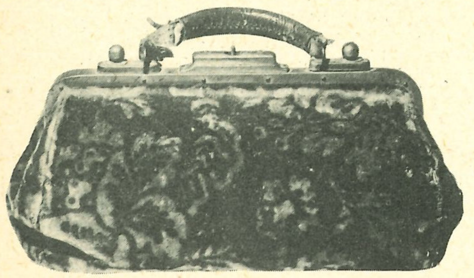




下 高杉晋作愛用の陣中三味線（東行庵蔵）
右 東行庵建立寄付名簿（東行庵蔵）

東行庵を改築、さらに東行記念館、自然公園を作り、二代目の遺志を継ぐことができました。それまでは庵の中に蔵っておいた遺品も、傷めずに保存・保管でき、皆様にご覧いただけるようになりました。大切な東行に関する資料、遺品の保存には二代目も私も重い責任を感じ、心を痛めていたことです。

現在では東行庵にお参りになる方は年間に一万四、五千人、日曜日にやや多いくらいで平日は閑散としていますが、下関市からやや奥まっている上、交通の便も悪いのでそうなるのでしょう。しかし、観光寺にしたり、バスとタイアップして大勢の人を呼ぶ、というつもりもございませんので、静かな毎日が送れて、それはそれでいいことだと思っています。


高杉のみやげのハンド・バッグ（東行庵蔵）

境内の清水山に、奇兵隊（諸隊も）士の墓を供養するようになったのは、昭和四十六年ごろからでございます。

晋作が創設して、維新に武功のあった奇兵隊も、その末路は、一部の人々を除いて、あまり恵まれたものとはいえないようです。

諸隊の叛乱などもあり、政府軍と戦って死んだり、捕らえられたのちに処刑された隊士も多いと聞いております。

晋作ゆかりの東行庵に、理由はどうであっても、不遇なかに死んでいった奇兵隊士や諸隊の霊を弔うのは、高杉東行の遺志に反してはいないと思っております。

無縁塚の中から奇兵隊の墓が発見されたのが最初でした。なかには公務員住宅の敷石として敷きつめられていたものもあります。細長い四角な石は敷石に適していたのでしょうが、この石を奇兵隊士の墓と知って使った人がいたとは思いたくございません。しかしそのままに放置しておくことはできず、東行庵の裏にある清水山に葬ることにいたしました。

高杉晋作の墓を中心とした顕彰墓地を清水山につくりまして、各地の山野にうずもれていた奇兵隊士の墓を葬っております。各地の有志の方々のご協力もあり、ご連絡をいただきまして は出向いて行きました。こうして現在では約百墓ほど葬りましたが、これは終わりのない仕事でございます。今後も続けて参ります。

私には奇兵隊や諸隊の人々が何故叛乱を起こしたか知りません。またなんで維新で官軍の先頭に立ってめざましい働きをした隊士たちが処刑されたのかも知りません。

しかし、一方は明治の元勲として華やかに脚光を浴びる人もいるのに、一方には無縁塚の片すみに忘れられ、石段代わりにされたということは東行先生の意志ではないでしょう。初代、二代をついで東行庵を守る私には、東行先生にかかわる奇兵隊士の霊を供養することが、何よりの勤めと思っております。

私は前にも申しましたように、幼女のころにこの東行庵に参りました。その後二十代のときに胸を患い、長い療養期を経て、やっと健康を取り戻しました。二代目梅仙尼のきびしい教えと修行を重ねて、三代目を継いだのですが、東行百年祭を期に東行記念館などの仕事も増え、ついつい後継者のことに気が回わりませんでした。

なるべく若いうちに庵に入ってもらい、修行を積んで、谷家に入籍して四代目を継ぐ人を、これから育てなければならないと思っております。尼としての修行のほか東行記念館の維持管理、保育園の経営と、ふつうの尼寺に比べて仕事が多く大変だと思います。

東行記念館をとってみましても、入館料だけでは三人の職員のお手当にも足りませんし、保育園も利益は二の次、三の次の福祉の気持でやっております。こうしたわけで、尼として東行庵を守り、その上の苦労を心得ている方を、谷家の養女に迎えたいものです。

（東行庵第三代庵主＝談）

奇兵隊の栄光

奈良本辰也

奇兵隊が結成されたのは、文久三年（一八六三）六月の始めのころだった。長州藩は、攘夷決行の日と定められた五月十日を期して、下関海峡を通行する外国船に無差別の砲撃を始めたものである。

このとき下関で攘夷の火蓋が切って落とされるというので、他国の志士たちも山地に乗り込んできた。京都で攘夷運動の先頭に立っていた久坂玄瑞も、急いで国に帰り、下関に直行してその第一線に立とうとした。

諸国の志士たちは、この久坂のもとに集まったものである。光明寺を屯所としていたのでこれを光明寺党とも有志党とも言っていた。その勢五、六十名もいたであろうか。外人部隊ともいうべき一隊であった。

初めのうち、海峡を通過する外国の商船は、いきなり打ち込んでくる長州側の砲台にすっかり驚いて、船首をひるがえして逃げた。これで好い気になっているところに、今度はその報復を目的とするアメリカ軍艦の来襲があった。

忽ちに、壬戌・癸亥・庚申の三艦が破却され、長州勢は散々の目にあった。まさしく敗戦の姿である。この頽勢を挽回すべく高杉晋作が総指揮に任命された。高杉は、旧来の正規軍に大いなる不満を持っていた。

近代戦に役にたたないと見ていたのである。下関敗軍の実状もまさに彼の考え方の正しさを立証した。それに比べると、光明寺党はまことに志気盛んであり、頼もしくも思われた。

高杉は、この光明寺党を基盤として奇兵隊を組織することを考えたのである。奇兵とは正規軍に対する奇兵で、士・農・工・商を問わない有志の士による軍隊の組織だった。

光明寺党にいた赤根武人、入江杉蔵、滝弥太郎らの吉田松陰門下は、当時、豪商白石正一郎の家にいた高杉の下にきて、その奇兵隊の中心となった。そして、白石正一郎と弟の廉作も、下関地方の有志を誘って、これに参加した。

この奇兵隊に正規軍にいた宮城彦助が入ったことで、正規軍と奇兵隊のあいだに紛争が起ったが、そのことによってかえって奇兵隊は強い団結を得たようである。

元治元年における四国連合艦隊との戦争では最も果敢に戦ったのがこの奇兵隊であるとされた。長州藩は、その前に大挙兵を率いて京都に上り、蛤御門の戦いを起こしているが、このときは出陣していない。蛤御門の戦いでは諸隊としては来島又兵衛の率いる遊撃隊が最もよく戦ったこと、人々の知るところである。

奇兵隊は、高杉晋作のあと赤根武人が総督となる。山県狂介（有朋）は軍監として、隊の実権をにぎっていた。第一次長州征伐のあと、藩の軟弱な態度に憤った高杉が、亡命先の九州から単身帰国して、下関で兵をあげるが、自重論をとる山県らは、直ぐにはそれに応じない。

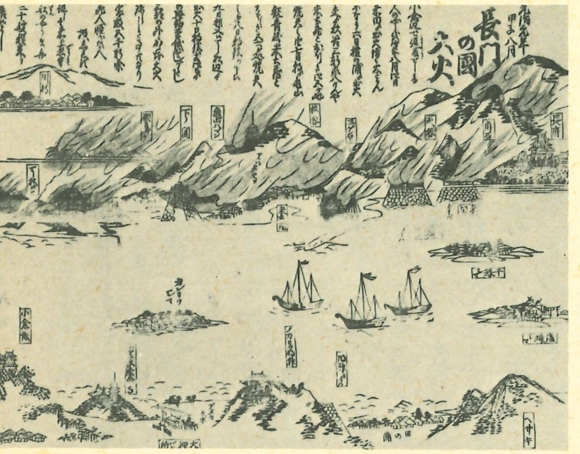
諸隊のなかでは遊撃隊と力士隊が従うだけだった。力士隊の隊長は伊藤俊輔（博文）である。山県も伊藤も松陰門下で、のちに総理大臣となった男だ。ともに足軽出身である。

高杉の決起は、やがて萩の政府から討伐の令を迎える。ここに至って、ついに山県の奇兵隊も立ちあがった。「俺とお前は焼山かずら、末は割れても根は一つ」と高杉は、山県に歌を送っている。

奇兵隊は、この藩の正規軍との戦いで、最も大きな働きをした。そして藩政を一変させるのである。その勢は赫々たるものだった。正規軍を圧する勢力を持ったことも当然だろう。

第二次長州征伐が始まったとき、小倉口の戦いで高杉のもとに堂々たる武勲を立てた。奇兵隊を中心とする諸隊の名前は全国に鳴りひびいた。このころ、奇兵隊の幹部は、赤川敬三、福田侠平、時山直八、山県狂介、野村和作等々である。時山も野村も、共に松陰門下だった。

鳥羽・伏見の戦争のころは、奇兵隊と諸隊は五千名を超えるほどの大勢力となっていた。志のある者は誰でも入隊出来るという制度がその膨張を許したのである。士籍にある者も参加した。



四国艦隊の砲撃により炎上する長州沿岸

しかし、その軍規はなかなか厳重だったようである。農民の妨げになるような行為も絶対に許さなかった。強盗や婦女暴行などは、もちろん厳罰に処せられたものである。

鳥羽・伏見の戦争が終わると、北越の戦争に従った。山県や時山が、この方面の指揮官として参戦し、武功を立てた。しかし、この戦いで時山は敵弾にあたって倒れ、不帰の客となった。

五稜郭の戦いに至るまで、奇兵隊は新政府側の最も信頼すべき軍隊だった。薩摩の西郷隆盛が率いる軍と二本柱であったといってもよい。それはまさに赫々たる栄光に包まれた軍隊だった。

しかし、すべての戦争が終わったとき、奇兵隊や諸隊から成る脱隊騒動が起こったのである。木戸孝允が先頭に立って、この騒動の鎮静にあたったことは、すでに述べられた通りである。

野村和作や三浦梧楼も、かつての部下たちを抑える側に立った。奇兵隊の名声を守るためには、その栄光を脱隊騒動などという長州の内部事情で汚してはならなかった。奇兵隊や諸隊の指導者たちは、その指導者であったことによって、新政府のなかに大きな地歩を固めているのである。

長州藩は、久坂玄瑞と入江九一、寺島忠三郎らを禁門の変に失い、生野の変では白石廉作、河上弥市らを死なせた。河上弥市は高杉と並んで奇兵隊の総督だった者である。

時山直八も越後で戦死しなかったら、山県狂介と並ぶ維新戦争の功労者であった。福田侠平も、鳥羽・伏見の戦争の直後、凱旋の途次を下関で病に斃れた。赤根武人や世良修蔵の死は、無残な死であった。

そうした多くの指導者たちの犠牲において克ち得た奇兵隊の栄光なのである。そして、諸隊の栄光であった。新政府はそれに報いなければならないのである。生き残った人たちは、その栄光を背に中央の政治家となり官吏となった。

高杉晋作は、まだ第二次長州征伐の結末が出せない中に下関で斃れたが、彼の盟友たる鴻城隊の隊長井上馨も力士隊長伊藤俊輔も、中央政府にとっては無くてならない人物として登場した。

野村和作は明治四年宮内大丞となり後に内務大臣や逓信大臣を歴任する政府高官であった。河上弥一や高杉晋作と奇兵隊総督の名を分かち合った滝弥太郎は、岡山地方裁判所長であり、干城隊総督佐世八十郎（前原一誠）は、維新後すぐに兵部大輔となった。

御楯隊参謀品川弥二郎も明治四年には、ドイツ公使代理を命ぜられた。のちに内務大臣から枢密院顧問官となる。品川は松陰門下で最年少だったが、やはり御楯隊参謀なるが故の抜擢であろう。

奇兵隊の栄光は、このようにして中央政界に大きな地歩を築くことになるのだ。（歴史学者）

幕末諸隊—栄光と挫折—

栗原隆一

京都木屋町二条下ル二番路次、そこにある長州藩控屋敷二階の四畳半で、関西出張中の兵部大輔大村益次郎が兇徒に襲われたのは、秋も深まりかけた明治二年九月四日のたそがれどきであった。

大村は、この傷がもとで同年十一月五日、四十五歳の波瀾多き生涯を終えるが、暗殺団のうち、越前福井で逮捕された五十嵐伊織は越後府兵「居之隊」の脱走者、金輪五郎は「赤報隊」一番隊の生き残り、また小郡に潜伏中を縛についた神代直人は長州「御楯隊」の脱隊者であった。

新政府の最高軍事官僚が草莽隊あがりの壮士団に襲われるというこの不祥事件は、あらためて明治維新の内部に巣食う陰惨な矛盾をさらけ出すものとして、各方面から注目された。

居之隊は越後における地域草莽隊。陽明学者斎藤赤城門下の高橋竹之介、二階堂良碩らを中心に百姓・庄屋・医者などからなる一隊で、官軍先鋒嚮導隊となって征討戦に参加した。もとの名を「方義隊」といい、二階堂の陣中日記ともいうべき『風後余草』には、官軍のなかにおける薩長軍の横暴ぶりや、依拠すべき権力背景を持たない草莽隊の悲哀が随所に散見される。

同隊の幹部は、戦陣の軍功によって、でき得れば居之隊を新政府の御親兵に取り立ててもらいたかったらしい。が、軍事をつかさどる雄藩の壁は厚く、隊内に鬱々たる反感がみなぎり始めたところへ、東京遷都に反対したという理由で、幹部の高橋竹之介、柳下安太郎、里見鋼之助らが越後府軍務局につかまった。脱隊者五十嵐伊織が大村暗殺団に加わったという飛報がもたらされたのは、そうした騒動のさなかである。



報国隊の旗（長府博物館蔵）

彼の同志、金輪五郎という男も、所詮は叛逆の一団に名をつらねる運命にあった。慶応四年（一八六八）三月三日、みぞれ降る下諏訪の宿場はずれで、赤報隊一番隊の相楽総三以下八名が偽官軍の名で断罪に処されたとき、金輪五郎もまた捕まって片眉片鬢剃り落としの刑に処せられ、石もて逐わるごとく放逐された。

彼は久保田藩渋谷内膳の家来で、東北ではちょっと名の知れた攘夷家である。雪の東山道で同志ともども受けたこの汚辱は、彼を遮二無二、反薩長の立場へ追いやり、復讐のほむらをかき立てることになった。なかんずく戦乱鎮定後における大村の兵制改革論、つまり、従前の武士の軍隊を残らず解散して、士族の佩刀を廃止するという方針が、誇り高き復古主義者の心情を逆撫でし、やがて長州「御楯隊」の脱隊者、神代直人らと結びつくきっかけとなる。

この御楯隊は元治元年（一八六四）八月、大田市之進（御堀耕助）、山田市之允（顕義）、品川弥二郎、松本鼎（提山）らによって創立され、禁門の戦争のあと、帰国したものがその回復をはかり、尊王攘夷を標榜して団結した。

慶応元年（一八六五）五月当時、隊員二百三十人で総管は御堀耕助。三田尻に屯集し、二年後「鴻城隊」と合して「整武隊」となり、隊士も五百七十余人にふくれあがって、明治二年暮れから翌三年にかけての脱隊騒動では「奇兵」「遊撃」「振武」「鋭武」の諸隊と謀叛に立ちあがった。大村が死んで間もなくのことである。

私の手許に五百近い諸隊があるが、その終末期はかならずしも恵まれていない。鳥羽・伏見の戦いで官軍側が大勝を博し、近畿以西の諸藩が朝廷側につくと、新政府の軍事官僚は草莽隊より在来の藩軍の力を重視し始めた。

この傾向は、戊辰五月ごろからいっそう露骨となり、やがて彼らは邪魔者扱いされて次から次へと粛清されていく。

その犠牲第一号が、豊前宇佐の草莽佐田秀によって馬城峯で旗挙げした花山院家理卿の「花山院隊」であり、時期は若干ずれるが、偽勅使として弾圧の悲運に遭った高松実村卿の「高松隊」などであろう。

草莽の志士、佐田秀が花山院卿をかついで挙兵したのは、長州藩の討幕戦略に不満を抱いたからで、かつて佐田を庇護したことのある長府「報国隊」では、その忘恩的な暴発行動を憎み、勤王に名をかる〝不逞の集団〟として、これを鎮圧した。佐田は殺され、多くの同志が自殺あるいは逃亡した。

一方、偽勅使事件の首謀者小沢雅楽助こと小沢一仙は、その出自が伊豆松崎の名もなき宮大工というところから、高松卿救解のいけにえに供され、戊辰三月十四日、甲府郊外山崎刑場で冤罪の刃に果てた。「赤報隊」相楽総三の処刑に遅れること十日余りである。

赤報隊といえば、事情あって京都帰還をためらった同隊三番隊の滋野井隊は、大村藩の「新精隊」に包囲され、これまた八名の幹部が斬殺された。

「渡辺清左衛門（清、大村藩士）、滋野井侍従（公寿）と安永村の寺院に会見す。和田藤之助、浮浪の徒川喜多真一郎（真彦）、玉川熊彦ふたりを捕縛す。浮浪の徒山本太宰、小笠原大和を本営に召喚し、夜、四日市河原に斬る」（『東征日記』より）

赤報隊の弾圧をきっかけに、草莽の排除政策は着々とすすめられていった。その急先鋒が薩長の二藩である。それにたいする恨みつらみは、なにも草莽隊かぎりのものではない。主流からはずれ、遅ればせながら征討戦に駆けつけた諸藩の隊も、薩長の独善的横暴ぶりには耐えがたい憤りを抱いていた。

筑前藩の「勇敢隊」もその一つである。この隊は博多の侠客〝勇敢仁平〟こと太野仁平が隊長となり、大宰府天満宮の神職三木隆助（のちの民権派代議士小野隆助）が参謀となって戊辰の役に出征、関東・東北で戦った歴戦の部隊であったが、戦場では薩長の弾丸よけがわりにいつも最前線に狩り出され、ここ一番という功名の場で取って代わられた。

参謀の三木隆助はそれが癪で、「自分が民権運動に走ったのは、戊辰戦争における薩長への反感からだ」と述懐している。

明治十七年相次いで起った、いわゆる自由民権運動の激化事件のなかで、名古屋事件と呼ばれる不可解な事件があった。加波山や秩父事件と同様、時の政府を転覆して自由民権派の政権を樹立するのが狙いで、軍資金調達の方法として強盗を働いた揚句、警察官二名を惨殺するという不祥事件までひき起こした。そのため連累者二十余名が検挙されたが、うち十名は尾州藩の草莽諸隊「集義隊」「磅礴隊」の出身者であった。

命を的に戦った報酬が幹部で五十円そこそこ。勇名を馳せた久留米藩の「応変隊」も凱旋後、復員の処遇をめぐって藩庁と対立、その一部が長州諸隊と気脈を通じ、叛乱を企てたとの疑いで弾圧された。

山県有朋など、諸隊の犠牲を足がかりに出世していくものがある反面、用がなくなれば野良犬のごとく放り出され、陋巷に逼塞したかつての志士も少なくない。

諸隊の栄光と挫折は、そのまま、また別の意味での明治維新史ともいえる。（幕末史家）

奇兵隊いまいずこ

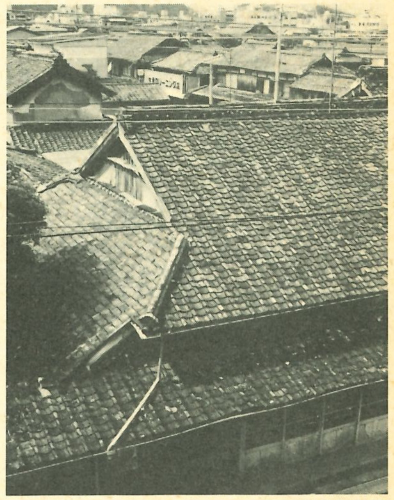
小林亜庭

柊は高速インター

新幹線・新岩国から岩徳線の周東町へ出る。大梅山通化寺は町はずれの山ふところ。黄檗宗の寺である。ここに慶応元年から明治三年三月の解隊まで、幹部十八人と三百三十人の兵が所属した遊撃隊の本営が置かれた。

住職の上田総明さんが無雑作に並べてみせてくれたのは短剣、火薬箱、砲弾入れ、隊長来島又兵衛着用の衣服など。「ここにも何か入ってますが」という小箱のなかからは、遊撃隊戦病者名簿、歩兵操典、肩書のたぐい。寺に伝えられてきたというだけで、上田さんにはそれほどの興味のあるものではないらしい。

山門の前、狭い谷あいの田圃が、かつては練兵場でもあった。そして、横の小山で首を打たれた隊員もいた。本堂の奥は、自然の石組を生かした広大な枯山水。ツツジとカエデの木立のなかに遊撃軍招魂の碑が建てられている。



旧宮市本陣

奇兵隊は、いわばゲリラ部隊。その諸隊は防長の各地に本営を置き、また転々としたはずである。防府天満宮の社前、宮市のあたりにも設営した部隊があった。三田尻は長州藩の軍港でもあったし、山口藩庁に近い。

宮市本陣は鎌倉時代からの旧家。「兄部」と標札のある門を入ると、品のいい老婦人が、「八十二歳になりますが、奇兵隊のことはよく聞いておりません」。殿様の常宿のようなところは、さすがの奇兵隊も避けたのかもしれない。

防府から山口へ通じる国道二六二号線。勝坂のトンネル前に「砲台跡」の標識がある。藩に叛旗をひるがえした諸隊は、ここで藩の正規軍と激しい戦闘をまじえた。その丘にある一軒家。ドアを叩くと、すごく不機嫌な様子で顔を出したおばさんだが、東京から来たというと途端にニコニコ顔になり、「そこの木の植わってるあたりが伊藤博文さんの畑だった」と話してくれる。砲台の跡らしいものは、雑木におおわれた石垣だけである。

トラックが唸りをたてて走る国道のタバコ屋では、孫を抱いて店番のお婆さんが、「砲台か何か、何百年も前のものだけ。わかりゃせんですよ」という。

旧藩庁の表門は鴻ノ峰の線を背にして、山口県庁のどっしりとした建物によく似合う。

文久三年、毛利敬親は萩の指月城を捨て、山口城を藩庁とした。幕府の命令で山口から萩へ移らされた藩が無断で山口へもどったのだ。門は本瓦葺の堂々とした建築。堀の水は無数の鯉が泳いでいる。その前の立札に、「高杉晋作、桂小五郎、伊藤俊輔らの志士たちが両刀をたばさみ肩をいからせて出入していた頃がしのばれる」とある。

門の両脇に葉をしげらせている大樹は、何という木なのか。通りすがりの恰幅のいい紳士に訊くと、「ちょっと、わしもあんまりくわしくないのんた」。

柊の処刑場跡は、中国自動車道山口インター進入路の脇にある。だが、近くの民家で尋ねても、はっきりしたことがわからない。すぐ側の大内中学校で年輩の先生に尋ねても、「どうも不勉強で……。あのあたりが昔の首切場だったちゅうことは伝説的に聞いちょりますがな」という答え。

その、あのあたり、運動場の端に碑らしいものが見える。「あれじゃないですか」と訊いても、先生は「さあ」と首を傾けるが、行ってみるとやはり脱隊諸士招魂の碑であった。

脱隊兵首謀者は、「この柊にあった獄舎に入れられ、刑に処せられた」と、碑の前の立札にはっきり書かれている。まわりは点々、アザミの花である。

長門俵山の夕日

萩は土塀の続く武家屋敷。その狭い道を、修学旅行の生徒がレンタサイクルで集団になって走りまわる。「あ、高杉晋作の家だ」とワラワラ自転車を土塀に寄せかけ、ドッと入り込んではツムジ風のように走り去る。折角の晋作の家も、座敷の縁側で絵ハガキと萩焼を売っているだけなのだ。

日本海に突き出た指月城（萩城）の石垣と濠、土手の松並木、その下の菊ケ浜に寄せる波は美しい。だが、ぶらぶら歩いてだけいると、売店のおばさんの目が気になる。焼イカの一匹でも買わないことには、にらまれているような落ち着きのなさを感じる。そんなところへヌードショーの宣伝カーが走ってくるのである。

脱隊兵は長門の俵山でも処刑された。俵山は長門の町から車で三十分以上も山に入る。木屋川ダムに近い山村である。

来島又兵衛の家というのがあった。藁葺の古い家がほとんどそっくり残っている。畑で豆を摘んでいた若い主婦が、「又兵衛の血は絶えたらしい。うちはもう何十年と住んでいる」という。

「むかしの家で古いでしょ。ようしたら、みんなようさんとあかんでしょ。それすると折角の来島さんの何がなくなるでしょ。だから、おいてるんです」



西島新兵衛・喜兵衛の子孫の坂井チエコさん

黒川の坂井チエコさんは、ちょうど田圃から帰ったところだった。

「はあ、うちの先祖の西島喜兵衛と新兵衛、親子です。宮の台で首切られたたちゅう話だわね。はあ、私は行ったことないです。二人の写真は、うちにあったんですよ。ガラスのね。チョンマゲ結ってね、刀さしてね。それ、どこへいったんか……。」

県道から山へ入り、また県道へもどり、また山へ入る。宮の台の大藤さんという家は、やはり処刑された藤村虎之助の子孫なのだが留守だった。隣りの家で尋ねると、「東京へ坊ちゃんの婚礼に行った。男先生は長門の小学校の校長先生。奥さんはお茶とお花の先生」と教えてくれて、若い嫁さんが首切場へ案内してくれる。

「藤村虎之助他処刑之地」と新しい木柱が、意外に開けた水田を見下している。まわりはヒノキの若木。

「本当の首切場は、この下の田だったっていいますよ。あこはお籠立場。峠になっちょるから、殿様のお籠が休んだ。いまは、この先は林道だけど、昔は街道だった。大藤さんの家のところ、茶店でね。あまりヤブに入ると、ハミ（マムシ）が出るから……。」

こんな山村からも奇兵隊に志願したものがたくさんいたのだ。そして志破れ、故郷へ帰ったところを捕らえられ、わが家の田で首を打たれた。彼らの遺骨は、いま吉田の東行庵に納められているのだが。いまだ回向されぬまま眠っている隊士も少なくないのではないか。この地に住む子孫がそれぞれ名字を変えていることでも、その隠れた歴史は無念なものだったろう。西の山に沈む夕日もまた、血のように赤い。

（ルポライター）

歴史への"招待"

昭和八年二月下旬当時、北満のハルピンの兵舎に駐留して広い満州各地に分散警備に当り、或は馬賊討伐に当っていた各警備隊の要請に応じ、快速部隊として出動、重宝がられて居た騎兵第十連隊の一兵卒としての体験です。

二月下旬、満州各地の匪賊討伐としての最後の地熱河作戦が開始されました。ハルピンより人馬全部列車輸送にて南下、新京—奉天、更に西に支線を通り、通遼にて下車、猛吹雪を衝いて連日連夜激闘を繰り返し、相当の損害も受けましたが、約一週間後赤峯を包囲攻撃、之を占領し、更に四方の残敵を求めて毎日出動し、一週間位にて平定し、赤峯にて警備に当って居りました。

当時部隊に通訳として三名の朝鮮人を雇って居りました。私等の中隊の通訳は年齢三十歳位、早くから満州に渡り穀物等の仲買人として相当田舎の方迄飛び歩いて居たと申して居りました。三月上旬頃のことです。通訳の崔が帰り、北方よりラクダの隊商に加わり、赤峯に来て居た蒙古人の話によると、赤峯の北方約五粁の処に、烏丹城と云う小さな町があり、其の郊外に北大廟と云うラマ寺があって蒙古人の老人が一人番をして居ると、この廟の奥に源の大将の鎧兜が祀ってあると聞いて来ました。

早速将校一名、兵六〜七名が馬を飛ばして見に行きました。私は前日午後五時より衛兵勤務にて、臨時に交替してやるから希望があれば見に行けと申して呉れた者もありましたが、前夜半赤峯郊外にて敗残兵らしき者の発砲の音が時々聞え、衛兵全員張り切って不眠の勤務で朝身体がだるく、僅か五粁と云っても、気が進まないので、見には行きませんでした。約一時間余りにて見に行った兵全員帰りました。

話によれば箱に入った鎧兜は途方もなく古い物でボロボロとなって居た、又、刀は毛皮でくるんであったと申して居りました。

尚、通訳の崔の申しますのに、蒙古人の老人の話によれば、源の大将は大変戦争の上手な人であった、尚内蒙古の奥地には、姓が源と称する蒙古部落があるとも申して居りました。先般テレビ番組を見て感無量にて筆を執りました。

（岡山県津山市　須江直栄さん）

前略　「歴史への招待」を毎回楽しく拝見していま す。私は名古屋在住の一主婦ですが、当地出身の織田信長の私生活は、ほとんど知られていません。同じ出身地の秀吉、家康の場合と比べて、くわしいことがさっぱり分らないようです。特に正室たる斎藤道三の娘濃姫は、何時頃死亡したのでしょう。多くの子供がありながら、なんという子女をもうけたか、一部を除いて謎のようです。正室、側室がどんな末路をたどったか、同じ女性の立場からぜひ知りたく、お便りさせて載きました。

NHK「歴史への招待」係の方に歴史の謎を解明して戴きたくお願い致します。　かしこ

（名古屋市南区　YKさん）

暑中のみぎり、スタッフ御一同様御見舞申し上げます。毎週楽しく番組を拝見させて戴いて居ります。群馬県前橋に行きますと、丁度県庁の裏の通りの桜並木の通りに「静御前の墓」といふ木標が立って居り、当地の方と良く不思議がって居りましたが、先日思い切ってその墓を見に参りました所、全々どれがそうなのか分らず、そしてその中は全部「静」と云う姓の一族の墓でした。当地の方も県庁に行っていた方で、そう云へばその時働いていた仲間にもその様な方がいらしたとのことです。

歴史はロマンを求めると申します。唯今「草燃ゆる」のドラマの中に静御前が出て来て懐妊し、何故もしそれが一族の過去の集り場所になったか……。

疑問は楽しいだけです。友人達も是非NHKに投書してとのことです。

スタッフの方々の御協力を楽しみに、ブラウン管から拝見出来ましたら幸せです。

（東京都中央区　大場りつ子さん）

前略　毎週木曜日午後十時（総合テレビ）からの「歴史への招待」たのしく見させて頂いて居りますが、あれだけ調べた資料なので、三十分間だけの画面から消えて仕舞うのがもったいないように思います。NHKのグラフか別冊にするかして、長く保存出来るような方法を御考え頂きたいと思いますが、如何なものでしょうか、御参考までに　草々

（東京都台東区　石和竹太郎さん）

●**表紙**

新選組局長近藤勇の娘婿勇五郎が調布に建てた天然理心流撥雲館は、ブームの陰で訪れる人もまばらに塵に埋もれている。日光のさし込まない道場の片隅には、隊士中島登が怨念を以って描き込んだ近藤や土方が生き続けているかに思われた。

撮影　土田ヒロミ
構成　荒田秀也

●**資料提供・協力者**

平凡社
新人物往来社
NHK
津江篤郎
曼珠院
宝鏡寺
岩倉公門跡保存会
霊山歴史館
木村幸比古
会津若松市立図書館
会津若松市役所観光課
鶴ケ城天守閣
白虎隊記念館
宮坂考古館
市立米沢図書館
函館博物館五稜郭分館
村井資長
寺田屋伊助
泉涌寺
鄭　詔文
中島　登
谷　春雄
宗家文庫
万松院
対馬歴史民俗資料館
対馬郷土資料館
鶴岡市致道博物館
増上寺
大塚　隆
小島資料館
八木喜久間
江差歴史資料館
今井幸彦
森川哲郎

光縁寺
土方　康
峰岸コン
鈴木康夫
平　拙三
藤田　誠
渡辺俊典
高台寺
早田英夫
横浜市立図書館
今泉亨吉
所　荘吉
渋沢秀雄
寿徳寺
頼　新
岡部虎男
石黒敬章
神奈川県立博物館
横浜市役所
長野県立松代象山記念館
鹿児島市立美術館
辛　基秀
早乙女　貢
神谷栄子
鈴木　尚
通化寺
正蓮寺
山口市文書館
功山寺
赤間神宮
坂井チエコ
桜山神社
西村　厳
佐藤重臣
三菱重工株式会社
京都大学図書館

神戸市立南蛮美術館
京都国立博物館
京都府立総合資料館
浅井　収
サントリー美術館
日本刀剣協会
慶応義塾大学古文書室
長府博物館
武広武夫
浦上　豊
梅木通徳
県立新潟図書館
芳州文庫

（順不同・敬称略）

●**NHKスタッフ**

北山章之助
和田光弘
中澤俊明
竹内　康
滝沢孝司
北村真征
中田整一
佐久間　宏

●**カメラマン**

首藤将夫
鈴木昭男
土田ヒロミ
村井吉直
毛利寿夫
山下寅彦

●**アート**

荒田秀也
中島敏夫

●**製作・進行**

渡辺謙二

●**編集**

平田喜久雄
小林恒夫
佐藤　實
山内直樹
梶山憲一
輪島節子
犬塚せつ子

歴史への招待　②

昭和五十四年十二月一日　第一刷発行

編集・発行人　藤根井和夫
印刷・製本　凸版印刷株式会社
発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一－一
郵便番号一五〇　振替東京一－四九七〇一